



オクトーバーレイン

アリスブルー I

にしのまさみ

オクトーバーレイン

October Rain

アリスブルー

” Alice Blue ”

文 にしのまさみ

1) 不安の出航

朝

7月29日．．．．．彼にとって朝早く起きるのは習慣になっているので別に苦にはならないはずだが、先日届いたディスクの内容が気にかかってなかなか寝付かなかった、そのせいもありどうも頭がハッキリしない。なぜ気に掛かったのかというと、いつものようなメモが、ディスクと共に入っていた<オープン7. 29. 14>と、ここまではいつもどおりで7月29日14時にこのディスクが開くと、いう意味だがその後が不思議なことに妙にストレートで<公爵と合流し、ベリアエンジェルを見つけ出せ>とあった。誰か行方不明の人物でもいるのか、それとも誰かのコードネームかよく分からないが、何処か聞き覚えのある、しかし、どうも思い出せなくて気になってしかたがなかった。お陰で今朝は少し寝不足のようだった。それに、突然の発掘調査ということで、ここ数日夜遅くまでの荷作りをし、先程は自分の主な荷物を旅行会社ミルウェルトラベルが受け取りに来たことで、ごたごたしたせいも手伝って今朝は、早くも疲れ気味だと思いつつ時計に目があった。

「8時2分前か」。

とふと呟いて、考えた、「これからスペースポートまでタクシーで30分程かかるからそろそろ出発したほうがよさそうだ、向こうに着いてから待ち合わせ場所の8番ゲートまで15分程かかる。9時の待ち合わせ時間に間に合わなければまた、公爵に叱責されるのが落ちだ」。

彼は、いつも出かける時にしているように、ドア口に立って自分の部屋をひととおり眺めた、何の変哲も無い机に端末用のコンピューターがのっている、いつもこれでレポートを仕上げたり、大学のホストコンピューターに調べものがある時に、アクセスなどをしている。他には家族の写真と、メモ用紙があるだけのそっけないものだ。机の左には外開きの窓がある、右には書籍棚があり幾つかの専門書が並んでいる、ほとんどが考古学に関しての物だが、宇宙工学に関しては何冊かある、中には興味半分で求めたものや人に進められたものも何冊か並んでいる。そして、書籍棚の右に小さなテーブルがあり、その上にはコミュニケーション端末がある、このテーブルに対してソファを挟んだ向かい側にシングルベッドが置いてある。その左にブリーフボックスがある。その他細々としたものが床の所々にある、味気ない部屋ではあるが今の自分には唯一ほっと、できる場所でもある、そして、左の奥にはダイニングとバスルームがある、そんな部屋をこうして、また、自分のいた場所を確認するように眺めた。

「はあ．．．」とため息を吐いて彼は部屋を出た。

今の彼の手荷物といえば、A3サイズの厚さ60ミリ程のシルバーグレイのケースだが、ゆうに7キロはある、ロックが掛かっている為何がはいっているかは分からないが、だいたい察しはつく、ほぼ物騒な物であることは間違いないだろう、諜報機関がこのような関係で遣す物となればなおさらだといえる。このような関係？。

そう、彼、アビン・ホーンブローはランカスター公爵の身辺調査のために、銀河帝国から派遣された一応諜報員である。ところで、一応というのは、彼の身分が大使館付きの事務補佐官助手であり、オクトバー大学の学生で公爵の研究室の助手をしているため、普段は彼は学生として生活し、それを謳歌しているためともいえるからだ。

まあ、端的に言えば上のほうもあまり期待してはならず、何かの時の布石として手を打っているだけのことで、当人も十分承知していた。

それでも、今回のように公爵がどこかに旅行するときには、必ずといって指令がくる

。しかし、今回のようなことは始めてである、指令のディスクにタイムロックがかかっている。一定の時刻にならないとロックは解除されない、それも、解除後には全て自動的に消去されることになっている、そのため、今日の14時には、このディスクのデータを必ず見る必要がある。そうしたらこのケースの開け方もわかるだろうし、一緒に入っていた妙なメモの意味も分かるだろうと思った。封印されたままの備品なんかナンセンスだからだ。

でも、まずは打ち合わせどうり公爵に合流して、ノルマンディーに乗船することが先決だった。

それで、アビンは部屋を出た、ドアを閉めると自動的にロックされた。彼はそうだと思い、管理人である平井に旅行に出かける旨を一言かけて出かけようと管理人室へ行った。

「おはようございます」。平井は管理人室の戸口に立っていた。

「おはようアビンくん、どちらかにお出かけかね」とおっとりとした口調で平井は応えた。

「ええ、これからアストレリアまで旅行に出かけます、一月ほど部屋を空けますが、不在のときの間よろしく願います」とアビン返事を返した。いつもの会話である。なにしろ公爵に付き添ってあっちこちの星の遺跡を発掘しては、研究の論文を手伝わされている、おかげで先週などは二日ほど徹夜をやる羽目になった、公爵は寝ていたが。

管理人の平井はにこにこ笑いながら、

「そうですか、今夜はあなたを食事に招待しようと考えていたんですが、ごんねんですね」と、少し不満そうに応えた。

アビンも残念そうに、「わたしも、ごいっしょできなくて残念です」と応える。

確かに、これは彼の本心でもあった、なぜなら、公爵との食事は何かと、堅苦しく身辺調査の任務も付随するので食事をした感じがしないからである。また、ひとりでの味気ない食事もつまらない物だからである。

「アビンさん、旅行はいいですね、大学での勉強もいいですが、若いんだからたまには息抜きも大切ですね、ところで、お独りの旅ですか」。

「いいえ、教授といっしょに考古学の研究でアストレリアまで行くんですよ」。と彼は素っ気なく応えた。アストレリアは辺境の国であるシュリン連邦の第三の惑星である。

。管理人の平井は呆れ顔で言った、「おやおや、今度も勉強ですか」。

「はあ」、と返す言葉がなかった。

管理人の平井は励ますように彼に言った、「でも、アビンさんアストレリアはいいところですよ食べ物美味しいですし、あそこにある、ええと、何といてたかな、あつ、そうそう、ポリトスにあるイオ遺跡などは観光の名所ですよ」。

その言葉に対してアビンは付け足すように行った。「これから、そこに行くんですよ」。

ポリトスは惑星アストレリアの第二の都市だ。

「そうですか、そうしますとポリトスで評判のお店はと・・・・・・・・」と平井の話がだんだん調子ずいてきたのでアビンは、これはまずいと思った、話が長くなりそうな雰囲気になってきたからだ。

「すみません、知人と9時に、まちあわせをしているので、これで、失礼します」。話を遮りその場をあとにした。残された平井はというと、これからのいいところだったのにと、つまらそうに彼を見送った。

アビンはこの地区では珍しくない煉瓦造りのアパートを後にして同じような煉瓦造りの歩道に立った、それから、チケットカードをポケットから出して、走ってくるタクシーにそれをかざして止めた。ドアは停止したのと同時に上の方へ開いた。乗車するとドアは自動的に閉じられコンピューターが行く先を尋ねてきた。

「どちらまで、行かれますか」。

「トウキョウスペースポートまで頼む」素っ気なく答えてから「第8ゲートに、一番近い降車場につけてくれ」と付け足した。

「わかりました、トウキョウスペースポートのD12降車場となりますが、よろしいですね」と答えが返ってきた。

「ああ、行ってくれ」。

「本日はご利用いただきましてありがとうございます、では、発進いたします」といって、タクシーは走り出した。

スペースポート

AM 8 : 50 道路が、空いていたものでスペースポートの第八ゲートには約束の時間よりも10分早く到着した、アビン。ホーンブロワーは、仕方が無いのでインフォメーションブースの向かい側にある8Eと表示してある柱の側で公爵を待つことにした。柱の側にたたずみながら周りを見渡した、7月ともなれば、学生たちは休みに入るため通行する人込みの中に学生たちの数が目立って多いのに気がつく、みな制服を着用しているために、すぐそれと分かる。

たしかに、全ての学校が個々に独自の制服を規程している為でもあり、国の方針で学生には、様々な援助があり、その一つとして交通運賃の割引がある、それを利用する為には学生であることを証明する手段として制服の着用を、各学校が求めているからでもあるからだ。ただ、大学生は一般扱いである、何といたっても学費がただなのだから、文句は言えない、ハイスクールまでは、高くはないが他のことで費用が掛かるがそれも生活水準によっては全額、面倒を見てくれる。

そんなわけで、学生たちは制服を着ることにあまり抵抗を感じていないようだ。そうこう考えながら、アビンは時間をつぶし、人の流れをぼんやりと眺めていた。それにしても、9時を過ぎても公爵はこない何かあったのだろうか。アビンは不安だった、その時、彼は、鋭い視線を感じた、まるで氷の刃を突き立てられたような感覚に襲われ振り替えた。彼の目に人込みの中から一瞬青く光る鋭い視線が写ったが、すぐ気配とともに消えた、後は雑踏の中にかき消され、さっきの気配はまったく感じられなくなった。

その後は、ただ人々の行き過ぎるざわめきだけがアビンを包んでいた。あの一瞬の、まるで氷の刃を突き立てられたような感覚を植え付ける青く光る鋭い視線、いや青く光る目は、何だったろう、初めての経験だ、と彼はもう一度周りを見渡した。さっきの気配のかけらすらない。

「気のせいだろうか、殺気とはまた違った感覚だ」と思案しながら少し後ずさりしたその時、背後から、どん！と誰かがいきよよくぶつかって、「あっ！」との声とともに誰かが倒れる音がした、彼自身も、ぶつかった勢いで前のめりになりシルバーグレーのケースを床に落とした。ケースは、ゴツ！と鈍い音とともに床の大理石に白い煙を立てて小さな穴を空けた。

すぐさま彼は、「申し訳ありません、少しぼうとしていたもので.....」

そう、言いながら振り返りケースに手を伸ばした。

相手のほうも、「申し訳ありません、急いでいたものですから」と、かわいらしい声に、アビンは相手を改めてよく見たところ14歳ぐらいの少女で印象的な長いうす紫色の流れるような髪、右の横顔を見ているせいか光の関係か深緑の中に静かに水を湛える湖のような輝く碧い瞳、たぶんエメラルブルーだろうと彼は思った、また、その透き通った肌、確かに美少女といえるが何か不思議な印象を受けた。

少女は「御怪我はありませんか」と、尋ねながらサッとシルバーグレーのケースを取って立ち上り、アビンにケースを両手で手渡した。

身長は155センチぐらいかとアビンは思った次の瞬間、ずしっとケースの重さを手に感じて前のめりになりそうなのを必死でこらえた、「えっ！何だ、こんな重いケースをどう見ても華奢な少女がこう軽々と」と、そう彼が思っていると少女は心配そうな表情で「申し訳ありませんが、何か御不都合が無ければ急いでいますので、これにて失礼いたします」。彼はただ呆気に取られた感じで、「何ともありませんから」と返事を返すのがせえいばいだった。

少女は、ほっとした表情をして「それはよかたです、では、これにて失礼いたしなす」と、言葉を残して立ち去っていった。

アビンは自分がなんとなくぼつんと取り残された気分だった、一瞬の出来事で彼女の名前さえ聞くのを忘れた、少し惜しい気がしてる自分に気がつき「まあ、俺とは関係ないさ」と自分に呟いた。

「それにしてもこの時期に、あの年頃で学生服を着ていないとはどこかの箱入り娘か、まあ箱入り娘ならこうゆう所には来ないだろう。でも、かわいい子だったな」と思いつつ、リストウォッチに目をやった。AM 9 : 10である。それにしても、さっきの

異なる気配も、今の少女のおかげですっかり過去のものとなってしまった。ただ、気に掛かるのは公爵が未だ来ないことだった。

「おかしい、時間に厳しい公爵がこれほど遅れるとは、何かあったに違いない、まさか暗殺」と、考えながらインフォメーションブースのほうに向かって歩き出したとき、アビンは呼び止められた。

「アビン君どこに行くのかね」。その声には聞き覚えがある、そう、ランカスター公爵である。

「どうしたんですか教授、あなたのような方が10分も遅れるとは、何かあったんですか」と聞き返したのだけれど、かといってこれによって何かどうなるわけでもないのだが、さっきのことといい、つい毒づいてしまってから、しまったと気付く、次なんと言われるか分っていた。

「それは、私に対する皮肉かね、アビン君」。公爵は言葉を返してきた。次の厳しい言葉を覚悟してアビンは身構えた。

しかし、今日の公爵は違っていた、おだやかな表情で「すまん、こちらのほうに突然野暮用ができてな」と、後ろの見慣れないダークスーツの二人の男たちを目で合図して示した。アビンは、ピーンときた「なるほどね」。

このような合図を公爵がするときには、必ずといってやばい話だ、研究の助手をすることになってから教授から助手への合図として決めたもので、宇宙考古学に関しては発掘時や発見物によっては、かなりやばいことがあるためだ。様々な利害関係が絡むときには特にそうだ。そして、今回もらしい。そこで、アビンは公爵に社交事例的に尋ねてみた。

「ところで、教授、後ろの方々は何方ですか」。

公爵は茶化すように、「私の護衛だというんだがね」。

すかさず二人のうちの背の低いほうが、「そんな風にいわれても困りますね、御自分の立場を考えてください」と口を挟んできた。

公爵は肩を竦めて、「やれやれ、アビン君、前にも話したと思うが、今回も何やら私を亡き者にしたい、と思っている族がいるらしいのだそうだ、いつもすまん」。

「いえ、もう慣れましたから」と社交事例的に応えた、アビンとしては、真実またかとうとうところで、つい「敵が多いんだよあんたは」と心の中で呟いた。

「ほお、よからぬことを考えたな、アビン君」。公爵はアビンの顔色を見て言った、どうも彼の考えは見透かされているようだ、彼としては応えようが無かった。

「まあ、それはいいとして、この二人は、帝国の内務省が私の護衛として遣してきたものたちだ、私は、要らないといったのだがな．．．．．」と少し間を置いてから「先ほど二人から、今回は確かな情報として、この私に対しての暗殺計画があるらしいのだ。それで、まあ、せっかくのご厚意だから今回は、そのご厚意に甘えることにしたのだ」。

アビンうんざりして呟いた、「はいはい、では俺はなんなんだ、俺はおまけか？」。

「なにぶつぶついつてるんだ、アビン君、まずはお互い初対面なのだから、紹介しておこう．．．．．いいかね」と公爵はアビンを急き立てた。

アビンは二人の男と向き合った、一人はかなりの長身で2メートルはあるがっちりした体格もう一人は、アビンより少し低く1.8メートルぐらいの少しほっそりした体格だ、どちらも表情からは、窺い知れない威圧感を感じた。

「まずは、アビン君、彼らには今回の発掘調査の助手として、一緒に同行してもらおうことになっている」といつてから二人のほうに向き直って、

「この若者が、私の大学の学生で、入学当時から私の助手をしているものの一人であアビン・ホーンブロー君だ、彼は色々と気が利くが、何せ若いので口の利き方を知らないこともあるが、私の信頼している助手の一人だ、発掘に用いる計測器などは全て彼に任せている」。

それから、公爵はアビンのほうに向き直って、

「まず、こちらが」と言葉を続けながら長身のほうの男を紹介し始めた「クルト・ミューラー少佐だ帝国宇宙軍特殊部隊ブラックナイツの士官だ、彼は主にテロ対策に携わってきたその筋の専門家だ」。

今度はさっき公爵の話に口を挟んできた男を紹介始めた「それから、もう一人のほうが、マックス・トレッカー帝国警察の警備部隊の大尉で、主に現場の指揮官として働いていて要人警護のスペシャリストだそうだ」。

「なるほどね」とアビンは思った。「帝国のおりがみ付きの面々だが、反面これほどド

「タリ暗殺のパーティナーはいないな、いつ豹変するとも限らない、だから、リスクは大きいが野放しにするよりは手元においておく方が何かと対処しやすいところか、流石だね」。すると別の疑問が湧いた「と、すると公爵は俺のことをどう思っているんだ、まさか本当に信用しているのか」と考えていると、「何をしているんだアビン君あいさつをしたまえ」。

公爵にせかされて、慌ててアビンは答えた。「あっ、．．．．．申しわけありません、あまりにすごい方々なもので少々面食らってしまいました、アビン・ホーンブローワーです、よろしく」。どうにか取り繕った。

「よろしく、クルト・ミュラーだ」。ミュラーと握手を交わして、ものすごく力強い手だとアビンは感じた、それは、相手から発せられるみなぎるような熱意のゆえかもしれなかった。

「わたしは、マックス・トレッカーだ、よろしく」。彼はトレッカーと握手を交わして、妙に冷たい手だと感じた、実際にも冷たかったかもしれないが相手に対する印象が、冷たいと思えるほどの冷静さを感じさせるゆえかもしれなかった。

アビンにとって二人は非常に好対照を成していた、二人には悪いがコメディアンコンビとゆう感じで少し微笑ましくもあった。熱血漢のクルト・ミュラー少佐、沈着冷静なマックス・トレッカー大尉、と。

ところで、アビン・ホーンブローワー自身も公爵にへばり付く諜報員なのだ、つまりは一応彼も彼ら二人と似たような者だが、レベルが違いすぎて足元にも及ばないと、ひしひしと雰囲気伝わってきているのを感じていた。ただ、彼にとって、腑に落ちない点があった、この二人の今聞いた経歴からして一概には言えないが、単独で行動するよりはチーム単位で行動する連中だ、なのにそれぞれ一人ずつ、がてんがいかない、もしかして、こちらに内緒で他に何人かの人物が、それぞれ別の立場で乗り込んでくるに違いない、その方が確かだといえる。そお個人的に考えをまとめていた。

「では、そろそろ行くとしませんか」と公爵が切り出した。「助手としての仕事については、アビン君後で、そうだな乗船した後にでも打ち合わせをしてくれ、他の人たちに不信がられてはかなわんからな」。

そう言い終わると公爵は歩き出した。「わかりました。では急ぎましょうか」とアビンは二人に声をかけた。彼らは、公爵にしたがって歩き出した。

スペースポートの第8ゲートで4人はチケットと所持品のチェックを受けた、不思議なことにアビンのシルバーグレーのケースは簡単にチェックをパスした。

一行は第8ゲートを通り抜けて、ノルマンディー号に続く100メートルもある長い乗船通路を通っていた。通路は移動式である為ただ立っていればいいだけなのだが、たまに歩くやつもいるミュラーがそうだ、彼はアビンに近づいてきた、アビンは振り返ってミュラーを見た、そのとき、10メートル程後ろで公爵とトレッカーは何やら話しているようだった。

「何か？、ミュラーさん」。

「いや、クルトでいいですよホーンブローワー君」。

「それでは、クルトさんわたしのことはアビンと呼んでください。ところで、何でしょうか」。

「いやね、アビン君、きみの出身はどちらかと思ったしだいでね」と気まずそうに話してきた。

「どうして、そのように」。尋ねるまでも無いと思いつつも聞き返した。

「いやあ．．．．．」相手が困っているようなので「ニュースコットです。銀河帝国の」隠してもしようがない、そのうち判る事であるからと思いつつ話した。

「そうすると、あのホーンブローワー提督の御子息ですか、私は提督が教官時代にいろいろお世話になたものです」。

そうニュースコットには、ホーンブローワーというラストネームを持つ家族は一家族しかいないからすぐに提督の家族とわかってしまう、それに、軍の情報部に打診すれば、彼の事は直ぐ判明してしまうので別段不思議でも何でもない。

「そうですか、その中に、不出来な息子がいて親に逆らって勘当されたのがいたとは聞いてませんか」。

「そう言えば、出来の悪いのが一人いてどおのこうのという話を言ってたような」。

「その出来の悪いのが、目の前にいる本人」。ここまでくればもうやけである。

「はぁ！．．．．．」といたが最後後はしばらく笑っぱなしだった。

「いかげんにしろよな」と思うアビンだった。「まったく、おやじのやついったい人の事をなんと話してるんだ」。

「いや笑ってしまってますまん。ほお、そうすると、なんだ、きみはおやじさんに勘当された後大学に入って教授のところに転がり込んだとゆうわけか」。妙に納得されているのをアビンには面白くなかった。実際には公爵の身辺調査で潜り込んだのだが、大学に入ったのは実力である。教授の研究室へはどちらかというところと転がり込んだのだが、それから、教授からの信頼も得て現在に至っている。まあ、他人がどう思うと彼にはあまり感心が無かった、というか色々忙しくてそんなことを考える時間が無かったとも言える。なぜなら、転がり込んだ翌日から、教授の論文を待っていましたとばかりに、徹夜で手伝わされていたのだから。「とほほ．．．．．」なんとなく気が滅入るアビンだった。

「そう仰るクルトさんは今回の御仕事はお独りですか」。聞き返す言葉を選びながら尋ねる。

「そおゆうことなんだ。珍しく一人での行動とゆうわけだ」。少し後ろを振り返ってから「まあ、警察のパートナーが付いているがな」。少しはき捨てるように行っただ。

それにしても流石だとアビンは思った、少佐とゆう立場から考えると、もっと話し方が威圧的でもおかしくはないと思ったのだが、これはかなり場数を踏んでいるに違いないと。

「ところで、警察の方がパートナーとゆうことがお気に召さないようですが」。

「そのように聞こえましたか」。ミュラーは浮かない顔で返答する。

「ええ」とアビンは素っ気なく応えた。

「仕方が無い事なのさ、今回の事はこちらの方で処理するはずだったのに、向こうの方から勝手に割り込んできたんでおかげで、こちらの方は規則とゆうことであれこれと身動きの取れないようにしてくれたからな」とミュラー少佐は悔しそうに言った。

「としますと、今回の事は主に警察の指導でなされているとゆうことですか」。

「そうなんだ、つまり私は飾りみたいな者さ」。

アビンは考えた「ということは、俺と同じ立場か、それでトレッカーが公爵にへばり付いているのか」。

そうこう話していると、乗船通路が50メートル程になるとぱっと開けた、外の光が眩しかった目の前にはノルマンディー号の巨大な白い船体が広がっていた、船体には赤と青のストライプが、それぞれ一本ずつ前から後ろにかけて真っ直ぐに走っていた、船体の中央部と後方部の下の方には格納デッキがある、今は荷物の搬入でおうわらわだろうと、通路の下の方をふと眺めてみた。そこにはたくさんの小さな荷物に混じって幾つかの大きな荷物があった、大きな荷物といえば発掘調査に、使う機材のコンテナもその中に入るが、それよりはるかに大きいコンテナがある全長40メートル幅25メートル程だろうか、かなりのものだ、小型艇が一隻納まってなおもオプションパーツフルセット付きとゆう感じに見えるほどのものだ、「いったい何が入っているだ」とふと思っただが、それ以上アビンは興味を持たなかった。なにしろ、辺境への荷物は獲たいの知れないものが非常に多いため、いちいち気にしていたら身が持たないからだ。

「そういえば、この前は、ブラウ・ワインのケース中にAWA-24対艦ミサイルが全部で34発隠してあったけ」と考えながら前に向き直してみると、すでに乗船口だった。

乗船口でもう一度乗船チケットの提示を求められた。「アビン・ホーンブローワーさんですね、ノルマンディーへようこそ乗船を歓迎します。このチケット船室はこのデッキの一階下の階層です。善い旅を」。

「ありがとうございます。では、教授後でそちらのキャビンに伺います」と後ろにいた公爵に向かって了解を求めた。すでに、ミュラーとトレッカーはアビンの傍らに立っていたのをその時気が付いた。

「ああ、そうだな15時にわたしのキャビンに来てくれるかな、少しまとめておきたい事があるんでな」と公爵は無表情に答える。

「わかりました、教授」。アビンは答えを返しながら、ふと通路の下の方がきになって、ちらっと目をやってから右にあるエレベーターに向かって歩き出した。

格納デッキ

格納デッキの入り口で男は、ぼんやりと上方の乗船通路を眺めていた、しばらくして首を振って後ろを振り返ってから、改めてため息を吐いた。

大型船の格納デッキとゆうものはかなりの大きさである。今、ジョン・ホルストはつくづくそう感じていた、高さは4階層分16メートル以上、広さはサッカーのグラウンドを十分よゆうを持って取れる、だが、それにもまして、この無分別なまでの大小様々な荷物やコンテナをどうやって整理したものか頭が痛かった。

「チーフ！、ホルストチーフ！、今、最終のお客が到着しました、これが本当に最終です、もうありません」。

山のような荷物の間をかいぐりながら、ルクレールが叫びながら近づいてきた。

「確かだな！、ルクレール！」苛立ちながらホルストは怒鳴った。

「はい！、チーフ本当にこれが最終です」ルクレールは平静に答える。

「では、今届いたお客さんのレベルは幾つだ」と素っ気なく質問した。

「本来の、われわれの仕事意外のレベル3です、どうします」。

レベル3はワインなどの酒類や化粧品を示す。因みに、レベル1は衣料品や書籍、雑貨などである、レベル2は穀物、果実、食肉や他の食料品（検疫の必要なもの、ただし、生きた生物は除く）、レベル4は医療関係の物、ワクチンや医療器材、モルモットも何故かこの部類に入る、レベル5は精密機器、一部の医療機器もこの部類に入る、レベル6は武器弾薬、レベル7は液体及び固体燃料、反応炉燃料、レベル8はその他該当しない物。

「これ以上、仕事が増えてはかなわん、前方の格納デッキにまわしてしまえ、こっちの3倍以上のスペースはあるから余裕ではいるだろう」。

「わかりました」とルクレールはくびすを返して搬入ゲートの方に向かって歩き出した、途中で作業中の二人を見つけて連れていった。

ホルストはそんなルクレールを見送りながら後悔していた、今回アストレリア納入される新型のハイパードライブエンジンの制御システムの取り付けと調整を迂闊にも昨日了承した為にこんな雑用まで、プロジェクトマネージャーのラッススに押し付けられてしまったのだった、今更エンジニアリングサービスに変わってくれとゆうわけにも行かなかった。

「ヘンツェ！ヘンツェはいるか」とホルストは叫んだ。

「はい！」後ろの方で返事があり誰かが駆け寄ってきた、「何ですかホルストチーフ」ヘンツェは、息を切らしながら応えた。

「ヘンツェ、今現在のここにある貨物の分類がわかるか」と貨物の山を指差しながら訪ねた。

「はい、ここにリストがあります」ヘンツェは持っていたボードを示しながら応えた。

「このごったがいしている中で、お前にしてはよくできたな」とホルストは驚きを禁じ得ないとゆう調子で応えた。

「いえ、これは、私ではありません、今日の状態をある程度予測して、後で簡単にチェックできるリストをアリスが作って、今朝渡してくれたんです」。

ヘンツェは気まずそうに返答しながら頭をかいた。

「そうだろうな、ただ、アリスは人の性格まで読んで、このようなりストを作るからな、俺とかお前のが、ほとんど間違いは無いだろうな」。

ほぼ半分あきれながらヘンツェに言い聞かせるように話した。

「ところで」、と言いだした言葉を留めて、少し考えてから話が続いた「ヘンツェあの子に直接アリスと呼びかけるなよ、本人はかなりいやみたいだからな」。

「わかりました」とヘンツェはホルストに敬礼しそうになった。ホルストはやれやれと思った。ヘンツェは2年前までは帝国軍の技術士官だった男だ、まあ、彼だけでないホルストの技術チームのほとんどが軍隊経験者で今では、その溜まり場とすら言われるほどだ、仕事ののりもそれに近いものがあるチームで、それが、善いとゆうやつもいれば、快く思わないやつもいる事は確かだ、とホルストは自分に何時も言い聞かせて

いる。

「ところで、分類は、どのような具合だ」と尋ねた。

「はい、メディカル関係が23パーセント地質調査系の器材が17パーセントわれわれの器材が25パーセントその他乗客が持ち込んだもの、これはかなり雑多なので特定できません、とゆうよりも中身は別物らしい物がかなりあり幾つかは、どんなものかが予測されています、チーフ、確かめてみますか」。

「いや、いい、それで全部か」。ホルストにとってはそんなのはうんざりだった。

「あと、まったく不明なものがあります、リストにも、このように”?”としか入力されていませんでした」とヘンツェはホルストにアウトプットされたボードをみせた。

「何かの出力ミスではないか」。ホルストはヘンツェを見返した。

「いえ、変だと思ひまして元のデータを見直したんですが、まったく同じです」。

「まず、あの子がミスするはずはないか」。

「そうですね」ヘンツェはうなずきながら応えた。

「で、その”?”の荷物はいったいどれなんだヘンツェ」とホルストはヘンツェを問いただすように尋ねた。

ヘンツェはある一点を指差して、「チーフ、あの一番でかいコンテナです」と答えた。

。

「何と」、ホルストは言葉を詰まらせた。

今、ホルストの脳裏には、不安が一杯に広がっていた、「もし、これがボスパー4光子魚雷艇だとしたら十分考えられる事だ、先週テスト中の一艇が行方不明になっている、どこかの国が開発費浮かすために盗み出したかそれとも、海賊行為に使うかしたら大変な事になる、この大きさのコンテナならば十分に可能だ」と。

そのとき、ピンとひらめいた「だめもとではあるがコードナンバーを調べてみれば何かわかるかもしれない」。

ホルストはすぐさまヘンツェに「あの、コンテナのコードナンバーを今すぐに調べろ」と言い放った。

「イエッサー！」と言ってからコンテナの方へ走っていった。

やれやれ困ったものだと思いながら、ホルストは例のコンテナに向かって歩き始めた。

。

格納デッキの外に出ると周りの雑踏に一瞬に包まれた、様々な機械音や振動、人の声、警笛など。貨物の間をぬいながら例のコンテナに向かっていると、突然左にあるコンテナが持ち上がった為ホルストは反射的に右に避けた。

その直後、拡声器による声が「申し訳ありません、チーフがいらっしやることにきずきませんでした」と響いた。

ホルストは、声のする方に向き直って「いや、気にするな、こちらも急いでいてコールするのを忘れていた、すまん」と返した。

相手は「ありがとうございます」と返しコンテナの移動を始めた。

声の主は汎用人型機械、作業用ロボットである、人間が搭乗して操作する機械だ、軍用などにも開発され様々な名称で呼ばれてはいるが、そのメンテナンスのたいへんさから技術者からはメタルフィギュアと呼ばれている。蔑称である。

「おい！、そのコンテナの中身はだいたい何だ」とホルストは相手のメタルフィギュアを呼び止めた。

「はい、メディカル関係のもので、実験用動物が冷凍冬眠されているらしいんです」と答えが返ってきた。

「わかった、大事に扱えよ」と相手を開放したと、側にいる観に覚えのある制服の男が目にはった。

「まったく！何を考えているんだ！冷凍冬眠だって間違っって途中で解凍されたらどうするんだ、おとなしい動物ならいいが以前ミュラが入っていて冬眠装置が壊れて目を覚ましたミュラに14人食い殺された事故もあるだぞ！分かってて貨物を搬入しているのか！」。都合よく側にいたスペースポートの係官を捕まえて怒鳴った、鬱憤がたまっていたせいもあるのだが、ミュラとはスペースタイガーウルフとも呼ばれている猛獣で、猫と犬の両方の性格を持つ単独で行動するときは猫、群で行動するときは犬のよう

にだ、ただ、肉食だと言われているが、かなり雑食性もあるとされている。数は少ないがペットとして飼われている、主人には忠実、成獣は体長4メートルを超える、宇宙船には持ち込み禁止、理由は不明とのこと。

「ああ、大丈夫ですよ。書類には千ルキットと記載されていたから、ほんと」と係

官は申し訳なきように応えた。

「本当だな」。ホルストは相手に詰め寄って聞き返した。係官といえばただ首を縦に振るだけだった。

ホルストはぷいっと向きを変えて目的のコンテナの方に歩き出した「後で、きっちり調べ上げてやる」と思いながら。

係官はやれやれと胸をなで下ろしてホルストを見送った。

ホルストが例のコンテナの所に来たころには、ある程度の調べがついていた頃で、ヘンツェともう一人メイソンが彼を待ってコンテナの横に立っていた。

そして、ヘンツェが待っていましたとばかりに話を切り出した「チーフ、これは内の社のものです、このプレートを観てください」。そお言いながらコンテナのコントロールパネルを指差している。

ホルストはそのコントロールパネルを観て思わずそれを読んだ「ギャラクティック・エンタープライズ・コーポレーション、プロジェクト9・ラボラトリー！これは、俺達のホームベースじゃないか」。

「そして、このプレートにこの搬出許可書が添付されていました、これによると、ラボからの搬出は今朝の7：30となっています、許可のサインは、.....」ヘンツェは言葉を詰まらせている。

「許可は誰が出したんだ、ヘンツェ！」。ホルストは怒鳴った。

ヘンツェはぼつんと答えた「チーフです」。

「俺が？どうゆうことだ。こんな物の許可を出した覚えはないぞ。その許可書を貸してみろ」とヘンツェから許可書を引っ手繰った。

そして、許可書に記載されているサインを念入りに調べた、確かに彼のサインだが、ホルストは待てよと思った、「このサインは転写されたものだ。たしか、ラボからの搬出や持ち出しは全て直接書かれた物だけが許可される。ただ例外が一つだけある」と彼は、許可書を透かして、「やっぱりな、それなら理解できる」と、呟くと「ヘンツェ、メイソン、こいつは大丈夫だ積み込んでしまえ」。ため息交じりに指示した。

「どうゆうことなんですか、チーフ」。ヘンツェが不信なおももちで尋ねてきた、メイソンといえば状況が理解できないのかきよとんとしている。

「ああ、そおか、お前たちには知らされていないからな。プロジェクト9から普通の搬出の場合は各責任者のサインで許可が下りるが、ひとつ例外がある。サイン無しまたは、写しだけで許可が下りるのがこの許可書だ。これには、ある特殊な透かしが入って光にかざすと青く輝くようになっている。そして、これが、機密品、特に実験兵器など開発途上の物を他の実験場に搬送する時に使われる許可証だ、が、俺のサインが使われている事にはむかつ腹が立つ」。いらだたしげに話してホルストはヘンツェに許可書を突きつけた。

「それにしても、いったい誰が、俺の名前を使ったんだ帰ってきたらきっちり調べ上げてやる」。そう呟きながら「こいつを、大型コンテナキャリアで格納庫の真ん中に据えて前後にスペースを区切ってしまえ」。コンテナを指さしながらヘンツェに指示した。

それから、メイソンに向かって手招きして呼び寄せた。

横では、ヘンツェがインカムを使ってキャリアとメタルフィギュアに指示を出している。メイソンが近づくとホルストは、さっそく指示を与えた。

「では、お前は格納庫が、このほかでかいコンテナで区切られた後、後方に俺たちの機材を搬入して整理しておけ、航行中に基礎部は組立調整を行うからな、その準備もしておけ、わかったな」。

「イエッサー！キャプテン」とメイソンは言った。このようにホルストに返すのは彼だけである。

ホルストは今いったことを復唱させ、もう一度「後部に整理しておけ」とあくまでメイソンに念を押した、彼が理解していないようなので、そうしているわけではなく、あくまでも間違いがないようにしているだけだった。

「しかし、この忌々しい”？”のコンテナはいったい誰が持ち込んだんだ。今朝の6時からここにくぎづけになっているのに、こいつを運んできた奴を見た者はいないのか」。

ホルストはコンテナをたたきながら声を荒げてヘンツェに向かって尋ねた。

「不思議なことなんですが、誰も運んできた者を見た者はいません」。

ホルストは、どうゆうことなんだといわんばかりの態度をした。

しかたがないなど、二人は格納デッキに向かって歩き出した。

歩きながらヘンツェは話を続けた。

「本当です、何か自動搬入装置が何かで運び入れられたみたい、誰もあれが運び入れられたときに、人影すら見ていないですから」。ヘンツェはきっぱり言い切った。

「そうか、そうすると変な話だな、．．．．．ところで、ヘンツェよくもまあ全員に聞き回る時間があったものだな」。あきれたようにホルストは話しを返した。

ヘンツェは少し照れながら、「はい、リストに”?”とあるものですかからつきになって、それから、コンテナが民間用としては、あまりにもほかでかいのでつい気になった物で、ちょっと」。悪戯ぽく話した。

「なるほどな」。ホルストは呆れたように言ってから彼の顔を見た。

「だが、」とホルストは切り出した。

「お前そのリストから気がつかないか」。ホルストは問いかけた。

ヘンツェはただただ首を傾げるばかりだった。

「よく考えてみる、このリストを作れたのは何時だと思う」。

「え、確か出荷日の二日前の午後10時が記録の締め切りで、翌日の9時までは入力できないことになっているはずですしそれ以降は別の日となりますから」。ヘンツェはぼそっと答えた。

「まだ解らないのか」。いらだたしげにホルストは問いつめる。

「あっ、このリストは今朝アリスから受け取った物だから、この記録は二日前の午後10時までのもの、とゆうことはその時にはすでにあのコンテナが、積み込まれることが決まっていたとですよ」。ヘンツェはホルストに聞き返してきた。

「そうゆうことだ、つまりあのコンテナは”?”のまま俺たちが目的地まで運ぶことに最初からなっていたのさ、たとえばハイパードライブの制御システムの納入を了承しなくてもな、あれの中身は俺たちしか扱えない物のようだからな」。

「どうゆうことですか」。

「ふつう、実験機などのたぐいは、そのメンテナンスチームが必ず付いていく、そして、そのチームがその実験機の搬送を担当することになっている」。

「あの許可書」。ヘンツェはぼつんとゆう。

「そう、あの許可書自体がそのことを表している、そして、現地に着くまでは中身がなんなのかよほど知られたくないらしいな」。ホルストはあきれながら言った。

「はめられたとゆうことですか」。心配そうにヘンツェは尋ねる。

「そうとも言えるな、ヘンツェ後で俺たちのチームがここ三ヶ月の間携わったプロジェクトをすべて調べ上げておいてくれ」。

「何が入っているか調べ上げるとゆうわけですね」とヘンツェは表情を輝かせながら返答をする。

「いやか」。

「いえ、喜んで」。ヘンツェは嬉しそうに応えた、確かに彼は物事を調査すること、ことに謎に挑戦することに生き甲斐を見いだすタイプの男だ、ただそれが、一つのことを突き詰めすぎてのめり込んでしまいやすい、とゆう欠点がある。

そのとき、後ろの方で大きくうなるような音がして、ふと振り返ってみると巨大なコンテナキャリアが例のコンテナを持ち上げ始めていたところだった。

「それにしても、あの中にはいったいなが入っているんでしょうね」。ヘンツェが、興味深げにホルストに話しかける。

「どうせろくでもないやばいもさ」。吐き捨てるように、ホルストは今はよけいなことは考えるなとばかりに話を切った。

たしかに、今、彼らが行っている仕事の大半は、自分たちの仕事のついでに行うことになってしまったもので本来は、ハイパードライブ制御システムに関係することだけが仕事だったからだ。

ふと後ろを振り返ると、巨大なコンテナキャリアが例のコンテナを持ち上げているさなか、格納デッキとキャリアの間の障害物になりそうな貨物をメタルフィギュア4体があたふたと撤去しているのが見えた。

ホルストは、しばらくやれやれと思いつつ見入っていた。

「格納デッキの方に急ぎませんか」。ヘンツェがホルストを促す。

「ああ」。乗り気のない返事でホルストは応えた。

また二人は格納デッキの方へ向かって歩き出す。

彼らが格納デッキの入り口に着いたころには、障害となる物は全て取り除かれていた。

ヘンツェはおもむろに。「では、ゆっくりと前進してくれ」とキャリアに無線で指示を

出す。

そのとき、ホルストは思いついたように「ヘンツェ、キャリアのパイロットにコンテナの重量を聞いてくれ」と言う。

「重量ですか」。今更なにを言い出すんですかと言わんばかりの顔おしから「悪いが、そのコンテナの重量はどのくらいか教えてくれ」とインカムでコンテナのパイロットと連絡を付けた。

返事はすぐに帰ってきたようで、「450トンです」。ヘンツェはパイロットの応答を素早くホルストに伝えた。

「450トンか、かなりの物がいちもおかしくはない重量だな」。

「そうですね。だいたい光子魚雷艇ボスパー4の2艇分はありますね」。

「そうだな、だが」、ホルストは口ごもるように言葉を区切った。

「何です」。ヘンツェはホルストの方を見て不安げに訪ねる。

「いやな、ボスパー4ならもうすでに情報は公開されているからその許可書はいらないはずだ」。ヘンツェの持っている特殊搬出許可書を指さしながら言う。

「それもそうですね」。ヘンツェはにやにやしなから言葉を続けて、

「としますと、開けてみてびっくり玉手箱とゆうことに、なることもあるとゆうことですね」。

「パンドラの箱ともかぎらん」。ホルストは、この話はこれでおしまいとばかりに言い切る。

そのとき、ゴクンと、鈍い振動音がして例のコンテナが格納デッキ内の所定の場所におろされた。

ホルストとヘンツェはコンテナが降ろされるまでまったくきずかなかったのでキャリアのパイロットは非常に腕のいいやつだと互いに思っていた。

そして、ヘンツェはすかさず「よし、オッケイだ、ありがとう、後はこちらです。」とキャリアのパイロットに答えてから、すぐにホルストの方に向きなおって「コンテナは、所定の位置に着きました、後は、貨物を区分けして、まとめて固定したら完了です」と直立して報告した。

ホルストはそんなヘンツェに対してやれやれと思いつつ、「わかった、ヘンツェ、後はメイソンに指示してあるとおりにやってくれ、それから、ルクレールが戻ってきたらメイソンの助けにまわってもらってくれ」と、手短かに指示を出す。

「わかりました、私はこの格納デッキの貨物の詳細をチェックして後ほど報告します」。

そのままの姿勢でヘンツェは応えた。「なら、全ての貨物が固定できたなら報告してくれ。それまでには、俺たちの部屋が確保されているかどうか確認して手続きをとってくる、何かあたら、俺はインカムを着けていくから連絡をくれ」。インカムを左の耳に着けながらホルストはヘンツェに話す。

「後は頼む」。そう言い残して格納デッキの奥にあるドアに向かって歩き出した。

後ろの方でヘンツェがおもむろに敬礼をしているのを感じ取ったホルストは、やれやれと思いつつもその場を立ち去った。

ヘンツェといえば、さっそく張り切って他の者たちに指示を与えながらあちらこちらと歩き始めた。

ふと、ホルストは、そんなヘンツェの様子をドア口に立ってしばらく眺めてから、自分の部下24名の名簿が記録されたカードが胸ポケットに入っていることを確認して、ドアの左にある開閉スイッチを押してドアを開けた。

船内へ

ドアの向こう側は格納デッキ内とは違い、ベージュを基調とした配色の静かな船内だ、と言ってもとてもスペースシップの船内とは思えないほどある、あえて言うならばホテルの通路を歩いているようだ。とホルストは思った。

この船の通路には、所々に窓のように風景を映しだした長さ4メートル高さ1.6メートルのスクリーンが、閉鎖的な空間の雰囲気と和らげている、それだけでなくこのノルマンディには直径70メートルもの円形の公園がある、小さな自然公園といったところのようだ。

ホルスト自身も直接見たことがあるわけではなく、ラボの女性職員たちから旅行のパフレットを広げて、いくつかの星への旅行について訪ねられたときに写真で見ただけだった、そのときにこの船に小さな自然公園のような円形公園があることを知った。

今回の、このような機会を利用して一度は評判になっている公園を見てみたいものだとホルストは思っていた。そして、彼は歩きながら、この船内の雰囲気はプロジェクト9のラボと同じような雰囲気があると感じつつ通路を歩いていた。しばらくすると、この船の案内板があった、このノルマンディのようなクラスの大きな船には、このような物があるのは初めて乗船する者にとってはありがたいものである。

さっそくホルストは、案内板を見て今の自分の位置とこれから向かう場所への順路を確認した。すると、今いる通路の真上の階層にインフォメーションセンターがある、それも、ちょうど今いる通路の向かっている方向にある最初の十字路を左に行った突き当たりエレベーターあり、そして、上の階層に上がればエレベーターから2区画戻ればそこが、インフォメーションセンターだ。彼は、これで、すぐにでも手続きが行え自分の部屋の確保出来ると、思いながらエレベーターへと足を急がせた。

通路を左に折れると、突き当たりエレベーターホールがあった、エレベーターは二つありそのうちのひとつはちょうどこの階で止まっていた、もう一つといえば8階層目まで止まっている、このエレベーターは、全14階層を運行しているようだった。ホルストがいる階層から下に3階層上には10階層となっているつまりこれからいこうとしているインフォメーションセンターは5階層目にあることになる。(1階層は4メートル程ある)

ホルストはエレベータードアの左にある昇降タッチセンサーに触れるとドアはすうと開いた、彼はすぐさまエレベーターに乗り込んだ。そして、一つ上の階層のボタンを押してドアを閉じた。すると、エレベーターは何の振動や加速感もなくすぐ上の階層に着きピッと音と共にドアが開くと、突き当たりの壁にインフォメーションセンターの方向を示す案内板が見て取れた。それに従ってホルストは歩き始めた。

突き当たりを右に折れると森林を写しだしたスクリーンが目にはいつてもホルストは妙な感じがした。なぜなら、これから宇宙に飛び出すとゆうのにこの風景とは何となくしっくりこないからだ。

そのように感じながらスクリーンの横をすぎると、インフォメーションセンターのロビーが見えてきた。さっそく手続きをすまそうとホルストは急いだ。

彼がロビーに現れると、人々の目が彼に向けられているように感じた、少しとまどいながら思い返してみた。そう言えばと自分の格好はと気が付けばワークスーツのまま、これはなんと場違いな格好であることに気が付いた。

「まあ、かえって今、エレベーターの点検が終わりましたなどこの場で係員に答えれば、この場になじむのだろうが」と考えながら、しかし、今日は、一応客なのだからとインフォメーションセンターのカウンターに近づき、カウンターの受け付けの女性に、何事もなかったようにホルストは用件を伝えた。

「ギャラクティック・エンタープライズ、カンパニーのエンジニアリング、ラボのホルストです、部屋の予約の確認をとりたいのですが」。

「少しお待ちください。申し訳ありませんが乗船カードはありますか」。

カウンターの女性はにこやかに応えた。

「あっ、ええと、これを」。

ホルストは胸ポケットからカードを出して、相手の女性に手渡した。

「では、お預かりします」。

女性は事務的に返答して、カードをチェックしてから、にこっと微笑んだ。「ギャラクティック・エンタープライズのホルスト様、ほか24名の社員の方々にいらっしゃいますね登録が確認されました、ただいまより乗船していただいたことが記録されます。ご利用ありがとうございます。それから、これがそれぞれの部屋のIDカードです。25名分あります。部屋はこちらの方で9室に振り分けさせていただきました。御自由にお使いください」とカードが差し出された。「ありがとうございます、お世話になるよ。ああ、くれぐれも迷惑をかけないようにするからよろしく」ホルストはカードが少しかさばるかなと思いながら、カウンターの女性に感謝といつも儀礼の言葉をかけた。

「よい旅を」にこやかに女性は言葉を返した。さてと、後部格納デッキに戻るかなと向きを変えたとき、目の前に現れた男がにこにこしながらあいさつをしてきた。

「やあ、ホルストじゃないか、ここで何をしているんだ」。

話しかけてきたのは、クルト・ミュラーだった。

「そう言うおまえこそ何でここにいるんだ」。

目を凝らしてホルストはミュラーを見つめて言葉を返した。

「おまえにそんな風に言われる筋合いはないんだが」。

むすっとしてミュラーは応える。

「それはこっちの台詞だ」。

ホルストは肩をすくめて応える。

ミュラーは、クスツと鼻で笑ってから「相変わらずだな、いや、おまえらしいよ」と

話してから「懐かしいなああれからどうしてた」と尋ねた。

「そっちこそ変わらないな」と言ってから「あれから2ヶ月程ブラブラしていたんだが、学生時代の恩師から仕事を手伝ってもらえないかとの話があって今は、ギャラクティック・エンタープライズで働かせてもらっているんだ。今じゃ、ミュラー、俺は一般の民間人だからどこにいようと、おまえにとやかく詮索される筋合いはないということだ」ホルストはミュラーの胸に指さしながらキツパリと言い切った。

「それは助かる、おまえのような奴が今でもメタルジャケットで、どこかをうろうろしていることを考えただけでもこちらとしては頭が痛いからな」。

ほっとした顔をしてミュラーはつぶやく。

「それは、どういたしまして」ホルストは相手をちやかすように応える。

「ところで、ミュラーおまえさんはどうなんだ。まさか、生え抜きの軍人が民間人でござれとゆうことは無いだろう今でも、焦臭さをぷんぷんさせているくせに」ホルストは苦笑いを見せながら尋ねる。

「やれやれ、おまえには隠しようもないか、まあ、黙っていたとしてもユニバースネットを使ってどうせ調べ上げるだろうからな」あきれたと言わんばかりの口調で言葉を返す。

「そうだな、俺は、おまえの今の仕事には興味はないが、現に今おまえがここにいることとある筋からの噂から、部下と運んでいる品物の安全のために、是が非でも聞きたい気分になってきている」。

ミュラーを睨みながらホルストは話す。

「ほお、安全のためね」ミュラーは言葉を区切ってから「極秘事項については話せない事はおまえも知っているとおりが」少し考えてから「まあ、この度はおまえだから他言無用とゆうことで、話しておこう」とミュラーは後ろを振り返って一人の男を呼んだ。

。「何ですか、クルトさん」とアビン。ホーンブローワーが近づいてきた。

「アビンくん、トレッカーはどうした」ミュラーはアビンに尋ねた。

「トレッカーさんですか、何か用事を思い出したとのことで、ご自分の部屋に戻られましたが」との返事にミュラーは、うるさい奴がいなくてちょうどよかったと思った。

「では、アビンくん、ホルストちよっとこっちに来てくれ」ミュラーは二人を誘ってロビーを出て人気のない乗員用のエレベーターホールに行った。

「この時間帯は出航のための準備のために、乗員エレベーターは減多に使われないから他人に話を聞かれることはまず無いだろう、そして」と話しながらポケットとから3ミリ程の厚さのカードを出してボタンをピツと押して「これで、監視モニターも動作してない」と呟いてからミュラーは二人に向かって口を開いた「さて、まずは、自己紹介と行くとするか」始めにホルストの方から紹介始めた「アビンくん、彼は、ジョン、ホ

「ホルスト元テラ・リーズ共和国宇宙軍のブルーフォレストの隊長だった男でカーディア戦争の時に戦った相手でバーランド戦争では共に戦った奴だ」とミュラーはここで言葉を区切った。

「そして、ホルストこちらが、アビン・ホーンブローワーくんオクトーバー大学の学生で氏名から解るとおり、あの、ホーンブローワー提督のご子息だ」と紹介したとたんホルストがまくしたてた。

「おいおい、俺の紹介が中途半端じゃないか、なんか恨みでもあるのか」。
「いや、今のおまえの事はあまり知らないから間違っただけを紹介してもなんだしな」少し間をおいてから「おまえ、自分で今の身分を紹介したらどうだ」と提案する。

「わかったよ、じゃ、ええと」ホルストがとまどっていると。
「ホルストさん、アビンと呼んでいただいてかまいませんが」アビンが割り込んできた。

。「そうか、じゃ、アビンくんジョン・ホルストだジョンと呼んでくれ今は、ギャラクティック・エンタープライズのエンジニアリング・ラボで働いている」と握手を求めた。

「ジョンさんアビン・ホーンブローワーです」と握手をした。
「では、本題に入ろうか」ミュラーがおもむろに話し始めたところに、アビンが割り込んで尋ねた「本当に大丈夫なんですか教授をほっといても」。

「ああ、いいんだ今しばらくはなこの船の警備員がテラ・リーズ領内を出るまでは就いていることになっているからな」とミュラーが応えた。

「そうなんですか、安心しました」と感謝を述べる。
アビンが理解したのを見て取ると、それではとミュラーが話し始めた。

「アビンくんは、すでに聞いていることだが、まだ話していないこともあったので、ついでにこの場で伝えておくことにする」と言葉を切っておいてから「まず、確かな情報としてこの航海でランカスター公爵の暗殺が計画されているとの情報を得て今回俺と警察の警備部のトレッカー大尉が、公爵の護衛をするために遣わされたのだが、どうもトレッカーは自分の部下を何人かこの船に潜り込ませるつもりらしい、それも、かなり巧妙にだ、こちらの情報部でもどうゆう人物が入り込んでいるかわからない程に、どうゆう意図があるのかこちらでも、とまどっているしだいだ」。ミュラーは一呼吸おいた。

。「そうゆうことか、道理で焦臭いはずだ」ため息混じりにホルストは呟いた。

アビンとしてはどうしたものか考えあぐんでいた。
「さて、それだけではないこの船で、公爵とテラ・リーズ共和国のファナービー提督との極秘の会談があるとの情報がある、現にファナービー提督のご家族がこの船に乗船している、これはさっき確認した」今度はミュラーがため息混じりに話している。

「なんか話がだんだん込み入ってくるな」ホルストは不満そうに言う。
「すまんが、まだあるこの船にはある極秘のものが輸送されているとのことだ、ただ、ものと言ったのは、物なのか人物なのかは実際にはどんなものかはわからない」と話を区切ってホルストに向かって「だから、おまえに協力してもらいたくて、このことを話すんだからな」。

「面倒はごめんだね、確かに物の方には心当たりはあるんだが、今調べている真っ最中でね解ったらおまえに知らせるよ」。それからホルストはミュラーに指さしながら「俺は、今は軍とか極秘とかとは関係ない一般人だからくれぐれも巻き浴いは勘弁してもらいたいな」と言い切った。

「話しておきたいことは以上だ、時間をとってすまなかつたな」。ミュラーは素っ気なく受け流す。

「まあ、いいさ、それだけでも知らせてくれれば何かあったとしてもあわてずにすむからな、ありがとうよ」。ホルストは、くびすを返してその場を離れようとした。

「ちょっと待て」とミュラーはホルストを呼び止めて「おまえには、聞きたいことがある、あのバーランド戦争が終わってから、なぜすぐ軍籍を離れた、俺たちを助けるために命令を無視して無断で行動した責任か」ミュラーはホルストの腕をつかんで問いかける。

ホルストは、にやっと笑ってから「そんなことはない、つくづく軍隊がいやになっただけさ、それでなければ誰が少佐が大佐で除隊できるか」と言い切ってから、ぽつんと「剩りにも多くのいい奴らを失ったからな」ため息混じりに呟いた。

アビンは経験がないので、よくわからないが人の人牛の重みを見たような気がした。

「そうだったのかすまん」とミュラーは手を離れた。

そのとき突然、ピツピーとホルストの左耳に掛かったインカムが鳴った。

「なんだ、ヘンツェ」ホルストは左胸あたりにあるインカムのスイッチ押して答えた。

「おい、今の答え方は、昔と変わらないじゃないか」すかさずミュラーが横から茶々を入れた。

「俺は昔からこうだ、軍にはいる前からな」とホルストはむすつと応える。

「そうか、俺と会ったときはもっと丁寧だったぞ」。

「俺に喧嘩うってんのかおまえ」とホルストは怒鳴り始めた。

「いや、軍にいたときの方が、おとなしかったなあと思った次第だ」ミュラーはなだめるように言う。

「あのお」とインカムの向こうで、申し訳なさそうな声がある。

「なんだ」と怒鳴るホルストにミュラーが「もっと落ち着いたらどうだ」と提案する。

「あ、すまん、ちょっと今朝からごたごたしていたもので、少しいらついていたんでね」と断ってから改めて「どうしたんだ、ヘンツェ」と尋ねた。

「あっ、はい、そのう、今こちらに、お嬢さん方が来ているんです」。ぼそぼそとヘンツェは答える。

「おい、何を言ってるんだ、はっきり言え、どこのお嬢さんだ」ホルストはヘンツェを問いただす。

「平松副社長のお嬢さんとシオンです」再び申し訳なさそうな声が響く。

「それがどうした、お嬢さん方が来て何か、問題でも起きたのか」ホルストは冷静に尋ねる。

「じつはあ、そうなんです」

「誰か、手を出したんだな、後で名前を知らせてくれ、俺が後の処理はする」努めて冷静に答えるホルスト。

「まったく、オオカミの群に羊が飛び込んでくるからだ」と呟いてから「お嬢さんたちは一応無事なんだろうな」と確認した。

「私たちは無事ですからチーフ」と元気な声が割り込んできた。

「その声は、シオン」ホルストは啞然とした。

インカムの向こう側ではシオンがヘンツェのインカムをひっぱって答えていた。

「こらっ、人の話に割り込むなシオン」ホルストはあわてて言い返した。

「いいではありませんか、私はホルストさんと是非お話がしたいんです」と甘い声で話してきた。

「そんな話し方をしてもだめなものだめ」まるで親が子供をなだめるように話した。

「よっ、色男」と四苦八苦しているホルストをミュラーがはやし立てる。

インカムの向こうといえば、ホルストとシオンの板挟みになったヘンツェはさっきから顔が真っ赤になっていた、そんなヘンツェを周りに集まっていた者たちが、同じようにはやし立てていた。

「うるさい、横から口を出すな」ホルストは、ミュラーに怒鳴った。

「す、すいません」インカムの向こうでヘンツェが、謝る。

「何で、おまえが謝る」とホルスト。

「す、す、いません」どうもヘンツェは、パニックに陥ってしまったらしいとホルストは思った。

ホルストは、「はあ」とため息を付いてから「ヘンツェ、インカムをしばらくの間シオンに貸してやれ、おまえが、混乱したままでは、どうもらちがあかん」どうにでもなれといわんばかりに言った。

「わかりました」と言っていたん通信が切れた。

しばらくすると話し手が変わって通信が回復した。

「では、ヘンツェさんしばらくお借りします」とシオンの声が入ってきた。

「何が話したいんだ、お嬢さん」皮肉たつぷりにホルストは口を開く。

「お嬢さんはないと思いますが、私には、シオン、F. ファーナビーと言う名前があります」と答えが返って来た。

「わかった、わかったから、もう話したから十分だろう、替わってくれないか」とため息混じりにホルストは話す。

「だめです、用件はまだ終わっていません」と言い切った。

「じゃ、用件を言ってくれ、今日は、おねだりはだめだからな」ホルストは念を押しながら話した。

「ホルストさんは？」のコンテナについてご心配なんでしょう」。
「ああ」うかつに返事をしてホルストは、しまったと思ったがもう遅かった。
「そのことなんですが、先ほどヘンツェさんから、コンテナのことでずいぶんお困りと事を伺いまして、ちょっとキイプレートにアクセスしてみたんです」と楽しそうな声が伝わってくるのを聞いてホルストは、現れた早々やってくれたなと思うのだった。

「ション誰か止めるのを聞いたか」。

努めて冷静にホルストは尋ねる。

「心配ですか」。

「心配だから聞いている」。

「そう、誰にも止められませんでした」と話を区切ってから「ただ、みなさんお困りのようなので、何かお手伝い差し上げましょうかとお訪ねしたらコンテナの話をして下さったので、ちょっとアクセスしてみたんです」と答えが返って来た。

ホルストは唾然として「なんと、あいつら」と呟いた、しかし、部下を攻めることもできない、なにせションは、ラボのエンジニアやワークチームのアイドル的存在で誰しものがちやほやしている、本人がどう思うと、そんなわけでほとんどの奴らはションの頼み事を断りきれたためしがない、それを知っているのか知らないのか、頼んだことで迷惑をかけたことがないのもまた不思議な話だと彼は、いつも思っている。

「で、何か分ったのか」。ホルストは仕方がないかと思いつつ尋ねる。

「はい、分かったことだけお知らせします」。

「分かったことだけとはどういう意味だ」と言いながら一瞬ホルストの顔が曇る。

「つまり、ハードウェアブロック、プロテクトとなっているためなんです」。

「ハードウェアブロック、プロテクトか」。

ハードウェアブロック、プロテクトとはプロテクトコードが破られても最終段階に入らないように、一つかそれ以上の回路ブロックが外されいながら電気的にはオンになっているキイプロテクト回路のことで、このプロテクトにぶち当たるまでは、ダメージプログラムでまったく判別できない、このプロテクトを破るには、外されたブロックと同様の回路が必要となる。ただ、その特性上ネットワーク上で使用するとトラブルの原因になる。

「はい、そうなんです」。

「それはかなり慎重だな、よほど知られたくないらしいな」。そう言いながらホルストはやっかいな事にならなければいいがと、思っていた。

「ホルストさん？」とションの可愛い声が、考え込んでいるホルストを呼ぶ。

ホルストは、はっとして返事をしようとしたとき周りの視線を感じた、そう、ミユラーとアビンの視線だった。

ホルストが苦笑いをすると、ミユラーが皮肉たっぷりに「我々を無視して彼女とのデートの打ち合わせはないだろう」。

「誰が、デートの打ち合わせだ、誰が」。

「お、ま、え」。ミユラーはホルストに冷たい視線を投げかけながら言った。

「そんなことしてないぞ」ホルストは少し焦りながら言った。

「気にするな、ジョークだ」とミユラーは平静に言った。

アビン、ホーンブローワーとしてはこの場は、黙っていようと決め込んでいた、なにせ分からないことばかりが立て続けに起きているからだ。

「あのう、私をデートにさそって下さるんですか、私はいつでもいいですけど」とションの声が響く。

「あっ、いや、気にしなくていいこっちの話だ」ホルストは話を否定した。

「あはっ、ごめんなさいジョーダンです」インカムの向こうで明るい声が響く。

「も、もいい」ホルストは頭を抱えながら答える。

「ほんとに良いんですか、他にも分かったことがあるんですけど」。

「じゃ、話してくれション」。

「はい、キーロックはハードウェアブロック、プロテクトまで4段階、ソフトウェアプロテクトが掛かっていました、その中で第3段階目は位相トリプルシンクロコード、タイプなんです、これは、特殊なプロジェクトでしか使われません、例えば」

「例えば」。

「軍用兵器などの部類です、他は極秘資料です」。

「そこまで分かれば、こちらでもある程度当たりが着けられる」と言葉を区切ってから「ありがとうション」。ホルストはこれはしめたと思いつつ感謝を述べる。

「いえ、お役に立ててうれしいです、それから、このプロジェクトリーダーは、ベンツ博士です、これでよろしいですか」。

「なんと、あのマッドサイエンティストか」。壁を一発たたいて呟いた。

その表情は、最悪の事態を予想して少し曇ってはいたが、アビンとミュラーには、悟られないように平静を装っていた。

「では、ヘンツェさんと替わりますね」とインカムが切れた。

「チーフ申し訳ありませんでした」と再びヘンツェの声が響いた。

「おいおい、しっかりしろよ、ションの術中に填りやがって」。

「申し訳ありません」。

「もういい、ところで、荷物の方はどうだ」ホルストは少しトーン落として尋ねる。

「はい、全て格納デッキに納めました、今調度固定の最中です」。少し落ち着きを取り戻してきたようで、声ははっきり響いてきた。

「分かった、もう少ししたらそちらに戻る」と言葉を切ってから少し考えたような素振りをしてから「お嬢さん方はまだ居るか」と尋ねた。

「いえ、もう居ません。なんか、パーティーがあるそうなので、帰りましたが」。

「それは、よかった、では通信を着るぞ」。

「イエッサー」と通信が切れた。

ホルストは、少しため息を付いてから、ミュラーとアビンの方を向いて先ほどの通信の内容をかいつまんで話してから「以上のとおりだ」と、気乗りのなさそうな様子で言葉を添える。

「どうも、やばい物を抱えているみたいだな」。ミュラーはにやりとしながらホルストに言う。

「うるさい、こっちだって、たった今の今まで知らなかった事だ」とむっとした顔でホルストは怒鳴った。

「まあ、そう言うな後でおまえの所に行くからな、色々話したいこともあるから」。

「どうゆうことだ」。怪訝そうな顔をして尋ねる。

「昔話でもって、ところかな」。肩をすくめてミュラーは答える。

「俺の部屋は未だどこかは決まっていない」とホルストはそっぽを向いて応える。

「なら、後で知らせてくれ、俺の部屋は5 B-112だ」。

「ああ、わかった5 B-112だなこの船を下りるときに知らせてやるよ」。

「おいおい、それはないだろうせっかく昔の戦友にあったのに」。

「誰が」。

「俺とおまえ」。

「そうだったか」。

それに答えるようにミュラーは首を縦に振る。

「ならインフォメーションセンターに行って聞くといい」とホルストは提案する。

「ああ、分かったよそうする」。少しむっとしながらミュラーは応えた。

「じゃ、俺はこれで失礼する」とホルストは立ち去っていった。

この、一部始終を見ていたアビンは、ホルストとミュラーの関係がどんなものか考え倦ねていた。なぜなら、互いに意識しているのか、嫌っているのかこれは一方的だが、親友というよりも悪友と言う感じか、どう考えてもホルストはミュラーに良い感情は持っていないように感じだ。また、ミュラーはミュラーでホルストをどうも利用しようとしている節が見え隠れしている。

「クルトさんはジョンさんとどういう関係なんですか」。アビンはつい訪ねてしまった。

「俺とあいつか、何て言うかライバルまたは好敵手てところかな、まあ、あいつはどう思っているかは知らないがな」と言葉を区切ってから「だが、味方の時はこれほど心強い奴はいないな」と何処か他の方を見るような風にして無表情にぽつりと言う。

アビンとしては、昔の戦争のことは余りよく知らない、と言うよりも、それぞれの戦記を読んだことがあるていどで、詳しい公式記録などは、滅多に外には出てこない百年以上立てば話は変わるかもしれないが、自分の国に都合がいいように、多かれ少なかれ歪曲されているのが、歴史の常だからだ。

だから、実際に当時係わっていた者から聞くのが一番確かだと思っている。実際には、これは公爵の自説の受け入り。

そんなわけで、彼はミュラーに色々聞きたいのだが、どうも今はそんな雰囲気ではないので好奇心を押し殺してここは別の話題を選ぶことにした。

「クルトさん、先ほどホルストさんが言っていた位相トリプロシクロコード、タイプ

とはどんな物なんですか」。トリプロシクロコード？、そうか、アビンくんは、知らなくて当然だからな」。ミユラーは笑いながら応える。「どのような物なんですか」。アビンは本当に知らないなので真剣に訪ねる。「原理は至って簡単なのだが、簡単故にかなり厄介なんだ」。アビンは首を縦に振りながら黙って聞いている。「つまり、三つのコードが時間軸に沿って波形変化するプロテクトコードのタイプのこと、至ってシンプルな物だが、三つのコードはそれぞれ別の始点角度から始まる波形で時間と共に変化する波形角度に合わせて各コード番号が変化していくため時々刻々とコードが替わる、そのため基本コードと位相波形の始まりを知っていたとしてもプロテクトを外すのはかなりの困難を極める、まあ、クロックを止めてしまうとゆう手はあるが、それではすぐにセキュリティが働いてしまうがね、唯一開けられるのは、指定された時間が来たときだけだ」。かなり堅いプロテクトなんですね」。アビンは何となく分かったような気がする程度なのだが、ミユラーに話を合わせることにした。「しかし、さっきの話の中でションと呼ばれていた子はわずかな時間で、プロテクトを破ったとなると、その子は天才プロテクトキラーかもしれない」とミユラーは呟く。「天才ですか、どんな子か会ってみたいですね」。この言葉はアビンの本心だった。「いや、要注意人物かもしれん」。気むずかしそうにミユラーは彼に話しかけた。「そうなんですか？．．．．．ところで、少し喉が渇きませんか」。「そう言えば、少し喋りすぎたかな」。「よろしければですが、この階層のBブロックにはティールームが有るそうなんです、おごりますから付き合ってもらえませんか」。アビンはミユラーをさそう。「そうだな、ここで立ち話もなんだしな」。「そうと決まれば、さっそく行きましょう」。「ミユラーはアビンに促されてBブロックに有るというティールームに行くことにした

。彼、アビン、ホーンブローワーにしては、これから起きるであろう事に備えて、誰が、どれだけ、どのように助けになるかを見極めておきたいからにはほかないから、このように誘っているにすぎなかった。事実、彼自身、自分に他に誇れる才能や能力が無い事を十分自覚しているのだから、自分より優秀な人の助けを借りるために、あらかじめできるだけ善い関係を築くように努力しているにすぎないのだが、いつもうまくいくとは限らない。例えば、彼と公爵との関係がそうだ、善い関係を築いたのは良いのだが、ほとんど公爵のこまづかい状態だからだ。だが、そんなこまづかい状態にも係わらずアビン自身は結構そのことを楽しんでる。なぜなら、ともすると単調になりがちな日々の生活に張りが出るからだ。

歩きながらアビンは少し言葉を選びながら話を切りだした。「クルトさん、ションと言う子はどんな子なんでしょうね」と出来るだけ感情が表に出ないように尋ねる。

「君は、会ってみたいのか」。ミユラーは笑みを浮かべながら応える。

「クルトさんは、興味ないんですか」。

「いや、興味が無いわけでもないのだが、ただ」。少し言葉が濁る。

「ただ？」。

「さっきの話からして、ご対面の直後には、ユニバースネットを使って、こちらの全ての情報を引き出しているともかぎらんからな、そうなたら最後、こちらが自由に動き回れなくなってしまう可能性があるからな」。

「それは考えすぎではないですか」。

「そうかもしれないが、ある程度最悪な事になってしまった時のことを想定しておけば万が一もの時にもあわてずにすむ」。ミユラーはアビンに諭すように話す。

「そうなんですか」と応えながら勉強になるなど、アビンは思った。

「そうゆうことだ」。

「でも、そんなに凄いい子ならば、そちらの情報部でもそうゆう情報はつかんでいるのではないんですか」。

「確かに、注目すべき人物のリストはあるが、事細かな全ての情報持ち合わせているわけでもないのだ、安全保障のランク順にリストが作成されるから、それほど注目すべき人物でなければリストには載らない。ただ、相手が子供となると、外に触れる機会が少

ない可能性がある故に、リストには載らない可能性が高い」。

「相手が子供だとですか」。少しつまらなそうにアビンは呟く。

「まあ、未確認の注目すべき子供が存在する事が分かると、その子の調査が始まる。例えば、女の子ならアリス、男の子ならマーク、とか言うコードネームを付けてね」。

「ところで、そんなこと私に話しても良いんですか」

「なに、アビン君の素性はもう割れているから大丈夫だよ」。

「それって、どういう意味なんですか」。アビンは一瞬まさかと、思いつつ尋ねる。

「君は、あの提督の息子だろ、こちらの方としては、それで十分なんだが」とキツパリ言い切られた。

「はあ」何となく釈然としないため、アビンはそれしか言葉を持ち合わせなかった。

ティールーム

それからしばらくして、アビンとミュラーはBブロックの中程にあるティールームの通路側にあるテーブルに席を取っていた。今は出航前とゆうこともあってここを利用する客もまばらで16ほど有るテーブルのほとんどが空いていた。そのためか、テーブルに着くとすぐにウエイトレスがメニュー持参で注文を取りに来た。彼らは、メニューなど見ずに、すぐさまキリマンジャロ系のコーヒーは有るか尋ねたら有るようなので、それを二つと頼んだ。しばらく、コーヒーが来るまで少し互いのことを話した。

アビンは、大学での生活や考古学研究室の学生たちの話や教授と行った数々の遺跡で起きた出来事などを話し、ミュラーはといえば自分の家族、特に妹たちの話をした。彼の話からミュラーは、独身らしかった。

「へええ、ミュラーさんは、すぐ下の妹さんと12歳も離れているんですか」。

「一番下の妹は15になったばかりなんだ、6月にだがね」。

「じゃ、それだけ離れていれば、結構可愛いじゃないですか」と言いながらこれっ

てちょっと調子よすぎるのでは、とアビンは思いながら話してしまった。

「そう、思うかね」。ミュラーの声が不満そうに響く。

これは、相手の気分を害してしまったと思い何とか取り繕うように「いや、何となくそう思ったしだいで、いつも可愛い妹がいたら良いなと思っていたものですから」と言う

「そうか。私は君にも妹がいたと記憶しているのだが、可愛くないのかね」と切り替えられる。

「あっそうでした、あはははあ」。何とも引きつった笑いしかでないアビンだった。何とも情けないしだいだと思っているところに「お待ちせいたしました。キリマンジャロ系のコーヒー二つでしたね」と都合よくウエイトレスがコーヒーを持ってきた。

「そうです。ありがとうございます」と答えながらアビンは、助かったと心内に手をたたいた。

ミュラーは彼の心内を見透かしてか口元が笑っていた。

「ミルクとシュガーはここにおかさせていただきますので、お好みで入れて下さい」と言ってからレシートをテーブルの上に置いていった。

「さて、妹の話だったよなアビン君」。

アビンは自分の失言に後悔し始めていた。「……………」

「どうかしたのか」。

「いえ何でもありません」。

「そうか、ならいいのだが、私の一番下の妹がハイスクールに通う年齢になったのを事欠いてオクトーバー・ユニバーシティーのハイスクールに行きたいと言い出した始末で、今、家の中はてんやわんやの大騒ぎ、母はいいじゃないと言うけれど、父はそんな遠い異国の地に可愛い娘をやるかと言い出す始末」とここでミュラーは一つため息を付けて、また、話し始める。

「それだけならまだしも、こんどは、長女が、私は可愛くないから他の星の学校にやったのと言い出す始末で、最終的に決まった事といえば、わたしに、一番下の妹の保護者をしろという事になったはいいが、軍人の私にどうしろって言うんだ、辞めるか駐在武官をやるしかない、いくら何でも短時間で大使館の武官にはなかなか入れないからな、よほどのコネがなければな」と言いきってからコーヒーをブラックで飲んだ。

「たいへんなんですね」。アビンはあいずちをうちながら、同じようにコーヒーを飲む

。「ところで、オクトーバー・ユニバーシティーのハイスクールはどんな学校なんだ」。

アビンは少し突拍子もない質問に啞然としながら応える。

「そのくらいは、ご自身で調べられるのでは、なんだったらそちらの情報網に何かと理由を付けて調べる事も出来るのではないですか」。

「私情に使えると思うか」。

「以外と堅いんですね」。

「悪いか」。

「いえ、善いと思いますよ、公私の区別の付かない人よりは」。
「それに、内部のことは内部のものが一番よく知っているからな」。
「そう仰られても、私が在籍しているのは、大学なのでハイスクールのことは詳しくは知らないのですが」。アビンとしてもハイスクールには、行ったことがないからどうしたものか困り果てながら応える。

「分かることだけがかまわないから」。ミュラーは念を押して尋ねてきた。
「分かりました、あまりお役には立たないと思いますが」と断りを入れて話し始めた。
「オクトーバー大学には付属のハイスクールが二校あります、それぞれノース、サウスと呼ばれています。これは、市のどこに位置しているかでそう呼ばれているにすぎないのですが。ハイスクールは各クラスが十人から十二人制で一学年十二クラス前後の規模、授業は必須が60パーセント、後が選択とボランティアこれをどの程度の割合にするかは本人に任されているし、選択も自分の興味のあるもの学んでみたいものが有れば大学のオープンクラスに参加できる。また、研究室への出入りも可能、同様にクラブ活動も大学と同じとゆうよりもジュニアハイから大学までが同じ、これは少し大きくなりすぎるくらいがあるという問題もあっていわれています。ですから、私のいる研究室にもハイスクールの学生が六名いますよ」と言ってから一呼吸おいてから「だいたいこんな感じですよ、わたしが、教育学部または教育課程を取っているなら、実際にハイスクールの教壇に立つことも有るでしょうが、そうでないので分かるのは、だいたいこんな感じですよ」。

「ありがたい、だいたいパンフレットにあったとおりだな、いや、君を試したわけではないんだ、よくあるだろう、説明と実際とは大違いだったという話を、そう言う訳で気を悪くしないでくれ」。

ミュラーは本当にすまなそうな表情をしていた。

「いいえ、気にしていませんから」とアビンは相手を気遣った。

「ほんとに助かったよ」。

「大したことは話していませんが」。

「いや、これで父親にパンフレットに書かれていることは実際とそう違わないと報告できるから助かったよ」。

「そうなるよ、どうなるんですか」。

いかにも関心がなさそうに尋ねる。

「はああ、そうだった。そうなるよ妹の留学が許可される事になってしまう、そうなるよ」。

「そうなるよ？」。

「わたしは、保護者としてテラ・リーズで仕事をするようにしなけりゃならん事になる、だいたいどんな仕事したらいいんだ」。

「警備員なんかどうですか」。素っ気なくアビンは応える。

「人ごとだと思って、ずいぶん軽々としてくれるじゃないか」。

不思議に素っ気なく答えるミュラーだった。

「まあ、他人事ですから、．．．．冗談はさておいて本当にそうならたいへんですね。これも何かの縁ですから私では頼りないと思いますが、相談に乗りますよ。私で手に負えなければ教授に相談に乗ってもらいますから」となだめるように話す。彼としては目上の人物に、このような話し方は、失礼に値するとは思いつつも何となく意地悪してみたい衝動に駆られてつい口を滑らせてしまったが、ミュラーの反応は、もう結論は出ているのではとの思いをよぎらせるものだった。

「いやあ、自分の口から教授に話してみるよ」。

ミュラーはため息混じりに口を開く。

「本当にいいんですか」。

「ああ、こうゆうことは自分で何とかする．．．．まあ、こちらに来ることになったらその時は、宜しく」。

「ええ、その時になりましたらこちらこそ宜しく頼みます」。

あまり機嫌を損ねていないのでアビンは、ほっと胸をなで下ろした。

「あつ、そうだ、もう一つ聴いておきたいことがあるんだ」。

「何でしょうか」。

今度は丁寧に受け答えをする。

「確か、オクトーバー・ユニバーシティには、学生寮が在ると聴いているが、どんな風なんだ」。

「そうですね」。

アビンは、少し間をおいてから「妹さんが学生寮に入る可能性も在るんですか」とつい興味本位に尋ねてしまった。

「まあ、その可能性もなきにしもあらずだ、私の仕事が此方で決まらなかったら、その可能性は十分にある。なにせ父親は、一番下の妹を溺愛しているものだからな、アパートでの一人暮らしなどもってのほかだろう。今までも近くの学校がなかったら寄宿学校に入れるとまで言い張っていたほどだったからな」。

「そうしますと、もしかしてその妹さん今まで女子校だったんじゃないでしょうか」。「そのとうりなんだ。それも手伝って他の学校に行きたいと言いつつ出したかもしれな。それも遠くの父親のあまり目が届かない所を」。

「そうしますと、クルトさんとしては、可愛い妹のために兄として何とかしてあげたいとゆうことですか」。

彼はミュラーが妹思いの気の優しい兄に写っていた、とてもホルストが話していたような生え抜きの軍人には見えなかった。

「ところで、学生寮の話だが」とミュラーが話を元に戻した。

「あっ、そうでした、あははははっ、つい好奇心が先立って、申し訳ありません」。

「君は本当に、教授が言っていたように好奇心が旺盛な若者のようだな。まっ、そうでなければや学問はやっていけないだろうな」。

あきれたと言わんばかりの口調でミュラーはアビンを評価する。

「教授、そんな風に言っていました、いや、参ったな」。

「でえっ」

「あっ、そうでした、学生寮の事でしたね、知っていることは、男子と女子の寮は別棟とゆうことと、部屋は個室または二人部屋のどちらかを選ぶらしいです、たいがいは個室ですが息があつた相手や友人が有る場合は、二人部屋を選ぶケースも有るそうです。また、どの寮にも食堂はあります。門限もあるようですが寮生活をしていても月の出席時間を満たせば外でアルバイトなどを行ってもかまわない事になっています」。

「そんなに自由でいいのか」。

「ええ、その代わり起きた問題は、全て自分の責任として対処しなければならないとゆう義務が有ります。学校側は、一任米の人として全ての学生を扱いますから自由ですが自己責任に関しては、かなり厳しいです。まあ、これが当然と言えば当然なんです、それがいやなら、規則でがんじがらめのお嬢様学校に行かれた方が善いと思いますよ。なにせこの国ではほとんど全ての学校が、同じ方針を取っていますから」。

「とすると、父親がこの話を承知するとはとても思えないな」。

仕方がなさそうにミュラーは呟く。

「そうかもしれませんが、ここではそれが当たり前ですから、小さなときから段階的に自立した社会人として生活できるように、個々の特性に合わせて教え指導されているんですだから、ほとんどの子供はジュニアハイスクールの時からながしかの仕事やアルバイトをしていますよ」。

少し論ずように、しかし、教えられているとの印象を受けないようにアビンは、話した。

「.....」。

ミュラーは思案に耽っているようだった。

「ですが、全てが、万事うまくいっているわけではないですから、ここでは、そのような教育方針が、取られているにすぎないとゆうことです」。

少し付け加えるようにアビンは言ってから話さなくてもいいことまで話してしまったと、悔やんだ。

「気を使ってくれなくてもいいよ、決めるのは父親だからな」。

ミュラーもそこまでの情報はいらないと、思いつつも、それを口にせずに応えた。

「そうですね」とアビンは答えつつ誰かの視線を感じた、どうもミュラーもそのようだが、ウインドウ側のテーブルに着いているので、誰かが見えても不思議では無いのだが、はつきり此方を直視していると感じていた、すると一人の長身の女性が、ウインドウの向こう側を通りすぎてから、ティールームに入ってくるなり彼らに、近づいてきて言った。

「お久しぶりね、クルト」とその女性はミュラーに声をかけてきた。

「やあ、エレナ、こんなところで君と会えるなんて光栄の至りだ」とどことなく素っ気ない返事をミュラーは返す。

「相変わらずね、その口がうまさは」。

「そうかな、此方は、本心でそう思っているのに」と言うミュラーの言葉を何となく弁解にしか聞こえないなとアビンは思った。

「そうなのかしら」と言ってから少し間をおいてから「あら、此方の若い子は新人さん？可愛そうにくれぐれも命を大切にね、私は、エレナ・ビットンブルーこれでも精神科医でオクトーバー・ユニバーシティーでカウンセリングをしているの悩み事があつたらいつでも相談に乗ってあげるわ、いつでもこの石頭と交渉してあげるから」。

「おいおい、早合点するなよ、彼は学生で今回迷惑をかけてしまうかもしれん協力者なんだ」。

「そう、ずいぶん深刻そうに話していたようだけど」とエレナはミュラーを問いつめる。

「いや、一番下の妹の話をしていただけだ」。

「そうお？、確かアニエスだったわね一番下の妹さん、ほんと食べちゃいたいくらい可愛い子だったわね、四年前会ったとき」。

「なんか棘のある言い方をするなお前」。

「いいじゃないまんざら知らない中でもないんだから」。

「あのう」、とアビンは二人の会話に割り込んで「お二人はどうゆうご関係ですか」と尋ねる。

「まあ、いいわ、話してあげる」と言うなり彼女は彼らのテーブルで空いていた椅子にトンと腰を下ろして話し始めた。

「私が、クルトと知り合ったのは五年前の皇帝暗殺未遂事件の時ね。犯罪心理と行動様式に関して、多くの専門家が犯人の実像に近づこうとして様々な試みを行い多くの調査がなされた頃に、オブライエン博士の助手としてテラ・リーズから銀河帝国に調査協力と言うことで派遣されていたの。そして、そのときに、帝国軍の捜査班の指揮官として紹介されたのが、彼、クルト・ミュラー、それが最初の顔合わせだったわ。その時は大尉さんだったかしら」。

「ああ」。

ミュラーは短く相づちをうつ。

アビンはミュラーが口を出さないのを不思議に思っていたが、彼女が話を続けていたので、口には出さなかった。

「結局は、調査は暗礁に乗り上げてと言うよりも、帝国内部の対立に起因する妨害工作により調査は打ち切りになってしまったの。けれども、始めに申請されていた調査期間が、一ヶ月ほど残っていたので無理は承知でミュラーと気に掛かっていた事を調査してみたの何度か危ない目にはあったけど、今こうして生きているわ」。

「.....」。

ミュラーは口をつぐんでいる。

「その時ね、ミュラーのご家族と知り合ったのは、彼と妹さんの年がずいぶん離れているのにビックリさせられたけど妹さんたちは、本当に可愛かったわ。それから、彼のお父さん鬼瓦みたいな顔をしているんだけど、外見に反して結構優しい方で色々便宜を図って下さったり助けて下さったりで、お世話になったわ」。

アビンはミュラーのことが気に掛かっていたが、口に出せなかった。

「それで、結局分かったことと言えば、どうも皇帝の側近の犯行らしいとゆう事だけで確たる証拠が見つからず、誰かを特定するには至らなかったわ」。

「そう、その側近とおぼしき人物は、三ヶ月後病死した」と突然ぽつんとミュラーが口を開く。

「あら、クルト珍しく私の話に、口を突っ込まないでいてくれたのね」。

「ああ、ここで言い争っても後が面倒になるだけだからな」。

「それはそれは、感謝しておくわ、どうせ貴方のことだからなにがしかの任務とゆう事でこの場にいるんでしょうけど」。

少しため息混じりに彼女は話す。

「はい、ご名答、正解者にはコーヒーを一杯おごらせてもらおう」と言ってミュラーはウエイトレスを呼んだ。

「あら、ありがとう。今日はご機嫌がいいのかしら」。

「ただ、今は、事を荒立てたくないだけだ」と言い添えるミュラーをアビンは微笑ましく思えた。

「何ででしょうか」。

「呼ばれたウエイトレスは、此方のテーブルに来て尋ねた。
「ああ、このご婦人にコーヒーを、ええと、モカ系のを一つ」。
「あら、私の好みを忘れずに覚えていてくれたのね」。
「モカ系のコーヒーを一つですね、ありがとうございます」と言ってからウエイトレスは、カウンターに向かって歩いていった。
「どうもクルトは今の任務にはあまり触れられたくないみたいね。違う？」。
「当たっているからもう言うな」。
ミュラーはじれったそうに呟く。
「じゃ、触れないで置くわ、ところで、そちらの坊やを紹介して下さい」とアビンを流し見ながらミュラーを促す。
「お前、面識がないのか」。
「どうして」。
「彼は、オクトーバー大学の宇宙考古学部の学生でアビン、ホーンブローワーくんだ」。
「宇宙考古学？ああ、ランカスター教授の居る？へええ、でも、知らないわね」。
「あのう」、とアビン会話に加わった。
「なあに？」。
「あのう、私は、今までカウセリングなど一度も受けていないので、たぶんお会いしたことがないと思います。また、結構、教授の助手として方々飛び回っていますので、授業と研究以外に大学にはほとんど居ませんから」
「興味深いわね、そのようなハードな生活をしている子が、今どんな精神状態か知りたいわ」。
含み笑いをしながらアビンを見てビットンブルーは話した。
「いえ、結構です」。
アビンとしてはあまり関係のないことで時間をとられたくはなかった。
「くすっ」、と笑ってから「冗談よ。でも、可愛い」とビットンブルーは言う。
まるで蛇に睨まれた蛙だなどミュラーは思いつつ「いい加減にしてくれよ、エレーナ」とビットンブルーをたしなめた。
「だから、冗談よ、冗談」。
「お待ちせいたしました。モカ系のコーヒーを一つでしたね、どうぞ」と話を遮るようにウエイトレスが現れテーブルにコーヒーを置いてから「ではごゆっくりと」と言ってからレシートをテーブルの上に置いて去っていった。
ミュラーはウエイトレスに感謝を述べてから、「ならいいんが、ところで、何処かの辺境星域でも行くのかこの船で、それとも、バカンスクルーズか、まあ、どっちにしても私とは関係ないがな」。
「うふふふ、今、私がしている仕事を聴いたら貴方きっと興味を持つわね」。ビットンブルーはカップを持ちながら思わせぶりの返事をする。
「何だ、その思わせぶりの含み笑いは」。
「気になる」。
ビットンブルーは誘いかけるように尋ねる。
「まあな、気になることは気になるが、どうせ話してはくれないだろ」。
「なあんだつまんない」。
残念そうに彼女はミュラーをちらっと見る。
やれやれしようがないなというふう「じゃあ、話していただけませんか、ミス、ビットンブルー」とミュラーは相手に切り返す。
「それでは、ご要望に応じて話します。私ね、今、ファーナビー提督の秘書をしているのどう驚いた」。
少し鼻にかけるように応えた。
「何で、お前が秘書なんだよ、それもよりによって女たらしと噂される提督とは、それに、お前は、曲がりなりにも医者だろ、どうして秘書なんかに、それとも、あれから秘書の勉強でもしたのか」。
ミュラーは驚きを隠せない様子で話した。
「何か、貴方は、私をずいぶん過小評価してはいませんか、確かに秘書の経験はないけど、少しはこれでも勉強したのよ、それに、今、提督が係わっているプロジェクトには、私のような精神科医が必要な。それから、言っときますけど提督は色々噂されるような方ではありません。確かに、奥さんは二十代前半だけど、決して女たらしじゃありませんからね」と彼女は思いあまってテーブルをドンとたたいて反論した。

「ふうん、ずいぶん御執心のようですね、ミス・ビットンブルー、まあ、私も、噂が全てだとは思っていないから、ただ、噂になるような要因はあるみたいだとゆうことが、今の君の発言で分かったよ」とミュラーは、相手をなだめるように話す。

「.....」。
彼女は憤然としたままで言葉を発しなかった。
「まあ、そんなに膨れるなよ、君の提督の事を言いすぎたことは謝るから」。 やれやれ手に負えないとゆうような様子でミュラーは彼女をなだめる。

「ところで、ミス・ビットンブルー、提督の秘書である貴方がどうしてこの船に乗っておられるのですか」。

アビンは、彼女に質問をすることで、ミュラーの苦境を助ける。
「えっ?、..... そ、それはね、この船にファーナビー提督が、乗船されているからよ、それから、提督はこの船で旧友と再会されるの、しばらくは二人だけ過ごしたいらしいの、だから、その間だけ提督に寄せられる全ての通信の受付や回答を代わりにすることになっているのよ」と彼女は、少し戸惑ってからアビンの質問に答える。

アビンとミュラーは、提督がこの船に乗船していることは、承知していたが、そのことは、切り出さずに彼女の話に興味深げに聞いているふりをしていた。

「そうしますと、今、ミス・ビットンブルー貴方が、ここに居られることというのは、提督は、今、旧友とお会いになっているとゆうことですか」とアビンは、彼女に尋ねた

。「そうじゃないの、ここで、お嬢さん方と待ち合わせなのよ」とため息混じりに彼女は答えた。

「お嬢さん方とは」とミュラーが話に割り込んできた。
「どうしたの、気になる、だけど、手、出しちゃだめよ、まだ、十代の子たちなんだから」と彼女は、ミュラーをたしなめるように言った。

「私がそんな事をする人間に見えるか」とミュラーは言い返す。
「見えるから言っているんじゃない」とビットンブルーは、平然と云ってのけた。

「お前にそんなことを言われる筋合いはない、それに、私はロリコンではないぞ」とミュラーは言い放つ。

「私は、貴方がロリコンだなんて言っていないわよ」と素っ気なく彼女は答えて少し考える素振りをしてから「もしかして、貴方ロリコンなの」と悪戯っぽくミュラーに質問する。

「それは、誤解だ」。
何となく焦るミュラー。
「そうかしら、前から妙に小さい子に優しいと思っていたのよね」。

「だから、それは、誤解だ」。
「あおう」とアビンが、割り込んできた「失礼ですが、その辺で辞めていただけませんか、周りの方々が注目していますが」。

その言葉に、二人は、周りを気にせず話してしまっていたことに気付いた。そこで、ミュラーは、「やれやれ、これは大人げない事をしてしまったな」と呟いた。

「そうね」とビットンブルーも呟く。
その時、アビンは、レジの辺りが騒がしくなったのを感じ何人かティールームに入ってきたのを知った。

そのことを同じように感じたビットンブルーは、レジの方を見て「あら、お嬢さんたちが来たみたいね。一応あなた方に紹介しとかなきゃね。これからしばらくはこの船の同じ乗客なんだから」と言ってから彼女は、それらの子達を手真似をして呼んだ。

すると、三人の子達が、アビン達のいるテーブルに、歩み寄ってきた。
ところで、その近づいて来る三人のうち一人は、どうも何処かで会ったような見覚えのある子だった、何処で会った誰だろうと考えているうちに、その子らは、そばまで来て「こんにちは」と三人でハモルように言った。

それに、答えてアビンとミュラーは「やあ、こんにちは」と応えた。
しかし、ビットンブルーは「少し遅かったわね」と答えてから「おかげで、昔なじみと少し話ができて善かったわ」と言葉を付け加えた。

「申し訳ありません、私が少し手間取っていたものですから」と金色の髪の少女が、頭を下げながら謝った。

「気にしなくてもいいのよアン、貴方を攻めてるわけじゃないのよ」と言ってビットンブルーは頭を下げている少女の顔を上げさせた。

「本当ですか、怒ってらっしゃる訳ではないのですか」少女は不安そうに尋ねる。

「ええ、怒ってはいわよ、アン」とビットンブルーは、保証した。

彼女ら三人は、オクトーバー・ハイスクールの学生服を着ていたが、リボン色はそれぞれ違っていた何故ならリボンまたはタイをするように決まっているが、色は規定されていないからだ、そんな彼女たちをミュラーは複雑な気持ちで眺めていた。

「あら、クルト、あなた見とれているの」とビットンブルーが微笑みながら彼に話す。

「いや、そうゆう訳では．．．．」と複雑な表情で応えた。

「心配しなくてもいいわよ、ちゃんと分かっているわ、妹さんのことでしょ」。

「あぁ．．．．」

「さてと、みんなハイスクールの制服を着ているとゆう事は、無事進級できたとゆう事ね、そして、シオンは、編入試験にパスしたとゆう事で、おめでとうを言わせていただくわ」とビットンブルーは、彼女たちに言葉をかけながら立ち上がった。

アビンとミュラーはシオンと言う名前を聞いて一瞬顔を見合わせた。

「では、紹介するわね」とビットンブルーは、紹介を始めた。

アビンとミュラーは、姿勢を正してビットンブルーの話に耳を傾けることにしたが、アビン自身は真ん中の子が、気に掛かってしょうがなかった、何処かで会ったことがある少女だ、だが何処であったか分からない名前も思い出せない、いったい誰だろう、こんな印象的な少女を忘れるはずはないのだがと、その子を見た。

「右端の子から紹介するわね、この子は美緒、平松、ラストネームからも分かるように、ギャラクティック・エンタープライズ、カンパニーの副社長のご令嬢で、今年の秋から、オクトーバーハイスクールに通うことになっているの15歳、美少女でしょ」。

「お初にお目に掛かります、美緒、平松です」とあいさつをして、にこっと少女は微笑んだ。

その少女は、黒髪と言うより栗色のストレートヘアーで、腰の辺りまでの長い髪は、昨今珍しい、少しあどけない表情といい、濃いブラウンの瞳といい、生粋のオリエンタルチャイドルだと彼ら二人は思いながらあいさつに答えた。

オリエンタルチャイドルとは、アジア系の純粋の他の血が交わっていない純血種を指すらしい。

つまりこの子は、本当の箱入り娘とゆう事になる、今の時代にオリエンタルチャイドルなどほとんど存在しないからだ、アビンは、貴重な経験だとゆう考えが先立ってしまった、これは、公爵の助手として彼方此方の星の残された遺跡を発掘しているうちに身に付いてしまった反応だ。ある意味では、情けない話だと、自分自身痛いほど感じている。

「二人とも、驚いたでしょ、この子は、生粋のオリエンタルチャイドルよ」と誇らしげに話すビットンブルーの言葉に少女は、少し恥ずかしそうに俯きかげんに下を向いた。

流石に、そのような仕草を見せ付けられると、心の琴線をわしづかみにされそうに感じるアビンとミュラーだったが、二人とも必死に心を平静に保つよう動揺を抑えていた。

「それでは、真ん中の子がシオン、F. ファーナビー、提督のところの子といっても娘さんじゃないの、確か弟さんの子供で今はご両親が亡くなられたので提督のところにお世話になっているの、この子も15歳、そして、最近編入試験にパスして、同じように今年の秋から学校に通う予定、この子も美少女でしょう、この子は、時々私が面倒を見ているのよ」と話しながらビットンブルーは、その子と顔を合わせた。

そして、その子は静かに「初めまして、シオン、F. ファーナビーと申します、ミスター」と可愛らしい響きの声であいさつをした。

その時、アビンは、はっとして気付いた、あの時の第八ゲートで待ち合わせの場所でぶつかった少女、確かに薄紫色の流れるような長い髪、それも、今はつきり見ると銀髪に近いようだ。それと、瞳はと見たとき、はっとした、この子、右はエメラルドブルーの瞳だが、左は何とエメラルドグリーンそれも何と形容したらいいか分からない輝きを持ったブルーだ、それに、同じくあどけない表情に気を取られて言葉を失った。

そんなアビンにミュラーが気が付き何か声をかけようとしたその時、「あのう、先ほど第八ゲートの辺りで、お会いしませんでしたか」とその子は微笑みながらアビンに、話し始めた。

「ええ、たぶん、第八ゲートの辺りでぶつかった時に、会ったのでは」と彼は答えた。

「やはりそうですか、あの時は申し訳ありませんでした、伯父様の用事で急いでいたものですから、たいへん失礼しました」とその子は申し訳なさそうな表情で、軽く会釈を

した。

「あっ、此方は何ともありませんでしたから、気になされなくて下さい。かえってこちらの方こそ、何事もありますか」とアビンは恐縮しながら応えた。

「いいえ、私は、だじょうぶですから、それと、あの時落とされたケースの中身は大丈夫でしたか」と心配そうな表情で尋ねてきた。

「あっ、あれですか何ともなかったですから、ミス、ファーナビー」とアビンは、開けることが出来なくて中身の状態を見ることもままならないのに、憶測で答えを返した。

「それはよろしかったです」と安堵した顔で話してから「申し訳ありませんが、ミス、ファーナビーではなくシヨンと呼んでは頂けませんか」とその子はアビんに、静かにしかしどことなく力がこもった調子で話した。

「あっ、分かりました。ミ、じゃなくシヨン」うっかり間違えそうになってヒヤリとした。

「ありがとうございます。ミスター・ホーンブロー。それからミスター・クルト・ミューラーにもお願いいたします」シヨンはにこっと微笑みながら話します。

アビンはほっと胸をなで下ろしていたが、しかし、ミューラーはビックリしていた、何故なら、彼はシヨンとは初対面であるはずなのに、彼女の方は、彼の名前を知っているからだ。ところで、アビンはそのことに関しては、気がつかなかった。

彼は、まさかと思いながら尋ねた「ところで、シヨン、私はあなたとは初対面なのに、何故私の名前を知っているのですか」。

「そうでした、これは失礼いたしました、未だ紹介もされていない方の名前をぶしつけにも申し上げてしまいました。じつは、6月の編入試験の時に、あなたの妹さんアニエス・ミューラーさんに、お会いしまして色々とお話することが出来ました。その時、あなたの名前と姿とお仕事を知りました。見せていただいたのは、紺の制服の画像でしたが」とシヨンは笑顔で話した。

その言葉を聞いてミューラーは、この子には自分の素性が、分かってしまっている事に落胆しながら「そうすると、アニエスは、もう編入試験を受けていたんですか」とぽつりと呟いた。これは、自分の素性が知られてしまった事と、アニエスが父親に黙って編入試験を受けたことで、また家でもめるなど、思いをよぎったための反応だった。

「それから、ミスター・ホーンブローあなたについては、ランカスター伯父様から伺っていましたので直ぐそれと分かっていたのですが、なにぶん急いでいた物ですから、あの時は何も名乗りませんでした、申し訳ありません」また、シヨンはアビんに軽く頭を下げた。

「あっ、いえ、気にしないで下さい。此方にも不備があったのですから、本当に」とアビンは、シヨンに話す。

「ふううん、二人とも、話が弾んでいるところを悪いんだけど、紹介を先に進めさせていただきたいんだけど、よろしい？」とビットンブルーが二人の会話を遮った。

「あっ、申し訳ありません。ミス、ビットンブルー」とシヨンは静かに謝って言葉を止めた。

「あっ、すみません」とアビンはうかつだったと謝った。

「じゃ、最後にこの子を紹介するわね。この子は、アン・フォレストご両親はバイオサイバネティックスの博士だったフォレスト夫妻、ミューラーあなたも知っているとおり昨年事故でお二人とも亡くなられて、今はファーナビー提督が、後継人として引き取られたの、だから今は、提督の家で暮らしているの。そして、この子も今秋ハイスクールに通うのよ」と紹介しながらビットンブルーはシヨンの方をちらりと見た。その様子にアビンは、この紹介の一部に何か隠された事柄があるような気がしたが、こんな事で疑い深くなってどうするんだと、その気持ちを抑えた。

このアンと言う名の少女は、金髪で瞳は愁いに沈んだグレーで、何となくだが普通の少女と少し印象が違う両親を去年亡くしたせいなのか、それとも他の何かか、しばらくは、この船で同乗してるのだから何かの機会に、親しく話す事もできるかもしれない、その時にそれとなく探ってみようとアビンは思った。

「そして、此方が、クルト・ミューラーで、彼は、オクトーバー大学の学生のアビン・ホーンブロー、まっ、私の知り合いだから気は使わなくていいわよ」とビットンブルーは彼らを紹介した。

それではと、アビンとミューラーはおもむろに立ち上がって自分たちの自己紹介をした。「初めまして、私は、クルト・ミューラー今回、ランカスター教授の助手としてこの船に垂船しています。私のことは、クルトと呼んでいただいても構いません」と話す。続

いてアビンが「初めまして、私は、アビン・ホーシブローです。ランカスター教授の助手をしています。私のことは、アビンと呼んで下さい、その方が呼びやすいと思いますから」と話した。

その時、アビンの視界に壁掛け時計の時刻が入った、AM11:04、乗船してから十分時間が立っていたことに気が付いた彼は、部屋に戻って少し今回の発掘調査の下準備をしておかなければと思った。ミュラーとの話もほぼ終わっていたことだし、何かの時にある程度頼りに出来そうな感触もつかめたのでこの辺で失礼しようと考えた。

「お嬢さん方が、来られたばかりのところ申し訳ありませんが、発掘調査の下準備がまだ残ってしまっていて、出来れば教授に15時にレポートを渡したいので、宜しければこれで失礼させていただきます」とアビンはすまなそうにきり出した。

「えっ、いいですよ。ただ、私はクルトと未だ話したいことがあるので、お借りして宜しい」少し意味深な響きのある響きでビットンブルーが答えた。

「あっ、楽しかったよアビン君」とミュラーは応える。

お嬢さん方は、静かに申し訳なさそうな顔をしていた。

ところが、シオンはアビンを一瞬ちらりと見てから「あのう、ミス、ビットンブルー、私も、来たばかりなのですが、失礼いたしたいのです。パーティーにもあまり興味はありませんから、宜しいですか」と話した。

すると、ビットンブルーは少し顔を曇らせてから「しかたがないわね、いいわよ、でも気を付けてね」と心配そうに話した。

「ありがとうございます。アン先に戻っていますから、ごゆっくり楽しんでね」とシオンは話す。

「お宜しいんですか、シオン様」とアンはシオンに敬語を付けて話した。

「もう、アンたら、こんなところでも堅苦しく様を付けて話さなくてもいいじゃない。まったく真面目なんだから」と美緒は呆れ顔で話す。

「でもお」とアン。

「しょうがありませんね、アン？二人だけの時以外はシオン様は使わないように、出来れば私たちは、対等の立場なんだから、様は付けてほしくはありませんけど」とシオンは左目でウインクした。

「分かりました。．．．．．」と返事をして、シオン様と思わず言いそうになるのをアンは止めた。

ビットンブルーは、そんなやりとりを微笑ましく思いながら、ちらっとミュラーを見てから「まあ、しょうがないじゃないの、アンにとってはシオンあなたは、命の恩人ですからね、彼女の気持ちを察してあげなくっちゃ」と優しく話した。

「アン、あなたを攻めるつもりはないの、だから、出来ればそうしてね」とシオンは静かに話した。

「ごめんねアン」と美緒は申し訳なさそうに謝った。

「いいえ、私は大丈夫ですから」とアンは応えた

そんなやり取りで、帰りそびれていたアビンは「では、私はこれにて失礼します」とその場を去った。

「それでは、私も失礼いたします」とシオンもその場をアビンの後を追って立ち去った。

美緒はそんなシオンに「ごめんなさい、また後で部屋に伺うわ」と声をかけた。

「ええ、では、また後で美緒さん」とシオンは言葉を返した。

B 通路

シヨンはアビンの後を追ってティールームを出た。
その時、船内アナウンスが響いた「アテンションプリーズ、船内のお客様各位にお知らせいたします、当船ノルマンディーは予定より30分遅れて一時間半後のPM12:40にここトウキョウスペースポートを出航いたします。しばらくお待ちいたしますが、そのまますろいでいて下さい」と放送が終わるとまた静かになった。
このB通路は真っ直ぐに進むとこの船に造られている公園出るため他の通路に比べて倍の広さがあるが、今は未だ出航前とのことで人道理は少ない、また、この通路も他の通路と同じくベージュを基調とした配色だが床はブラウン系の色使いがなされている。
アビンは、ふと思った「たぶん荷物の搬入が、うまくいかなかったのだろう。また、誰かが変な物を持ち込んだのがばれてすったもんだをやらかしているか、荷物が多すぎて困っているかのどちらかだろう、よくあることだ」と、彼にとってはごく普通のことだに思っている。何故なら、もう何十回も辺境の星に旅行をしていると、そのようなトラブルは当たり前のことだからだ。
そうこう考えていると、ふと誰かが、自分の後を付けているような気配を感じた。そこで彼はそっと後ろを振り返ってみた。すると、そこには、あの不思議な印象を与える少女シヨンが立っていた。そして、彼女はアビンが振り返るのを見て微笑んで近づいて来た。
「ミスター、ホーンブローア少しご一緒してもかまいませんか」とシヨンは話しかけてきた。
「ええ、かまいませんが、そのミスター、ホーンブローアは辞めていただけないかな、アビンでかまわないんですけど」と彼は答えた。
「では、ミスター、アビンご一緒していただけます」とシヨンは訂正した。
「アビンだけでいいのだけど」とアビンはため息混じりに話した。
「ですが、それは、あなたに対して失礼になるのではありませんか」と不安そうな面もちでシヨンは応える。
「堅苦しく考えないで下さい」。
「分かりました。アビン、これで宜しいのですか」。
「オッケイ、ところで、シヨンの部屋も此方のほうかい」と彼は、何の気なしについ尋ねてしまった。
「.....」シヨンは無言でアビンの顔をのぞき込んだ。
「あっ、別に深い意味はないのだけど、女の子には、失礼だったね」と照れくさそうに詫びを入れた。
「別に構いませんが、私を普通の女の子としてそう仰るのですか」とシヨンは、少し寂しそうな表情で尋ねる。
「そうだけど」アビンはシヨンの言葉と表情から何を言いたいのか察することが出来ないでいた。
「分かりました。7A-108が私たちの部屋です。時間があるときに遊びにいらしゃって下さい。私たち歓迎いたしますから」と彼の言葉に少し表情が和らいで話すシヨンだった。
「お邪魔していいんですか。ところで、私たち？、と言うことは他にも誰かいるとゆうことですよ」と彼は何となく尋ねた。
「ええ、アンと二人でその部屋を使っています。別に一人ずつでも善かったのですが、伯父様が、二人でいるようにと仰られたので、二人部屋になったんです」とシヨンは答える。
「それって、スイートルームじゃないのか」アビンは心配そうに尋ねた。
「はい、そうとも言うらしいです」と平気な顔で答えるシヨン。
「やれやれ、とんだお嬢さんだ」とアビンは心の中で思った。確かにシヨンは、変わった子だった容貌もそうだが、話し方もそうだ使う言葉といえば、ほとんどが上流階級の使う単語のクイーンスペルだが、嫌味な使い方や上品ぶったところはみじんも感じられ

ない、綺麗で優しい使い方をしている。そして、少し気になるのは、時々だが、音が強い、強いて言うなればコンピュータと話している感じがすることがあるなど、アビンは感じていた。

「どういたしましたか」とシオンが彼に尋ねてきたのだ一瞬ドキッとした。なぜなら、変な子だなと考え事をしていたものだから、何か尋ねられたことを聴きそびれたのではと思ったからだ。

「いえ、何でもありません。ちょっと考え事をしていましたもので．．．．．」とまた、言葉が止まってしまった。アビンは、これはまずいなと思っていると、シオンの方からまた尋ねてきた。

「あのう、本当に大丈夫でしょうか。アビンさん。何か不審そうな顔をされていますが、何か」とシオンは心配そうに彼に尋ねる。

「いや、何でもない」と彼は答えてから、少し思い直して「ところで、あのう、ええと、そのう．．．．．」とちょっと感じたことを話そうとしたが、何となく気まずくてなかなか切り出せなかった。

シオンは、それを察知してか「私の話し方が気になるのですね。時々、コンピュータのように話すことがありますから、違いますか」と寂しそうな表情で尋ねてきた。

アビンは、ビックリしてシオンをまじまじと見た。確かに、不思議な印象を受けるのは拭えない、しかし、アンドロイドともサイバノイド（サイボーグのこと）ともいえないと思いつつ「ああっ」と気のない返事をしてしまった。

「そうですか。仕方がないことです」シオンは、ぼつりと言う。「どうして、仕方がないのですか」アビンは、つい、相手を急かすように尋ねてしまった。

「それは」とシオンは話し始める「二年前のある事故に原因があります。ご存じでしょうか、惑星ソルフエにあるクリークと言う都市が、消滅した事件を」。

「ああ、知っている」と彼は答えて「たしか、いくつかの研究機関の研究施設があった有名な都市だった。それが、何かの事故で、一瞬のうちに消滅したとの話をニュースで聞いたことがある。原因は不明とのことだが、奇跡的に三人の生存者がいたが、そのうちの一人は、残念ながら病院で亡くなったとのことだった」と話した。

「はい、そうです。じつは、私は、その生存者の一人なんです」とシオンは静かに話した。

アビンは、驚きのあまり「そうか」としか言葉が出なかった。そして、まんざら嘘でもないだろうとも思った。何故なら、嘘をついたとしても彼女には何のメリットも無いからだ、かえってデメリットの方が多いだろうからだ。

シオンの話は続く「その時に、私は、十万人の人々と共に感情と心を無くしてしまっただけです」と話す声が震えていた。それを抑えるためなのかシオンは、少し大きく一呼吸をしてから「それ以来、話し方がコンピュータのような生気のない話し方しか出来ませんでした。しかし、今は、多くの人々の助けでだいぶ人間らしくなりました。でも、でも時々なってしまうので、未だ完全ではありません」と悲しそうな表情で話すシオン。

「そうだったのか」とアビンは答えながら、表情は自然なのだから話が多少変なところがあっても、それはそれで一つのチャームポイントなのにと考えた。

「心の状態については、ミス、ビットンブルーによると、無くしたのではなく、閉ざしてしまっただけで、仰っていましたし他の先生方も同様でしたが、私本人としては、無くしてしまっただけと同じなんです。今でも、時々心に空白があることに気をやむことがあります」とシオンは話した。

「もう話さなくていいよ、シオン、辛いだろうから」とアビンは、彼女に気を使った。「いいえ、大丈夫です。話すことで少し荷が軽くなりますから」彼女は、少し潤んだ目で応える。

「そう？では、少し聴いてもいいかな、その時の事」と彼は、また好奇心に押されて口走ってしまった。

「ええ、どうぞ、かまいません」と少し微笑んでいるように見える表情で、シオンは、答えたので、アビンは、ほっとして尋ねた。

「何故、その事故に遭ったんですか」。

「そのころは、ブリストル博士ご夫妻に御世話になっていましたので、それ故に、惑星ソロンのパース市に住んでいました。パース市は、事故のあったクリークから山を隔てて40キロメートルあります。ちょうどその日に、双子の姉妹のセシリアに会いにクリーク市にあるニュートロンバイオニック研究所へ出かけたんです。そこで私は事故に遭

いきました」とシヨンは、答えてから大きく息を吸った。

「そうすると、ブリストル博士ご夫妻は、ご健在とゆうことですね」。

「はい」。

「ところで、何故、シヨンの姉妹が、そのニュートロンバイオニック研究所にいたんですか。その双子の姉妹セシリアさんに何かあったためにそこに行ったんですか」と尋ねながら彼は、少しきつく質問してしまっている自分に気が付く。

「申し訳ありませんが、そのことについては、お話ししたくありません」と答えるシヨンの顔は非常に寂しそうな表情をしていた。

「もしかして、セシリアさんは、亡くなられたとゆうことですか」と尋ねながら俺はなんとゆうことを聴いているんだと、アビンは思った。

その言葉に、シヨンは、黙ってうなずいた。

「あつ、ごめん。どうも辛いことを聴いてしまったようですね。申し訳ない」彼はこれ以上聴き出すことは出来ないなど、思いながら謝った。

「いえ、かまいません。アビンさん、あんたはたぶんニュートロンバイオニック研究所が何をしていたかと疑問に思われるかもしれませんが。お知りになりたいのであればユニバーサルネットでアクセスすれば調べることが出来ます」シヨンは、目を伏せながら彼に応えた。

「あつ、いや、そうだね」アビンには、返す言葉が見つからず、そのようにしか応えられなかった。

確かに、そうだと言える、そして、何と鋭い勘をしているんだろう、まるで心を見透かされているようだ、彼は、そう思いながら、双子のもう一人の方のセシリアについて、もっと尋ねてみたくなっている自分に気づく。

そうこう話しているうちに、二人とも公園の入り口近くまで来ていた。アビンは、何とかこの気まずい雰囲気打破したいと考えていた。そこで、ふと思いに浮かんだ事といえば、情けない話だが、公園には座るためのベンチがあるとゆうものだ、本当に涙が出てきそうな程の気のきかなさだ、これで、公園にベンチの一つもなければとんだ笑いものだ。しかし、彼には他に思い浮かばなかったために、口からでてきた言葉は「たぶん公園の中にベンチがあると思いますから、少し座って心を落ち着けてみませんか」と言うものだった。

シヨンは黙ってうなずいた。それではと、アビンは公園に入る三重ドアの最初のドアを開いてシヨンをの中に入れた、それに続いて彼も中に入った。すると、今開いていたドアは自動的に閉じられ、それと同時に次のドアが開いた。そして、二人は先に進むと、同じように今開いていたドアは閉じ、三つ目のドアが開いた。すると、そこには見事な自然公園が広がっていた。

自然公園内

二人が、公園内に出た所は、ちょうど公園の小さな7メートル四方の広場だった、周りには背の低い木々が植わっていた、周りを見渡すと、奥の方には小さな噴水のある池があるその周りには歩道があり、此方から行くには十五段ぐらいの階段を下りなければならぬ、上の方に行く階段もある、丁度この上の方にある歩道まで上がる階段だが、二十段ぐらいあるようだ、途中で折れ曲がっているため、はつきり段数を数えられない。見渡すと気づくのだが、高さが十メートルを越す樹木が数十本も植わっているのに気がつく、それに、何羽かの小鳥も放し飼いにされているようだ、流石に直径70メートル自然公園というふれ込みも、まんざらではないが、やはり人の手が入ったものであることを上方にある渡り通路を見ると、感じさせられる。しかし、この中にいるととても宇宙船の中にいるとは考えられない。そう、天井は大空の様子を映し出すスクリーンと成っており、雲の動きに合わせて風がそよぐことになっている。

ここでベンチに座ってしばらく何も考えずにボーとした気分を駆られるアビンであったが、そのためにここに来ただけでは無かった。

「シオン、池の畔にあるベンチに腰掛けて、少し心を落ち着けるのはどうだろう」とアビンはぎこちなく切り出した。

「ええ、そうですね。では、行きましょう」とシオンは応えた。

二人は、無言のまま、池の畔にあるベンチに来て腰掛けた。当然、彼は、シオンを先に座らせたのは言うまでもない。

しばらくして、シオンは少し落ち着いたのか、アビンに尋ねてきた。

「アビンさん、アビンさんのラストネームが変わった響きがある名ですね」。

「そう言われるとそうかもしれないですね。あはははは、……」彼は応えながら何で俺が笑わなければいけないんだと思いつつむなしい笑いをしてしまった。

「もしかして、管楽器奏者の家系とか、牧夫の家系とかとの印象を受けるんですが、気を悪くされたらごめんなさい」とシオンは少し詮索するように話してきた。

アビンとしてはさして気に留めなかったが、何故そのように尋ねられるのか気になったので、あえて名の成り立ちを「私の遠い昔の父方の家系では、昔はブロワーと言う名だったそうですが、ある時、子供が一人しか無く、相手の家も子供が一人しか無かった時に出来れば両者の家系の名を残したいとのことで、ホーン家と、ブロワー家の名を合わせた名のホーンブロワー家が、両者の子供の結婚に伴って出来たのが名の由来だと父祖から聴かされたんですが、私には、それ以上のことは知らない」と話した。

「そう、そのような成り立ちもあるんですね。ごめんなさい。つい、銀河帝国の有名な提督の名と同じものですから、いらぬ詮索をしまいまして、本当に、ごめんなさい」とシオンは、申し訳なさそうに謝る。

「いいえ、その人は、私の父ですから」と彼は、シオンの言葉に不思議にすんなり答えた。

「えっ、そうなんでしたか、私は、てっきりテラ、リーズの方だと思っていました。そうなんですか、あの知将と呼ばれているホーンブロワー提督のご子息なんですか。そうしますと、此方の方には留学で来られておられるんですか」とシオンは彼の顔を好奇心のまなざしで見ると、

この時、アビンは、シオンの顔からさっきまでの沈んだ表情が消えて明るくなっていることに気づき、ほっと胸をなで下ろした。

ただ彼としては、少し気まずい答えをしなければならなかった。「じつは、意見の食い違いで、父親に勘当されてこっちに来ているんです。情けない話ですが」と話しながら本当に自分が情けなかった。

「そうですね、でも、お父様がお健勝なら何時でも会えますし、仲違いがあったとしても何時かは、努力すれば解消できるでしょう。きっと、アビンさんなら出来ると思います」とシオンは、彼を気遣って話す。

「そうだね」とアビンは応える。

それから、少しの間二人とも黙ってベンチに座っていた。そんな様子が人の目にどう

眺めるかは、考えもせず、たただ、小な噴水がたてるさざ波を静かに眺めていた。しばらくして、誰かの話し声が聞こえてきた。たぶん、他の客の誰かだとアビンは思ったが、どうも何処かで聞き覚えのある声だった。そこで彼は、おもむろに声のする方へ振り向いた。そこには、マックス、トレッカーが見知らぬ女性と立っていた。

何やら込み入った話をしているような雰囲気である。アビンは話が聞き取れればと思ったが、噴水の音にかき乱されて、よく聞こえなかったが、しばらくするとトレッカーは、此方の方に気がついて女性を伴って近づいてきた。

「これはこれは、アビンくんお隣のお嬢さんは、君の彼女かい？」と出し抜けにションのことを尋ねてきた。

「いいえ、彼女は、ファーナビー提督の所のお嬢さんです。別にデートをしたりしていたわけでもありませんから。ところで、トレッカーさんこそ、そちらの女性は何方ですか」とアビンは切り返した。

「そうか、彼女は昔の同業者だが、今はフリーのルポライターをしているアリス、マクレガー何処かで聞き覚えのある名前だろ」トレッカーは、彼女を紹介しながら口元をにやりとさせた。

「へー、あの辺境惑星の名所案内とかトロン遺跡の謎に迫るなどの著者の」どうリアクションを取っているのか、あまり関心のない事は、どうも鈍いアビンだった。

その反応を見て、マクレガーは「私って、まだまだなのね」と呟いた。

「君が、宇宙考古学専攻なので、てっきり大喜びすると思っていたんだが、残念だ」といかにも残念そうに、トレッカーは、肩を落とす。

その時、アビンは、一瞬だが、ションを見るマクレガーの目つきが鋭くなったのを見た。彼は、何故と思っていると不思議なことがもう一つあった。それは、ションのことだった、この子は初対面でも、自分をミスとかお嬢さんと呼ばせないようにしているのに、今は、そうしない、どうゆう事だろうとゆう思いが過ぎった。

そうしていると、トレッカーが、「彼は、アビン、ホーンブロワーくんだ、ランカスター教授の助手をしている」と彼を紹介した。

「アビン、ホーンブロワーです、アビンと呼んでいただいて構いません。ミス、マクレガー」とあいさつをして答える、アビン。

そして今度は、アビンがションを紹介した、「ミス、マクレガー、トレッカーさん、この子は、ファーナビー提督の弟さんのお嬢さんで、ション、F. ファーナビー今秋からオクトーバーハイスクールに通われるとのことですよ」と話を区切ってから、「ション、此方が、マックス、トレッカー」と紹介した。

すると、ションは丁寧な仕草で、「初めてお会いします。ミス、マクレガー、ミスター、トレッカー、私は、ション、F. ファーナビーと申します。宜しくお願いします」とあいさつをした。

「宜しく、トレッカーだ」と相変わらず無愛想に応えるトレッカー。

それに対して、「へえええ、今度ハイスクールなの、初々しさがまぶしいわ。宜しくね、ションちゃん」と好対照な反応のマクレガー。

アビンとしては、なんでこんなぶっきらぼうの男に、こんな美人が、いっしょにいるのか不思議で仕方がなかった。

「そうだわ」。

マクレガーは突然に大きな声を出してアビンに詰め寄ってきて言った、「ねえ、あなたランカスター教授の助手でしょう。じゃ、今度、今発掘中の遺跡のことでインタビューできないかな、お願いだから、それとなあく聴いてみてくれないかな、ね！ね！ねえ！」。

「ですが、.....」とアビンが答えようとした言葉を遮って、彼女は、「じゃ、私これから合わなくちゃいけない人があるので、これで失礼するわ。後で連絡するから宜しくねアビンくん」と言い終えるやいなや走り去っていった。

残されたアビンは、言葉を無くして茫然としていた。その横で、トレッカーが「なんと、相変わらず騒々しい奴だ、他の人に迷惑かけなきやいいんだが」と呟いた。そんな中、ションは静かにじっとしていた。それをちらと見てから、トレッカーは「私も、これで失礼する。別に用事もあるわけでもないんでね」と言うなり立ち去っていった。

アビンは、そんな彼をやはり茫然と見送った。

そんな彼のそばに、ションは近づいてきて「私、あのトレッカーと言う人、信用できません。何となくですが、血の臭いがする人ですから」とまるでコンピュータが話すよ

うに喋った。

「そんな風に、人を決めつけては、だめだよ」とアビンは、シヨンの言葉にはっとしてたしなめた。

「私は、あなたを信用出来そうです」。シヨンは、今度は普通に答える。

「それ、どういう意味」。

「はい、アビンさんは、私にちやほやせずに、はっきり善し悪しを述べられますから。いけません？」。

「あっ、いや、構わないけど、それだけで私を信じていいのかい」。

アビンは、真面目に心配して問う。

「それは、私が、アビンさんをどう評価するかの問題で、アビンさんが気にかける問題ではないと思います。それから、アビンさんは、ご自身のことを私と、仰るのはどうも苦手のようなですね、何時もは、俺とか使っておられるのでは？私の前では、構いませんから、下品とか思いませぬし、その方が、アビンさんには自然に感じられます」と言ってからシヨンは、にっこり微笑んだ。

アビンは、「やれやれ、まったくこの子にはかなわないな」と思うのであった。

また、二人だけになって、静けさが戻ってきた、聞こえると言えば噴水の音、小鳥のさえずり、人工的に造られたとはいえ心地よい風にそよぐ木の葉の音、本当に心が落ち着く環境だ。

アビンは、もうしばらくこうしていたかった、可愛い子もそばにいるし、足下には妙に毛がフサフサした子狐がじゃれているし、「子狐？何でだ、こうゆう自然公園には肉食獣は離されないはずだが」と改めてよく見てもやはり狐だった。そこで、彼は、シヨンに尋ねてみた、「この子狐、いつ頃からここにいたんだろう」。

「えっ、気づきませんでしたか。先ほど前の茂みから出てきて、アビンさんを気に入ったのか、足にまとわりついてるんですが、動物は、お嫌いですか」。

シヨンは微笑みながら言った。

彼は、そんなシヨンを見てふと思いを過ぎるものがあった「この子、普通の女子と何処か違うな。物腰か、それも、だが、この可愛い子狐を見たなら普通の女の子ならしそうな反応をしなかった。まあ、可愛いとか。これも、一時的とはいえ感情を失った結果なのか、元々そんな子か、どうなんだろう」。

アビンは、そんな事を思いながら子狐を両手で抱えた。

その時、ふと視線を感じた、シヨンの視線だ、物悲しそうな、ドキッとするような潤んだ目、彼の考えを察したのか、それとも、シヨンが無言である限りは何も分からない

。「その子、ティベリア、フォクスと呼ばれる狐で、生後五ヶ月ぐらいですね。可愛いですね」。

子狐の小さな頭を撫でながら、彼の思いに、答えているかのようにシヨンは、静かに話した。

「そうだね」アビンは、短くそう答える。

ティベリア、フォクスは、ごく普通の狐だが、子供の頃に毛が長いのが特徴で、成獣に成ると長い毛は、全ては短い毛に生え替わる。原生場所は惑星ティベリア。

それにしても、子狐はみんなそんなのか、それとも、誰かに飼われているためなのか、妙に人なつこい。先ほどから、いしようけんめいに愛嬌を振りまいている。そんな中どこからか人の声が聞こえたと、思うとアビンの手をすりと抜けて、声がしたと思える方向に駆けだしていった。

その様子からすると、どうも飼い主の声らしかった。アビンは、少し抱えていた手が寂しかったが、シヨンはただ子狐の走っていった方向をジッと眺めたいため表情を見ることは出来なかった。しかし、たぶん寂しそうな表情だろうと思った。

ふと見上げてみると、子狐が走っていった方角から誰か歩いてくる、それも、その子狐を抱きかかえてだ。

そして、二人に近づくやいなや「あのう、この子、ご迷惑はかけませんでしたか」と尋ねてきた。

「いいえ、そんなことありません」。

アビンは、相手に答える。そして、シヨンも答えて「いいえ、迷惑だなんて、とても可愛い子なので連れて行きたくなるぐらいでした」。

「それは、善かったです。この子時々悪戯したり噛みついたりしますもので、困ってるんです。早く親を亡くしたせいもあるんですが、そして、さっき、私が、ちょっと目

を離したすきに逃げ出しちゃって困っていたんです」。

相手の若い女性は、ほっとしたような表情で話した。

そんな彼女に対して、シヨンが口を開いた「失礼だとは思いますが、その子にマーカークロムや何かの印を付けておいた方がいいと思いますが、そうしないと配線ダクトや換気ダクトに紛れ込んだらたいへんな事になりますから」。

「それはそうね、忠告ありがとうございます。後で首輪でも付けて置くわ」。女性は少し当惑しながら応えた。

「あっ、気を悪くされたらごめんなさい」。

相手のことを察したかシヨンは、謝罪をする。

「いいえ、別に気にしてなんか無いから、気を付ける方は此方なんだから」と答えてから彼女は尋ねてきた「あなた達、恋人同士？」。

「いいえ、違いますよ。そんな風に見えますか」。

少しあわて気味に尋ねるアビン。

そんな彼を気遣うように「私たち、先ほど知り合ったばかりなんですが」と答えるシヨン。

「でも、似合いのカップルよ．．．．．ところで、あなたオクトーバーハイスクールの学生でしょう。私も以前通っていたの懐かしいわ」。

女性はシヨンを見ながら話す。

「そうですか、ですが、私は、今秋から通う予定なんですけど」と応えるシヨン。

「あっ、ごめんなさい。気を悪くされた？本当に懐かしかったものだから」そして、彼女は、気を取り直してから、にこやかに言った、「でも、これも何かの縁ね。私、シリル・ミツチエル動物の調教士をしているの、今回、プラネットテレビジョンの仕事でこの船に乗ることになったのと言うより、ここが、現場なんだけどね。それで、ちよつと下見をと思っただけで来たら、この子が、バスケットから逃げ出しちゃって、ここまで追っつけて来たの。でも、本当に助かったわ、この子本当にやんちゃで見境無く何でもまず噛みついてしまうので、誰かにけがをさせなければいいのにと、思っていたところ何も無かったみたいで善かったわ」。

それに対してシヨンが答えた、「そうなんですか。そんな風には見えませんでした。茂みから現れるなりアビンさんの足下に来てじゃれていましたから」。

アビンは、そんなシヨンの言葉に驚いていた。何故なら、普通そのようなことを女の子が、黙って見ているとは、彼には思えなかったからだ。しかし、実際に目の前に居るのだからしょうがないと彼は、少しため息混じりに、呟く「ただ見ているだけだったんだ」。

「ええ、アビンさん、何か考え事をされているようなので、声をお掛けしませでした」とシヨンは、答えを期待しないで呟いた言葉に、応えた。

「あっ」と一瞬言葉の詰まるアビンだったが、気を取り直して話し出した。「ええと、自己紹介が遅れてもうしわけありません。私は、アビン・ホーンブローと申します。オクトーバー大学の学生で宇宙考古学を専攻しています。今回は、教授の助手としてこの船に乗船しています。あっ、私のことはアビンと呼んで下さい」。

それに、続いてシヨンが、自己紹介を始めた。「ミス・ミツチエル、初めまして、私は、シヨン・F・ファナービーご覧のとおりオクトーバーハイスクールに今秋から通う予定でございます。今日は、伯父様達のお誘いで、この船に乗船いたしました。たぶん時々お会いすることが、有るかと思しますので、宜しくお願いします」。

ミツチエルは、くすっ、と笑ってからシヨンに握手を求めて言った。「宜しくシヨンちゃん、あなた、可愛いわね、その神秘的な目の色といい珍しい銀髪に近い薄紫の長い髪、きっと学園で、話題になるわよ。たぶんちよつとしたアイドルに成るんじゃないかしら。今からそんなことを想像すると楽しいわ、今度、生物工学科の研究室に顔を出すときが楽しみだわ、どんな話題になっているかってね」。

そんなミツチエルに対してシヨンは、気を悪くしたのか何も答えず、ただ笑いながら握手をするだけだった。

アビンとしては、シヨンの気持ちがよく分からないでいたが、これまでの経過から考えると、シヨンは不満に違いないと思えたが、また、何かを警戒しているようにも感じられた。なぜなら、自分の伯父の名前を出さなかった、出せば直ぐに素性が、知られるからだ。そして、ふと、先ほどシヨンが、話した言葉が彼の頭の中で引っかかった。

「さっき、確か、伯父様達と言ったはずだ、すると提督以外にもう一人誰が、伯父様と呼ばれている人物がいることになるな。そう言えばティールームでランカスター公爵の

ことを伯父様と呼んでいたがまさか「ね」と考えた後、わき上がる好奇心を抑えて、機会があったらそのへん詳しく聴いてみることにしようと思心に決め込んだ。

「ねえ、アビンくん」と話がアビンの方に回ってきた、「こんな可愛い子が側にいると、みんなから冷やされるわよ」。

「はあ」としか答えられないアビンだった。

「あのう」と、突然、シヨンが、切り出して言った。

「ミス、ミツチエル、私たちこれから用事がありますので、失礼します」。

このなんの前触れもなしに語られた言葉に、アビンはビクビクしてシヨンを見た。すると彼に対してウインクをして何かを促してから、彼の腕を軽く引っ張るのに反応して「そうなんです。教授の用事を言付かっけていまして、申し訳ありません。また会えるかもしれません、今は、これにて失礼」と口から自然とその場に応じた言葉が出た。これも、公爵とたびたび窮地を切り抜けてきた経験が成せる技であると言えた。

こうして、二人は、その場を去って公園を出ようとする出入り口の方へ向かって歩いて行った。そして、ちょうど池から離れて一つ上の歩道に上る為の階段に差し掛かった時、アビンは、ふと上を見上げた。そこには、渡り通路が公園の上方に掛かっているのが見えた。その通路を女の子が、ふらふらと歩いているのを目にして、眩いた。「あの子あぶなっかしいな」。するとシヨンが、小さく叫んだ、「あれは、アン。なんだか、様子が変、アビンさん申し訳ありませんが、急いで一緒に来ていただけませんか」そうして、シヨンはアビンの手を引っ張って駆けだした。

二人は、階段を駆け上がると、丁度右側にあった、出入り口からまず、公園の外に出た、そして、出入り口のドアから五メートルほど左に行った所に、螺旋階段があった。それを使って渡り通路の有る階層まで二階層駆け上がって渡り通路の入り口に付いた。この渡り通路は、公園を上から眺めながら通行出来るように造られた物で、幅は四メートル有る。そして、見ると通路の中央辺りで、アンは、肩で激しく息をしながら手すりにしがみついていた。それを見るやシヨンは、彼女の側まで駆け寄って言った。

「大丈夫、アン」。

それに対してアンは、苦しそうに答えた。

「はい、大丈夫です」。

しかし、その答えとは裏腹に息も絶え絶えであることを追いついたアビンは見て取って言った。

「凄い汗じゃないか。それに、かなりの熱があるみたいだ、直ぐ医務室へ」。

ところが、シヨンは冷静にアビンに言った。

「いつもの発作ですから心配はいりません。大丈夫ですから、薬を飲んで少し横になれば直ぐに善くなりますから」。

アビンには、シヨンの冷静さに驚いて何も言えなかった。

「申し訳ありませんが、アビンさん、アンを私たちの部屋まで、連れてきては頂けませんか」と、シヨンは今度は少し寂しそうに言った。

「ああ、いいけど」と、答えてから「本当に医務室に連れて行かなくてもいいのか」と

、アビンは、納得がいかないために尋ねた。

「ええ、大丈夫です」と言うなりシヨンは、さっとくびすを返して、アビンに「此方です」と促した。

アビンは、仕方がないのでアンを背負ってシヨンの後に従った。背負ってみて初めて感じたのは、女の子は、こんなに柔らかくて軽いのかとゆう事だった。ただそれは、彼女がそのような子だったに、すぎなかつただけのこと。しかし、それが幸いして、アンを背負っていることがあまり苦にならなかった。

Aブロックの二人の部屋

Aブロックの二人の部屋

アビンは、アンを背負ってシヨンの後について彼女たちの部屋に向かった。Aブロックの区画は、Bブロックのそれと少し違う、通路の床には絨毯が敷き詰められていた。三人が、渡り通路から出た所から少し離れた右側に、先ほど上ってきた螺旋階段があった。その反対側になる左側の少し離れた7メートル程の所にエレベータが有った。どうもここは、螺旋階段がある広いエレベータロビーだったようだ。そう言えば、先ほどは急いでいて目に入らなかったが、テーブルとかソファが幾つか置かれている事に、アビンは気がついた。

「アビンさん、エレベータを使いましょう」とシヨンは、彼を促した。

シヨンは、エレベータのドアを開けて、アンを背負っているアビンをエレベータ内に、招き入れた。

「アビンさん。重くありませんか」とシヨンは7階層行きのスイッチを押しながら彼に、尋ねた。

彼は、ぼんやりとガラスの向こうの公園の景色がドアが閉まる事により断ち切られる様を見ながら答えた。

「いや、この子は軽いから大丈夫だ」。

「そうですか、ありがとうございます。私たちの部屋は、一階層下ですからそんなにお手間は取らせませんから」。シヨンは申し訳なさそうに話した。

そして、確かに、直ぐに7階層に着いてドアが開いた。そこは、エレベータロビーと言うよりも広いラウンジになっていた。上の階層と違ってテーブルもソファの数も多く広さも二倍位有った。それに、ここには小さなインフォメーションブースが有ったがどうゆう役割が有るかは、今のところ分からなかったが、ここからも公園の景色がガラスを透して眺められる。

エレベータを出るとシヨンに促されてラウンジの手前の右側の通路に入って右の三番目が7A-108号室だった。つまり彼女たちの部屋とゆうことだ、その、ドア口に立ってシヨンは言った。

「少しお待ち下さい。今、ドアを開けますから」。

それから、シヨンはスカートのポケットからロックキーカード取り出してカード読み取り機に差し込んでドアを開けた。

アビンは促されるまま部屋に入る、と直ぐに部屋の明かりが点灯した、その後続いてシヨンが部屋に入ってきてドアを閉じた。そして、目の前にある部屋は、確かにツインだった。それも、一等船室なので二等船室とは、比べ物にならないほど広く贅沢な作りが施してあった。なにせ提督の親族なのだから、やはりお嬢さんとして育ったんだろうなと思いながら、シヨンに促されるように奥にある寝室に向かった。

「ところで」とアビンは切り出した。

シヨンはそれに寂しそうな目で答えた。それに対して彼は、次に続ける言葉を失ってしまった。

寝室に入ると、シヨンは左のベッドの方へ行ってからその横で腕を開いて

「ここに、アンを寝かせて頂けませんか」

と彼に、言った。

アビンは、それに答えて背負っていたアンを今度は、抱きかかえてベッドの上に横たわらせた。アンは、苦痛のためか「うっ」と小さな声を立てて少し身を振った。

「ふう、やれやれ、これでいいのかいシヨン」

と彼は、一息ついて尋ねた。

「はい。ありがとうございます。ついでにと言っては申し訳有りませんが、アンは、私が見ていますので、ミス・ビットンブルーを呼んできては頂けないでしょうか。たぶんまだ、あの人はティールームにいらっしゃると思いますから」とシヨンは、アビンに願い出た。

その言葉に面食らいながらアビンは尋ねた。

「呼んでくるのはいいんだが、どうして、ミス・ビットンブルーが、まだ、ティールー

ムにいますと言いつつ切れるんだい」。

それに対してシオンは、答えていった。

「はい。あの方はコーヒーには眼のない方で、何杯かお代わりされながら一時間は楽しめます。それに、ミユラーさんも、結構コーヒー好きだとゆう事を妹さんから聴きましたし、美緒さんには悪いですけど、そのままほうっておくと、明日の明け方まで互いに意見をぶつかり合わせていると思います。そのような訳で、申し上げたしだいです」。

やれやれ、とんだ二人だったんだと思いつつ彼は尋ねた。

「そうゆう事か、でも、ミス・ビットンブルーは精神科医ではなかったじゃないか、それとも内科医の資格もあるのかい」。

「いいえ、ですが、ミス・ビットンブルーが、この子の薬を持っていて、あの方しかそれを投与できないのです。ですから、お願いします、呼んできては頂けないでしょうか」

とシオンは、アビンに懇願した。

「そうゆう事なら、分かった。じゃミス・ビットンブルーを呼んでくる。それまでがんばって」

と言うなり彼は二人を残して部屋を出ていった。

シオンは、そんなアビンを見送ってから、「クスッ」と微笑んでから。アンの側に腰掛けて、彼女の額に触れて言った。

「どう？大丈夫。．．．．． どうも調整がうまくいかなかったのね」。

「申し訳有りませんシオン様」

と辛そうにアンは喋る。

そんなアンをシオンはなだめるように言った。

「少し静かに、大丈夫、今調整してあげるから」。

そう言うなり、シオンはテーブルの上に置いてあったシルバーの小さなケースを取り膝の上で開いた。その中には小さな端末コンピュータと端末のケーブルが入っていた。シオンはケーブルがコンピュータに接続されている事を確認してから、アンのうなじの辺りを軽く押した、すると、うなじの辺りに一つの小さな穴が空いた。それを確認すると、シオンは端末ケーブルの先端にある針状のコネクターをその穴に差し入れるとコンピュータのディスプレイに様々なデータが表示された。その幾つかの数値をシオンは書き換え始めながら言った。「直ぐに楽になりますから。どうもバイオシステムとサイバシステムのリンクが少しズレていたみたいね」。

「申し訳有りません。シオン様」とアン。

「アン？いつも感謝しているのは私の方なのに、だから、そのシオン様と呼ぶのは、辞めてもらえませんか。出来れば他の呼び方に変えてもらえませんか」とシオンは端末を操作しながら話した。

「では、何とお呼びすればいいのでしょうか」

とアンは、尋ねる。

しかしシオンはそれに答えて言った。「出来れば、人前ではシオンだけにしたいんですけど」。

「分かりました。人前ではそのように致します。ですが、提督の前や二人っきりの時は、そのように言うのは難しく感じますが」

と少し弱々しく答えるアン。

シオンは少し考えてから口を開いた。「そうですね、その時はシオン様でも良いですよ、また、あなたと二人だけならセカンドネームでも構いませんよ、アン」。

アンは、シオンのその答えに少し当惑しながら応えた。「でも、それではお困りになるのではありませんか」。

「御主人様とかシオン様と言われるよりは、私も受け入れやすいけど、そして、アンあなたにだけなら宜しいですよ」

とシオンはニッコリして答えてから、アンのうなじに、つながっていたコネクター抜き再びうなじを軽く押して穴を閉じてから言った。

「これでもう大丈夫よ。後は、少し眠っていなさい」。

「そうですか。ありがとうございます、フィリシア様」とアンはシオンに感謝を述べた

。「そうそう、二人だけの時だけですよ」。

「本当に宜しいんですか」。

「ええ、良いですよ」。

すると、アンは、起きあがって少し涙ぐみながらシヨンの膝元に手をついて言った。「分かりました。いつもいつも御世話になっていきますのに気遣って下さるのを感謝いたします」。

それに対してシヨンは、アンの肩を抱いて答える、「気にしなくても良いのに、完全とはいかなくても、あと二ヶ月もすれば、こんな事も無くなります、それまで、しばらくの辛抱だからがんばってね」。

「本当に、元のような人間になれるんですね」

と少し泣くじやくりながら応えた。

「そうね、でも、バイオノイドに近いかたちに成ってしまうんです。それ以上は無理みたい、どうしても人の力では越えることの出来ない壁だとセシリアが言ってました。ごめんなさい」。

シヨンも同じように少し泣きじやくりながらアンに言い聞かせた。

その答えに、アンは首を振りながら言う。

「いいえ、これまで、私にして下さった事を考えれば、今でも十分以上ですのに、この上私に親切を示して下さいなんて」。

シヨンは、アンの反応に言いしれぬ悲しみを感じていた。それは、アンの身体を、元に戻すようセシリアが、あれこれと行っていることは、ただ、フォレスト博士達の研究の成果を吸収したいが為かまた、アンによってデータの蓄積とその実現の効力を確かめたいだけの、衝動だけで動いているにすぎないことを知っていたからだ。しかし、事はどうあれ結果からすれば、彼女は、ある意味で元に戻れる事は事実である。それにしても、好奇心と探求に異常なまでに執着する困った行動が、何とかならないだろうかとシヨンは、常々思っている。そして、かつての同じ悲劇を引き起こさないで欲しいとも願っている。そして、この船にまだセシリアが乗り込んできていないことに感謝していた。

ただ、最近言えることは、セシリアは、以前とは少し違うような行動や反応する時がある、あえて言うならば人間味ある行動が増えてきた、いろいろな事を学習してきたせいなのかはシヨンには、分からなかった。しかし、目に見えた変化として、アンに対する扱いだ、以前なら単なる実験体としか見なかったが、今は、アンを自分の妹のように扱っている事からしても、なにがしかの変化が起きている事は、確かだとシヨンはこの前ブリストル博士から聴いた。

シンク．．．．．C. I. N. C. 誰がなんの目的で制作したか分からないテラ．コンピュータ、本体が何処に有るのかも不明と言うよりもそのような情報を持っていた者は、今は、その中に取り込まれてしまっていて、その時以来、語ろうとしない。その当事者は、セシリア。そう、シヨンの双子の姉妹。あの事故で瀕死の重傷を負って、そう長くは保たないと判断された時、自ら進んでテラ．コンピュータに取り込まれるプログラムを走らせた。

その後、しばらくしてブリストル博士からシヨンは、C. I. N. C. のコミュニケイション端末として人間をテラ．コンピュータに取り込んでしまう計画のために、セシリアが、犠牲者となる人物を捜していたらしいとゆう事を聴かされ、驚愕したのを覚えている。

それ以来、シヨンは、自身も失った感情と心を取り戻すべく努力しながら、人間性とゆうことで何度となくシンクと意見が衝突した。そんな中で、シヨンはアンに会った。その時には、彼女の身体は飛行機事故のためほとんどが、作り物になっていたが、生前のフォレスト夫妻の愛情の現れを十分感じ取る事の出来る作り物となっていた。それに、シンクことセシリアは目を留めて、彼女に巧みに言いより「あなたを元に戻してあげる」と言ったそう。始めは、利用するために近づいたようだが、それからの一年半ほどの期間、アン、シヨン、シンクの間でいろいろな事が有ったが、アンは、着実に元の身体に戻りつつあり、シヨンは彼女との関係で、豊かな感情や心を知った。シンクはデータ得て満足したようだが、他にも何か得るところが有って最近少し変化が見える。

シヨンの脳裏に様々な思いが一瞬のうちに過ぎった。そして、アンの肩に手を掛けて引き離してから、泣きはらした目を見ながら言った。

「私は、本当にあなたに感謝しているんだから、あなたに会わなければ、今の私は、無いと言えます。私は、あなたに会った時に、身体のほとんどがバイオテクノロジーとサイバーテクノロジーの固まりなのに、人間としての感情と心が非常に豊かだったのに驚かされました。その時、この子は両親に本当に愛されて育てられたと感じました。それ

にひきかえ私は、人間としての感情がいくら欠落していましたが、そして、オクトーバーシティに来てからというものアン、あなたと、美緒さんにはいろいろと教わって感謝しているの、特にあなたには、アン」。

「そんなことはありません。フィリシア様あなたは、私の命の恩人なんですから」。
そんなふうに懸命に答えるアンの震える唇に、シオンは右手の人差し指を当てて言った。

「もう、その事は言わないで、あなたの胸の内に納めて欲しいんです」。

「はい、分かりました」。

「それじゃ、少し横になっていると良いですよ。アン」。

「はい、そういたします」

と言ってアンは横になった。

その時、アンが横になったと同時にドアをノックする音がしたので、シオンは、それに答えて言った。

「何方ですか」。

するとドア越しに、答える声がした。

「アビンです。ミス、ビットンブルーを連れて来たんですが」。

「どうぞ、お入り下さい。鍵は開いていますから」

とシオンは、返事をした。

するとドアが開いて三人の人間が入ってくるのをシオンは、感じた。どうも一人予定外の人物が、来てしまっているようだ、それで、もう一人の人物について神経を集中すると、どうも美緒、平松も着いてきていることを感じ取ったので彼女に語りかけた。

「美緒さん、お父様との約束をすっぽかして宜しいんですか」。

すると、美緒は寝室に入ってくるなり不機嫌そうに言った。

「相変わらずね、シオン。今度は、私の何で分かったの」。

それに答えてシオンは言った。

「美緒さんの歩く音と、香水の香りで、あなただと判断しました」。

「まったく、相変わらずね、．．．．．ところで、アンはどう」

と美緒はシオンに右目でウィンクしながら尋ねた。

「ええ、もう大丈夫です。少し休ませた方が善いみたいなので、ミス、ビットンブルーに精神安定剤を頂きたく、アビンさんに呼んできていただくようお願いしたんです」

と美緒の言葉に答えた。

そんな会話の中に、アビンとビットンブルーが入ってきた。そして、ビットンブルーはシオンの言葉に反応して言った。

「どうして、私が、いつも薬を持ち歩いていることを知っているの」。

「はい、ミス、ビットンブルーがいつも携帯されている安定剤は、分解が早いタイプですよ。微かな臭いがありますから、それで、わたし、分かるんです」 とシオンは少し申し訳なさそうに答えた。

ため息を吐いてからビットンブルーは言った。

「まったく、あなたには、かなわないわね。まるで子犬のようね」。

そして、彼女はアンを見てから胸元のポケットから薬のケース出しシオンに向かって放り投げて言った。

「シオン、薬の用法は分かてるわよね」。

シオンはそれをさっと左手で受け取って言った。

「ありがとうございます。ミス、ビットンブルー」。

そんなやり取りをただ黙ってアビンは見ていた。それもそのはずである彼がビットンブルーをここに呼んでくれば、それで、彼の役目は何も無い、それに、どうもシオンは彼に少し離れていて欲しかったようだ、何故なら薬の投与はビットンブルーしか出来ない訳ではなかったからだ。そして、彼としては元々二人の部屋に訪れる予定は、無かったのだから。

そして彼は、事も一段落したのだからと、この場を去ることにして言った。「それでは、俺の用は済んだことだし、これで、しつれさせてもらいます」。

「あら、ゆっくりしていけば宜しいのに、．．．．．でもないか」

とビットンブルーは、アビンを呼び止めるように言った。

それに答えるように美緒が言った。

「そうね、少し取り込み中な事は否めないわね。これからアンを寝かしつけなきゃいけないもんね」。

「なにをちゃかしてるんですか」
とシヨンは、むっとして応えた。
そんなシヨンの反応に美緒は、大げさに脅えるふりをして言った。
「おおこわ、じゃ私たちこれで退散するわ、元気でねアン、バイバイねシヨンちゃん」

。そう言い終えるやいなや美緒は、アビンの腕を引っ張って外に出た。それに続いてビットンブルーもシヨンに、

「それじゃ、私もこれで失礼するわ。お大事にね」
と言って部屋を出た。

三人は、部屋の外出たところで、船内アナウンスが有った。「乗客の皆様にお知らせいたします。たいへん長らくお待ちいたしました。当船は、後30分で出航いたします。お見送りの方は、下船をお願いいたします。まもなくゲートが閉じられます。ゲートが閉じられると次の寄港地まで船をお降りすることは出来ません」。

アビンは二人の女性の方に向き直って言った。
「そろそろ、出発ですね。では、私は、これから用事がありますから、これで失礼します」。

「あら、残念もう少しお話しできればと思ってましたのに」

とビットンブルーは残念そうに言った。
その言葉が終わると、すかさず美緒が尋ねてきた。

「ねえ、アビンさん。アビンさんの部屋は何号室」。

「あっ、5B-107だけど、それが何か」

と答えた。
美緒は、含み笑いをしながら、その言葉に答えた。

「それはね、ティールームにちよとした忘れ物をしてきたの、それで、宜しければなんだけど、同伴してくれないかなってね。．．．．．だめかな、一人で歩き回っているところを見つかると、後でお父様がうるさいの」。

上目使いで頼み込まれるアビンは、あくまで冷静に言った。

「かえって、私と二人して歩いているところを見られた方が、よほどうるさいんじゃないかな」。

美緒は、くすっと笑ってから彼に言った。

「それは大丈夫ですわ、あなたが、教授の助手をされていることを話せば、お父様も納得されますから」。

「ずいぶん自信たっぷりに言うんだな」。

アビンは、美緒の発言に少し驚きながら言った。

「そんな訳ですから、ミス．ビットンブルーまた後で」

と美緒は微笑みながら言った。

そんな彼女に対してビットンブルーは、少しため息混じりに別れのあいさつをする。

「ホントにげんきなんだから．．．．．美緒、くれぐれもはしゃぎすぎないように、お願いね。後で、あなたのお父様に叱られるのは、私なんですからね．．．

．じゃ、気お付けて、バイバイお嬢様」。

アビンは、ミス．ビットンブルーの最後の言葉は皮肉だなど思いながら、美緒に腕を引っ張られながらエレベータの方に歩いていった。

黒い商人

エレベータは5階層に到着してドアが開いた。開くと同時に美緒は、さっと外に出ようとして黒一色に身を固めた若い男にぶつかった。

「あっ」と言って美緒は、ぶつかった勢いで転びそうになったのをその男は、腕で支えて言った。

「大丈夫ですか。お嬢さん」。

美緒は、少し恥ずかしそうに

「ええ、大丈夫です。ありがとうございます」

と答えた。

「お急ぎでしたか、気を付けて下さいね」

とその男は、優しく言葉をかける。

「あっ、はい．．．．．」と急にしおらしく応え始める美緒だった。

それを見ていたアビンは、やれやれと思って声を掛けた。

「そちらの方こそ、大丈夫でしょうか」。

「ありがとうございます。気を使っていただいて」

と男は、感謝を述べてきた。

そんな相手を、アビンは、観察して思った。「結構好青年だ美青年と言っても良いだろう、これなら女性達は、放っておかないだろうな。けど、それにしても何でこれ程にまで、黒づくめの服装をしているんだ」。

あんまり相手をじろじろ見過ぎたせいなのか、その男は尋ねてきた、

「あのう、私に何か」。

「いや何でも有りませんから．．．．．」

と言葉を濁すように答えた。

「あのう、ご迷惑でなかったら、お詫びにお茶をご一緒しては頂けませんか」と美緒は、二人の間に割り込んできて、黒づくめの男を誘った。

そんな美緒に対してアビンは驚きながら言った。

「美緒さん、有ったばかりの人にそのような誘いは失礼では有りませんか。それに、相手が何方か分からないのに」。

アビンがそう言うのが早いかな否かに美緒は応えた。

「アビンさん。旅はみちずれ世は情けと言うではありませんか」。

アビンは、唾然としながら言われたことの意味が把握できないでいたが

「だから、何だって言うんだ」

と言いたいのをジツとこらえた。

相手の男は、クスッと笑ってから口を開いた。

「これは、これは、失礼、わたしは、ジョン・ブラックと言います。ミント、コーポレーションと言うしがない貿易会社を父親と共にやっております、この度は、香料の買い付けでアストレリアまで、この船で船旅としゃれ込んだしだいなんです」。

それを受けて美緒は答えた。

「私は、美緒。平松。今秋からオクトーバーハイスクールに通うの、そして、この人はアビン。ホーンブローワー．．．．．ええとオクトーバー大学の学生で確か宇宙考古学を専攻しておられるそうです」。

「アビン、ホーンブローワーです。宜しく」

と彼は短くあいさつをした。

「此方こそ」

とブラックも短くあいさつをした。

そのあいさつを受けてアビンは、彼ブラックはどうも美緒のお茶への誘いをあまり嬉しくはないような感じを受けた、それもこれもアビン自身が、美緒に付き合ってお茶する事でこれ以上無駄に時間をつぶしたくないと、思っているせいかもしれなかったが、確かにそのような印象を受けたのだった。

それに彼アビン、ホーンブローワーとしては、早く部屋に戻り今回の発掘に関する書類

の整理と今日の十四時に開くディスクの事が気になり始めていた。今までは、自分の周りでこの短時間の内に、いろいろな人物に会い様々な話を聴かされて振り回されたために、今回の自分の重要な任務をすっかり忘れるところだった。それをようやく自分のペースに取り戻せる、この機会にさっさとこの二人から別れようと、機会をねらい始めたのだった。

「ところで、美緒さん、私は教授に提出しなければならない書類の整理があるので、ここで失礼したいのだが、．．．宜しければブラックさんと二人でお茶をされるのもいかがですか、まあ、ブラックさんが宜しければの話ですが」

とアビンは切り出す。

「あら、そう言えばあの時そんな事を仰っていましたわね」

と美緒は言う。

その言葉に、アビンは、これで解放されるぞ、と心の中で手を打ったが、そう簡単にはいかず、美緒は言葉を続ける、

「ですが、その時からずいぶんの間、シヨンと一緒にいたじゃありませんか、それなのに私とは少しの間でも一緒にお茶をする時間が惜しいんでしょうか」。

美緒の言葉にアビンもブラックも目を丸くした、それぞれの反応は違う物だったが、ブラックにしてみれば恋の三角関係に写っていたのだが、アビンにしてみれば、彼の心境は「おいおい、何でそこまで俺に食い下がるんだ」というものだった。

彼は、何とかシヨンとの事情を何とか分かってもらおうと公園であったことなどを話して説明した。そして言った。

「と言う訳なんだ、ですから美緒さん、分かって欲しいんだ」。

すると美緒は、すかさず提案してきた、

「では、30分だけでしたら、宜しいでしょうか」。

彼は、「やれやれ、そこまで食い下がるのか」と思いながら言った、

「では、30分だけです。良いですね」。

そんな二人の様子をブラックは、微笑ましく思えて言った。

「お二人さん、意見の一致したところで、お二人を祝して私がお茶をご馳走しましょう」。

「ですが、お茶をお誘いしたのは私ですのに」

と美緒がブラックに言う。

「良いじゃありませんか、私にご馳走させていただいても、まあ、私からのせめてのお近づきの印です」

とブラックは言っただけで、

アビンとしてはこの二人のやり取りに口を挟んで言った、

「おいおい、それは、どうゆう意味なんだい」。

それに対してブラックは、確信したように言った。

「え？お二人とも恋人同士なんでしょう．．．．．そして今仲直りをしたところなんでしょう」。

とんだ誤解であるとアビンは、思ったのだが美緒の方はまんざらでもないようだった。

そして、美緒は、二人を促すように

「では参りましょうか」

と言って歩き出した。

アビンとブラックはその後に従って歩き出した。そんな中ブラックはアビンの方に振り向いて小さな声で、美緒に聞こえないように、彼にこう言うのであった。

「こう言っちゃ何ですが、あなたきつと尻に敷かれてしまいますよ」。

「そんな関係ではないんですけど．．．．．しかし、完全にあの子のペースに振り回されているな」、

とアビンは言葉を返した。

その言葉に、驚いたようにブラックは言った。

「そうなんですか。でも、惜しいですねあんなに可愛い子なのに」。

「それはどうも．．．．．何だったら交代しましょうか」

とアビンは提案する。

それに対してブラックは、苦笑しながら答えた。

「私は、彼女みたいな方は苦手です、謹んで辞退いたしますよ」。

「何なんだよお前は」とアビンは思った。

そんな風に、二人は美緒の後に従いながら、小声で話している内にBブロックにあるティールームに着いた。

ティールームにて．．．．．そして、出航

彼アビン、ホーンブロワーにとって再びこのティールームに来るのは、不本意ではあったが、美緒に押し切られたかたちでブラックという若い貿易商とテーブルを境に仕方なく向き合う羽目になった。なにせ、まだ知り合ったばかりということで、相手がある程度知っておくことは大切なのだ。だが、ではある、今は、そんな気には中々なれなかった。それは、15時までに教授に手渡すためのレポート、用意しておかなければならない為に、ディスクがオープンになる12時までには、そのことを済ませておきたいと気も漫ろであるからだだった。

しかし、ここは30分我慢すれば解放されるのだから、それまで、相手が不機嫌にならないように、何とかしてご機嫌を取るしか無さそうだと、なかばあきらめがちに話し始めた。

「ブラックさんはコーヒー党なんですか」

と何とも情けない会話の始め方だなどと思いつつ尋ねている自分が情けなかった。

すると、ブラックはにこりとして言葉を返してきた。

「そう仰るホーンブロワーさんもコーヒー党でいらっしゃるのでは」。

「分かりますか」。

「ええ」。

「どうしてです」。

「あなたも、そう感じられた事柄ですよ」。

「そうですか、一概にも銘柄を指名したからと言って、そうは言えないと私は思います」

とアビンは素っ気なく答える。

相手は、興味深げな顔をして尋ねてきた。

「そうしますと、どんな理由でですか」。

「あと、その人の雰囲気と自分の感です」

と彼は答えた。

するとブラックは少し考える風にしてから苦笑しながら言った。

「ずいぶん古風な、いや乱暴かもしれませんね、その捉え方」。

「そうかもしれませんね」

と相づちを打ちながら彼は、世の中には、それを頼るしかないときもあるんだと、心の中で呟いた。

そんな二人の会話を聴いて美緒が、会話に加わってきた。

「お二人ともコーヒー党なんですか、ミス・ビットンブルーがお聞きになればきつとご馳走して下さるわ、あの方コーヒーには眼がない方ですもの、ただ、お付き合いする時はそれなりの覚悟が必要になるかも」。

「それってどうゆう意味」

とアビンは尋ねた。

美緒は、にこりとして答えた。

「それはね、一晚語り明かす事になるかもしれないって事なんです」。

その答えを聞いてアビンは、ゾッと寒気がした。

それに引き替えブラックは、平気な顔で美緒に尋ねた。

「その、ミス・ビットンブルーは美人かい」。

「ええ、今、提督の秘書をされてますけど、美人の方ですわ。アビンさんもそう思われるでしょ」

と美緒は話をアビンに振った。

「そうですね。綺麗な方ですね」

と思いきりしながら確かにそうだったと確認するように答えた。

「それなら、私は、是非ご一緒したいですな」

とブラックはニヤリとしてから答えた。

そんなブラックを見てアビンは、思った。

「俺は、あまりこういうタイプの男はどれも好きになれないな」。

美緒は、そんな二人に対し話してきた。
「私なんかは、コーヒーとか紅茶、グリーンティー何でも良いんだけどお菓子と合えば何ですけど、お二人みたいにコーヒーだけとゆうのは御免被りたいですわ」。
それで、彼女の前だけにイチゴショートケーキが有るのが、アビンには理解できた。それにしても、他人のおごりだとゆうことで随分ちやっかりしているもんだなど、彼は思った。
「ところで、此処に忘れ物をしてきたと仰っていましたが有りましたか」
とそれとなく彼は美緒に尋ねた。
美緒は、その言葉にニコリと微笑んで答えた。
「ええ、有りましたわ」。
「それは、善かったですね」。
「ええ、このイチゴショートケーキ、もう少しでいただき損なうところでした」 と美緒は、平然と答えた。
「.」彼アビン、ホーンブロー言葉を失った。
「どうしましたの、アビンさん」。
ブラックは失礼にならないようにと、笑いをこらえていた。
しかし、アビンとしてみれば何か忘れ物だと来てみれば食べ物の事とは、それはたいへんですねと、のこのこ付いてきた自分が情けなかった。
そんなアビンの心境を知る由もなく美緒は彼に、ケーキを薦めて言った。
「アビンさんこのケーキ本当に美味しいんですよ、雑誌の論評の中にも取り上げられていましたけど、やはり実際に食べてみなくっちゃ. そう、思いません」。
「そうですね」
と彼は、気のない返事をした。何故なら彼は、甘いものが苦手なのだ。
「つまんない、言葉に誠意が見えてない」
と美緒の追い打ちの言葉。
「ホント、食べ物は実際ただかなくては分かりませんからね」。
もうやけくそになって言った。
その言葉を聞いて美緒はニコリ微笑んだ。アビンは何かどっと疲れを感じて思った「もういい加減にしてくれ、早く時間が来て俺を解放してくれ」。
そんな、アビンに美緒は別のことを話した。
「アビンさん、シオンを誘うときはね紅茶を勧めるのよ。あの子はね紅茶党なのコーヒーを全く飲まないとゆう訳でもないのだけど。そして、薦めるんだったらクイーンマリーなのそうすると喜ぶわよ。ただ、子供扱いして絶対にミルクを薦めちゃだめよ、後がたいへんなんだから」。
「どうゆう風にたいへんなんだ」
と彼は、尋ねた。
「それは、ちょっと言えないわ。でも、暴れ出すとゆうわけではないから」。
アビンは、そう言われるとよけいに聴きたくるではないかと、言い出したいのをこらえて
「分かった、助言、痛み入ります」
と答えた。
そんな二人のやり取りをブラックは、苦笑しながら見ていたが、美緒の関心が彼に移りそんな彼に突然質問を浴びせた。
「ブラックさん、ケーキは好きですか」。
「へっ、. 私ですか、私は、そのう.」
と彼が答えに困っていると美緒は詰め寄るゆうに言った。
「お嫌いじゃないですよ、ブラックさんはそんなお堅い方ではないですよ」。
その言葉に対してアビンは思った「おいおい、ケーキが嫌いなだけで堅物かよう、俺はそんなに堅物ではないぞ」。
そして、ブラックの方と云えば、かなりたじたじな状態で、引きつった笑みを浮かべてただ、「そうですね」と応えただけだった。
「じゃ、私が、ブラックさんにケーキをおごりますわ」。
と美緒がすかさず応え、手を挙げてウエイトレスを呼んでケーキを注文する。
美緒がウエイトレスに注文している最中アビンはブラックに小声で尋ねた「あなたは、甘いものは大丈夫ですか」。
それに対してブラックは答えた。

「好きっと言う程ではないですが、こうゆう時は女性を立てるのが、私の主義でしてね」。

アビンはそんなブラックを改めて自分とは、その合わない奴だと思った。

そんな二人を注文を終えた美緒が目留めて言った。

「何、二人でここそ話をしているの。．．．．． あっやしい！」。

その言葉を聞いてアビンとブラックの二人は互いに見合わせて深くため息を吐いた。それに対して美緒は反応して言った。

「何よ二人とも！」。

その時、船内ナウンスが始まった「アテンション、全てのお客様へ、たいへん長らくお待たせいたしました。当船ノルマンディーは後2分でトウキョウ、スペースポートを立ちますので、万一に備えてお近くの座席またはソファにお掛け下さい。．．．．．」。

「ようやく出発のようだな」

とアビンは呟いた。

「そのようですね」

とブラックがその言葉を受ける。

「．．．．． この船の船長はポール、デュパルクです。では、みなさん善い旅を」とアナウンスが終了した。

そこで、アビンは思った、「この船の出発により、どうももうしばらくここに、居なければならなくなったな」。それは、このような宇宙船では、船が大気圏を出るまでは、安全のためにしばらくは座席に着いておくのが、求められている。実際には立っていてもそれほど問題にはならないのだが、やはり乗務員から忠告されるのは、うっとおしいから、それに、従うことにしているのだった。

そして、再びアナウンスが始まった「アテンション、乗客の皆さん私は当船ノルマンディーの船長ポール、デュパルクです。先ずは、皆様の当船の御乗船を歓迎します。当船は、後30秒程で、ここトウキョウ、スペースポートを発進し一路最初の寄港地であるホスパー星系のロックウェルに向かいます所要時間は5日程です。では、これより発進しますので大気圏を離脱するまでその場にお留まり下さい。では、皆さん善い旅を」。

そして、船内拡声器のスイッチを切り、デュパルクはパイロットのウィリアムに指示を出す。

「よし、ウィリアムくん発進したまえ」。

ウィリアムはそれに答える「イエッサー．．．．． トウキョウ、スペースポートコントロールこちらノルマンディーただ今より発進します。改めて発進許可をお願いします」。

「こちらトウキョウコントロール、ノルマンディー発信を許可します」

と応答がかえってきた。

「ありがとうコントロール、発信する」。

「ノルマンディー善い旅を」。

そして、ウィリアムはエンジンの出力を上げて言った。

「各アンカー切り離せ」。

それに答えてセカンドパイロットが言った。

「全アンカー切り離し確認、グリーンです」。

「発進します」

とウィリアムは言いながらエンジン出力を80パーセントまで上げた。

「全て、順調航路を遮るものは3000万キロメートル内一切ありません」

と航法オペレーターが報告してきた。

「アンダーソン、セカンドモニターをコントロールからの発進中継に切り替えてくれ」

とデュパルク船長は航法オペレーターに指示した。

「セカンドモニター、コントロールビデオシグナルに」

とアンダーソンは復唱しながら切り替えスイッチを押して答えた。

「セカンドモニターに当船の発進状況、映ります」。

すると、メインモニターの右にあるセカンドモニターにノルマンディーがゆっくりと上昇を始めているのが映し出された。600メートルは優にある白い船体が、雲一つない青空をバックによく映えていた、デュパルク船長はそんな船体を見ながら注意を船体全体に配っていた。それは、このような地トからの発進は、重力の關係で船体の強度不

足の箇所が、歪みとなつてしわや窪みを招きさせるので、モニターで容易に確認できるためなのである。ただ、このノルマンディーにはそんな処は、何処にも見あたらない。流石にまだ就航一年未満の新造船だと、彼は満足していた。また、この船が巨大な反応炉エンジンを四機備えた恒星間航行速度記録を持つ最速船である事も、彼にとっては誇りでもあった。

そして、モニターのノルマンディーがみるみるうちに小さくなってゆくを見ながら、デュパルク船長は、後数分で重力圏を離脱するなとアンダーソンに声を掛けた。「アンダーソン、もうすぐ重力圏を離脱するから、セカンドモニターを後方のモニターに切り替えてくれ」。

「セカンドモニター、後部モニターへ」と復唱しながら切り替えスイッチを押してから言った。

「セカンドモニター、後部モニターの映像でます」。さてと、とデュパルク船長は、そろそろまたスピーチの時間だと襟を正した。ふと気づくと左の傍らに副長のマティエリが静かに立っていた。そういえば彼のことをすっかり忘れていたことをデュパルク船長は気が付いた。

「マティエリくん、今回の荷物の量は、かなり多かったのかな、随分手間取っていたようだが」

と副長に運び込まれる全ての荷物の管理を任せていたのを思い出して尋ねた。

マティエリは船長の言葉にハツとしてから困ったように答えた。「いや、参りましたよ船長、今回やたらと酒が多いんですよ、これがまた固定するのに厄介な樽なんです。まあ、商人に取っちゃその方が品質が善くて高く売れるからと言うんですがね、こっちとしては、たまったもんじゃありませんよ。それだけならまだしも、うっかり倒した樽から何が出てきたと思います？MGL10ブラスターライフルですよ軍用の、それも24挺も、まったく持ち込んだ奴の気が知れませんか。おかげで、こっちは全ての樽の金属反応とエネルギー反応のチェックをする羽目になって、出発時刻を遅らせなければならなくなっちゃったんですよ。まったく、もっと搬入ゲートのチェックの厳しくして欲しいんですよ。船長！聴いてます。それで、ゲートの係り員の奴は言うことに事欠いて、.....」。

一言尋ねたら、捲し立てるようにマティエリが話してきたので、デュパルクはうんざりして宥めるように言った。

「それは、たいへんだったなマティエリくん、後でその事は詳しく聴くことにする。これから、船内へのアナウンスを行うので、静かにしてくれないか」。

「イエッサー、分かりました」

と言つてマティエリは口を閉じた。やれやれとデュパルクは船内放送のスイッチに手を伸ばした。確かにマティエリ副長は優秀な人物では有るが、少々お喋りが過ぎるきらいがある。たぶん本人の耳にも入っているとは思ふが、乗組員達は彼のことをマリエッタ、マティエリとかミススピッツなどと呼んでいる、前者はお喋りなオペラ歌手に、後者は泣き始めるとかなりうるさい犬にかけて付けた呼び名だ、ところで、彼デュパルクは、どうも熊と呼ばれているらしいことを当然本人は知っているが、その事とやかやく言わないことにしている。

「船長、テランの重力圏を離脱しました」

と航法オペレーターが報告した。

デュパルク船長は副長の方を向いて

「マティエリくん放送終了後は、君がここで船の指揮を取りたまえ、つまり交代だ、後六時間もすれば交代のリャーノフが来る、君の時間を少し取ってすまん」。

「いえ、そんなことはありません。私はまだ、大型船の船長の資格を取っていませんから、発進や着陸の指揮にはまだ船長のサポートの必要な人間ですから」とマティエリは返した。

それから、おもむろにデュパルクはマイクのスイッチを入れて話し出した。「乗客の皆様、お知らせいたします。私は当船の船長ポール・デュパルクです。ただ今当船は、惑星テランの重力圏を離脱しました。乗客の皆様には、たいへん窮屈なおもいをお掛けいたしましたこととお詫びいたします。これよりは、特別の事情がない限り、惑星アストリアまで皆様に席に着いていただくことはございません。この度の辺境クルーズの安全を願つて、また乗客の皆様との親睦をかねて、わたくし船長の主催するパーティーを船内時刻19時より当船の第一ホールで執り行います。皆様が喜んでご出席されるよう希望しているしだいです。なお、会場の第一ホールについては.....」。

船長にスピーチが長々続く中ようやくこれで、この場から解放されるとアビンは席を立ちながら美緒に言った。

「お嬢さんお約束の30分が過ぎましたので、これで失礼させていただきます」。

「あら、もうそんなに時間が.....残念ですわ、もう少しお話がしたかったのに」と残念そうに美緒は話した。

そう言われたとしても彼アビン・ホーンブロワーにとっては残念なことはなく諸手をあげて歓迎したい気分だった。この煩わしさからの解放は何とも言えない心地よさだった。

そして、口元が今にも緩みそうなのを堪えて

「では、失礼します」と言っ

て席を立った。

するとブラックも「では、私もこれにて失礼します美緒お嬢さん」

と言っ

て立ち上がった。

「そうですね、残念ですわ」と美緒は短く応えた。

そんなやり取りを後にアビンはさっさとその場を去ってティールームを出た。

そんな彼を追うようにブラックが出てきてアビンに話しかけた。

「アビンさん口元が笑っていますよ」。アビンはそんなはずはないとウインドウに映る自分の顔を見た。どうもにやけてはい

なかったのを確認してから

「いったいどう有意味だ」

とブラックに言った。「ははっ、ただあなたの今の気持ちを想像してみたんですよ」

と悪戯っぽく彼は応えた。

むっときたアビンは

「ところで、香料の買い付けだと仰っていましたが、貿易ですから現金をお持ちとゆう事はないですよ」

とかまをかけて尋ねた。

「善くお分かりですね。お酒と化粧品を輸出してその代金で買い付けるんですがね」

と答えが返ってきた。

アビンは多分そうだろうなと思った答えが返ってきた小さな会社ならそれがごく普通の商いだ、かえって現金での買い付けはよほど大きな会社でないと相手も信用してくれない事もある、また、現金の持ち出し持ち込みを禁じている処もあるから安全策としては当然と言える。しかし、酒と化粧品かと彼は思った。それは、一番密輸の隠れ蓑に使いやすいものであることも間違いないし一番検閲が厳しい、ただこれは酒の方だが、そこで、アビンはこう言ってみた。「お酒はどんな容器ですか、化粧品は陶器の器の高級な奴ですか」

と。その質問にブラックは少し考えたようにしてから

「お酒は樽のウイスキー、化粧品はアビンさんの仰るとおりです」

と答えた。

「へえ、それじゃ何処でも高く売れますね」

と感嘆して相手にこちらが何を探ったかを知られないようにしてから

「じゃきっと善い香料を買い付けられますよ」

と話した。

「いや、ありがとう、善ければ後でウイスキーをご馳走しますよ」

とブラックは言葉を返してきた。

それに対してアビンは申し訳なさそうに言った。

「ご厚意はありがたいのですが、あいにく私はお酒が駄目なんです」。

「それは残念」。

「おっと、こうして入られない早くレポートをまとめないと.....ではブラックさん私は急ぎますのでこれで」

と言っ

てその場を後にした。アビンは、自分の部屋へ急ぎながら、考えていた、「たぶん、これは俺の感だがブラ

ックは、かなりの確率で密輸業者だ。何しろ辺境の星域に輸出品と一緒に行ったまともな商人の話は聞いたことがないからだ。しかし、今回の事で奴が係わってくることもな

「いだろうから、ここは、事が大げさにならないためにも黙っておいた方が良さそうだ」
などと。

そう言えば、ほとんどの辺境の星では密輸も合法の処がほとんどで、輸出の時に見つからなければ大丈夫だとゆう事を今思い出したアビン。ホーンブローアだった。

自分の部屋 5B-107

Bブロックの彼アビン・ホーンブローの部屋は船の進行方向を基準に、自然公園のある区画の後ろに有るBブロックの5階層目107号室である、ちなみにクルト・ミュラーは斜め向かいの112号室、マックス・トレッカーは四階層目の113号室だ。

彼は自分の部屋に戻る前にミュラーの部屋の前を通り過ぎるで、一応戻ってきたことを知らせようと彼の部屋のドアをロックした。しかし、返事は無かった。彼は、まだ戻っていないだろうと自分の部屋に向かった。

そして、彼は自分の部屋のドアの前に立ち、改めて部屋番号を確認してからIDカード差し込んでドアのロックを解除して中に入った。

彼は、部屋に入って最初に思ったのはAブロックに比べて随分小さなものだなとゆうことだった。しかし、そんなことを比べてもしょうがない、一介の学生と提督のお嬢さんとは、どうしても差が付くのはしょうがないことだから。ここで、ぼうとしているわけにもいかないで、まだかたずいていない荷物の整理に取りかかった。あれが、こうで、これが、そうで、とかたずけたところ、ふと時計を見たらそろそろPM14:00である。そこで、鞆の中からノートコンピューターとディスクを取り出して、コンピュータにディスクをセットして時間が来るのをレポートを整理しながら待った。

そんな時、彼はふとクローゼットの中から音がしたような気がしたが、誰かが自分の部屋にこっそり入ることは、セキュリティのしっかりしたこの船では考えられ無い事であるから、きっと気のせいだと思って気に止めなかった。

それから、何も物音はしなかったので、確かに気のせいだと思った時にピッピーと音を発してディスクのロックが外れてコンピューターのディスプレイに映像が出てきた。それは、帝国中央情報局のイニシャルだった。どうやら今回の主なクライアントは情報局らしい。しばらくすると、全てのファイルのロックが解除されてプログラムリンクが完了したのか画面が変わって、音声が始めた「お早う、アビンくん。今回の任務の依頼元は、帝国中央情報局だ、当然この任務はかねてより指令されているように、公爵の身辺調査を行いながら達成してもらわなければならない。その為の必要な装備は此方から支給されているものを用いて達成してもらいたい。ただし、可能な限り支給した装備の使用は控えるように、先ずは今回のクライアントの要望を伝える。今君が乗っているノルマンディーには、ある物が、乗っている。その物のコードネームはアリスブルーだ。現時点で判明していることは、過去の遺物だと言うこと、どのくらい過去であるかは不明。ただし、このアリスブルーは実際には物なのか人物なのか、それともあるシステムプログラムなのかはまだ掴めてはいない、ただ、このアリスブルーは必ずや我が帝国の驚異となる物であることが確認されている。つまり此方、特務諜報局には驚異となると確認されていることは伏せたまま探し出して、破壊または、抹殺、消去、可能な確保、保護せよとゆうことだ。よって今回任務で知り得た事柄全ては一切口外してはならないとゆう事だ。もし口外すればどうなるかは君も十分承知していると思う」。

その言葉を聞いてアビンはやれやれたいへんな事に、巻き込まれてしまったと思いつつため息を吐いた。

その時ディスプレイの画面が変わった。何処かの風景が映し出された、そこには頭の禿げ上がった体格のがっちりした男と、まだ、二十代前半の美しい女性が仲むつまじく、花壇の手入れをしている様子が見てとれた、音声が続く「この映像の人物はファーナビー提督ご夫妻だ。今回、君の乗り込んでいる船には丁度、提督が同乗しておられる。情報によるとこの提督が何らかの手がかりを握っているらしい。同時に公爵も何か知っているのではとの情報もある。それが確かなら君が公爵の側に何時も付き添っていたことは、無駄ではなかったことになる」。その言葉にアビンはムツとして思った「付き添ってではなく、こき使われての間違いだ」。

そして、画面が変わって町並みが映ってある店がアップになった、ショーウィンドーにはムーンキャロットと店の名が読みとれた、そのウィンドー越しに一人の女の子が映った白い服に青い大きなリボンそして長い銀髪に近い薄紫の髪、ふとその少女が振り返ると彼はハッと息をのんだ、音声の説明が入る「この子は、ファーナビー提督の弟であるバイオニックコンピューターの権威でもあるバイオニック工学博士、エドガー・エディ・ファーナーの子供でショーン・F・ファーナーだ。今回、何故かこの子の安

全を確保するようにも依頼されている、理由については詳しく知らされていないが、さる方の友人だそうだ」。

また画面が変わった。今度は、このノルマンディーの見取り図だった。音声が続いて言った「ここからの情報は君のコンピューターに自動的にインストールされる」。

アビンは、ただ黙って映像を見ていたがある言葉でハッとした。

「では、君に予め注意していた人物に付いての情報だ、本名不明、性別、年齢、体型など特徴となる物全て不明、名称ベリアエンジェル。暗殺者。犠牲者、帝国内でも十四人、他の星系で二十二名、主にパワードスーツを用いて行うため発見したとしても本人を直接見ることは出来ない。発見しだい射殺可。今回、ノルマンディーに乗船との情報あり。帝国法務局はベリアエンジェルを法廷に送り込むことを希望」と無機質な情報が流れた。

アビンは何処かで聴いた名だと思っていたがとんでもない奴であることが分かって身震いがした。「だいたいそんな奴どうやった見つけろと、言うんだ」と思いに浮かんで何となく頭に来た。

するとコンピューターがピッピーと鳴ってから再び音声の説明「さて、今ので全てのインストールは終わった。ここからは君に送られた装備のキーロックの外し方を説明する。ただ、装備の使用方法は説明するまでもないと思う。そして、キーロックの外し方の説明が終わって5秒後にディスクの全てのデータは自動的に破壊される、そう、この船と共に、．．．．．と言うのは冗談だが、どうだビックリしたか」。

「このおやじは何を考えているんだ」とアビンは思った。

「これくらいのジョークを受け流せなくては大物にはなれんぞ。さて、説明に入るとしよう。まず、ケースの取っ手の方にある二つのボタンをまず90度に回してから、取っ手の処にある5桁のカウンターの数字を左から42705と合わせてから、ボタンを回して元に戻してカウンターの数字を左から10183と合わせ二つのボタンを同時に押すと開く、以上だアビンくん、では君の健闘を祈る」と言って映像は消えた。

彼は、やれやれこれからたいへんだなど、思っていると、後ろの方でカチツ と音がして声がした。

「随分、物騒な物が入っているんですね」。

そして、もう一人の声

「なるほど、これは、誰かをやってしまえとでも言ってるようなものだ」。

アビンには、それぞれの声に聞き覚えがあった。まさかと思いつつゆっくりと後ろを振り返った。すると

「やあ、アビンくん待ちきれなくてお邪魔させてもらってたよ」

とランカスター公爵、

「そうなんですか、アビンさんて学生が本業では無かったんですね」

とシオンが話した。

アビンは、驚きのあまり声がうわずって話した。

「ななんで、教授とシオンが私の部屋に、それもドアにはロックが掛かっているはずなのに、どどうして、それに何時から、ここの部屋にいたんですか」。

それに応えてランカスターが言った。

「いや、わるいわるい、君が部屋にしばらく戻ってこないように、シオンに協力してもらったしだいだ」。

その言葉を聞いてアビンは、シオンの方を向いて冷たく言い放った。

「とゆう事は、今までの事は全てこの為の画策した事なんだな、此方はすっかりだまされたとゆうわけだ」。

「アビンくんそんなに冷たく、あしらわないでくれたまえ」

とランカスターはシオンをかばう。

それに対してシオンは口を開いて

「申し訳ありません、ランカスター伯父様のたつての頼み事でしたもので、ですが、アンの事やティールームからの事は予定外のことでしたし、アビンさんと色々お話ししたかった事は私に希望でした。始めはアビンさんのお部屋の番号を教えてもらって、その後、美緒さんと二人でアビンさんを誘い出すのが、当初の予定でしたが、思わぬトラブルで全てを美緒さんに一任したんです」

と申し訳なさそうに話した。

「とゆう事は、彼女は全てのことを知って協力したとゆうことか」

とアビンは信じられないとゆうような口振りで呟いた。

それに、応えるようにシヨンが言った。
「それは違います。彼女は詳しいことは何も知りません。ただ美緒さんにお話ししたことは、ランカスター伯父様が助手のアビンさんをビックリさせようと計画しておられるので、協力してもらえませんかと持ちかけたし、このような悪戯が彼女は大好きなので、二つ返事で参加してくれたんです。ただ一つ条件を出してきましたけど」。

「それで、彼女が妙にしつこかったのが、いま分かったよ」

とアビンはため息混じりに話した。

「ところで、条件とは何か良ければ聴かせてもらいたいものだね」

と少し図々しく切り出した。

シヨンは少し考える素振りをしてから応えた。

「それは、私が髪を切った時には、必ずその髪を頂きたいとゆうものですが」。

アビンはその応えに少し考えた「確かにシヨンのような髪は珍しく貴重だとも言えるが、いったい何時髪が切られるとも分からない不確かな事を約束させるなんて何を考えているだろうあの子は」。

「話は変わりますが、どうやってこの部屋に入ったんですか」

と尋ねた。

それに応えてランカスターが言った。

「ああ、鍵を開けてね」。

「そんなの当たり前でしょうが、鍵を開けずにどうやって入るんですか！」。

「だから鍵を」

「そんなの分かっています。その鍵を何処から持ってきたんですか。だいたいスペアのキーカードなんかおいそれと借りることは、出来ないんですよ教授」。

「そう、噛みつくアビンくん」

「その事については、わたくしがお話しいたします」

とシヨンが二人の会話に割って入った。

「わたくしがって、シヨン、君が説明してくれるのかい」

と驚いたようにアビンは尋ねた。

「はい、わたくしがお答えします。．．．．．アビンさんはどうしてドアのロックがご自身の持つておられるIDカード以外でロックが外れるわけがないと思っておられようですね。確かに、そうなんです、これには、唯一の欠点があります。スペアのカードは幾らでも出来るとゆうことです」。

との言葉にアビンが「それはどうゆう事なんだ」と言い出そうとした時に、シヨンはスカートのポケットから白いカードを出し、アビンの顔の前に突き出してそれを止めて言った。

「カードのデータが有れば幾らでも、複製できます。たとえアビンさんがご自分で暗唱コードを設定したとしてもです」。

「それでは、いったい何のためのIDカードなんだ」

とアビンは苛立ちながら言う。

「セキュリティーの為なんです、特にこの様な宇宙船の場合はメイン及びサブコンピュータに全てのデータが蓄積されています。普通はアクセスしても呼び出すことが出来ないようになってはいるんですが、客室が火事とか船が事故に遭った場合そのセキュリティーが解除される事になっています。一応手動ですが、その緊急コードを知っているのが船長と副長位で、後はブリッジにある航法マニュアルに記載されているだけなんです、私は、この船の航法マニュアルを作成するのを手伝いしてまして、全ての暗唱コード及びセキュリティーコードを知っているんです。ですから、この様にアビンさんの部屋のIDカードを簡単に作ることが出来たんです」

と事も無げにシヨンは言っただけだ。

アビンはそんなシヨンをまるで異質な物を見るような目で見ながら考えた「いったいこの子は、何者なんだ。宇宙船の航法マニュアルなんかおいそれと出来る物ではないし、それほど経験豊かなパイロットとゆうわけでもない。歳がまだ15歳であるから経験を積み重ねる時間は無い。まてよ、まさか、あの時のホルストさんとインカムで話していた子で有るなら、コンピュータの中に潜り込めるだろう、そうなればデータなんか取り放題だ、そうだ、それとなく聞いてみよう」。

それで、アビンは少し咳払いをしてから、切り出した。

「なあ、シヨン、君は今日この船の後部格納デッキに行ったかい」。

シヨンはニッコツとして

「ええ、行きました。ラボのみんなが来ていると伺いましたので、少し様子を見に」

とあっさり答えた。その応えにアビンは拍子抜けした、と同時にとんでもない子が目の前にいることを知った。「それなら分かる、たとえコードを知らなくても、たぶんこの子なら全てのプロトタイプをかいくぐりデータを取り出せるだろう」とアビンは自分を納得させるように考えをまとめた。

そのように彼が思案しているのを横に、シオンは彼の装備をまじまじと見入っていた。ランカスター公爵は腕組みをしながら少し考えているようだった。

しばらくの沈黙が過ぎてから、アビンはランカスターに分かってしまったのだから、隠していてもしょうがないと自分が何故ランカスターの処に転がり込んだのか話そうと口も開いた。

「あのう、教授.....」。

すると彼の言葉を遮るようにランカスターが言った。

「知っていたよ」。

「えっ」と言葉に詰まるアビン。

「君が私の処に来た日からね。君は知らないだろうが、ホーンブローワー提督は私の親友でね君のことをよく話してくれたし、学生時代の君も私は知っていたしね、君は覚えてないだろうが小さい頃は私の家によく遊びに来ていたものだ、だから君が私の研究室に来たときはビックリしたよ。でも君は私を知らないみたいだし、私と君の父上の事も知らないようだった。それに、始め他の学生と比べて何処か何かを伺っているような素振りも見え隠れしていたもので、少し気になったので調べさせてもらったんだよ」

とランカスターは言った。

その言葉にアビンは落胆して言った。

「私が未熟だったとゆうことですね」。

「まあ、そうだが、その後直ぐに君の父上に連絡して確かめたんだが、君が何故此方にいるのかは知らないみたいだった」。

「そう、ですから伯父様から頼まれて、少しアビンさんの事を調べさせてもらいました」

とシオンがランカスターの言葉を受けると話した。

アビンは目を伏せて

「それで、私が何故教授の前に現れたのか知ったわけですね」

と言った。

「そうなんだ」

とランカスター。

「ですが、アビンさん調べたのは私ですし、伯父様は、それでもアビンさんが来られたのをたいそうお喜びになられまして、彼は私の親友の息子なんだ、と何時も私に話しておられたんですよ」

とシオンはランカスターを弁護した。

「でも、良くこき使ってくれましたね、まさか愛の鞭とか言うんじゃないでしょうね」

と少し不機嫌そうにアビンが言う。

「いや、かえって此方が気づいたことが知られないようにと、そして、何時も自分の目の届くところに置きたい気持ちでつい厳しくしてしまったのだ」

と言いつつがましく言った。

まだ不機嫌そうにアビンは言う。

「そうですか」。

「だが」

とランカスターがトーンを落として話し始めた。

「アビンくん、私は君にこれまでと同じように振る舞ってもらいたいんだが、それは、難しい問題だとは私なりに分かっているつもりなんだが、これは、私からのたつての願いだ。それに、君はなかなか優秀な助手で、私としては将来が楽しみなんだよ。その点は、君の父上に伝えてある。そして将来は私の後任になって欲しいと考えているんだ、今の調子で行けば後三年もすれば助教授として本当に私の片腕に成れる」。

その言葉を聴いてアビンは言った。

「それは、いかばかりとゆうものです。それに、助教授になるためには、博士課程を取らなければ成れませんし、その為には、まず、正規の課程を修了していなければなりません。それに、相当の教授の推薦状が.....」

話している途中でアビンが言葉を失ったのを見てランカスターは口元をニヤリとさせてから言った。

「そう、気が付いたかねアビンくん、私は君を推薦したんだよ」。

その言葉にアビンは言い返した。

「ですが、教授、正規の課程がまだ修了していませんが」

それに対してランカスターは諭すように言った。

「君は、気が付かなかつたのかね、この一年、私が君に受けるように要請した全てのカリキュラムやレポートの提出、一般の学生より多すぎるのではないかと」。

「ええ、まあ、ただ、一般の学生と話す機会はほとんど有りませんでしたから。ご存じでしょう。大学にいる時は講義に出ているか研究室に、こもっているかの、どちらかだったんですよ」

とアビンは言葉を返した。

「やれやれ、君はそれでも諜報員かね」

とランカスターはため息混じりに言った。

「申し訳有りません」。

「仕方ない、教えて上げよう。今までに、君に要請した全てのカリキュラムとレポートは実は大学卒業単位の全部だ。それに、今君が仕上げている私のレポートは私に提出されたと同時に君の卒業論文となる。君は私に、だまされていたと思うかもしれないが、ここまで君が優秀だとは思わなかったよBプラスの成績でね」

とランカスターは、さっきと違って笑みをたたえながら話す。

「どうして、幼年士官学校時代の成績を．．．．．」。

その言葉に反応してシヨンが口を開く

「申し訳有りません。伯父様の願いで私がユニバーサルネットを使ってアビンさんの全てのデータを引っ張り出してしまいました」。

アビンは、ギョツとしてシヨンを見た、確かにこの子にかかれば帝国諜報局のセキュリティなんかは無いに等しいだろうと思うのであった。すると、ランカスターにはアビンの報告した全ての情報は筒抜けだったとゆうことになる、つまりこれからは、報告することを気を付けねばとアビンは考えた。

「すまん、私のわがままに君を引っ張り込んで」

とランカスターが申し訳なさそうに話した。

「いえ、そんなことはありません。そこまで私に目を掛けていただいてありがとうございます。ただ」

とアビンは言葉を区切ってから

「ですが、今までのようなわがままはもう聴きませんからね」

とランカスターに言い返した。

その言葉を聞いてシヨンが言った。

「伯父様？また、無理難題を人に頼んでたんですか」。

「いや、その．．．．．まあなんだ」

とランカスターは言葉を濁した。

「アビンさん。ランカスター伯父様は時々悪戯で人の困ることを頼むことがあるの。それも、自分の気を許した相手だけですけどね、私はたびたびその悪い癖を改めていただくようお願いしていたんですが、まだ、やっていたんですね。今度、リチャードさんに尋ねられたらこのこと話しておきますね」

とシヨンがランカスターをたしなめるように言った。

その言葉にランカスターは、それは困るとゆうような身振りをして見せた。

「シヨン、そのリチャードって誰なんだい」

とアビンは尋ねた。

「あれ、アビンさん知らなかったんですか。ランカスター伯父様の息子さん」

とビックリしたようにシヨンは応えた。

アビンは少し気まずそうに言った。

「実は、ご子息がいることは知っていたんだが、なにぶん忙しくて、すっかり忘れてしまっていた」。

「まったく、それでよく諜報員が務まるもんだな、情けない」

と追い打ちを掛けるようにランカスターが言う。

かえすがえすも言葉が無いアビンだった。

そこへ助け船を出すようにシヨンが言った。

「伯父様、もうそのへんで宜しいのではありませんか、前途有望な若者をここでご自身の手でお潰しになるのですか」。

「まあ、そうだなまだ、19歳でもあるし、仕方がない。もっと経験を積む必要があるな」。

「では、その事はもう宜しいとゆうことで、宜しいですね」

とシヨンが念を押した。

「ところで、アビンさん、私少し協力出来ることをお伝えします。先ほどアリスブルーについて調べるようにとの指令でしたね、それについて、私が知っていることについて、お話しいたします」。

突然の展開にアビンは言葉が無かった。

シヨンの話は続く「アリスブルーと呼ばれている物は、幾つかあります」。

「えっ、幾つかと言うことはどうゆう事なんだ」とアビンは考えた。

「その内の一つはギャラクティック・エンタープライズのプロジェクト9にあるリトルナインがコールサインがアリスブルーです。ノースポートにあるファンシーハウスの名前がアリスブルー、トウキョウシティのウェルストリート32に有るバーの名前がアリスブルー、此処についてはホルストさんがよくご存じです。ニュートロンバイオニック研究所で開発されていた物の中に確かそのようなコードネームの物が有りました。それから、」

と言葉はまだ続きそうなのをアビンは遮っていった。

「だいたいいくつぐらい有るんだ」

それに応えて「12件」とそっけなくシヨンは言った。

アビンは頭を抱えながら言った。

「それらは、この船に乗っていると思うかい」。

「いいえ、」

「ありがとう。協力は感謝するが、どうも的はずれとしか考えられない物ばかりだね」

とアビンはシヨンに言った。

「せっかく助けになればと思ったのですが」

とシヨンは残念そうに言った。

「せっかくだけど自分で何とかするよ。何か助けが必要なときには、その時にはお願いするよ」。

「そうですか．．．．．分かりましたアビンさん」

とシヨンはニッコリして応えた。

「ところで、」

とシヨンが別の話を持ち出した。

「どうしたの」何気なくアビンは尋ねた。

シヨンはケースの中に有る物を指さしていった。

「これってメタルラインのMSG-P48ハンドスマートガンですよ、それも、48PAK六ミリスマート弾、三カートリッジ有ります。それとリニアガンカートリッジが二つも」。

それを聴いてアビンはため息を吐きながら言った。

「それが、今回の私の装備だそうだ」。

「これだけの装備なら重装備の一個小隊を相手にしても大丈夫ですね」

とまるで他人事のように話すシヨン。

それにギョツとしながらも、さも平静に話すアビン、

「使わないに越したこと無い物さ、シヨンきみは詳しそうだけど使ったことが有るのかい」。

彼は、自分が軽い気持ち出した言葉にもギョツとした「何と、こんな少女に、この質問はなかった」と心の中で悔やんだ。

「はい、安全テストを研究所が依頼を受けたときに、子供がうっかり触ったときに暴発しないかどうかで、指名されました時に、触れました。女性や子供が持つには重いですけど発射時の反動は皆無でした。つまりセキューリティーの安全テストは不合格でした」

とまるでレポートを読むようにシヨンは答えた。

その応えにアビンはいったいこの子は、それに周りの大人達は止めないのかと思いつつシヨンに尋ねた。

「セキューリティーとゆうのは？」

「はい、所有者以外の者が持ったとしても発射する事が出来ないように。遺伝情報を登

録するシステムですが、これを解除するシステムも必要なため電子ロックキーで解除する機構なんです、これが不安定なため軽くとロックが直ぐはずれてしまうんです。元々この様な物は大事に扱われる事は期待できませんので、安全装置は気休めでしか有りません」

とこれもレポートを読むように応えてきた。

その答えを聞いてからアビンはランカスターの方を振り向いて言った。

「ところで、教授、こんないたいけな少女に、周りの大人は平気で話にあるような危ないことをさせているんですか」。

ランカスターは眉をひそめて答えた。

「確かに、だが私からはどうとも言えんのだよ。シオンは研究所の職員だしこの子の仕事でも有るんだから」。

「しかし！」

とアビンは少し声をあげた。

「まあ、聴いてくれ私もその事について話したんだが、その事については本人も承諾しているとのことだ。そして、シオンの感情が幾分欠落している分パニック陥る可能性が少ないので誤った判断を起こしにくいとも説明してくれた」

とため息混じりに話した。

そこで、アビンはシオンに言った。

「シオン、君はそれでいいのか」。

その言葉にシオンは応えた。

「はい、私で何かお役に立てればそれで構いません」

「それが、君を利用しているだけだとしても」。

「はい、．．．．．」。

「分かった、この事についてはもう何も言わない」

とアビンはこれ以上追求するのを止めた。

「ありがとうございます。私のことで心配して下さい．．．．．」

とシオンはアビンに感謝した。

「ところで、」

とアビンはランカスターとシオンの二人に向かって話し始めた。

「二人とも、私の素性を知ってしまったのですから、他言は無用とゆう事を理解していただきたい、そして、協力もお願いしたい。くれぐれもお二人とも無茶だけはしないで下さいね。特に教授は、ミュラーさんとトレッカーさんにくれぐれも迷惑掛けないように、お願いしますよ」。

「Bプラスの成績が偉そうに、．．．．． まっ、期待してないががんばってくれ」とランカスターはアビンの鼻をへし折るかのように言葉を返した。

「くっ、その事は、．．．．．」

と言葉による見事なカウンターパンチを食らったアビンであった。

しょげているアビンにランカスターが言った。

「さて、アビンくん君の指令にあったように、シオンの事を宜しく、この子なら色々助けになってくれると私は思うんだがな」。

「えっ」

とアビンは意表をつかれてシオンを見た。そこにはニコリともせず何とも無表情な女の子が立っていた。そう、今のランカスターの言葉に全く反応せずに、何か別の世界にでもいるような、隔絶された隔たりをアビンは感じた。そこには、何か言いしれぬ恐怖すら感じたが、それを何とか振り払ってシオンに話そうとしたその時、今まで感じていた物が全て消えて、その子は口を開いた「申し訳有りません。宜しく申し上げます」

。「ああ、」何と言えばいいのかアビンは、とまどった。そして、シオンの言った、「申し訳有りません」は何を指しての事か疑問に思った。ただ、この子は普通の子では無いことは確かだと確信した。

「やれやれ、」

とランカスターは呟いた。そして、続けて言った。

「私に提出するレポートは明日で構わない、今日はゆっくりしたまえアビンくん。それから、君は今日パーティーに出席するのかね」。

「あまり気が進みませんが」

とアビン。

「そうか、だが、私からの願いだがシヨンをエスコートしてもらえないかな、実はこの子も、気が進まないようでね、一緒に顔を見せるだけでいいんだ、後は二人で何処へ行こうと勝手にしたまえ。先ずは、君に紹介したい相手が有るものでね。必ずシヨンをエスコートしてくれたまえ」

とランカスターは念を押した。

その言葉にシヨンは浮かない顔をしていた。どちらかと言えばどうも不機嫌そうだとアビンは感じながら応えた。

「分かりました」。

それを聴いてシヨンは自分の気持ちを抑えて言った。

「伯父様はどうしても、わたくしを出席させたいのですね。．．．．．分かりました。仰せのとうりに致します。ですが、ご用件が済みしだい退席させていただきます。宜しいですね」。

少しシヨンの表情がきつくなつたのをアビンは見て取ってから相手の顔色を窺いながら言った。

「では、シヨン、始まる20分前に君の部屋に向かいに行くけど、いいかな」。

「ええ、構いません」

と短く無表情にシヨンは応えた。

「じゃ、私はこれで失礼する」

と言ってランカスターはドアを開けて出て行こうとドアを開けると、いつの間に来ていたのかテラ、リーズの警官が二人立っていた。

それを見てアビンは狙われているのはランカスター公爵で有ることを改めて思い起こされた中、ランカスターが出て行くのを見送った。

ドアが閉じられてふと気がつくと後ろにシヨンが立っていた。そう、彼女はまだ残っていたのだとアビンは思いながら言った。

「どうしたんだい。帰らないのかい？シヨン。それともまだ何か有るのかい」。

するとシヨンは静かに言った。

「私、アビンさんの助けに成れると思います。それに、何か必要な情報が有れば調べて差し上げることもできます。それから．．．．．」。

妙なところでシヨンの言葉が止まったのでアビンは尋ねた。

「どうしたの」。

「あのう、アビンさんは、先ほど私の様子が変わつたのを気が付かれましたか」

と寂しそうな表情で尋ねてきた。

その言葉にアビンは、先ほどのシヨンから受けた言いしれぬ感覚を思い出して言った

。「ああ、」。

「そうですか」

とシヨンは目を伏せた。

「どうしたんだい」

とアビンは気にかかり言った。

「誰か、分かりませんが、悲鳴が聞こえたんです。はっきりと」

と目を伏せたまま応える。

「俺には、聞こえなかったが」。

「はい、微かな振動でしたから。でも、はっきり聞き取れました」。

「だが、俺には」

とアビンは首を傾げた。

「確かにアビンさんには聞き取れないかもしれませんが。私の可聴帯域は人のそれより幾分広いらしいんです。どのくらいかは博士達は教えてくれませんでした」

と目を見開いてシヨンは言った。

「．．．．．」アビンは何と言っていいのかわからなかった。

「どうも、事故以来こんな感じなんです」。

「そうか」。

何ていったものか困り果てているアビンだった。

「何もない方がいいのですが」

と言いながらシヨンはドア口に立った。

それに対してアビンは、的はずれなことを言ってしまった。

「帰って寺屋をするといひ」。

「ジョンはそれを受けるようにドアを開けながら言った。
「そうですね。お待ちしておりますミスター・アビン」。
「ああ、迎えに上がるよ」
と儀礼的な答えをする。
そしてアビンはジョンが出て行くのを見送りながら考えた。
「今回はとんでもない旅になりそうな予感的中だな。それも、お嬢さんのお守り付き、
非常に危なっかしい」。
ドアが閉じられて、アビンは今度は本当に一人っきりに成れたと安心してドッカとベ
ッドに腰を下ろした。そして、今までの事を考えると謎のことが多すぎるなど考えた。
また、どんな人物がこの船に乗り込んでいるか、まずは把握する必要があるな、それ
には、ジョンに協力してもらおうと早いかもしれないなど考えていたが、まずは夕食に出
かける前に、もう少しレポートを整理しようとテーブルに向かった。その時、再び配水
管を伝って悲鳴が響いたが、アビンの耳には聞き取れなかった。

第一項 不安の出航

終わり

October Rain

(オクトーバーレイン)

” Alice Blue ”

(アリスブルー)

文 にしのまさみ

2)

恐怖の目覚め

食事のテーブル

「では、それでお願ひします」
アビンはウェイターに注文を終えると、ウェイターは「かしこまりました」と言っ下がっていた。
アビンは今日これまであったことを思い返していた。彼はあまりにも多くのことがあったので、今にも頭の血管切れそうな感じを受けていた。それで、ここは心を落ち着けて少し早い夕食だが、とっておこうと決め込んでレストランに来ていた。
ただ、これからパーティーが始まるのだから、今は厨房はその準備の為にまるで戦場のような有様だろうから、この時間に食事をしようとする輩には、構ってられないだろう、だから先ほどのウェイターも、たいした物が出せないと断っていた。それではと彼は簡単な物で構わないからと注文したのだった。
彼、アビン・ホーンブローは、食事が来るまで、少し頭を休めようと、ウィンドウの向こう側に広がる公園を眺めていた。
だが、頭の方は、いっこうに休もうとせず色々と考えを巡らしていた。何故なら、アリスブルーに関しては、うまく教授に逃げられてしまい聴くことすら出来なかったからだ、それに、シヨンという子は、何処か掴み所がないとゆうか、存在感が有るようでどことなく存在していない印象を受けるのは何故だろうか、でも、助けになってくれような存在でもある。あの子の才能は、．．．．．と。そして、ふと見上げてみると、今、船内時刻はテラ、リーズ標準時18:21を公園の池の中程にある時計が示していた。この時刻では七月としては日の傾きが、少し早いようで木々の陰が長く池の畔に落ちていた。「やれやれ、どうも気の早いのがいるらしい」とアビンは思った、そして「そんなに早くと急かしても予定の時刻にならなければ始まらないのだから、パーティーは、．．．．」とも思った、人通りが無く静かそうに見える公園を見ながら、パーティーを抜けたら何処へ行こうかと考えていた「そうだ、よるの公園はどうなんだろうか行ってみるか」などと。
「あのう、隣空いています？」
との女性の声のアビンはハツとして声のする方を振り向いた。
「あっ、空いています。どうぞ」
とアビンはとっさに答えた。
その声の主はすらっとした長身の女性二人だった。その内の一人はエルファだった。エルファの見た目の特徴は耳が横に細長い、人類から派生した種族、環境に適応するために遺伝操作がなされた人々の子孫だ。空気の薄い土地に強い特徴を持つなど。
二人は
「ありがとうございます」
と言っテーブルの反対側に座った。
すると、すかさずウェイターが近づいてきて言った。
「お連れ様でいらっしやいますか」。
「いや」
とアビンは短く答えた。
「そうですか」
と言っしてから女性達に向かって
「いらっしやいませ。お客様、何をご注文されますか」

と尋ねた。
「そうね、食事をしたいんだけど、どうもとりこんでいるみたいね」
とエルファの女性が言った。
「申し訳ありません。簡単な物なら、ご希望に添えることができますが」
とウエイター。
「では、何が出来ます」。
「パスタを使用した物とか、ピザなどで、飲み物は全てご希望に添えますが」。
それで、彼女達はトッピングを指定したピザとワインを注文して言った。
「あと、ルームサービスは頼めるかしら」。
「ご注文いただければ、ただ、今日はパーティーの関係でパーティー開始後一時間お待ちいただく事になります。その後でしたら何なりと」
とウエイターは答えた。
「わかったわ、ありがとう」
ともう一人の女性が応えた。
それから、女性達はパスタを用いた料理を注文したがアビンには、それがどんな料理かは理解できなかった。ただ、彼の理解できるのは、パスタの料理ぐらいの認識である。
注文を受けたウエイターは軽く会釈をしてテーブルから離れていった。それをアビンは、少しぼんやりと眺めていた。
「あのう．．．．．お邪魔では無かったのでしょうか」
とエルファの女性が尋ねてきた。
この言葉は、どうも自分が浮かない顔をしているせいなんだろうと思い答えた。
「いえ、そうゆう訳ではなく、今日は乗船早々ごたごたに巻き込まれて少し疲れていたもので、ボーとしてしまいまして、ご機嫌を損ねて申し訳ない」。
「あっ、此方こそ、お疲れのところお邪魔して申し訳ありません」
と二人の女性が彼に答えた。
「いえ、構いません。ところで、今の話を伺いますとお二人はパーティーには出席なさらないんですか」
とアビンは二人の女性に尋ねた。
その言葉に普通の女性の方が答えた。
「パーティーですか、私たちはこの船に仕事で乗り合わせていますので、パーティー用のドレスなどは持って来てはいないのです。それに、チーフが許可してくれそうも無いしねえ」
と話をふられたエルファの女性が
「そうね、今朝からごたごた続きで、チーフはいらいらしてるし、ヘンツェなんか片っ端から過去のデータを調べては叫き立てているし、ほとんどみんなは、くたくたで今日はダウン寸前だし．．．．．そう言えばメイソンだけは元気よね、あのタフさは羨ましいかぎりよね」
と話した。
「あのう、本当にお邪魔でなかったかしら」
と浮かない顔をしている彼に、もう一人の女性が再度尋ねた。
「別に構いませんよ。一人で寂しく食事をするよりは、にぎやかに食事を楽しむ方が、疲れてはいるとは言え、その方が旅の醍醐味とゆうものですから」
とアビンは、少し無理をして答えた。本当の事を言えば一人にして欲しかったのだが．．．．．
「本当はお邪魔では、と思っていたのですが、よかったです。少し別の人と話がしたかったものですから．．．．．」
とエルファの女性がホッとした表情で応えた。
「どうしてその様に」
とアビンは尋ねた。
「今、私たちの仕事でたいへんな問題を抱え込んでしまったらしいんです。まあ、各セクションの責任者はその為、今協議の真っ最中で、他のメンバーときたら、殆どがダウンしている始末なの、そのまま一緒にいると息が詰まりそうなので、此処へ来て誰かと全く別の事でお喋りがしたかったの」
ともう一人の女性が答えた。
「そうだったんですか 私で良ければ構いませんよ」

と内心いい加減にしてくれよと思いつつも気の良い返事をしている自分が妬ましかった。

その言葉に、二人の女性は顔を見合わせてからホッとした表情で応えた。

アビンは、そんな二人を見て、それとなくご婦人達の名前を尋ねることにした。

「これも何かの巡り合わせですね。わたしは、アビン、ホーンブローワー、オクトーバー大学で宇宙考古学を専攻しています。失礼ですがお二人は？」。

二人は互いに顔を見合わせてから、ニッコリと笑って自分たちの紹介を始めた。初めに向かって右の普通の女性が口を開いた。

「はじめまして、わたしはメイ、リンと申しましてギャラクティック、エンタープライズ、カンパニーのエンジニアリング、ラボで働いてます。メイと呼んでください」。

。「では．．．」

と向かって左のエルファの女性が口を開く

「はじめまして、わたしは、エミーナ、プロックフェルと申します。わたしは彼女の同僚で同じラボで働いています。わたしのことは、エナと呼んでください。仲間みんなそう呼んでいますから」。

「そうですか、お二人ともギャラクティック、エンタープライズの方ですか。これは奇遇ですね、わたしは、時々そちらに、発掘調査の機械の関係でお世話になっているんですよ。それから、わたしのことはアビンと呼んでください」

と二人に話した。

今の二人の答えから二人はたぶんホルストさんの部下だろうと思ったが、それは口に出さず、それとはなしに乗船目的を聞き出すことにした。

「ところで、お二方は、どんな仕事で、このノルマンディーに、乗船なされたんですか」。

この質問にメイとエナは一瞬互いに見合わせてからエナが口を開いた。

「まっ、隠すようなことじゃないから、お話しするわ。わたし達はねウエルクラブスに納める、新型のハイパードライブシステムの納品と取り付け工事のために、品物と一緒に乗り合わせているしだいなの」。

「ただ、ほかの雑用まで此方に押しつけられているものだから、トップはそのために会議中とゆう状態なんですけど」

とため息混じりにメイが付け加えた。

「それはたいへんなことですね」

とアビンはあいずちをうちながらホルストさんも、たいへんだなと思い、後で彼女たちから部屋の番号を聞きだして、労いに行こうと考えた。

「そんな事無いわ、今回は余計な雑用が込みになっていたのだけど、ごたごたに巻き込まれるのは珍しくないのよね、うちのグループは、扱う仕事の仕事だけに、トラブルは付き物なのよね」

とエナはにやにやしながら言った。

「そうね、いつだったかしら、戦場の真っ直中に送り込まれた事もあったわね。あの時は、確かプロジェクトマネージャーのミスで連絡が遅れて戦場に降下する羽目になったのよね。それにしても、よく全員無事に帰ってこれたわよね」

とメイがあいずちをうつ。

エナは、いっそう笑みを浮かべて言った。

「そうそう、その時よ、初めてうちのグループの噂が本当だった事を知ったのは、まさか三分の二が元軍人で、それもどちらかと言うとプロフェッショナルばかり」。

「あの手際よさはね、一時間で宇宙港を制圧しちゃうんだからね、その代わり、向こうの方には、かなりの死傷者が出たみたいなのだけど．．．．．可哀想に」

と言ってからメイは口に手を当てて言葉を止めた。

「あっ、ごめんなさい勝手に此方だけで盛り上がってしまっ」

とエナがアビんに申し訳なさそうに言った。

「別にかまいませんよ。それに、その様に心強いお仲間がいれば安心ですね」

と言葉をアビンは返した。

「まあ、そうなんだけど．．．．．」

エナは少し浮かない返事。

アビンが少し不審に思っているとメイが口を開いた。

「そうね、だけどわたし達女性にはかなりきつい現場なのよね、彼らは彼らなりに女性

としてわたし達に気を遣っているみたいなんだけど、いかんせん、みんなハイパワーな人物ばかりだから、加減が分からないみたいなのよね。それに、女性でも元軍人も居るし、結構辛いときがあったりもするの」。

「でも、やりがいのある職場でもあるわね、各自に明確な役割があり、責任が持たされ、そして、いつも必ず誰かしらサポートしたりされたりで仕事を行っているの。また、チーフも立派ね、部下のミスを自分の責任として取ってくれるし、成果は必ず部下に還元するのよね、なかなか出来ないことだわ」

とエナが言葉を添える。

「そうですね。なかなか出来ない事ですね。羨ましい限りです」

とアビンは言葉を添える、これは本心間らの物であった。それに、今の話しで、ジョン、ホルストなる人物がどの様な人物かを少し理解できそうだったし、ミユラーとの会話の真意がよく理解できるようになった。

「部下思いね.」

とアビンは小さな声で呟いた。

「えっ？何か」

アビンの言葉に反応してエナが言った。

アビンはその言葉に、ビックリして相手を見た。そして、思った「失言だったな。エルファは聴覚が鋭いんだっけ」。

「いや、此方の独り言です。わたしの処と大違いだと思ひまして」

と言葉を濁すアビン。少し悪いが、ここは教授に悪者になって貰おうと彼は決め込んだ。

「そうなんですか？」

エナは興味深げに尋ねてきた。

「そうなんです。わたしなんか教授の奴隷みたいにこき使われていますから」

と話しながら少し後ろめたい気分だった。

そして、丁度その時、アビンと彼女たちの注文していた食事をウエイターが運んできた。

「お待たせいたしました。此方がアビン様ご注文のベーコンのミックスピザでございます。そして、此方がメイ様ご注文の.」

と言っている最中に、フツと停電になった。

少しざわめきが、生じたが直ぐに明るくなった。この時、ガラスの向こう側の公園の外灯は点いていたので、この停電は、部分的な物だ、もしかしたら誰かがパーティーの予行演習で間違っ落としてしまった物かもしれないとアビンはその時思った。

こんな中、ウエイターは気分を削がれたのか、そそくさに事を済ませて下がっていた。

「やれやれ.」

と呟いてから

「では、いただきますでしょうか」

と言って食事を始めた。お喋りをしながら.。

痕跡

「Bブロック停電」。
「船長！BブロックへのB12ラインの供給が85%ダウン」。
「どうゆう事なんだ」。
「分かりません。今突然に、落ちました」。
「仕方がない。バイパスを通せ。そうだなG14ラインの予備ラインを使え」。
「それから、ハイパードライブをカット」。
「イエッサー。ハイパードライブウエイを離脱」
とパイロットが応えて左にあるハイパードライブのコントロールレバーを倒した。
「イエッサー。供給異常のマーカ一部を迂回します。B12ライン、BF2T4ブロックでカットG14の予備ラインに接続、同時にBF2RブロックでB12ラインをカット、BF2P2ブロックでB12ラインにG14の予備ライン接続」。
デュパルク船長は、少し曇り顔で
「原因の場所の特定は出来るか」
とオペレーターに問う。
「たぶんですが、今切断したラインは、丁度、後部格納デッキに並行して走っている部分に当たります。正確には係員を送ってみななければ分かりませんが．．．」
とオペレーターのワッツが答えた。
「モニターはどうした」
と苛立たしげに答えた。
ワッツは、申し訳なさそうに
「今回、何か機密の物が運ばれるとのことで全て撤去されたんです」
と返した。
「運行管理は何をを考えて居るんだ。全く！わしは、そんな報告は受けてないぞ」。
「今からでも、付けますか？取り外したカメラは全て警備の倉庫にしまっておりませんが．．．」
「いやっ、それは後だ。警備員を現場に送って原因を明らかにする方が先だ」。
「分かりました。警備員を送ります」
とワッツは言う前から警備センターを呼び出す。
「はい、警備センターです」
と直ぐに答えが返ってきた。
「ブリッジだが、今、後部格納デッキに並行して走っているB12のラインの供給がダウンした。至急原因を調べて貰いたい。此方ではモニタリングが出来ない。以上よろしく」。
「分かりました。警備員を二人送ります」
と返ってきた。
「船長。警備員を二人送るそうです」
とワッツ。
デュパルクは、顎に手をやりながら
「此方も、一応修理班を準備しておかんとらんな」
と言った。
そこへ、マティエリがブリッジに入ってきた。
「どうかしましたか」
彼は、その場の異様な雰囲気反応して尋ねた。
デュパルクは彼を見るなり
「マティエリ君、君に直ぐに取りかかって貰いたいことがあるんだが」
と口を開く。
「何でしょうか、船長」。
デュパルクは、先ほど起きた事を話してから

「君の判断で適任者を数人選んで、待機して貰いたい」と用件を述べた。
「分かりました、船長」。
「すまん、パーティーにはでられんかもしれんようになるが」とデュパルクはため息混じりに言った。
「いえっ、わたしは大丈夫です」。
「では、よろしく頼む」とデュパルクは命令した。
「イエッサー」と敬礼をしてマティエリはブリッジを出ていった。ワッツは、副長は、また間の悪いときにブリッジに上がって来たものだなと思った。その時、警備センターからシグナルが入った。
「はい、此方ブリッジ」
「警備センターです。二人の警備員の回線をそちらに回します。コールはゼクター3です。よろしく」。
「了解」と通話は終わった。すると、直ぐに「此方は、ゼクター3、只今より後部格納デッキに向かいます」との通信が入った。
「了解、よく聞こえる。きおつけていけよ」とワッツは返した。
「ありがとう。かつて知ったる我が家だ大丈夫だよ」との返事。ワッツは「ああっ、そうなんだ」と思いつつどうして自分がその様に話したのか不思議だった。

「何ですって？」
警備員の一人ブラウスが相棒に尋ねた。
「気を付けろってさ」と相棒のアヒムが答えた。
「はあっ？」。
「まあっ、後部格納デッキには、何やらごちゃごちゃ置いてあるらしいから、足下に気を付けろって事だろう」。
「まったく！俺達を信用しろっていうんだ！」
不機嫌そうにブラウスが応える。
「そうくさるな、こっちは異常がないか確かめるだけなんだから．．．．．行くぞブラウス！」
そう言ってからアヒムは、当直のワンに「これから、アヒム、ブラウス両二名、ゼクター3として後部格納デッキのB12ラインの点検に出発します」と言いながら左腕のリストウオッチを確認してから「船内時刻18：57：10以上」と述べて二人とも敬礼をした。すると今度はワンが「では、装備のチェックを、電子警棒、拘束ワイヤー、ホイッスル、無線電話ヘッドセット、身分証、それからハンドブラスター．．．．．オッケイか？」と二人を問いただす。二人はワンがチェック項目を上げる度に、それぞれをチェックした。そして二人は顔を見合わせてからアヒムが答えた「全装備異常なし」。
「では、気を付けて」とワン。
「土産は何がいい？」と返すアヒム。

「そうだな、温かいピザでも貰おうか」。
「俺達の宅配は高いぞワン」
とプラウスが返した。
「分かった分かった、後で払うから付けといてくれ」
と早く行けとばかりにワンは応えた。
「じゃあ〜な」
と言って二人とも警備センターから出た。
二人は警備センターから真っ直ぐに行って突き当たりのQ3ブロックのエレベーターホールに来た。そこには二つのエレベーターが稼働していた、その内右のエレベーターが、上の方から丁度下りてくるところだった。そこで、アヒムはエレベーターの下りボタンを押した。
そんなおり、プラウスといえばエレベーターホールに有る緊急ボックスからハンドライトを取り出していた。
「お前、何やってんだ？」
とアヒムが彼に尋ねた。
「見て分かるだろう、緊急時の備え」
プラウスはこともなげに答える。
「緊急時の備えってお前．．．．」
とアヒムは言葉を失った。
「いいじゃないか、この見回りは予定外のことだろう？つまり緊急事態だ、違うか？」
と言葉を続けるプラウス。
「しかし、．．．．」。
「お前も堅いこと言うなあ」。
「分かったよ。だが、一つだけにしておけよ」
とアヒムは折れた。
「まっ、一つでもいいか」
と渋々左手に持っていたハンドライトをボックスに戻した。
アヒムは緊急ボックスの扉を閉めながら
「この船が、停電になることは無いって」
と言った。
「俺は、過信は禁物だと思うんだけどね」
とプラウス。
「それ、エレベーターが来たぞ」
とアヒムはプラウスを促した。
そして二人はドアの前に立った。すると、直ぐにドアはサッと開いた中には若いご婦人と小さな男の子が居たが、突然ドアが開いて見知らぬ制服を着た男が二人立って居たものだから、その男の子は若いご婦人の後ろにサッと隠れた。
「あっ、これは失礼。御邪魔しますよ」
と言って彼らは、エレベーターに乗り込んだ。
「坊や、驚かせてごめんな。これからおじさん達、みんなの荷物の見回りなんだ」
とプラウスが子供に話した。
しかし、子供はまだ後ろに隠れて女性の服に、しっかりとしがみついていた。それを困ったように、女性が応えた。
「申し訳有りません。この子人見知りが激しいんです」。
「そうなんですか。此方も少し驚かせてしまいましたから．．．．」
とアヒムは応えた。
「おじちゃん達は怖い人じゃないよ。みんなを守ってるんだぞ」
とプラウスはしゃがみ込んで子供と同じ目線の高さに成って話し掛けた。
「ほら、ビリー怖い人じゃないのよ」
と女性はその子を優しく促す。
「ホント？ママ？」
とその子は、母親の顔を見上げた。
それに応えて母親はこっくりと優しくうなずいた。
すると、その子は服を掴んでいた手を離しておそるおそる母親の後ろから出てきた。
「おじちゃんいい人なんだよね」
とその子は言った。

「そうだよ、ビリー、おじちゃんはいいい人」
とプラウス。
「そうそう、どうでもいい人、と俺は思う」
とアヒムは彼をちやかした。
すると、母親はクスツと笑った。
「どうしました？」
とアヒムは尋ねた。
「いいえ何でもありません」。
「ねえねえ、おじちゃん、おじちゃんの腰にある物はなあに？」
とプラウスの右の腰に下げているハンドブラスターを指さしてビリーは尋ねた。
「これは、悪いやつをやっつける道具だよ」
とプラウスは答えた。
「本当？どんなやつでもやっつけちゃうの」。
「そうだよ」。
「凄いな〜」
ビリーは、まるで何かにあこがれるように答えた。
「凄いだらう」
と少し威張るプラウス。
それを見てアヒムは、何が凄いなんだか、子供と同じ思考パターンしか持たないやつが
と思った。
そうしている内にピーンと言ってF 6でエレベーターが止まってドアが開いた。
すると、その子の母親は
「わたし達は、この階で降りますので、どうも申し訳有りませんでした」
と言ってビリーの手を引いた。
「おじちゃんバイバイ」
とビリーはプラウスに別れを告げた。
「バイバイ、元気でなビリー」
とプラウスは返した。
親子が出るとドアはスウツと閉じた。
「お前は、直ぐ誰とも仲良くできるな」
とアヒムは、ぶっきらぼうに言った。
「そう言う、あんたは、少し堅いんじゃないか」
と返すプラウス。
その言葉に、怒ることなく、返って少し苦笑しながらアヒムは答えた。
「この前、母親にもそう言われたよ」。
「こりゃ失礼」
とプラウスは短く言葉を切った。
「まっ、いいさ」
とアヒムは呟いた。
すると、ピーンと言ってエレベーターはF 4で止まった。後部格納デッキの入り口
が有る四階に着いたのだった。
「さあ〜、仕事を始めるぞ」
とアヒムはプラウスに言った。
「では行きますか」
と言って二人はエレベーターから出て真っ直ぐ最初の 十字路まで歩いた。
そこで、アヒムは最初の連絡を行った。
「此方、ゼクター3。ブリッジどうぞ」。
すると、言葉は直ぐに返ってきた。
「此方、ブリッジ」。
アヒムはブリッジの応答を聞いて、こいつは無駄のない男だなと思いながらリスト
ウオッチを見ながら連絡をした。
「ゼクター3、今、船内時刻19：10。後部格納デッキの入り口があるF 4、四階層
に到着し入り口に向かっている。現在異常なし。次の連絡は入り口に到着時に、以上」
。
「了解」
と通信は切れた。

「流石に静かな物だな」

とアヒムが呟いた。

「格納デッキは右ですね」

とプラウス。

二人は格納デッキの入り口に向かって歩きながら壁や床、天井を見渡した。

「それにしても、誰もこの辺には居ないんでしょうかね」

とプラウス。

「仕方がないさ、ここいらは荷物置き場に近いからな」

とアヒム。

「確か、後部格納デッキの反対側は探査艇やシャトルの格納庫でしたよね」。

「そう、しかし今は、パーティーの準備で誰もいないし、イベントや惑星上陸も無いから、整備員達も暇だから、みんなパーティーにかり出されている」。

「それでこんなに静かなんですね」

とプラウスが残念そうに言う。

「何か、当てでもあったのか」

とアヒムはプラウスの横顔を見たが、そのひょうひょうとした表情からは何も察する事が出来なかった。

そして、

「別に何でもありません」

との言葉が返ってきた。

「まあ、いいさ」

とアヒムは独り言のように言った。

しばらくすると、彼らは丁字路に差し掛かった。ここからは、右側の壁は全て格納デッキのぶ厚い壁の部分になる。その壁を注意深く見ながら二人は入り口まで歩いた。

「何も有りませんね」

とプラウスが言った。

「有ったら困る。このぶ厚い壁に穴が空くような事があるとしたら、この中で小型反応炉エンジンが爆発するぐらいだ。そんなことが起きなければ穴は空かない」

とアヒムは壁を小突きながら答えた。

「そうですね。そんな事があつたらこの船もただじゃ済まないし、俺達もこうしてとぼとぼと歩いてくることも出来ないだろうし．．．．」

とプラウスは上を見上げながら言った。

「そうだな」。

「でもさあ」。

「なんだ？」

とアヒムはプラウスの方に振り返る。この時プラウスは彼の後ろを歩いていたからだ。

。「確か、格納デッキには、モニターカメラが据え付けてなかったか」

とプラウスが不機嫌そうに言った。

「確かに、だが、どこかのお偉いさんが取り外せとの事で昨日全て取り外されたんだとさ」

と、アヒムは、うんざりしたような表情で言う。

「ところで、お前今朝のミーティングの時の話、聞いてなかったのか？」

とアヒムは、驚きの表情で聞き返した。

「いやあ、ちょっと野暮用で遅れてしまって．．．． 申し訳ない」

とプラウスは頭をかきかき答えた。

「やれやれ、また、どこぞでナンパしてたのか？」。

「あははははっ」。

アヒムは、また、笑ってごまかしていると思いながら言った。

「さあっ、着いたぞ！格納デッキの入り口だ」。

そのドアにはBD2と書かれていた。二人は少し戸惑っていた。というのは、ドアの開閉のボタンが、電源の供給が停止しているために反応しなかったためだ。そこで先ずは、ブリッジに連絡してどうした物か連絡することにした。彼、アヒムとしてはドアを開けてから、連絡を取ろうと思っていたが、今はそれが出来ないのを歯がゆく思っていた。

「此方、ゼクター3、ブリッジどうぞ」。

「此方、ブリッジ」。
「ゼクター3、唯今、後部格納デッキの入り口BD2の前に居ます。ドアの開閉のための電源が供給されていないために、開閉装置が作動せず。緊急時の開閉システムは有るか？どうぞ」
とアヒムは事務的に伝えた。
「了解、しばらく待ってくれ」
と回答があった。
「しばらくここで待ちぼうけだとさ」
とアヒムは皮肉めいた響きの言葉を吐いた。
「待ちぼうけですか」
とそれを受けてプラウスは応えた。

そのころブリッジではワッツがリャーノフと後部格納デッキの動力ラインを調べ始めていた。モニターに様々な系統図と配線図を出してBD2の動力ラインを調べていた。
「もしかしたら、これかもしれないな」
とリャーノフが言った。
「どれだ？」。
「これですよ」
と指さすリャーノフ。
「これか？ドアの開閉スイッチの下にある点検ボックス内のエアーコックか？」とワッツ。
「まったく、このドアの設計者はデッキ内の非常開閉には気を配っても船内からの非常開閉の事は考えてなかったんですかね」
とぶつぶつ文句をたれるリャーノフ。
「まあっ、そうぼやくな。だいたい、非常時には全てのドアは閉じられるように設計されている。そして、外側より内側が、生存性を高くするために優先される為に、規格上このように設計されるんだ。だが、最近は、少し高率と融通の観点から変わってきてるがな、このような、外宇宙型宇宙船は、まだ規格が、どうのこうのと五月蠅いから仕方がないことさ。そう、設計者のことを攻めなさんな」
とワッツはリャーノフをたしなめた。
「そうでしたね」
とリャーノフ。
「では、リャーノフ、モニターをそのまま、開閉方法を説明してくれ」。
「分かりました」。
「では行くぞ」
と言ってトークのスイッチを入れた。
「ゼクター3、此方ブリッジ待たせて申し訳ない。今からドアの開閉方法を説明する」
とワッツ。
「此方ゼクター3、了解。もうじきお茶でもしようかと思ってた処だ」
とアヒムは応えた。
「悪かったな、邪魔して」。
「いやっ、いい」。
「それじゃ、これからドアの開け方を説明する。まずは、開閉スイッチの下にあるボックスまたは、点検扉が有るかどうか確認してくれ、そして有れば先ずはその扉を開ける」
とワッツは伝えた。
「了解、開閉スイッチの下だな、探して見る」
とアヒムは応えてから
「おい！プラウス下の方に何かあるか」
とプラウスに聞いた。
「ああっ、足下に点検扉が有るが．．．．．」
と言ってからプラウスは、かがみ込んだ。
「じゃそれを開けろ」。
「開けるんだな」
と言ってから点検扉のPUSHのボタンを押して引き出しレバーが、立ち上がったので

、プラウスはそれを掴んで引っ張ったが扉はびくともしなかった。
「開かないぜ」
とプラウス。
「此方ゼクター3、指示どおり扉は見つけたが、開かない」。
「開かない？ちょっと待て」
とワッツは応えた。
「また待てかい」
とアヒムは呟いた。
ブリッジではワッツがリヤーノフに開かないときの対処方法を調べさせていた。
「難しいですが此しかないようです」
とリヤーノフ。
「船長！許可を」。
デュパルクは黙って肯いた。
「しょうがないか」
と言ってからワッツは、ゼクター3を呼び出した。
「それで、どうするんです」
とアヒムは苛立ちながら尋ねた。
そして返ってきた回答に、ビクリして言った。
「本当にそんな事をして、大丈夫なのか？．．．．えっ？許可は取ったからおもきつてやってくれ？おいおい本当にいいのか？．．．．分かったそうする」。
「どうしたんです」
とプラウスが尋ねた。
「そのPUSHのボタンの処をお前のハンドブラスターでぶち抜け」
とアヒムは、ため息混じりに言った。
「正気ですか」。
「許可は取ったそうな」。
「投げやりになってませんか？」
プラウスは問い返す。
「いいからやっつけてしまえ」。
「そうですか？」
と言ってからプラウスはハンドブラスターをホルスターから抜いて、少し扉から離れてからねらいを定めた。
アヒムも少し離れてから
「よしやってくれ」
と言った。
その声に従ってプラウスはハンドブラスターで打った。するとバシユンと音を立ててボタンの有ったところに穴が開いた。
「此方ゼクター3、そちらの要望どうりに穴を開けてやったぞ．．．．えっ？此で扉は開く？」
とアヒム。
その言葉を聞いてプラウスは引き出しレバーを引っ張ると扉は静かに開いた。それで彼は言った
「アヒム、扉は開いたぞ」。
「わかった．．．．此方ゼクター3、扉は開いた。ブリッジどうぞ」
とアヒムはブリッジを呼んだ。
「此方ブリッジ了解した。では、次に移る。まず、メッシュの入った銀色のホースが水平方向に三本平行に走っているのと、それに垂直に二本走っているのを確認してくれ」
とワッツは応えた。
その言葉をアヒムはプラウスに伝えた。それで、プラウスは床に座って中を覗き込んで確認して言った。
「確かに、言うとおりにあるぞ」。
アヒムは手短かに返した。
「ブリッジ、確認した」。
「よし、では始めに、水平に走っている上から二番目と三番目のホースに付いているコックをクローズ方向にしてくれ」
とワッツは伝えた。

アヒムは伝えられたことを手短かにプラウスに伝えた。それで、プラウスはそれぞれのコックを確認してから手を入れてコックをひねってクローズにし終わると

「二番三番クローズにした」

と応えた。

それを受けてアヒムは

「ブリッジへ、クローズにした」

と伝えた。

「わかった、今度は垂直方向の右のホースのコックを今度はオープン方向に回してくれ、此でドアは手動で開くようになる。ただ、注意点としてオープン方向にすると多量のガスが噴出する有毒ガスではないが、オイルが少し混じっているので臭いかもしれん。以上だ」

とワッツは伝えた。

その言葉を聞いてアヒムはため息を付いて

「プラウス、その縦に走っている右のやつのコックを開ければ、手動でドアが開くんだそう」

と言った。

「手動で？」

「そう、手動でだ。ただ、注意しろってさ、開けたとたんオイルの混じったガスが出る時、有毒では無いけど」。

「へ？」

と、その時プラウスは、既にコックに手を掛けて回し始めていた。

とたんに、バシュワァ〜と猛烈な勢いでガスが噴出、辺り一帯に霧が立ちこめた。

「うへえ〜、オイル臭え〜」。

「ゴホン、ゴホン。わ〜、もろにかぶっちゃまった」。

「ああ〜。此方ゼクター3、ブリッジどうぞ」

もう二人ともうんざりだった。

「はい。此方ブリッジ」。

「此方は、しばらく身動きかたれない。どうぞ」。

「どうゆう事だ、何か問題でも起きたか」。

「ガスの発生で、視界ゼロ」

とアヒムは投げやりに言った。

「視界ゼロ？」

と応えるワッツの言葉を聞いてリャーノフが言った。

「どうも水が溜まっていたようですね」。

「ドレンしてなかったのか？」

とワッツ。

「結果からして、その様ですね」

とリャーノフは肩をすくめて答えた。

「整備ミスかどうかは、知らないが此方はしばらく動けない。霧が晴れたらドアを開けるそうしたらまた連絡をする」

とアヒムは、うんざりしながら通信を終えた。

密閉された空間では、なかなか霧が四散しない。彼の目の前をオイルの混じった細かい水滴が浮いているのが見て取れた。そう言えばとプラウスに声をかけた。

「プラウス、どうだ大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ。ただ、めえいっぱいガスをかぶっちゃまった」

と返事が返ってきた。

「お前が、話を終えるまでに手を出すからだ」

とアヒムはぼんやりとしか見えない相手にたしなめるように話す。

「お前の話が、回りくどいからだ」

とプラウスは、言い張った。

「それは、悪かったな」

とアヒムは事も無げに受けた。

「ところで、この霧はどのくらいで晴れるんだ」

とプラウスは心配そうに言った。

「なに、もうすぐさ」。

「どうしてそんな事わかる？」

「上の方を、見て見ろよ。明かりがだいぶハッキリ見えるようになってきただろう」
とアヒムはブラウスを促す。

「ああっ」

と浮かぬ返事だが、投げやりな響きはなかった。

「まき散らされた水滴が、だいぶ落ち着いてきた証拠さ」。

「そうなのか？」。

「そうさ、だいぶ周りが見える様になってきただろう」

とアヒムは言い聞かせるように言った。

「そうだな」

とブラウスは応えた。

「では、そろそろ開けるとしますか」

と促すようにアヒムは言った。

「そうするか」

と言ってブラウスは立ち上がった。

二人は、まだ完全に霧が晴れてはいなかったが、すでにドアを確認できるまでに視界が回復していたので、開ける作業に取りかかった。先ずは、ドアを引くための手が掛かるところを探した。すると緊急時の為だろう何か所かに、手を掛ける場所があった。

それで、二人は、その場所に手を掛けてドアを左に引っ張ってスライドさせた。ドアの厚みは150ミリ有るのでかなりの重さだが、レールにベアリングよって乗っているために、比較的楽に動かしたが、やはり骨の折れる事は確かだった。

二人はドアが開くと妙なにおいに気が付いた。

「なんだこの臭い」

とアヒム。

「何でしょうね？それに、中は真っ暗ですよ」

とブラウス。

「どうも、お前の言ったことは、正しかったな。ホント、緊急時には何があるか判らないな」

とため息混じりにアヒムは言った。

そして、彼は、ブリッジを呼び出した

「此方ゼクター3、ドアを開けた」。

「此方ブリッジ、中はどうだ？」。

「中は真っ暗だ、電源が供給されていないようだ」。

「ゼクター3、中に入れそうか？」

「ああっ、ハンドライトを持ってきたから大丈夫だ」。

「そうか、では、中に入って確認を頼む、状況が判りしだい此方から修理班を送る」。

「了解、では、此方は中に入って調査する」

とアヒムは伝えた。

「了解、では気お付けて」

とワッツは通信を終えた。

アヒムは、ブラウスに向かって

「では、行くとするか」

と言った。

「何となく気が進まないけどね」

とブラウス。

二人は、後部格納デッキへと入っていった。その中は、何か異様な空気が立ちこめていた。ブラウスは、この臭いは、何だろうか、しきりに思い返していた。何かの腐乱したような臭いと考えながら、明かりを照らしながら通路沿いの壁を調べながら歩いた。

二人の歩みに合わせて、ハンドライトの明かりに様々な荷物が浮かび上がっては消えを繰り返した。

ある程度歩いた処で、アヒムは、何か堅い物をけっ飛ばした。

その音は、広い格納デッキ内をカランカランとこだました。それで、ブラウスはとっさに持っていたハンドライトを足下に向けて照らした。そこには、金属製の潰れたパイプの様な物が、幾つか転がっていた。

「何だ、ゴミを散らかしっぱなしか」

とブラウスが呟いた。

それを見てアヒムはしゃがんで、そのゴミを手にとって言った。
「此は、配線やエア管の保護パイプだ」。
「どういうことだ？」
とプラウスは尋ねた。
「つまり散らかしたんじゃないで、壊されているということだ」
とアヒムは答えた。
「え？ どういう事ですか？」
と戸惑うプラウス。
それに対してアヒムは
「もっと壁をよく照らしてみてくれ」
と言いつつ放った。
それに応えてプラウスは壁を照らしたと同時に二人はハッとした。
「此方ゼクター3、ブリッジどうぞ」
とアヒムは叫んだ。
「はい、此方ブリッジ。どうした？」。
「ブリッジ、B12ラインが何かによって切断されている」。
「切断？」
ワッツは信じられなかった。
「そうだ！何か鋭い物で三カ所壁からえぐられる様に切断されている」。
「本当か？」。
「疑うんだったら、ここに来てみて見ろ」
と焦れっただけに怒鳴った。
「悪い、疑ってすまなかった。原因が判って良かった。他に何か気づいたことは無いか」
とワッツは言った。
「他に気づいたことか？」
とアヒムが呟くと、プラウスが不安そうに言った。
「この変な臭いは、死臭ですよ！あれを見てください」。
プラウスがハンドライト照らす方向を指さした。そこには、動物に遺骸が散乱していた。そしてよく見ると、切断されたラインの処にも血痕が付着しているのが見て取れた。
それを見たたんアヒムは、ホルスターからハンドブラスターを抜いて安全装置を外してから言った。
「どうもここから早く退散した方がいいようだな」。
「その様ですね」
と言いつつプラウスもハンドブラスターを抜いた。
「ブリッジ、此方ゼクター3、直ちに格納デツキを出る、繰り返す格納デツキを出る」
とアヒムは連絡した。
「どう言うことだ」
とワッツは言った。
二人は既に警戒しながら後退し始めていた。その問いにアヒムは答えた。
「何か見知らぬ凶暴な動物が持ち込まれていたようだ。それが檻か何かは知らないが、それから出て暴れ出しているようだ。幾つかの動物の死体を発見、また数カ所に鮮血が飛び散っている。だが、まだその存在を肉眼では確認してはいない」。
「まだ確認はしてないんだな」
とワッツは問いただす。
「ああっ、だが確認してからは遅いかもしれん」
とアヒムは答えた。
「よし判った。退却してくれ」
とワッツは言いつつ船長に指示を仰いだ。
すると、デュパルクは、後部格納デツキに続く通路の閉鎖を命じた。
「ワッツ、ゼクター3のエレベーターまでの後退路を確保しながら各通路を閉鎖しろ」
。「判りました。船長。BD2のドアに面する通路に続く各通路を閉鎖。ただし、BF4-11と-12の隔壁は開いたままに」
とワッツはモニターを見ながらリャーノフに言った。

「了解、BF4-A3通路に通じるBF4-11、12以外の各隔壁を閉鎖」
と言ってコントロールキーを押した。
やれやれ、と頭の後ろで腕を組みながらワッツは大きなため息を付いて言った。
「此方ブリッジ、ゼクター3急いでエレベーターまで後退してくれ」。
アヒムはそれに対して、周りに気を配りながら
「判った。エレベーターまで後退する」
と言ってドアの処まで間で後退する。
それから、アヒムは
「ブリッジ、BD2のドアは、閉じなくてもいいのか」
と尋ねた。
「そうだな、出来るなら閉じてもらいたいのだが」
との答えが返ってきてアヒムは、うんざりした様子でプラウスに言った。
「おい、このドアを閉じろってさ」。
「こんな緊急時にですか」
と抗議の表情も露わにプラウスは応えた。
「じゃお前、そこの処でブラスターを構えて援護してくれ！俺が、一人でドアを閉じるから」
とアヒムは、プラウスに指示した。
「ああっ、そうする」
と言ってドアから二メートルほど下がった処でハンドブラスターを構えて立った。
それを見てアヒムは、これから閉じるからと言わんばかりの仕草をしてから、ドアを力一杯押しながら徐々に閉じていった。
そしてドアを閉じてからアヒムはブリッジに連絡した。
「此方ゼクター3、今、BD2のドアを閉じた。これからエレベーターまで後退する」。
「了解、後退してくれ。今、応援を送る。エレベーターフロワーで待機していてくれ」
とブリッジの応答にアヒムはしようがないかと、ばかりにエレベーターフロワーで待機する旨を伝えた。
それから、アヒムはプラウスの方に向かって
「エレベーターフロワーで応援が来るまで待機するぞ」
と言い放った。
「俺達にバリケードになれって事か」
とプラウスは不満そうに返した。
「ああっ、だがドアは閉じて置いたからわざわざ開けて出てくる事もないだろう。そこまで器用な野獣はいないさ」
とアヒムは安心させるように言った。それは、たぶん自分に向けて言い放った言葉でもあった。
「そうですかね」
とプラウスは安心は出来ないようだった。

そのころブリッジでは、警備センターに連絡して増援を求めている。
「そうだ、各警備ステーションに配置されている人員から一人ずつゼクター3への増援を送ってくれ」
とワッツは伝えた。
「了解した。増援を至急送る。それから、動物学者か動物に詳しい者が誰か乗客にいないか調べて、いたら此方に来てくれるよう御願ひできないか」
と答えが返ってきた。
「判った。至急しよう」
とワッツ。
「あつと、それから」
と追加の用件を警備センターが言ってきた
「この船にどんな動物が持ち込まれている可能性があるか、調べてもらえないだろうか」。
その言葉に、ワッツは渋るように
「調べても良いが、ウイスキーの樽にブラスターライフルを忍ばせてくる輩が多いのにはい。猛獣を持ち込みますと記載する。奇抜な人物はいないと思うが、……」

、と答えた。

「一応で良いんだ」

と向こうは答えた

「まあっ、そう言うんだったら調べてみる」

とワッツは了承した。

デュパルク船長は、通信が切れたのを確認してから言った

「ワッツさんに、リャーノフくん、すまないが、先ずは後部格納デツキ内に入ること無しに現在電源の供給が止まっているB-12のラインを回復する方法を調べてくれ、そして、判りしだい、わたしからだと副長の編成した修理班に連絡してくれ。それが終わったら、たいへんだと思うが積み荷の調査を開始してくれ、無駄だとは思いますが、よろしく頼む」。

「判りました。船長」

と言って二人は仕事を始めた。

それから、デュパルクは、後ろを振り返って航法オペレーターの加藤に

「すまんが客室管理センターに連絡して、動物学者か動物に詳しい人物を捜し出してもらってくれ、判りしだい、わしを呼び出してくれ」

とことづけると出口の方へ歩き出した。

そんなデュパルクに対して加藤は

「判りました船長」

言葉を返した。

そして、デュパルクは、ドアの前に立つとクルッと振り向いて

「すまん、これからわたし主催のパーティーにでなならん、悪いが後はよろしく頼むベッカーくん」

と当直の一等航宙士に言った。

「イエッサー」

と彼は答えた。

「ああっ、それから」

とデュパルクは言葉を続けて

「後から、何か飲み物と食べ物を届けさせよう」

と言ってブリッジを出ていった。此は今、彼の考え得る精一杯の部下への気遣いだった。

少女の秘密

ブリッジを出て直ぐ突き当たりのエレベーターを使ってデュパルクはF 8に降りた。そして、パーティーの準備がなされているホールに足を速めた。というのはパーティーを行うホールは船の前方部のF 6のEからFの区画に有るためブリッジから水平方向に三百メートル程離れており、丁度この船にある自然公園の反対側に位置するからだ。そして、公園を真っ直ぐ突っ切るためにはF 8に有る渡り通路を使うのが一番早道だった。

彼が、その渡り通路を渡ろうとした時反対から渡ってきた男に出会った。その男は、既に服装を整えていたので、その男にデュパルクは尋ねた。

「あっ、申し訳ない。もう皆さん集まっていますか」。

その男は、首を傾げて言った。

「少しだけですが」。

「そうですか、ありがとうございます」

とデュパルクは感謝を述べてから先を急いだ。

そんなデュパルクを見送りながらアビンは思った、「そんなに慌てなくても、パーティーは、まだ始まってないのに」と。

アビンは、ションを迎えに行く前に、ちょっとだけ様子を見に行っていたのだった。それは、素早くパーティーを抜け出す事の出来る方法を探るための下見をして来た所だった。

「まっ、下見をしたことだし、そろそろ行くとするか。あんまり待たしちやお嬢さんが可哀想だからな」

とアビンは、ぶつぶつと独り言を言いながら螺旋階段を使って降りていった。

アビンはF 7のロビーに降り立った、相変わらず広いなと彼は思った。それから、少しどうしたもんだろうと考えた、というのはションを迎えに来たのは良いのだが、どの様にエスコートしたらいいものか、決めていなかった。ごく自然にお嬢様お迎えに上がりました。と言うものならションはきっと怒り出すに違いない。確かにどう見ても、良家のお嬢様という感じの子だし、実際そうなのだから。それに、美少女で何処に出ても恥ずかしくない物腰だ。それとも、ドアをノックして、ドアが開くのを同時に敬礼をして「公爵閣下の命により提督閣下のご親族の方をお迎えに上がりました」とでも言うか。此は此で結構爆笑ものか、非常に嫌われるかのどちらかだな。と考えている内に、彼の足の方は、勝手にションの部屋の方へ向かっていた。そして気が付いた時には、そのドア口に立っていたのが、我ながら情けなかった。

このままドア口に立っているわけにも行かないので、まずは部屋番号を改めて確認し、7A-108、身支度を確認し、タキシードは慣れてないので、どうもしっくりこないのだが、教授がわざわざ用意してくれた物だから、不平を言うわけにもいかなかった。

そして、彼はドアをノックした。すると、ドアはスーと開いてアンが、出迎えて言った。

「此は、ミスター、ホーンブローワー丁度、今仕度を終えたところです」。

「それは、良かった。随分待たせてしまったのかと思っていましたから」

とアビンは応えた。

「それは違うわ」

と奥の方からビットンブルー女史の声がして、こっちの方へ歩いてきた。そして、もう一言、

「もう少し早く来ていただければ、こっちもションを急かして早くすることが出来たのに、随分手間取ったのよ」。

「手間取った？そんなにたいへんだったんですか」

とアビンは、つい好奇心から尋ねた。

「ション様は、今回のドレスがとても気に入らなくて、制服で出ると聞かなかったんです」

とアンがアビンの問いに答えた。
「そうよ、わたしがせっかく選んできたドレスをやだと言い出して、こっちの楽しみを
台無しにされては、面白くないのよね」
とビットンブルー女史はアンの答えに付け足した。
「はあっ？」
とアビンは返す言葉に困った。
「まあ、あなたには理解できないことでしょうけど」
と彼女はため息混じりに言った
その反応に、何も言えないアビンの腕を掴んで、彼女は奥の部屋へと引っ張って
いった。そこには、小さな羽を広げた蝶の様に大きなリボンを背中に負ったシオンが、少
し恥ずかしそうに佇んでいた。その容貌は、印象的なシオンをより際だって印象的にす
る物だった。それは、まるでおとぎ話の妖精が、現れた様だとアビンは思った。その
姿は、とても愛らしい物だったが、どうもシオンが妙にもじもじしているのが、彼は気
にかかって、ふと、その様子を観察して判った。シオンは、スカートの丈が気になるら
しい。だが、それほど短いという物では無いなど彼は思ったが、どうもシオンはそう
でもないらしい。
「シオン。迎えに来たよ。そのドレスとても素敵だよ」
とアビンは、ぎこちないあいさつをした。
「情けないわね。ほめ言葉はそれだけ？」
とビットンブルー女史の厳しい言葉が、すかさず飛んだ。
「すみません。どうも、お世辞が、苦手なものでしていつも教授に、小言を言われてい
ます」
とアビンは恐縮し頭をかきながら応える。
「張り合いがないわね」
と彼女はため息混じりに言う。
どうも、ビットンブルー女史の気分を害してしまったと、アビンは思った。するとシ
オンが二人の会話に入ってきた。
「あのう、エレナさん」。
「なあ～に？シオン」
とビットンブルー女史。
「このスカート短くはありません。膝が寒いのですが」
とシオン。
「健康的で良いじゃない」
と言い切る女史。
「ですが、．．．．」。
「お尻が、見えるわけでは無いんだから良いんじゃない」。
アビンはビットンブルー女史は随分乱暴な人だなど思っていると
「ねえ？アビンくんもシオンの足、綺麗だと思うわよね」
と半ば強制的とも思える圧力を掛けながら、彼に話を振ってきた。
彼は、戸惑いながらも、シオンを見て確かに綺麗なすらっとした足だと思って、つい
肯いてしまった。それに対してシオンは、かあつと顔を赤らめたと思うとうつむいたま
ま静かにソファに腰を下ろしてしまった。
そして、シオンは
「わたし、出たくありません」
と言い放った。
此は、困ったことになったぞと彼が思っていると、ビットンブルー女史は、そんな事
は認めないとばかりに
「シオン！立ちなさい。わがままは許しません。今日は大事な方面会する事になってい
るんですから、さあ、立ちなさい」
ときつく言い放つ。
すると、それに対して、シオンの顔が一瞬だがキッと睨み付ける様に見えたと思うと
、さっきまできつく当たっていたビットンブルー女史が顔色を変えて後ずさりして
「勝手にしなさい」
と言ってからくびすを返して部屋から出ていった。
アビンは少し当惑しながら、その場に佇んでいたが、本来の目的を思い出して言った

。「シヨン？迎えに来たんだが、どうもこうも出来ない様子だね」。

すると、さっきとはうって変わって微笑みを湛えて

「ありがとうございます。気になされないでください。わたしは大丈夫ですから」

とシヨンは答える。

その言葉を補うようにアンが言った。

「エレナさんが、衣装を持って来られたときは、いつもこんな具合ですですから、気になさらないでくださいアビンさん」。

「君は平気なのかい、アン」

と尋ねると。

「ええ、わたしは慣れましたから」

とアンはクスツと笑いながら答える。

アビンは、その表情を見てホッと安心した。それは、この言い争いが、今後もずっと

険悪のままと言うわけでは無さそうだという事と、それから、昼間のアンの様態が、さほど悪いものでは無かった様なので安心したからだった。

「アビンさん笑っていますね」

とアン。

「あっ、申し訳ない。つい」

と答えてしまったアビン。

「ついですか」。

「そのう、女の子だから綺麗に着飾りたいのは、自然だと思うんだが、たまにはそうでない子もいるのかなってね」

と正直に答えた。

「そうですね、確かに、でも、エレナさんは、どちらかと言うとシヨン様を着せ替えにして楽しんでるふしがあるんです。それで、時々やってしまうんです」

とアンが説明してくれた。

「そうか、だが、シヨン綺麗だよ」

とアビンは正直に褒める。

その言葉に、シヨンは少し悲しそうな表情を見せて

「アリガトウ」

と単音の響きが強い返事をする。

その返事にアビンはドキツとして眉をひそめた。そして、アンは手で口から出そうな言葉を押さえて目を見開いてシヨンを見ていた。

何故その様な反応を二人がしたのか。それは、その返事をしている唇を伝って血が滴り落ちていたからだ。すると突然、シヨンは咳き込んで吐血した。

「シヨン様、今すぐ薬をお持ちいたします」

とアンは急いで奥のベッドルームへ駆けていく。

アビンは、シヨンの体を押さえて倒れるのを止めて

「大丈夫か、しっかりしろ今アンが薬を持ってくるからな」

と言って励ます。

それに対してシヨンは

「ご心配なく軽い発作ですから、少し横になれば良くなりますから」

と答えた。

そんなシヨンをアビンは、ソファに寝かした。この子は、アンよりも軽かった、それに華奢で非常に柔らかかった。

すると、アンが奥の部屋から駆けて戻ってきた、そして、小さな樹脂製の瓶を持ってきていてシヨンに渡して

「今水をお持ちします」

と言って立ち去ろうとする。

シヨンは、そんなアンを呼び止めて言った。

「アン、大丈夫。今回は軽いから薬が無くても大丈夫」。

アンは、それに応えるよう薬を渡した方の手を握って

「シヨン様」

と言ってその場にしゃがみ込んでしまった。その頬を涙が一筋流れるのをアビンは見逃さなかった。

そんな二人のやりとりを見てからアビンは言った。

「シヨン今日のパーティーは、休んだらいいよ。俺が、教授とその君の伯父さんだった

「な、ファーナビー提督にこのことを話して、今日のところは休むというふうに伝えておくよ」。

すると、シオンは首を横に振って

「それは、出来ません今日お会いする方は、とても大事な方ですから、少々の事では休むわけにはいきませんから」

と少し辛そうに答えた。

「でも．．．．．」。

「いいえ、少し遅れますが、30分程休めば良くなりますから、本当に軽い発作ですから」

とシオンは強く押した。

アビンはその気迫に押されて

「それなら、仕方がない後30分経ったらまた来るよ」

と折れた。

そして、アビンが立ち去ろうとしたらアンが彼を呼び止めて言った。

「お待ちになって下さいアビンさん、どうかそちらのソファに腰掛けてお待ちになって下さい。30分程ですから、お茶で一息付けますから、少しお待ちになって下さい」。

そして、アンは、直ぐに奥の部屋から毛布を持ってきて、既に寝入っているシオンに掛けてから、吐血した血をハンカチで拭き取ってからカウンターの方に行って、お茶の準備を始めた。

そんな中アビンは、何となく手持ち蓋差なのが手伝って、寝入っているシオンの横顔を何となく眺めていた。彼は正直、綺麗な子だなと思ったが、こんな子が、発作で吐血か、かなり重度の難病か何か知らないが可哀想に、と思っていると、早速支度が出来たのか、陶器のポットにティーカップを二つ持ってきてテーブルの上に置いて、カップにお茶を注ぎ始めた。

「あのう、俺のことはお構いなく」

とアビンは言ったが、アンは、それに気を止めることなく、お茶を注ぎ終えてしまっていた。

それから、アンはアビンにティーカップを差し出して

「アビンさん驚かれたでしょう。突然のことで、それにしても血がドレスに付いていなくて良かったですわ」

と言う。

「まあっ、そうですね」

とアビンは短く答えるにとどまった。

アビンがティーカップを受け取ると

「たぶん、シオン様からお聞きと思いますが、クリーク市の消滅事故の後の後遺症で、時々この様な発作が起きるんです。今回は、どうも軽かったみたいですが、普通は精神疲労が大きい時や30日位の周期で発生するんです。その時は、この錠剤を一粒服用するんです」

とアンは話すがアビンには初耳だった。

そして、アンはそう言いながら先ほどの小瓶をテーブルに置いた。その小瓶をアビンが手に取ろうとしたらアンは、それを制して言った。

「アビンさん、その瓶には触らないでください。此はメタクロンの結晶剤です」。

その言葉に、アビンはビクツとして手を止めて

「メタクロンて、あの、劇薬の？」

と半信半疑で尋ねた。

アンは、黙ってコックリと肯いた。

このメタクロンは、猛烈な劇薬で触れただけで皮膚を透して浸透し神経細胞に作用して死滅させる強アルカリ性の毒物である。それ故に、この劇薬の保存容器はガラスかまたは特殊な樹脂の容器に収められている。だが、結晶体と言えば純度はほぼ百パーセントに近い、そんな物をどの様に扱うんだろうとアビンは思いアンに尋ねた。

「アン？今、メタクロンの結晶体と言ったね。では、そんな物、素人がどの様に扱えるんだい」。

それに対して、アンは否定するように答えた。

「アビンさん。わたしは、結晶体とは申ししておりません。結晶剤と申しました。それですからわたしにも扱えるんです」。

「あっ。結晶剤でしたか。此は失礼。しかし、扱いは可成り慎重にしなければならない

のでは」

とアビンは返した。

「そうですが、約0.1ミリグラムの結晶体を非化学反応物質で覆い表面を糖質ガムをコーティングしてあるそうで、至って安全に保存持ち運びが出来ます」

とアンはすらすらと答えてから、口元にカップを持っていきお茶を少しすすった。

その平静さを見てアビンは気が気ではなかった。なぜなら彼はアンにこう言ったからだ。

「それじゃ、この薬は、スパイや諜報員が自害様に使うMDTと言う薬の百倍も強力な物じゃないか。そんな物を使ったら即死だ」

と。

だが、取り乱しているアビンを見てアンはクスツと笑ってから

「ですが、シヨン様は、生きておられます。アビンさん？わたしも詳しいことは知らないのですが、発作の時はこの薬を使用しても、大丈夫だと主治医のブルックス博士が申し出ておりました。何でも拡張性神経暴走症には此しか無いんだそうです」

と平静に答える。

「拡張性神経暴走症とかという病名聞いたことが無いが、医者が言ったのだから確かだろう。それにしてもかなり危ない処方だな」

とアビンは呟いた。

「そうですね。名付けた本人も、どうしてなのかよく分からないと、申し出ておりましたから」

とアンは突拍子のないことを言った。

アビンはその言葉に言葉を失った。

そして言葉を失いながらも「冗談だろう。まるで試行錯誤の末に偶然の結果を処方してるのか。命が幾つ有っても足りないぞ、そんな医者に掛ったら」とアビンは思っていた。

だが、こんな胡散臭い話は切り上げることにしてアビンは、話の方向をアンに持っていった。

「ところでアン？」。

「何でしょうか」。

「昼間は、たいへんだったけど、もう大丈夫なのかい」

とアビンは既にすっかり元気になったアンに尋ねる。

「はい。ありがとうございます」

とアンは言葉をそれ以上続けなかった。

アビンは、それに何か有るのではと考えたが、それを尋ねることは止めにして

「それは、良かった」

と噛み締めるように言った。

確かに、人の情報や秘密を集めるのは彼の仕事の一つでは有るが、この二人の少女については正直言って気が進まなかった。上からの命令が有るわけでもないが、なんだか妙に気になる。これは、彼の感だが、何か秘密が有りそうだ、それも人に知られたくない。

しかし、この場は、探るのではなく親しくなることが先決だったので、アンの普段のことを尋ねた

「アンは、いつもは何をして過ごすのが好きなのかい？」。

すると、アンは少し上目使いで、彼をチラッと見た。

「いやっ、別に詮索するつもりではなく、学校以外では、どんな風に過ごしているのかなって、今頃のハイスクールの子はと、考えたしだいでして.....」

とアビンは彼女の目つきに、疑いの眼差しを感じて、焦りながら取り繕うように言った。自分でも情けないと思いつつ。

そんなアビンの反応を見てアンは、ニッコリ微笑んで

「わたしは、まだ、ハイスクールには通っていませんが、普段どんな風に過ごしているかの質問には、お答えできます。わたしはファーナビー提督の御屋敷でメイドとして働かせていただいています」

と言った。

「まだ、十五なのに、その歳でメイド？どうして？」

とアビンはつい口を滑らせて、言わない方がいい質問の言葉をポロツと言ってしまっ

「だが、アンは、そんな質問に気を止めることなく訳を話してくれたのでアビンはほっとした。そしてその訳とは、彼女はこう言った。

「わたしは、提督の御屋敷でお世話になっております。そのご厚意に甘えて学校にも行かせてもらって、何もしないわけには、いきませんので、無理は承知でメイドとして雇っていただいたのです。初めは反対されたのですが、今はこれがわたしの出来るせい一杯の事であることを理解していただきました」。

アビンは、彼女の話に感心して

「アンは随分しっかりしているんだね」

と誉めた。

「いえ、そんな事はありません。いつもシヨン様や旦那様や奥様に励ましやら助けていただいていますから」

とアンは、彼の誉め言葉をやんわりと否定する。

アビンは、そんな風に答えるアンの表情を見て

「アンは、それで満足しているみたいだね」

と言った。

「はい、わたしは、シヨン様や旦那様、奥様のお世話をさせていただいて幸せです」

とアンは彼の言葉に同意するように応えた。

そんな風に、アビンとアンが話していると30分経ったのかシヨンが、起きて立ち上がって言った。

「お待たせいたしました。もう大丈夫です。アビンさん」。

それは、寝ながら時間を計っていたように、きっかり30分経っていた。アビンは、また不思議な何かをシヨンに感じたが、それを口にしまいと、わき起こる好奇心を抑えた。

「どうかしました」

とシヨンは、そんなアビンを覗き込むように尋ねた。

アビンは突然シヨンが目の前に近づいたものだから、その顔のアップをまろに見いつて自分の顔が、カーと熱くなるのを感じた。それは、彼にとって初めての経験だったので、どうしてそうなったのか理解できなかった。

そんなアビンにシヨンは、気遣うように

「アビンさん、顔が赤いようですが熱があるのでは？」

と尋ねてきた。

アビンは、それを受け流すように

「ええ、36度5分」

と言いつつ切った。

するとアンとシヨンの二人ともクスクス笑いだして

「面白い人」

とシヨンが言った。

二人の反応を見てアビンは、うまく誤魔化せたなと思った。そして、彼はシヨンに言った。

「では、お約束どうり、シヨンをエスコートしていざパーティーへと行きますか」。

「では、御願ひします。ミスターアビン」

とシヨンは答えた。その言葉には、アビン中尉と言う意味合いを込められていた。

そんな意味を込めて話されていることを理解していないアビンは、ただ、

「ミスターだなんて言われるとこそばゆいんだが」

と言いつつ照れていた。

こんなんじゃ先が思いやられると、ランカスター教授は、いつも思っていた事を聞かされていたシヨンは、何となく微笑ましかったのでアビンにこう言った。

「アビンさん、今晚だけ、わたしのことをお嬢さんと、呼んでも構いません。今晚はその方がアビンさんにとっても都合が良いと思います」。

「えっ、いいのかいシヨン」

とアビンは聞き返した。

それに対してシヨンは軽く肯く。

それではと、気を取り直してアビンは

「では、お嬢様お迎えに上がりました。お手をどうぞ」

と手を差し出した。

「では、よろしく御願ひします」

とジョンはそれを受けた。
アンはそれを見てやれやれと思っていた。
「ところでアンは、どうするんだい」
とアビンは彼女のことが気になり尋ねた。
「ありがとうございます。ご心配なく、いま戸口に迎えが来たみたいですから」
と答えが返ってきた。
「えっ？」
とアビンが驚いているとドアをノックする音がした。
すぐさまアンはセキュリティビューのボタンを押して相手を確認してドアを開けた。
そこには、長身の体格のガッチリした禿げ上がった頭の男性が立っていた。そして、
その男は言った。
「アン、待たせてすまん。今、用を終えたところで、迎えに来た」。
その男からは少々ぶっきらぼうだが、アンに対して優しい眼差しと気遣いが、感じられた。
アンもそれに応えて、微笑みながら言った。
「いいえ、わたしの方は大丈夫ですから、提督」。
アビンは、その言葉にハツとして男の顔を見上げて何処かで見覚えのある顔だかと思案していると
「あっ、ヤン伯父様。伯父様がアンのお相手ですか」
とジョンが話し掛けた。
その言葉にアビンはハツとして思い出した
「伯父様、ジョンの、ファーナビー提督、確か昼過ぎに今回の指令のビデオで見ただけだったなど」と。
そんな風に思い返しているアビンを見て提督は言った。
「此は此は、君がランカスターが言っていた青年か、では今日はジョンをよろしく頼む、少しわがままだが頼むよ。わたしは娘と一緒にパーティーに出るから」。
アビンは、その言葉にビックリして尋ねた。
「あのう、申し訳有りませんが、今し方アンの事を娘と仰られませんでしたか」。
「そうだが、それがどうしたのかね」
と提督はアビンに言葉を返す。
その言葉にアビンは、思い出しながら
「提督、間違っていたら謝りますが、アンは確かフォレストご夫妻の娘でしたと記憶していますが」
と慎重に尋ね始めた。
提督は、アビンの言葉に事も無げに
「そうだが」
と応える。
「彼女を紹介されたときに、確かアン、フォレストと紹介されましたが、それが何故、娘と仰るのですか」
とアビンは、何となく確かめっておきたくて尋ねる。
その質問に、提督は気を悪くすることなく
「そのことかね、良いだろうだが、余り言い広めて欲しくはないんだが、アビンくん約束してくれるかね」
と穏やかに話ながら、アンを自分の傍らに引き寄せた。
アビンは自分が言いたてまえ
「はい、お約束します」
と答えるしかなかった。
「では、話そう。アンはわたしが養女として引き取ったのだよ。だから、正式にはアン、フォレスト、ファーナビーと成るんだが、彼女の希望により普段は、アン、フォレストのままにしている、急な変化で彼女が戸惑うのをわたしは希望していないのでね、今までのままにと言うことにしてある。此で良いかな、アビンくん」
と提督は説明した。
その言葉に「あっ、はい」と答えながらアビンは随分手短に答えてくれたものだと思っていた。
そんなアビンに提督はニコリともせずに
「では、少し遅れたようだから、早速出かけるとしようか。アビンくん、 そ

「から、シヨンに手を出したらただでは、すまんからな、その点を肝に銘じておけ」と威圧的な言葉を押しつけた。

その言葉に、アビンが当惑しているとシヨンが

「伯父様、また人を虐めるようなことを仰られては、わたし男友達が一人も出来ません」

と提督に抗議した。

「わたしは、そう願っているのだが」

とポツンと言ってから

「さあ、アン今日は紹介したい奴がいるから楽しみにしていなさい」

とアンの手を取って部屋の外に出ていった。

そんな様子をアビンは、ただ漠然と見ていた。そんな彼の耳に外でアンが

「提督？少しアビンさんが可哀想です」

との声が届いた。

それから、ようやくアビンは胸を撫で下ろした。なにせあの有名なファーナビー提督と話が出来た事と、どうも目を付けられてしまったような緊張感が無くなったせいも手伝ってのことだった。

その様に安堵していると

「では、アビンさん。わたし達も行きましょうか」

とシヨンがアビンの傍らに来て言った。

パーティー会場

パーティー会場

アビンとシヨンが会場に着くと、遅れたせいもあって既に乾杯は終わっており、室内楽団がクラシック音楽を奏でていた。人々はそれぞれおもいおもいに語りだしていた。どうも、アビンが下見に来たときと配置はさほど換わっていないので、アビン自身はこれなら、人目に付かないように簡単に抜け出せるなど思っていた。

そこへ、なんだか知らないが、二人が会場に、入るとざわめきと人々の視線が急に此方に向けられた。これは、どういう事だと思案しながらふとシヨンが目に入った。その時彼は、何故人々の視線が此方に向いたのか理解できた。そう、原因はシヨンにあった。

その人目を引く容貌に、．．．．．。そんな視線を感じてかシヨンはアビンに言った。

「申し訳ありません。わたしと一緒にいたばかりに皆さんの注目を浴びるようになってしまつて」。

「仕方ないさ」

とアビンは覚悟していたとばかりに言う。

だが、そうは言うもののこのまま皆の注目を浴びたままなのは、どうも居心地が悪い、どうしたものかと考えていると、ファーナビー提督と教授が並んで立っているのを見つけた。

そして、シヨンに正面に顔を向けながら小声で言った。

「あそこに提督とランカスター教授が見えるね」。

「はい」

とシヨンも小声で答えた。

「このままあそこに、真っ直ぐに行こう。この世のお偉いさんを何時までもじろじろと見る奴はいない」

と提案する。

「分かりました。お任せします」

とシヨン。

「では、行きましょう。お嬢様」

とアビンは丁寧な言い方をして、シヨンを人々が注目する中エスコートして歩き始めた。

そして、提督と教授の処に来て、改めてあいさつを二人はした。すると、人々の視線は次第に離れていった。

そんな二人に、教授の側に付いていたミュラーが言った。

「颯爽とした登場だったな、此処の全員の注目の的になってしまったぞ」。

その言葉を和らげるように教授が言葉を足した。

「丁度、皆が次の余興を待っていたときに、タイミング良く会場に入ってくるから、注目を浴びてしまったのだよ」。

アビンは間が悪かったことを認めて

「申し訳ありません。時間どおりにこれなくて」

と教授に謝った。

そんな彼に、教授は

「気にするなアビンくん、話は提督から聞いたよ。突然の事でたいへんだったな」

と言って取り立てて攻めることはしなかった。

「それにしても」

とミュラーが話し出した。

「これ程、このお嬢さんが、．．．．． あっ失礼シヨンが、目立つとは思ひもしなかった。

まるで、おとぎ話から抜け出した妖精のようだったよ。何人かの女性は、ため息を付いていたよ」。

そのお言葉に対してシヨンは、少しも嬉しそうな表情をすること無しに、かえって寂しように

「そうですか」

とぽつりと一言言った。
ミュラーは、その反応を見て
「此は失礼だったかな、申し訳ないション」
と謝罪する。

すると
「あっ、氣遣って下さりありがとうございます。クルトさん」

とションは直ぐにミュラーに感謝した。
これは、まずいぞとアビンが考えていると、ランカスター教授が話し始めた。

「今日はちょっと派手なティンカーベルの様だなション？少し恥ずかしいかもしれんが、少し我慢してくれ、合わせたい人物がいるので、こっちに来てくれ。提督とアンは既にそちらの方に行ってしまうわられた」。

実に情けない話だが、今の教授の言葉でアビンは、提督とアンが、既になくなっていくのに気が付いた。

「分かりました。ランカスター伯父様」

とションは言って教授に従った。

それに従ってアビンとミュラーもそれに付いて行くことにした。その途中、教授はぽつりと言った。

「ビットンブルーの趣味にも困ったものだ」。

その言葉にアビンは同感だった。確かに、ションの服装はかなり目立つものだった、白っぽいドレスに微妙な色合い、まるで森の奥で見つけた木漏れ日の様な、薄いベールで覆ったようなもの、実際に何と表現したらいいのか、それに、妖精の羽のように見える大きなリボン、それらが合わさって少し短いスカートに薄いベールがフレアの様になりリボンがそれにアクセントを付けている。よく此処まで考えたものだと感心させられた。それに加えて、ションの人目を引かずにはおかない、銀髪に近い薄紫のストレートヘアに左右異なる色の瞳のミステリアスさに、どことなくあどけなさが残る表情の美少女だ。だが彼の部屋で一瞬だけ見せた、背筋が凍り付くような雰囲気もションのもう一つの顔ではないかとアビンは思っていた。たぶん二重人格では無いだろう、本人はそのことを自覚しているようだから、。。。。。

アビンが教授の言葉からあれこれ考えている内に提督がまっている処に着た。そこには提督とアン、それから何処かの貴族か妙に装飾が施された服をきた紳士とその従者とおぼしき人物が、いっこうを待っていた。

「待たせて、すまん。フランク」

とランカスター教授が相手の紳士が言った。

その相手はニコニコしながら

「いや、かまわんよデイビット。船に乗ったら最後、港に寄るまでは、降りれんからな」

と答えた。

「そんな軽口をたたくのも相変わらぬだな」

とランカスター教授は言いながら口元は笑っていた。

「なに、お前が国を出てからというもの、こっちはたいへんだったんだぞ、お前が国外に逃亡したとかデマは流れるし、事故で行方不明だとか、暗殺されたとか、色々噂が流れたが、しばらくして何処かの大学で教鞭を執っているとの知らせを受けて始めて皆は安堵した。特にお前さんの息子のリチャードも、あれで結構心配しておったぞ」

と紳士は言った。

「隠居の身の儂の事をそんなに心配することはないのに、リチャードにも知らせる置き手紙をデスクの上に置いてきたのだが、読まなかったらどうか」

とランカスター教授は首を傾げて言った。

「あっ、それな、お前がいなくなった、どさくさで読む暇がなかったそうだ。なんせキッチリ封がされた公文書用の封筒が、使われていたそうじゃないか、誰が見ても私用の手紙とは思えない」

と少し咎め立てをするように紳士は言った

その言葉に、アビンとションそして提督は、また変に誇張面過ぎる悪い癖が出たなど同じように思った。

当のランカスター教授の反応は

「そうだったか。あれって公用の封筒だったのか、普段いつも使っているものだから、大丈夫だと思ったのだが」

「と如何にも当然だと言った。

その言葉に紳士は

「やれやれ、相変わらずのおとぼけぶりだな、デイビット」

とため息を付きながら言ってから、この会見の本題に入って言った。

「処で、この前の手紙での話は本当なんだな」。

「ああ、確かに、だからこうして儂と、ファーナビー提督とでお前さんと会っている
だが」

とランカスター教授は言った。

「そうだな」

とその紳士はファーナビー提督を見るのではなくションの方を見て返事をしているようにアビンには見えた。

その時アビンは気のせいだと思っていたが。

「まっ、こうして三人顔を付き合わせる事が出来たのだから、話はまとまりやすいと思
うのだが」

と提督がおもむろに話した。

「そうだな」

と肯いた紳士は少しアビン達の顔を見回すような素振りをしてから

「それにしてもギャラリーが多すぎやしないか」

と不平を言った。

それに対して

「仕方がないだろう、わたし達だけで会ってしまうと何かと噂が立つからな」

と教授が言葉を返した。

すると紳士は少し考える素振りをしてから

「まあ、良いだろう。今来たもの達を紹介してはもらえまいかな」

ともったいぶった様に言った。

「そうか、分かった」

と教授は応えてからまずションから紹介し始めた。

「では、ダウランド伯爵、この子は、ション・F・ファーナビー、提督の弟さんの子で
15歳に、成ったばかりだ」。

「始めまして、ダウランド伯爵。ション・F・ファーナビーと申します」

と少し腰を落としてあいさつをした。

すると伯爵はションの右手を取って手の甲に口づけして言った

「此は此は、ションお嬢さん。あなたのようなお美しいお嬢さんに、お目にかかれて光
栄です」。

アビンは、その言葉に、どんな女性にも同じ様に言っているのではと思った。

それから、ミュラーが紹介された。

「伯爵、彼は、今回わたしの助手をしてくれる、クルト・ミュラーです」。

「始めまして、ダウランド伯爵。わたしはクルト・ミュラーと申します。以後よろしく
御願います」

とミュラーはあいさつをした。

伯爵は短く

「此方こそよろしく。クルトくん」

と短く答えた。

そして今度はアビンが紹介された。

「伯爵、彼は、わたしの片腕の助手でアビン・ホーンブローワーです」。

「始めまして、ダウランド伯爵。わたしはアビン・ホーンブローワーと申します。以後よ
ろしく御願います」

とミュラーと同じように答えた。

ところが、アビンの手を取って伯爵は言った。

「おおっ、君かあのホーンブローワー提督のご子息というのは、あの堅物の息子にしては
、砕けた男みたいだそうだな君は」。

アビンは、突然の反応に面食らってしまった。

「おおっ、これはすまん。つい奴の息子と言うことで、喜びがこみ上げてしまったもの
でな」

と伯爵は、断りながら彼の手を離す。

アビンは伯爵の反応に面食らいながら答えた。

「あっ、これは伯爵、父をご存知なんですね」。
「知っている。君の父上とはアビシャークで一緒だったんだよ。まあ、君の父上は、第21宇宙艦隊の司令官で、わたしはアビシャークで総督の任に着いていた頃だ。あの頃はアビシャークもまだ、不安定な星域だったが、あれから十七年、今となっては、懐かしい思い出だ。よく奴と酒を酌み交わす※ものだ」

とダウランド伯爵は答えた。
アビンには、そのころは幼かったので思い出せない、だから相手の話に合わせてしかない、それで

「わたしでそのころの思い出を振り返ることが出来れば光栄です伯爵」

と答えた。
その言葉に、ダウランド伯爵は微笑みながら
「そう堅くなることはない。今日は、非公式、お互いこの船に乗り合わせた乗客同士気さくに、話してくれたまえ」

と彼を気遣う様に言ってくれた。
だが、アビンにとっては、やはり雲の上の人物には違いないので、伯爵の言葉どおり気さくには振る舞えない。しかし此処では、相手の意を汲み取って、失礼のない様に出るだけ普通に接することに務めることにした。だいたい、こういう気を遣う事が、苦手な彼は、ランカスター教授との食事もありありがたくはない。その上この伯爵と、これからしばらく一緒にいなければならないことを考えただけでも気が遠くなった。

デュパルクは、今、少し目立つグループを見つめていた。
それは、アビンやシヨンが居るグループだ。その中によく知る人物は、三人居る、ファナービー提督とランカスター教授そしてシヨンである。彼が、シヨンに最初に会ったのはシヨンが六歳の時、それは、銀河帝国のルップスからテラリーズのハインの定期便船のバージニアの船長に成ったばかりの時だった。彼は船内の見回りをしていた時にラウンジデッキで双子の女の子を連れた美しいご婦人に会った。その時の片方の子がシヨンだった。その時彼は、婦人に旅は順調ですかと、尋ねたことを覚えている。それに対して婦人は、順調であることを告げてくれたが、どことなくもの悲しそうな表情だった。そこで、何か要望はないか尋ねると、婦人ではなく、シヨンがブリッジが見たいと言い出した。婦人はそれを、失礼と思ったのか謝罪したが、自分は船長なので、その申し出を歓迎すると言って、三人を案内したことを覚えている。その時、シyonはよく彼に、あれこれと計器を指さして尋ねたので、案内がけっこう時間がかかったが、ブリッジのみんなは楽しんでいて、なにせ定期航路の当直は、けっこう退屈なもので、いつも何か変わったことがないかと期待しているからだった。それに、美しいご婦人の訪問と来れば、彼らにとって願ったりかなったりなのだから。あの時からすればシyonもだいぶ大きくなったし、母親によく似ている、たぶん後数年もすれば、そっくりな容貌になるだろう。それに、ハインに着くまで何度もシyonが自分の部屋に尋ねては、色々な話をしたが、その時この子は、かなり頭の良い子だと実感したが、今では、それだけでなく、あの歳でかなり生活力が有ることも知っている。なにせ13歳の時から一人暮らしをしているとの事を話していたからだ。

それにしても、次の余興がなかなか始まらないのはどうしたものかと、デュパルクが考えていると、懐に忍び込ませておいた船内電話が、振動した。すると彼は、公園が眺められる窓の方に行って、カーテンの陰で応答した。

「わたしだ。何かあったのか」

「はい、此方、マティエリです。今後部格納デッキに続く通路に修理班と共に待機しています。何とか、中に入ることに無事にB12ラインを回復しようと、協議しています。あと、警備から増援をいただいて警備員16名で、警戒に当たってもらっています。その内4名は重装備です。進展がありましたらまた連絡いたします」

と副長から返事があった。

「わかった。すまんがよろしく頼むマティエリくん」

と言って彼は電話を切った。

どうも、今の話しぶりからするとワッツが答えを出す前に、修理班の方が先に動いてしまったらしかった。彼にとっては、この件は順番などはどうでも良かった。まずは、復旧することが最優先だったからだ。

そして、デュパルクは船内電話を懐にしまいながら窓側から離れて、おもむろに、幾つかのグループに

「この度は、我がノルマンディーにようこそ、今晚は、この歓迎パーティーを楽しませてください」

等と言いながら、一つのグループに近づいていった。

「あっ、これは、デュパルク船長。先だっではありがとうございます」

と彼に目を留めて提督と伯爵が話している中、シオンは声を掛けた。その声に促されるように、提督と伯爵は振り返るようにデュパルクを見た。

「やあ、ポール元気か」

と提督は声を掛けて彼を手招きして呼び寄せる。

彼としては、本来の目的はファーナビー提督に旧友としてのあいさつをしておこうと近づいたまでだったのだが、どうもこのグループにしばらくは交わらなければならなくなかった、と感じながら招きに応じた。

「そう言うお前こそ、どうなんだ」。

「ごらんのとうりさ」

と肩をすくめて提督は答える。

それを見てシオンは、少しウンザリした表情で

「伯父様も船長さんも大人なんですからこの前みたいな、健康自慢の張り合いをしないで下さいね。特に大勢の人の集まる場所では」

と言った。

その言葉を聞いてデュパルクは

「おやおや、今日は小さなお目付役が着いているようだな」

とシオンに、そんな事はしないとばかりに言う。

「まあ、そんなところだ」

とファーナビー提督は、シオンの代わりにその言葉を受けた。

それに対して

「御願います。おじ様方」

とシオンは短く言葉を添える。

「ところで、今日は、見慣れないお客様が居るようですね、提督、昔のよしみで何方か教えてはもらえないか」

とデュパルクはファーナビー提督に話題を変えて尋ねる。

その言葉に、そんな事はとうに知っているくせに、もったいぶりやがってと、思いながらも平静に

「そうか、此方は、ダウランド伯爵だ、教授の友人で今回偶然にこのすかした船に乗り合わせたんだ」

と皮肉たっぷりに提督は言いはなつ。

その答えに、ムツとしながらもデュパルクは

「これはこれは、ダウランド伯爵、当ノルマンディーに乗船いただき光栄の至りです。当船では伯爵のご要望にお応えいたしますよう最善を尽くさせていただきます」

と儀礼的ではあるが心からの歓迎の意を表した。

「もう、伯父様！」

とシオンが心配なのか提督の袖を引っ張りながら言う。

「これはこれはご丁寧に、痛み入ります。ですが、わたしの身の回りのことは、このブラウンがしてくれるので、気を遣わなくて構わないですよ、船長。それに、必要なものは、予め全て持ち込んでいますからご心配なく」

と伯爵は、丁寧に受け答えるが、どちらかというところと慇懃無礼とも取れる受け答えだ。

「分かりました。ですが、何かご要望があれば何なりと、お申し付けください」

とデュパルクは受け流しながら、伯爵の執事であるブラウンをチラッと見た。

別に、デュパルクとしては、彼の値踏みをしたつもりはなかったのだが、このブラウンという執事、年齢は60代後半というところか、それにしてもどこことなく隙がない。

どうも元軍人の臭いがすると思った。それに、伯爵がどんなに慇懃無礼に振る舞おうと、此方はそんな手合いには慣れているが、どうも少し様子が違う感じがした。それは気のせいではないかと考えはしたが、今はもめ事は勘弁してもらいたかった。なにせB-12ラインの問題で此方は手一杯だからだ。

そんな彼の素振りに気が付いたのか、伯爵の後ろに控えていたブラウンを指して伯爵が

「船長、彼に何か？」

と尋ねてきた。
「いや、何でもありません」
とデュパルクは答えながら、流石だとヒヤリとしながら、どうも気の抜けない相手らしいと思った。
そこへ提督がデュパルクに言った。
「この船の船長が、此処で長居をして良いのかね？他のお客さんにも、愛嬌を振りまかなくて大丈夫なのか」。
「伯父様！」
とシヨンが提督の袖を引っ張る。
その様子を見てデュパルクは
「可愛いお目付役を怒らすなよ。女たらし」
と提督に言ってから
「では、伯爵、教授これにて失礼します」
と別れを述べてその場を去って他の乗客の元へ行った。

この様子を見ていたアビンは、これから先どうなるかと思っていたが、どうにか事が落ち着いたのでほっとしていた。
すると、彼の傍らでミュラーが
「アビくん君は、心配性なのかね？顔に今心配ですと書いてあるみたいだぞ」
と静かに言った。
「えっ！」とアビンは言葉を返すことが出来なかった。
流石にプロだと思う反面、自分がそれほど未熟なのかとも取れるのが情けなかった。
それにしても、このダウランド伯爵と提督、そして教授の会見が何を意味するのか、アビンは気になっていた。まさかこれが、指令で言っていたアリスブルーに関してのこのヒントになるのではと、あらぬ期待をしていた。
そこへ教授がアビンに声を掛けた。
「アビくん、何をぼさっとしているのかね」。
「あっ、教授。何でもありません」
と彼は答える。
「ほんとかね」
と教授は問い尋ねる。
「いえ、そのう、提督とこの船の船長とは、どの様な関係なんですか」
とアビンは教授に尋ねた。
「なあに、よくある悪友同士という関係なんだがね」
そう答える教授の言葉に割って入るようにシヨンが口を挟んできた。
「あのう、アビンさん、わたしが詳しく話します。宜しいですよねランカスター伯父様」。
「ああ、かまわんよシヨンの好きにきなさい」
と教授は承諾する。
「ありがとうございます。伯父様」
とシヨンは感謝を述べてからアビンの方を向いて話し始めた。
「アビンさんが気になったのは、ファーナビー伯父様とデュパルク船長との関係ですよね」
とシヨンはアビンに改めて尋ねた。
「ああ、そうなんだ」
アビンは短く答えた。
「分かりました。アビンさん伯父様と船長は、ハイスクールの時代からの友人同士なんです。ですが、いつの時から分かりませんが、お互いの意見の対立からよく喧嘩するようになりました。とは言っても意外に互いの意見は、認め合っているんですが、どうも顔を合わすと素直になれないらしく、先ほどのような状態になってしまふんです。特に、士官学校時代には、互いにライバル意識を燃やして火花を散らしていた間柄だとか言う話です。その、士官学校時代に特に険悪になったのが、三年の時のグループ対抗のボートレースの時からだそうです。それまでは、何とか収拾の方向に傾いていたそうですから」。
「そのボートレースで何があったんだい」

とアビンはシヨンに尋ねる。

「なんでも、伯父様のグループと船長さんのグループが互いに優勝候補だったそうです、しかし、レースで互いにトップを争っていたんですが、ゴール手前で、突風のため互いのボートが接触、船長さんの方のボートが転覆沈没したんです。当然、伯父様のボートは、停止して救助を行ったのですが、それ以来、互いの操船技術が悪いとか、負けそうになったのでわざとぶつけたとかで、言い合いになったそうです。それからです、この二人が、互いに競うときには、何かしらトラブルが付き物になってしまって、それ以来、一緒に物事をするのを互いに嫌うようになってしまったんです」。

「それにしても、なんだか大人げないな」

とアビンは率直な感想を述べた。

「そうなんです。単に偶然が重なりすぎただけなのにと、わたしも思うんですが」

とシヨン。

「まあ、仕方がないさ、偶然にしてもあまりに重なると疑いを捨てきれなくなるからな」

とランカスター教授はシヨンの言葉に付け足すように言った。

そして、アビンに向かって教授は

「この半人前が偉そうに、それともそれだけ人を見る目を養えてきたのかな」

と皮肉たっぷりに言う。

「教授！」

とアビンは抗議のつもりで短く言い返す。

その反応をニコニコしながらランカスターは受けて

「まだ若いんだから、他人の失敗から教訓を学ぶんだぞ」

と教え子をたしなめた。

そんなやり取りを提督は複雑な気持ちで見ているのだが、抗議するつもりはないらしく伯爵に何か話し掛けていた。だが、アビンには、その話が聞き取れなかった。

でも、その会話にアンが加わっていたので、さして重要な話ではないと考えた。

そこへ、出し抜けにミュラーが

「提督と、あの船長にそんな関係があったのは知らなかったな」

と言った。

「そうだったんですか」

とシヨンは、いかにもミュラーが知っているもおかしく無いような口振りで言った。

アビンは、そんなシヨンの話し方が気に止まったが、この場では何となく聞きずらかったので、尋ねるのを辞めた。

アビンとミュラーそしてシヨンが、話している横からアンともう一人の人物が割り込んできた。ダウランド伯爵の執事ブラウンである。

「あのう、お話中申し訳有りません。シヨン様この方が、お伝えしたいことがお有りなんだそうです」

とアンは理由を述べて執事のブラウンをシヨンの前に連れてきた。

そのブラウンという執事は背丈は普通でほっそりした体格だ。だが、初老の執事にしては、動きは無駄が無く凛とした雰囲気を持った人物、そんな彼を見てアビンは、ただ者では無いなど感じていた。そしてミュラーもそう感じているらしく先ほどまで、こぼしていた笑みが既に無かった。

ところが、そんな人物に対してシヨンは、いたって普通にしていた。ブラウンの雰囲気を感じ取れないのか、気にならないのかアビンには、分からないが次の二人の交わす会話で、そのことを理解した。

「わたしにですか。どんなことでしょうかブラウンさん」

とシヨンが尋ねる。

その言葉に、ブラウンは一瞬目を閉じてから

「お母様に、よく似てらっしゃる。こんなに大きくなられて、奥様も生きていらっしゃったらさぞやお喜びになられた事でしょう。あつ、申し訳有りません。つい昔のことを思い出しまして」

と言ったところで、彼の声がうわずって、胸のハンカチで目頭を押さえる。

この言葉には、アビンやアンはビックリしたが、シヨンはいたって平静に

「わたしやお母様のことを覚えておられるのですか」

と尋ねる。

ブラウンはハンカチを胸ポケットに戻して

「はい。シヨン様が、二つになる時まで御屋敷でお世話させていただいていました。その時、諸事情でダウランド伯爵のもとで執事をさせていただく事になりました」

とブラウンは話した。

その言葉には、多くの含みが有るなどアビンは、感じた。だが、それは詮索すべきでは無いことは彼自身も心得ているつもりだったが、やはり気になることは気になった。「でも、ブラウンさん。ダウランド伯爵のもとへ行かれてから、何度かお母様を訪ねて来られたことをわたしは覚えてますよ。それと、六歳の時、テラリーズへ旅立つときにわざわざ見送りに来てくださったことも」

とシヨンは優しく微笑みながら語りかけた。

それを見ていたアビンは、一瞬だがシヨンが大きく見えた。そしてその微笑みは、何処かで見た事がある様な気がしたが思い出せなかった。

「覚えていらしたんですか。ありがとうございます」

とブラウンは、またハンカチで目頭を押さえて感激していた。

やれやれ感動の対面かとアビンは思っ、ふと気になった。シヨンは提督の弟の子供なのは確かなようなのだが、今の成り行きは、どうも、シヨンは帝国生まれだということに、そして、かなりの上流階級、なぜなら執事が人から人に移るとき、同じ階級か下の階級にしか移らない。上に上がる時には、いったん暇をもらうからだと思いを巡らした。

「それから、ブラウンさん。わたしもわたしのお母様も平民なんですからその様を付けるのは辞めていただきますか」

とシヨンがブラウンに話した言葉で、アビンはよりいっそう理解に苦しむのだった。

だが、ブラウンは、それを曲げたくはない理由を話した。

「ですが、シヨン様、あなた様に失礼があるとわたしは、アシエル様に大目玉をいただいておりますから」。

アビンは聞き慣れない人物の名を耳にした。その名は、彼の記憶にはなかった。

しかし、シヨンの反応は違っていた。

「アシエルが？あの方がそんな事で怒ったりはされないでしょう」。

「いいえ、シヨン様、あなた様だけは別格なのです。ですから、わたしがダウランド伯爵の下にいても、あの方は、わたしをシヨン様や奥様の様子をうかがうように、使わされたのです。そして今回は、久しぶりの船旅とのことで、アシエル様からこの手紙をお渡しするようと、直々にことづかりました」

と言って、ブラウンは上着の内ポケットから手紙を出してシヨンに手渡した。

「えっ、アシエルがわたしに」

と言って、少し戸惑うようにシヨンは手紙を受け取る。

その封を見てアビンは、随分立派な封筒だ、何処の人物だと思いながらミュラーを見た。その、ミュラーは何事もないように装っていたものの目は、そうではない事を示して、驚きを表していたが、そのことについて尋ねても何故だかは、話してくれそうもない雰囲気だった。

「シヨン様、お返事はなさらなくても宜しいとのことでした。それでは、わたしはこれにて失礼させていただきます。お目にかかれて光栄でした」

とブラウンは深々とお辞儀をしてその場を去っていった。

そんなブラウンをアビンは、何か言いたそうに見送っていた。

シヨンはシヨンで、手紙の宛名を見て、少し微笑んでから短いスカートに何故か有るポケットにしまい込み。それから、提督達の方に顔を向けて

「あのう、伯父様？」

と声を掛ける。

それに対して、教授と提督が振り返ってから、提督の方が

「なんだね、シヨン」

と応えた。

「あのう、わたしこれで失礼しても宜しいでしょうか」

とシヨン。

「うむ、かまわんがね。失礼する前に伯爵へもう一度あいさつをして行きなさい」

と提督はシヨンに促す。

「分かりました。伯父様」

と返事をしてからダウランド伯爵に近づいて言った。

「伯爵様、申し訳有りませんが、わたしは、これにて失礼いたします。お目にかかれて

「たいへん光栄でした」。

すると伯爵も

「そうですか。残念だ。わたしもお嬢さんに会えて嬉しかったですよ。それに、この船に乗っている限りまた会えますから、その時には、色々と話をしたいものですね」と別れのあいさつをした。

「そうですね。その時にまた。では、伯爵、伯父様達これにて失礼します」とシオンは帰り始める。

それを見て教授がアビンに言った。

「アビンくん。今日はシオンをエスコートしてくれと言わなかったか。何ぼさつとしとるんだ。部屋まで送り届けなくてどうするんだ」。

アビンはその言葉にハツとして

「そうでした教授。ではわたしもこれにて失礼いたします。では、またダウランド伯爵、教授そして提督にアン、ミュラーさん」とあいさつをしてシオンの後を追った。

それを「おきおつけてアビンさん」とアンが見送ったが、提督は「シオンに手を出すなよ」ときつい言葉だけだった。

アビンはそんな言葉を背に受けながらシオンの後を追った。すると突然立ち止まって、目の前の女性に話し掛けた為に、彼は直ぐシオンに追いついた。

「あっ、これはミス、ビットンブルー？今おいでになられたのですか。先ほどは、たいへん失礼いたしました」とシオンが彼女に話す。

「えっ、今来たところよ。それに、さっきのことは気にしなくても良いのよ。そんなにわたしも気にしていないのだから」とビットンブルーは素っ気なく応える。

シオンはその言葉を聞いてから、何処かホツとするような面もちで

「ありがとうございます」と丁寧な答え方をする。

その言葉が終わるか終わらない内に

「クルト、彼も提督と一緒にだった」と彼女はシオンに尋ねる。その様子は、明らかに何かの事でいらついている証拠だった。

シオンはその様なビットンブルーの反応に怯えるように

「は、はいご一緒でした」と答える。

アビンも彼女の反応を見て少し驚いていた。シオンの反応はごく自然なものなのだが、ビットンブルーの反応は、まだ根に持っているように取れる反応だったからだ。

ところが、次の彼女の言葉でその原因が他のことであることが判った。

「まったく、あの唐変木が、わたしを迎に来るとの約束をすっぽかして、今度こそぎゃふんと言わせてやらなきゃ気が済まないわ」とビットンブルーは口走りながら人混みの中に消えていった。

アビンは、自分には関係ない事ながら、何故かホツとしている自分に気が付いてから、ふと顔を上げてみると、シオンが目に入った。

その顔には、いまだに不安の様子が窺えたので、アビンはそれとなく尋ねる「どうしたの」。

「あの様子ですと、ミュラーさん、ミス、ビットンブルーに怒鳴られそうですね」とシオンは、答える。

「そうなのか」とアビンはぽつりと言った。

「ええ、あの方は、約束を破るとかなり五月蠅い方ですから、それもかなりしつこく言いますから、それで、よくシルバークロウ（銀鴉）と陰口をたたかれるんです。アビンさんは、聞いてませんか」とシオンが説明する。

アビンには始めて聞く事柄なので「ああっ」としか答えられなかった。

するとシオンは何事もなかったかのように

「では、行きましょう。アビンさん」と言って歩き始めた。

アビンは、狐につままれたような面もちで、シヨンの後を言われるままに従った。その時、チラッとトレッカーとマクレガーが並んで立っているのが目に入った。その様子は、何か込み入った話をしているようで、二人とも難しい顔をしていたが、どちらかと言うとトレッカーは元々難しそうな顔をしているのだがと、思うのであった。しかし、そんな風に考えていると、シヨンを見失ってしまうので、頭によぎる思いを振り捨ててシヨンを追っかけることにした。そして、二人はパーティー会場を後にした。

トレッカーはアビンとシヨンが、パーティー会場を出ていくのを確認していた。すると「何を見ているの」と彼にマクレガーが尋ねた。それに対して「いや、昼頃公園で会った二人が、今、会場から出ていくのを見かけたものでね」と彼は返す。その言葉を疑うようにマクレガーは「本当に？」とちやかすように言う。「そうだ」と彼は短く答える。それを聞いて「じゃ今の話、聞いてなかったのね」とトレッカーに確かめるように言った。「わるい」とトレッカーは、自分の非を認めて答える。「分かったわ。もう一度言うわね。あなたこの船にランカスター教授の護衛として乗り込んでるんでしょ。否定をしてもだめよ。調べはちゃんと着いてるんですからね。そこで、御願いがああるんだけど、独占インタビュー取れないかな、30分でいいんだけど。もちろんあなたの仕事の邪魔は、しないつもりだから」と彼女は言葉をまくし立てた。そのことかとトレッカーは、思いながら「それだけでも十分、わたしの邪魔をしているんだが」と応えた。「良いじゃない。そうでないと、この船で暗殺が計画されていると言いつらすわよ」と彼女は脅しにかかってきた。それに対して「そんな根も葉もないことを」と言って彼は取り合わないように務める。それでも、彼女は「そうかしら、まずあなたがいること、そして、対テロの専門家であるミュラー少佐があなたと同行していることを考えれば、当然、行き着く結論は一つ、決まっているわよね。普通の人でも警備部隊と対テロの専門家が、乗船している聞いたらどんな反応をするでしょうね」と口元に笑みを湛えながら、脅すようにトレッカーに言った。その言葉を聞いて、彼は深くため息を付いて「仕方がない、聞いてみるよ。確約はできんがね」とウンザリだとばかりに応えた。すると、「いいえ、絶対に御願いな。そうしないと」と彼女は彼に圧力を掛けてきた。「分かった、何とか御願いしてみる」とトレッカーは折れた。「ありがとうございます。じゃマックス。わたし他に、インタビューする人がいるのでこれにて、またね」と言ったかと思うと、さっさと何処かに行ってしまった。トレッカーはそんなマクレガーの姿を追いながら

「まったく、自分の欲望に忠実なわがままな奴だ」

と思うのであった。

そんな彼の見ている先に、この船の船長デュパルクが、目に入った。そこには、船長だけではなく若い男女も一緒に、何やら込み入った話をしている様子が窺えた。だが、彼にとっては余り興味のない事柄だった。そう、今の彼にとっては、ランカスター教授、いや公爵の身辺に不審な人物が近づかない様に、警護するのが第一だった。

そこシャンパングラスを盆に載せたウエイターが、近づいてきて

「お客様、シャンパンは如何ですか」

と尋ねてきた。

トレッカーは、

「ありがとうございます。一つただこう」

と言って、手前にあるグラスの一つを取った。

するとウエイターは、彼の側をすりと、とおり過ぎるなり

「不審な人物は、いませんが、バグが」

と小声で言いながら彼の左手に、メモを渡して歩き去っていった。

トレッカーは、そのメモを直ぐにスーツのポケットにしまい込んでから、軽く唇をしめらす程度にシャンパンに口を付ける。

そして、おもむろに、周りを見ながら、会場の外へと歩いていった。

ところで、デュパルクといえば、若い男女に話し掛けていた。

「申し訳ありませんが、ミス、ミッチェル。せっかくお楽しみのところ申し訳ないのですが、私どもに協力しては、頂けないでしょうか」

と彼は、精一杯恐縮しているように相手が取ってくれるよう表情を努力しながら頼み込む。

「どうゆう事なんですか」

と不安を隠せなく尋ねる、彼女の言葉を助けるようにブラックも

「どうゆう事なんですか。船長」

と少し強く言い放つ。

「ちょっと動物学者としての動物の扱い方で、あなたに助言を頂ければと思ひまして」

とデュパルクは、慎重に確信をまだ避けながら願い出る。

「わたしの事を、名簿で検索されてから来られたようですね。船長？」

とミッチェルは少し含みがあるように応えた。

その言葉にブラックは

「へえ～、君、学者なんだ」

と少し驚きの眼差しで言う。

「学者といっても、普段は動物の調教師をして生計を立ててるんですけどね」

と彼女は肩書きなどどうでも良いような口振りで言い返した。

しかし、デュパルクは、調教師だろうが学者だろうがどうでも良かった。動物に詳しい人物なら誰でも良かったので

「ミス、ミッチェル。たいへん申し訳ないのだが、あちらの方で詳しい話を聞いてもらえませんか」

と彼女を促した。

彼女は、少し考えてから

「分かりました。伺いましょう」

とデュパルクに申し出た。

そこで彼は、「では、此方へと」会場の外へと促した。

すると、ブラックも二人に着いていこうとしたので、彼は

「申し訳ないが、内密のことなので君には、遠慮してもらいたい」

と言い放つ。

「内密ですか？分かりました」

とブラックは、あっさり折れた。

そして、船長とミッチェルが他の乗員と一緒に別室への扉に消えていくのを見届けてからブラック自身も会場を後にして下の階層に続く階段を下りていった。

ミッチェルとデュパルク達は、パーティー会場に接するように設けられたサブコン

コントロールルームに入った。そこには、既に三人ほどの乗員がコントロールパネルを操作してしきりに、何処かと交信をしていた。

「船長さん？此処で、わたしに何を」

とミッチェルは尋ねる。

「ご心配なくミス、ミッチェル。これから、お話しする事から、動物学者としてのあなたの意見をお聞きしたいのです」

とデュパルクは、彼女を安心させるように話す。

そして、彼は、パネルを操作している者に

「現場の映像は出るか」

と尋ねた。

「格納デッキの外側だけなら映像を出せます。内部はまだ．．．」

と口を濁すように乗員は答えた。

「そうか、今の状況は、どんな具合だ」

と彼は、経過を聞く。

「はい。破損したB12ラインの迂回作業が、始まったところです」

と答えが返ってくる。

「と、いうことは、破損個所の迂回の方法が決まったということだな」

と確認するようにデュパルクは乗員に尋ねた。

「はい。そうです。短時間で作業が終える方法として通路側にB12ラインの迂回路据え付ける方法を探る事になりました。既に格納デッキの外側に修理用のラインを走り終えたところです。後は出入り口で繋ぎ返るだけです」

と乗員は状況を伝える。

「解った、続けてくれ」

と答えてから、ミッチェルの方を向き、もう少ししたら修理が終わるようだから今の内に用件を彼女に話して置いた方が良さそうだと考えてから、デュパルクは口を開いた

。「では、ミス、ミッチェル。此処にお呼びした用件を話しておきましょう」。

「御願いますわ。そうでもしていただかないと、不安で仕方ありませんわ」

と彼女は今の正直な気持ちを述べる。

「今現在、後部格納デッキにて原因不明の事故の為にB12ラインが寸断されています。中に入った警備員の報告によると、何か鋭い爪のような物でB12ラインのパイプが切断されていました。そしてその周りには動物の遺骸が散乱していたそうです。そこで、可能性のある程度踏まえ、ミス、ミッチェルあなたの意見を伺いたくてお越し頂いたというわけです」

と彼は手短かに用件を述べた。

「はい。それでわたしに何を．．．」。

「まず始めにお聞きしたいのは、厚さ2ミリ直径120ミリも有る鋼鉄のパイプを引き裂く事が出来る動物が存在するかどうかということですが」

と彼は、尋ね始める。

それに対して彼女は

「そうですね。その様な事が出来るのは、かなり大型の動物と言うことになりますね。バイオニック技術で生み出された恐竜とか何かなら可能かも知れませんね。他にはわたし達がまだよく知らない動物、例えば、クリファスのサーベントタイガーとかベルーガンのミュラなど、どの程度の能力が有るかよく知られていませんが、可能性は否定できません」

と答えが返ってきた。

そこで

「そうですか。その中で、どう猛な肉食動物は？」

と彼は質問を詰める。

「恐竜の中の肉食の物と、サーベントタイガーでしょうか」

との答え。

「それらは、むやみやたらに襲いますか。つまり人をですが」。

「お腹がすいていたり、気が立っていたりしなければ、向こうからは襲ってきません」

。「そうですか、解りました」

とデュパルクは答えてから、警備員が入ったときは静かだったようだし何も襲って来

はしなかったのだから、彼らの思い過ぎしか、それとも、相手はずでに満足していたのかのどちらかだと、思った。

それから、彼は、念のためにとミッチェルに言った。

「申し訳ないですが、再び、警備員達が中に入って調査するまで、しばらく此処で待ったもらうわけには、行きませんか」。

「ええ、かまいませんが、どの位待つ必要がありますか」

と彼女は尋ねる。

その言葉を聞いてデュパルクはオペレーターの方に振り返って尋ねると、あと五分程で接続が回復するので、そうしたら直ぐにドアを開けて中の調査を開始するとの返事が返ってきた。その言葉を聞いて、彼は、

「ということですが、待っていただけますか、ミス．ミッチェル」

と彼女に言う。

「解りました。待ちましょう」

と少しため息混じりに了承する。

デュパルクは彼女の言葉に満足したのか、ミッチェルにいすに腰掛けてはと促した。それで彼女は、直ぐ右に据えられていた椅子に、青いドレスのスカートを気にしながら座った。

内部

内部

格納デッキの横の通路は幅が六メートル有るが、警備員が16名に彼が組織した修理班の12名を合わせた人数と修理機材が集まると何と狭いことだなど、マティエリは思っていた。

そこへこの通路の船首側の端にいる修理班の者から彼を呼ぶ声があった。「マティエリ副長！B12ラインのバイパス接続を終了しました。これで、迂回接続により格納デッキ内の電源供給は完全です」。

「解った。ありがとう。後は機材を片付けて持ち場に戻ってくれ。後で当直後、わたしの奢りでいっぱいやろう」

と彼は返した。

すると

「それはいいや、じゃあ、後で、ごちそうになります」

と返事が返ってきた。

「それじゃ、後でB7のバーで落ち合おう」

と彼は集まる場所を指定した。

彼としては、これで一段落ついた、後は警備に任せて置けばいい。そこで、彼は携帯用の船内電話を取り出して船長に連絡した。

「此方、副長のマティエリだ、船長は、其方にいるか」。

「はい。此方第三サブコントロール。此方に船長がいらっしゃいます」

と返事が返ってきた。

それで、彼は用件を伝えた

「船長に、B12ラインの応急修理が終わったと伝えてくれ。以上だ」。

「了解」。

そこで、彼は、これからバーに予約を入れておかなければと思いながら、12名の酒代をどうやって捻出しようか、考え始めていた。せこいと言われようが、自腹はちよつときついなと思っていたからだ、船長に言って何とかしてもらうのも、どうも気が引けて言い出せないしと、そこへ、誰かが声を掛けてきた。

「副長さん」。

彼は、その声のする方へ振り向くと、警備員の隊長が立っていた。名前は何と言ったかなと考えている内に、相手がもう一度声を掛けてきた。

「副長さん。ちょっと宜しいですか」。

彼は、そういえばと相手の名前を思い出して言った。

「ええと、ヘスさんでしたっけ。何でしょうか」。

彼の返事に、相手は少し首を傾げながら

「はい。副長さん。少し事務的なことなんですけど、これから、格納デッキのドアを開て、中に入りますが、その時の立ち会いをあなたにやっていただきたいのです。これも、規定事項なので、申し訳ありませんが、よろしく御願います」

と言ってきた。

その言葉に彼は驚いて、そんな話は聞いていないとばかりに

「わたしが立ち会う必要があるのですか」

と言う。

相手は、そんな彼の取り乱したような言い分を平静に受け取って

「これは規定ですから、警備上必要な事のために、船及び貨物に損害を与えたときの為の証人として立ち会って頂かなくてはなりません」

と言葉を返してきた。

その言葉に、マティエリは、やれやれとんだことに巻き込まれたなど思いながら

「解りました。それならいかし方ありませんね。お付き合いしますよ」

と言ってから

「ただね、わたしは丸腰なんでちゃんとガードしてくださいね」

と言葉を付け足した。

「相手は、二ヤリとして
「それなら大丈夫。うちは精鋭揃いですから」

とヘスは言い放った。
しかし、そんな彼の言葉をマティエリは、信用してはいなかった。彼自身、元来の生真面目さから、色々とトラブルを押し付けられてきたこの方、この様な手合いの言葉は余り当てにはならないことを身に染みて知っているし、運だけでは生き残れそうもない事に何度もあって来た。よく今まで、生きていたものだ自分自身感心している。それもこれも、まだ、外宇宙の定期便の三等航宙士だった頃、ある士官が、彼に生真面目に規定を守るのも良いが、宇宙に出たら何があるか解らない。規則や取り決めが通らないこともある、そんな時は、自分の感だけが頼りだ。自分を守るのは自分しかない、そんな事が必ず起きる。そこで生き抜くには、何時もその感を育てておく必要があるんだ。坊やと話してくれたことがあった。そのうちに、何度か危ない目にあつた事から、その士官の言葉を自分にあてはめるようになった。ただ、生来の生真面目で口うるさい性格は、本人としても改めたいのだが、直りそうもないことを認めざるおえなかつた。それで、出来るだけ部下に小言を言うまいと決め込んでいるが、実際にはどうもうまくいっていないのが事実だった。

だから、彼はその言葉を

「じゃあ、よろしく」

と言って受け流した。
「ふっ、そう来なくて面白くないな」

とヘスは不敵な笑みをして呟く。

それから、後ろを振り向きざまに怒鳴りながら命令を発した。

「シュミット、ストコフスキー二人は、ドアの前でブラスターを構えて援護しろ！アヒムは俺が合図したらドアを開けろ！後の者は、ドアが開いたら俺に続いて全員中に突入する！いいな！」

すると全員が

「イエッサー」

と返事を返した。

そんな様子を見てマティエリは、まるで軍隊だなと思ったが、確か警察の特殊部隊も軍隊と変わらないと聞いたことがあるので、大差ないかと思ったのだった。

そこへ、間髪入れずにヘスの怒号がとんできた。

「ギャラリーは、後ろに下がってろ」。

その怒鳴り声に、彼は少しムツとしながら、はいはいそうしますとばかりに、ドアの反対側まで身を引いた。

「全員、突撃準備！」

とヘスが怒鳴ると、全員ブラスターを構えて安全装置を外す。

「ドアが開いたら全員突入する」。

「アヒム！開けろ！」

との声と共にシュパッーと音を立ててドアが、開く。

ヘスを先頭に警備隊が中になだれ込む。

「各自状況！」

とまたヘスの声。

「異常なし」

と各人が答える声が響く。

するとヘスは、次の命令を下し始めた。

「各二名ずつになって不審な者はないか搜索しろ！そうだ！お前とお前は右に行け！そして、お前とお前は左へ．．．．． プラウスお前は俺と一緒にいろ！さあ、こっちだ！」。

「さて、どうなるやら」

とマティエリはポツンと独り言を呟いた。

それから、ふと気になった。この警備隊の隊長はまさか船長に連絡せずに事を済まそうと思っているのではないかと。そこで彼は、携帯の船内無線を取り出して呼び出した。

。「此方、マティエリ、サブブリッジ応答願います」。

「はい、此方サブブリッジ」

と応答があった。

「後部格納デッキの状況を知らせる。今、警備隊が中に突入した」。
「了解、船長に知らせる」。

サブブリッジでは、デュパルクが副長からの報告を聞いて苛立っていた。
「警備隊とは連絡が取れないのか」。
「申し訳ありません。連絡が付きません」。
「どうゆう事なんだ」
とデュパルクはオペレーターをせき立てる。
「どうも、向こうで無線もスイッチを切っているらしく応答がありません」
とオペレーターは、こわごわ言葉を返す。
「何を考えているんだ。警備隊は. . . .」。
「さあ、何か向こうの方で考えがあるのでは」。
「どういう考えなんだ、キーンくん」
とデュパルクはオペレーターに尋ねる。
その質問にキーンは、言葉がなかったので苦笑いをしてごまかす。
その表情を見てデュパルクは
「答えがなかったら無駄口をたたくな」
と言いつつ放った。
「それにしても、これでは、せつかくミス。ミッチェルに来てもらったのが無駄になっ
てしまう」
と彼は、ぼやいた。
「まさか、みんな遣られてしまったんじゃ. . . .」
とキーンが口ごもりながら言う。
「キーンくん。憶測で物事判断しないように」
とデュパルク。
「申し訳ありません。それで. . . .」。
「何だね」。
「副長と連絡を取ってみてはどうでしょう。船長」。
彼は、少し考えてから
「良いだろう。やってみてくれ」
と提案を了承する。
すると直ぐにキーンは、副長と連絡を取り始めた。
「副長、聞こえますか」。
「ああ聞こえる」
と返事が返ってくる。
キーンが、返事と共にデュパルクを振り返ってみると、デュパルクは黙って肯く。
「副長、其方から、警備隊の責任者と連絡が付きますか」。
「ちょっと待ってくれ」。
少し間をおいてから
「だめだ、こっちはドア口で足止めを食っている。中に入ることも、責任者に連絡を付
けることの出来ない」
と返事が返ってきた。
「どうなっているんでしょう」
とキーンは、デュパルクに答えを期待しない質問をする。
デュパルクとしても答えようがないので、ただ、黙っていた。
すると
「ちょっと待ってください」
とのマティエリとの通信が入った。
しばらくして答えがあった。
「船長に伝えてくれ。責任者からの伝言だ。安全が確認できるまで、連絡は出来ない。
確認が出来しだい中に入って調査を開始する。との事です」。
「安全が確認出来しだいかな。随分勝手だな」
とデュパルクは、ぼやいた。
そして、彼は、ミッチェルに振り向いて
「どうも、もうしばらくお待ちいただくことになりそうです」

「と言う。
「仕方ありませんね」
と彼女は少し肩をすくめて答えた。
「申し訳ない」。
「あら、船長さんが悪いわけでは無いんでしょう」。
「そうですが」
と言葉に詰まるデュパルク。
「なら、その様に謝られる必要はないと思います」。
まったく彼女の言う通りだと思いつつも、やはり迷惑を掛けてしまっているのだから、此処は謝るのが筋だと判断したまじなのだが、彼女は此方の接し方が気に入らないらしい。なにせせっかくのパーティーが、殆どふいになるのだから、仕方がない。後で埋め合わせをしなければと、彼は考えた。

マティエリといえば、この待ちぼうけ状態を何とか脱したいと考え始めていた。そんな矢先に、中が、急に騒がしくなった。彼は、中の様子をうかがおうと、ドアから中に入ろうとすると、警備員に制止された。この事は、彼のプライドにそれなりの傷を付けた。なぜならこの船でいえば、船長の次に責任ある立場なのだから、. しかし、何が中で起きたのか気になってしょうがなかった。なにせ、手持ち蓋さも手伝って、好奇心が無くてもこの状況では、何か首を突っ込みたくなるのは、しょうがないと勝手な理由を自分で付け始めていた。そこへ、突然中が騒がしくなった。すると、ドア口に立っていた警備員も何かに備えるかのようにブラスターライフルをサッと構えた。それと同時に、中から「そっちへ行ったぞ！アヒム気お付けろ！奴はでかいぞ！」とヘスの怒鳴り声が響いてきた。「プラウス！遅いぞ早く行け！」との声と共に幾つかのブラスターの発射音が中で木霊し、物が倒れる音や人が駆け回る音がする。時々何か炸裂する音も混じっている。マティエリとしては、中がどうなっているか解らず気が気では無かった。そこへ、ドア口の警備員が中に入ったのにつられて、彼は、格納デッキ内に飛び込んだ。その時、彼は大きな虎のような動物が、コンテナからコンテナに飛び移るのを見た。そして、飛び移るとその動物は、身構えるようにして此方を見たと思うと、突然フツと見えなくなった、次の瞬間「ふせろ！」との怒鳴り声が響く、彼は衝撃を受けて冷たい床に叩き付けられ意識が薄らいでいく、そんな中誰かが「うまくいったか、.」と言っている声が耳元で響いているのを聞き取ろうとしながら気を失った。

夜の公園

ドアが開くと、中は薄暗く、少しひんやりとしていた。アビンは、これも自然公園という事で、実際、夜ともなれば気温が下がるのを模倣して気温が少し下げられているようだった。ただ、足下は、薄明かりで照らされるようになっていて、それほど暗くは無い。それに外灯も点灯しているので、意外と明るいとも言えた。上を見上げれば、満天の星が映し出されている。この星の映像は、この船のトップブリッジから見上げた情景を映し出しているという事で、時間と共に刻一刻と変化するので、しばらくボーと見ているだけでも飽きないらしい。「アビンさん？わたしとの付き合いでせっかくのパーティーが楽しめなくて申し訳ありません」
とジョンが、振り向きざまに言う。

彼は、少しぎこちない笑いをして
「気にしなくて良いよ。俺は、お偉いさんと一緒にパーティーは御免被りたいんでね」
と少し茶化すように、答えるが、これは彼の本心であることは間違いなかった。
「そうなんですか」
とシオンは驚いたように言う。
彼としては、こんなに心地よく反応してくれるシオンが、可愛かったがそれは口にし
まいと、誘いの言葉と言う。
「シオン、池の畔にあるあのベンチに座って、少し休もうか」。
「そうですね。少し休みましょうか」。
シオンはそう言うと、ベンチの在る所までトントンと駆けて行って、クルツと髪をな
びかせながら此方側に振り向いて微笑みながらアビンに話しかけてきた。
「アビンさんはパーティーは、好きですか」。
「ああっ、堅苦しく無ければ好きだ」。
「そうですか、なら、面白い人達を後で紹介します。きっとアビンさんなら気に入って
くれる人達だと思います」。
「俺の？」
とアビンは、シオンの言葉に疑うように言う。
「はい、そうです。きっと気に入っていただける方たちですから．．．．．そ
れに．．．」。
「それに？」。
「きっと、今回のアビンさんの任務に助けになっていただける方達だと、わたしは思う
のです」
とシオンが、言った言葉でともすると忘れてしまいそうな今回の任務を思い出した。
「ありがとう。気を遣ってくれて」
と答えながら、アビンは考えていた。なにせ雲を掴むような話なのだからだ。一つは
、これが今回の本当の任務だが、アリスブルーを探し出し、捕獲または抹殺せよという
物だ。本来どういう物かも解らない代物をまずどうやって見つけるかだ。鍵は、教授と
提督が握っているらしい。だが、どちらの人物も彼の苦手とするタイプだ。二つ目は、
謎の暗殺者ベリアエンジェルこれもアリスブルーと同様雲を掴むような物だ、しかし、
此方はまだましな方だ、過去の犯罪記録は残っている。そしてこの船に乗船しているこ
とが確認されている。たぶん、依頼者が口を割ってしまったか、依頼者の情報が漏れた
のかのどちらかだろうが、それにしてもこれはこれとしてかなり厄介な代物だ。そして
、三つ目が、今日の前にいるシオンだ、理由は解らないが、どうも帝国のお偉いさんの
お気に入りのようで、この子の身辺警護まで付録付きだ。おかげでシオンをエスコート
してパーティーに出る羽目になった。そして今こうして二人夜の公園にいる。これは、
彼の感だがシオンの警護を依頼した人物はアシエルなる人物だろう、ただ本名は別の名
なんだろう、そのことをシオンは知っているのか、それともその名が本来の名と思っ
ているのかは、アビンには知る由もなかった。
「アビンさん、どうしました」。
シオンの声に、ハツとして
「いやなんでもない。何か今日は疲れているみたいだ」
と考え込んでいたことの言い訳を取り繕うように言った。
「そうですか、では、此処に一緒に座りませんか」
とシオンはベンチにちょこんと腰掛けてから彼を誘った。
アビンは、この際しょうがないかと思いつつシオンの横に座る。
このベンチは、池の中央にある噴水の方に向かっていて、その為外灯に照らされた池
のさざ波が、キラキラと反射して美しかった。だからと言うわけではないのだが、この
まましばらく上方の星空を眺めながらボーとしていようと考えていたので、徐に、上を
見上げて
「今見えている、星空は、何処の宇宙空間だろう」
と独り言のように彼は言った。
「そうですね、発信してからまだ十時間は過ぎていませんから、テラリーズのトロア星
域辺りではないでしょうか」
とシオンが答える。
「!？」アビンは答えを期待しない独り言に答えを返されたので、かえって言葉を失う

。「どうかしましたか」
とシオンが彼の顔を覗き込む。

「いやべつに．．．．．」

と答えながら、シオンは普通の女の子のような反応はしない、変わった娘だなと考えていた。

確かに、この女の子は、どうも普通と反応が違う。俺が見ても綺麗だとか美しいと思う物に「わ～、素敵」とか「何と綺麗なんでしょう」というような反応をしない。ただ、そこに有る物、または、存在している事を認知しているという具合の反応だ。感情の欠落とか情緒が欠如しているしか言い方がない反応、まるで、できの悪いアンドロイドを相手にしているようだとの思いがよぎる。

そんな思いを持ってはいけないとアビンは、少しシオンのプライバシーに立ち寄るような事を尋ねた。

「シオン少し聞きたいことが有るのだが、良いかな」。

「何でしょうかアビンさん」。

「あのダウランド伯爵の執事のブラウンさんが言っていたアシエルと言う人どういう人なんですか」。

確かにぶしつけな質問だと、アビンは承知していたが、今どうしても確かめておきたかったので、あえて尋ねることにしたのだった。

その質問にシオンはニッコリ笑って答える。

「アシエルさんですか」。

「そう、アシエルという人物は、君のなんなんだい？」。

「わたしが、アシエルさんに最初に会ったのは、三歳の頃でした。その時彼は八歳でした。そのころ、わたしと母そして姉妹のセシリアと一緒にランカスター伯父様の御屋敷でお世話になっていました。その時偶然にお会いすることになったんですが．．．．．」

とシオンの話が続く。

シオンの話は、こうであった。アシエルとシオンの出会いは、ランカスター公爵のオレンジの庭園で遊んでいた時に、彼が偶然その庭園を従者と共に散歩していた。その前に彼らの通行を遮る様に、シオンがその前に飛び出して一行の足を止めたのだった。当然従者は、この無礼な輩を捕まえて懲らしめようとシオンを捕まえ、彼の前に引いていた。この時姉妹のセシリアは、木の陰から見守っていたそうだ。この時アシエルは、シオンを見るなり可哀想だからはなしてやる様に従者に言ってシオンを解放させたそうだ。そして彼は、自分の名を告げ「君は、何処の子」と尋ねたそうだ。当然、シオンはランカスター公爵の屋敷にお世話になっていることを告げたのだった。すると彼は「君の名は何」と尋ねたそうだ。シオンは自分のフルネームを告げたのだそうだ。その言葉に彼はひどく驚いた様子だったそうだが、シオンはその意味がよく解らないそうだ、今もって．．．．．。そして、シオンは直ぐ解放された。これが第一回目の出会いだ。二回目はシオンが六歳になった時だった。この時は、ランカスター公爵の書齋で伯父さんに本を読んでもらっていた時に、出会った。この時ランカスターが、アシエルに深々とあいさつをしていたので、偉い方と思ったそうだ。そしてこの時始めて、正式に互いに紹介された。シオンとしては、姉妹のセシリアと別れたばかりなので、寂しさも手伝ってアシエルと一緒にいることが多かった。ただし、彼は、此方に静養のために来ているのだから、良くなればまた、自分の家に戻ると、シオンは聞かされたのだった。

それでも、シオンとしてはアシエルが、屋敷の中で一番歳が近かった為、本当に気の許せる数少ない相手だった、たぶん互い同士に、他に母と伯父のランカスターも気が許せる相手では有ったが、なにせ大人と子供では、感じ方や見方の違いは、なかなか理解してもらおうのも難しい。シオンの母は元教育者でもあったので、その点ある程度、理解や状況を踏まえてはくれたが、シオンの置かれた状況は難しい物だった様だ。

そんな中、シオンはアシエルとランカスターの屋敷で、母が家庭教師として共に勉強したそうだ。他にも家庭教師が来たそうだ、それは母親では手に負えない教養に関して、それを補うためランカスターが招いたそうだ。

それからシオンが八歳になるまで、ランカスター公爵の屋敷でアシエルは静養した。

その後、母親の死でシオンはファーナー一家に引き取られることになった。それが、アシエルとの別れだったと、その後、時々手紙を交わす間柄となって今日に至るという

。 此処までシオンは、まるで報告書を読むように、何の感情も交えずに一気に言ったの

けた。そして、話し終わると、その不思議な二つの瞳が、アビンをじっと見据えていた。アビンはその眼差しに、ゾツとするような寒気を感じた。何故そう感じるのか解らない。だが、殺気ではない何かを訴えたようなそんな感じと寒気、そう、あの時部屋で感じたまさにその感じだった。

彼は、完全にその雰囲気飲み込まれていた。

それなのに、彼は何か突き動かされるように知らず知らずシオンに質問している自分に驚いた。

「シオン、君は五歳も年上のアシエルと同じ教育を受けたのかい」。

「はい」。

「難しく、たいへんだっただろう」。

「いいえ、テストの時にはアシエルよりいい点を頂いてましたから」。

「へえ～、どんな教科が、好きだったのかい」。

「理論物理です」。

ここで、アビンは、驚いた。幼い子供に理論物理だって、俺なんかは、出来ればパスしたい科目の一番にあげる物だと思いながら、質問を続ける。

「ところで、アシエルも同じような教科を教わっていたのかい」。

「いいえ、その教科は、わたしだけです。色々出来るので、伯父様が何か学びたい物が有れば、講師を呼んであげると、仰ってくださいましたので、お言葉に甘えて、御願いましたんです」。

その言葉を聞いて彼はシオンへの見方が少し変わった。この天才児は何か秘められた物を持っているに違いないと、今までは何か秘められた物がある少女とぐらいしか、見ていなかったのだが、

すると変な疑問がわき上がってきた。それは、そんな天才児が、わざわざ今頃、ハイスクールに通い始めるのか、そんなに頭が良ければ、ハイスクールを飛び越して大学へ行ってもおかしくない。かといって、そんな事は、此処の事情だろうから気にする必要はないかと考えをまとめてから彼は口を開いた。

「ところで、提督に引き取られてからは、どうしてたんだい、同じように家庭教師から教わったのかい」。

すると、シオンは少し考えるような素振りをしてから口を開いた。

「これからお話しすることは、美緒さんや他の方には、話さないで頂きたいのですが、お約束していただけますか。アビンさん」。

その言葉に、一瞬たじろいだ

「ああ、約束する」

と承諾した。

「ありがとうございます。これからお話しする事は、一部の方しかご存じではないものです。わたしは、ファーナビー家に引き取られてから直ぐに、伯父さんの赴任地で有る、テラリーズの第二惑星ソルフェに行きました。そこで、ソルティス工科大学の宇宙航空物理学部に入れて頂きました。そこで二年半程楽しく学ばせていただきました。博士論文を書き終えてからは、ソルティス工科大学の宇宙物理学研究所に研究員として赴任しました。その時まで、伯父様の友人であるブリストル博士ご夫妻のご厄介になることとなりました。後は通路でお話しした通りです」。

アビンは、今ハッキリ解った。シオンが天才児で有ること、そして、既に博士課程を修了していることをだが、疑問が残った。その思いは彼に次の質問をさせていた。

「シオン。俺には少し疑問が残るのだが、何故改めてハイスクールに通うんだい。既に学ぶことは終えているのではないのかい」。

「知識とそれを用いる点では」

とシオンが寂しそうに答えた。

「どうゆうことだい」。

「わたしは13歳になるまで殆ど同年代の人と遊んだり学び合ったりしたことがあります。殆どが大人の方でわたしを子供として見るのではなく一学者として見られてました、ある意味で背伸びをした生活をしていました。これは、いつか弊害が起きるとも限りません。伯父様は、心の成長が大切だと仰いました。確かに、子供達だけでは正しく心は育たない、そこには良き教育者が必要で。そして、その様な中で、同年代の痛みや苦しみをつまり人としての痛みを解かってあげられる資質を培う必要があるとの事

つまりわたしには育った環境のせい、欠けている部分があるということです。それで、学業ではなく友達を作りなさいと」。

アビンはじっとシヨンの話に耳を傾けていた。そして、だいたいの疑問は解けた、ただ時々見せる雰囲気は理解できなかったが。

「それで、ハイスクールに」。

「はい。でも始めに数ヶ月は、週に三日しか出られないんです」。

「どうして？」。

「プロジェクト9との調整がうまくいかなかったんです」。

「そうなんだ」。

「しばらくは、ホームスタディーのカリキュラムを消化しなければなりません」

とシヨンは残念そうに言う。

そんなシヨンの横顔が外灯の明かりに照らされて妙に神秘的なのに気が付いて、少し見とれていた。

すると、シヨンは

「わたしの顔に何か」

とアビンに尋ねた。

その言葉に彼はドキッとして慌てて返事をする。

「あっ、いや、何でもない。あっはははは、．．．」。

相も変わらず情けない反応だと、自分自身がいやになった。

するとシヨンは「うふふふ、面白い方」と言いながらスカートのポケットから例の手紙を出して

「今、アビンさんはこの手紙に興味があるのではないのでしょうか」

と彼の好奇心をくすぐるように言う。

その言葉にアビンは誘われるように「まあ、そうだが」と言う。

すると、シヨンは悪戯っぽい笑みを浮かべて

「ここで、読んで差し上げましょうか」

と彼を誘う。

「良いのかい」。

「当の本人が、尋ねているんですよ」

とシヨン。

「では、聞かせてはもらえないだろうか」。

アビンの言葉に満足したのかシヨンは手紙の封を切り便せんを取り出して読み始めた。『拝啓、僕のアリス。毎日、元気で暮らしているとの知らせを喜んでいます。ところで今日、知らせを聞いたところでは、伯父さんとアストレイリアまで旅行をするそうですね、そこで、旅の安全を願ってペンを取ったしだいですが、なにせ辺境の地なので気を付けてください。出来れば、安全のために僕が守ってあげたいのですが、今はそれが出来ないません。そこで、陰ながら安全に寄与できればと思い一人の人物に護衛を頼むことにしました。勝手な判断は許してもらいたい。何時も君の安否を心配している僕の気持ちを酌んで欲しい。それから、この前の手紙にあった話ですが、24の惑星の資料はやはり有りませんでした。確かに、君の言う通りロススペース内に散らばっているのでしょう。それから、七つの星についてですが、君が言っていたように王冠にはめられた宝石でした。それぞれの石には、ある物を象徴しているようですが、五回ほど検索してみたんですが、解りませんでした。此方のデータベースには何も残っていなかったようです。残念ですが。この度は此処までです。旅の安全をお祈りしています。敬具。あなたのアシェル．．．．．追伸。護衛してくれる人物の名はアビン。ホーンブローだそうです。帝国特務諜報局からの推薦です。』

「いかがですか」。

アビンは今の手紙で、シヨンの護衛を頼んだお偉いさんは、アシェルなる人物であることが解った。それと、この手紙からシヨンは手紙の主からアリスと呼ばれている事、そして、手紙の内容から何かを互いに調べている事が解ったがそれは、今回の件には関係ないだろう。それから「アリスね～」と考えているとアリスと言う名前が、今回、妙に多く聞くことに気が付いた。アリス．．．アリスブルー、アリス、マクレガー、コードネームアリス、それと愛称、今のところ判断は出来ないがもしかしたら何か関係があるかも知れないなと考えてから答えた。

「シヨン、君は、アリスと呼ばれているんだね」。

「はい。二人の間では本名は避けています」。

「どうして？」。

「それは、もし万が一にもわたし達の関係に気付いた者がいても、相手が誰か特定できないようにするためです」。

「そんなに相手の人物は重要人物なのか」

とアビンは解りきったことではあるが、あえて尋ねた。

「はい。わたしの方は大したことはないと思いますが、アシエルの方は、この事が知れると大騒ぎになることでしょう」

とシオンはいたって冷静に答える。

「相手の名は、教えてくれないだろうね、やはり.....」。

「申し訳ありませんが、そればかりは.....」。

「解った。その事は聞かないけど、本当に良かったのか手紙読んでくれて」。

「はい。この手紙は途中から暗号になっていますから、重要な事柄は全てその中に有りますから」

とシオンはニッコリ笑って答える。

アビンはハツとする。そして、シオンの意図が何となく分かった。たぶん、シオンは、俺の疑いのある程度解消しようとして手紙を読んだのだ、それも暗号を含めて。これは、俺の情報を知ってしまったお返しなのか、それとも此方に、自分は部外者である事を開いて見せたかったのか、確かに、この子は自分の素性のある程度話してくれた。それも此方が調べても決して出てきそうもない情報まで見せてくれた。つまり自分を信用して欲しいと言っているに等しかった。

そうすると、アシエルなる人物とシオンの関係が白日の下にさらされると、とんでも無い問題が発生する可能性がある、つまりシオンがアリスブルーと呼ばれている人物かも知れないが、同時に情報局を通しての依頼から判断すると、保護をして欲しい重要人物としてアリスブルーとはまったく関係ないとも言える。そして、アビンはどちらかというと後者の関係ない方が高いと言えると、考えた。

すると、フツと風が吹き抜ける。その風に舞ってシオンの髪がさらさらとアビンの肩までなびく。微かな、ラベンダーの香りがして、シオンの方を見た。

「どういたしましたか」。

「いや、何でもなし。ただ、どうして風が吹き抜けたのかと思っただけで」

すると、シオンはクスツと笑ってから

「此処のシステムを、ご存じないのですか」

と言った。その言葉に、彼は此処のシステムについて思い出した。

「あつ、そうだった、此処は風が吹き抜けるように作られているためか」

とアビンはまるで気に効かない男が彼女を困らせている様だなど思いながら応えた。

それから、二人はしばらく無言のままベンチに座っていた。アビンは、上の星空のスクリーンを見上げていた。シオンは、外灯にきらめく噴水をじっと眺めていた。

それほど時間が過ぎたわけでもなかったが、沈黙の時間は、意外と長く感じる。ただ、実際には十数分しか立っていなかったが、それも、ある鳴き声で、突然終わる。

「ミャ〜オン」。

「え!？」

とアビンは、妙な鳴き声にビックリした。

だが、自分の足下にまわりついている物は、無かったのでホツとしたが、シオンの方で何か動きを感じて、その方を見ると、シオンの足下に白い動物がじゃれていた。

「どうしたんだ、その猫？」

とアビンは思ったことを口にした。

「そうでしょうか。赤い目の猫は見たことがありませんし、手足は随分太いですね。まるで、虎やライオンの赤ちゃんみたい」

とシオンはアビンの判断を修正する。

「それにしても、何処から来たんだ」。

「この子もミッチェルさんの持ち物でしょうか」。

「さあ〜、こんな動物は初めて見たからな、後でミッチェルさんに届ければ、ハッキリするんじゃないかな」。

「そうですね。でも、ミッチェルさんの部屋アビンさんをご存じで？」。

「!？ そうだ、聞いてなかったな、あの時はさっさと別れたからな」。

「そういえば、そうでした」。

アビンはシオンが急かさなければ、聞くことが出来たかも知れないとは思ったが、確

実性の無い事でとやかく言えるわけが無いので、此処は、提案だけに止めることにした。

「シヨン後で、船長に訳を話して、教えてもらってはどうかかな」。

「そうですね」。

シヨンはそう言いながら動物を抱き上げる。すると嬉しそうに、しきりにシヨンの顔に近づいては舌で舐め回すのだった。

「やあっ、くすぐったい」

とシヨンはその行為に反応した。

アビンはそんなシヨンの反応を見て、やっぱり普通の子かなと安心感が彼の中にわいた、確かに自然の反応だと思いながら、ふと自分が今まで、この娘に抱いていた感情を恥ずかしく感じていた。

そんな彼の思いを知る由もないシヨンは、見知らぬ動物を膝に置いて頭を撫でている

そこへ誰かが声を掛けてきた。

「これは、これは、お二人さん仲のおよろしいことで」。

ふと振り返ると、声の主は美緒だった。

「これは、美緒さん。美緒さんはパーティーでは無かったんですか」

とアビンは尋ねる。

すると

「あれほどパーティーを楽しみにしてたのにどうしたんですか」

とアビンの言葉に足すようにシヨンも尋ねる。

「二人とも、いかにもわたしが、パーティーに浸りきっているような言い方をしないでね」

と美緒は、二人の言葉に憤慨したように応える。

「解りました。お嬢様。ところで、どうして此方においでになったのですか」

とアビンは少し茶化すように言った。

しかし、美緒は、そんなアビンの言葉をかわす様に

「お二人とも、パーティーは苦手だと思ひましてね。それで、ちゃっかり抜け出しているなら、此処にいるのでは思ったのよ、どうお？」

と言った。

「さすがですね。美緒さん」

とシヨンは感心して言う。

「あらどうも、今日は随分しおらしいんじゃないの、シヨン？」。

「そうですね」。

「そうよ。いつもは、何か一言必ずかえすくせに」。

「.....」。

アビンは、二人の会話に入れず、また美緒が言ったことから、彼女の勘は鋭い、それにプライドも高そうな娘だと思うのであった。

「ところで、シヨン？あなたの抱えている猫みたいな動物どうしたの」

と美緒が尋ねる。

「この子ですか。アビンさんと此処で話していたら、わたしの足にまとわり付いてきたんです」

とシヨンは、少し戸惑いながら応える。

「そう？随分変わった動物ね。猫だったら珍しいわね、赤い目なんて」。

それに答えるようにシヨンが、その動物を美緒に差し出しながら言う。

「抱いてみます。けっこう重いけど抱き心地は、クッションを抱えているみたいですよ」。

「わたしは、いいわ。お父様が、猫が嫌いだから、服に毛が付いていると、機嫌が悪くなるから」。

「そう？残念です」。

「こら！何考えてた？この悪戯っ子」

と言うなりシヨンの頭を軽く小突く美緒。

「解りました？」

とシヨンは、可愛く笑って応える。

「当たり前でしょう。シヨンは、わたしのお父様を余り好きではない事は、知っているんだから..... まあ理由はわたしも解らないではないんだけど..... やはり今日は、辞めてもらいたいわ」。

「美緒さんが、そう仰るなら何もいたしません」。
「良かった。何故か、今日は機嫌が悪いのよ。お父様」と言う美緒のかをが少し曇る。
「何かあったの」。
「ちょっとね。どんな事かは、話してくれなかったけど、そうとう頭に来ていたみたい」。
「そうなの？解った、美緒さんに協力します」。
「ありがとう」
美緒は、ため息混じりに応える。
そんな二人の会話にアビンは、完全に蚊帳の外だった。まあ、仕方がないことだと諦めていたところに、美緒が彼に話しかけた。
「アビンさん」。
「何ですか、お嬢さん」。
「そのお嬢さんは辞めていただきませんか。美緒でけっこうですから」とアビンの呼び方の訂正をせまる。
彼は「解りました、美緒さん」と従う。
「ところでアビンさん？此処にいるのは、二人だけですか」と美緒は尋ねる。
「ああ、そうですが、それが何か？」
とアビンは、彼女の見ている通りなのに、何故その様なことを聞くのかと思うのであった。
すると美緒は、あきれたと言わんばかりの口調で
「よくもまあ、あの提督が、見知らぬ男にみすみすシオンを預けるなんて前代未聞だわ」と言う。
その言葉にアビンは答えた。
「そんな事は無いさ、此処にシオンをエスコートしてくる前に、手を出したらただでは済まないぞと、脅かされたよ。まっ、エスコートの件は教授の言い付けだから、俺としてもどうしようも無いけどね」。
「そうなの」
と美緒は、シオンの方を見て尋ねる。
それに対してシオンは、黙って肯く。
そんな仕草を見て、深くため息を付いてから
「そう、ならばばらくは、あの提督は何も言わないわ、それにしてもシオン？今日は随分気合いが入っているわね。その姿だったらダンスに引っ張りだこだったでしょうね。ただし、提督がいなければの話だけどね」
と言ってシオンに右目でウインクした。
「これ、エレナさんが、選んだ物なの、わたしは嫌だと言ったんですが．．．．」
。「シオン、似合ってるわよ。あなたの雰囲気ぴったりよ。少し派手だけど．．．．」
。「そうですか」
とシオンは白い動物を抱え込みながら少しうなだれる。
そんなシオンの反応を見て
「あっ、で、でも、本当に可愛いわよ。嘘じゃないって。ホント」
と美緒は取り繕うように言う。
「どうせ、わたしは．．．．」。
「シオン、そんなに悄げないで。ええっと、アビンさんも何とか言ってよ」
と何故かアビンに話を振ってきた。
アビンとしては、そっちで話をまずくして置いて手に負えなくなったらこっちに回すとは、いい迷惑だとは思ったが、ここで込み入った話は避けておきたかったので、何かいい話題は無いかと考えて、思いついたことを話した。
「そう言えば、シオン。俺に助けになる相手を紹介してくれるとの話だけど、早速紹介してもらえないだろうか」。
この話で、気を紛らしてくれるかどうかは、確信がなかったが、言ってみるに越したことはないと思った。

するとアビンの言葉にシオンは、

「今ですか」

と尋ねてきた。

「よければ、今」。

「解りました。ご紹介します。此方へ来てください」

とシオンは立ち上がると船の後部の方に向かって歩き出す。

その反応を見て、アビンはやれやれ随分冷たい反応だ、機嫌を直してくれ無かったみたいだけど、落ち込んだままでないだけでもましかなと、思いながらシオンの後に従う。

すると、美緒も二人に付いてきた。

そんな美緒にアビンは小声で

「どうして付いてくるんだ」

と尋ねた。

「いいでしょ、わたしの勝手でしょ」。

「だが、これ以上こじれるのは御免被りたいんだが、こっちとしては」。

「わたしとしても責任を感じているんだから、付いていくの」。

「それって、無理矢理な理由じゃないか」。

「いいでしょ」

と美緒は、アビンの言葉を突っぱねた。

そんな美緒に対してアビンは、何か爆弾を抱えて歩いているような気がしてならなかった。

三人が公園の出口を出た所で、ブラックとぼったり出会った。

「これはこれは、美緒さん。それとアビンさんでしたか。おっとこれは．．．」と言ったところでブラックの言葉が詰まった。

「これはブラックさん。パーティーにいらしてはなかったんですか」

と美緒が尋ねる。

「いや、行っていたんだが、途中で出てきてしまったんだ。ちよつとつまらない事もあったんでね」。

「そうなんですか。残念ですね」

と美緒。

そんな会話を、アビンは聞きながら、なんかあったなと感じた。

「ところで其方のお嬢さんは？」

とブラックはシオンのことを尋ねてきた。

「あっ、この娘？わたしの友達で、シオンと言うのよ」。

するとブラックは丁寧にあいさつをした。

「これは、失礼しました。わたくしは、ジョン・ブラックと申します。ギャラクシープリンセス」。

その言葉にアビンと美緒がビックリしているなかシオンが応えた。

「失礼ですが、わたしはプリンセスと呼ばれるような者ではありません。わたしはシオン・F・ファーナビーと申します」。

その応えにブラックは、少し考える素振りをしてから

「これは、失礼ついそんな気がした者ですから、ファーナビーと言いますとファーナビー提督のご家族の方ですか」。

「はい、そうです」。

「そうですか、そうしますと提督もこの船に乗船されているということですね」。

「はい」。

二人の会話にはいるように、美緒が言った。

「ブラックさんは、今お暇ですか」。

「いや、悪いけど仕事できて今忙しいんですよ、美緒さん」。

「そうですか、残念」。

「わたしに何か？」

「いえ、忙しいならいいんです」

と美緒は、少しごまかすように言う。

「ならいいんですが、ところで、シオンさんが抱えている動物はどうしたんですか」。

「この子ですか。公園で拾ったんですが、たぶん動物の調教師の方の物だと思います。お会いしたことがあるので、お渡ししようと思っ

「そんなシヨンの言葉を聞くなりブラックはシヨンに近づきその動物を見た。

「ちょっと失礼」。

「どうかしました」。

「これは、．．．．．」

と言葉に詰まるブラック。

ブラックの顔が曇っているのでアビンや美緒そしてシヨンも不安な面もちで彼の言葉を待った。

「これは、ミュラの幼獣ですよ。船内持ち込みは禁止されている物です。それもこのミュラは、まだ生後一ヶ月も経っていない。つまり母親が乳を与えている段階なんです。そしてこの事は、成獣も一緒にいる事になるし、他にもこの子の兄弟もいることになる。なにせミュラは子が乳離れするまでは、気が立っているから、親元から子供を離すことはまず出来ない。でも、この子が一匹でいると言うことは、母親が何らかの理由で、子育てが出来なくなった時に限られるらしい」。

「ミュラってどんな動物ですか」

とアビンは彼に尋ねた。

「わたしも詳しいことは知らないのですが、かなりどう猛な動物だそうです。もとは、バイオニックの研究で生み出されたバイオノイドだそうですが、手に余ったので、捨てられその星の環境に適合して、固有種となった言われています。成獣は体長6メートルを超える。鋼鉄さえも切り裂くと言われる鋭い爪、しなやかだが硬い皮膚と分厚い皮下組織、柔らかだがケプラ繊維のような毛が全身を覆っている、そして暗闇でも見る事の出来る赤い目と短い尻尾などが特徴として上げられる」と言ったところでブラックは少しため息を付いてから話を続ける。

「このミュラに関しては、噂がある。船内に入れると、暴れだし片っ端から物を壊し人を襲うと言う事だ、真意のことは解らないが。こんな話もある成獣のミュラにはブラスターライフルは効かない、理由は解らないし、話の出所も解らない。ただ言えることは、このミュラに関しては、詳しいことが余り知られていない事と、これ程危険な動物もないと言うことだ」。

「そんなに怖い動物なんですか」

と美緒は真剣に尋ねる。

「聴くところによれば．．．．．」

とブラックは口を濁す。どうも彼としては話しすぎたと感じたらしい。

「随分お詳しいんですね」

とアビンはブラックに言う。

「いや、それほどでも無いですよ」。

「そうですか。この猫のような動物を見てミュラと判断する辺り、実際に見たことがあるんじゃないんですか」。

アビンは少し鎌を掛けて言った。

するとブラックは少したじろいだ様子を見せてから口を開いた。

「アビンさん、あなた気の抜けない人ですね。あなたの仰るように、見たことがあります。それも飼われていたミュラをね」。

「飼われていた？」。

アビンはどう猛なのに飼うのかとの思いから発せられた言葉だった。

「そうです。何方が飼っていたかは、企業機密と言うことでお話しできませんが、このミュラはかえるんです。そして、飼い主には献身的に忠実な動物です。たとえ出産後でもね。わたしも、そこの主から聴かされるまでは、信じられませんでしたけどね。ただし、飼い主がその場を離れると、状況は一変しますが．．．．．」。

「すると、その時に実際のミュラをご覧になったと言うことですか」。

「そうです。おやっ、丁寧な言い方をしてくださるんですね」。

「仮にも、物を尋ねていますから」。

とアビンは応える。

「おやおや、まあいいでしょう。それから、その主人は言っていましたよ、ミュラの成獣は、絶対船に乗せるなってね。それは、自殺行為だとね」。

「船に乗せると何かあると言うことですか」。

「それは、わたしにも解りません」。

「ところで、献身的に忠実と言うことは、何を命令されてもと、いうことですか」。

アビンはこの点が特に聴いておきたいことだった。

「そうかも知れません。実際に飼ったことはありませんから」
とブラックはアビンの質問をするりと交わした。
「そうですね。でも貴重な情報ありがとうございます」
とアビンは聞けるのは此処までかと引き下がった。
「いえいえ、お役に立てれば、わたしとしては嬉しい限りです」。
「こんなに可愛いのに、そんなに恐ろしい動物なんですか」
と美緒は顔を強張らせながら言った。
「いえ、大丈夫です。幼獣ですから。それに、どんな動物でも赤ちゃんは可愛い物ですよ。美緒さん」
とブラックは彼女の不安を取り除くように言う。
「そそうですね。ははははあ」
と美緒はから笑いをする。
そんな美緒を見ながらアビンはやれやれと思った。
「重要な情報をありがとうございます。ブラックさん」
とシヨンは無表情に感謝を言う。
「どういたしまして、シヨンお嬢さん」
と言ってから彼はリストウォッチを見て
「オツと商談相手を待たせてはまずい。じゃ、これで失礼、お嬢さん達、そしてアビンくん」
と言って公園の入り口の方へ去っていった。
アビンはブラックを見送りながら、自分の周りで、何か知らない歯車が既に回りだして、自分を含めて多くの人を巻き込もうとしている事を感じ取っていた。
「アビンさん、急ぎましようか」
と後ろからシヨンが声を掛けていた。
「ああっ、そうだね」。
「あのブラックさん、ちょっとミステリアスで素敵だわ」
と美緒は感じ入っていた。
そんな美緒はほっておこうと思いアビンは、
「では案内してくれるかな、シヨン」
と言う。
「では、此方です、アビンさん」。
「あっ、二人ともわたしを置いてかないでよ」。

偽装

「大丈夫ですか。副長？」。
「ああっ、少し未だ頭が痛いけど、大丈夫だ」。
とは言いもののまだ、そばで話されると頭に響くのであった。
「それにしても、もう少しでガブッとやられてしまうところでしたよ」。
「ありがとう。つつ！」。
「俺は引っ込んでいろと言わなかったか」。
マティエリは、その声のする方向を見上げると、そこには屈強な男が立っていた。警備隊の隊長ヘスである。
「そうでしたね。つい気になってね。申し訳ない」。
「解ればいい。だが、何時もラッキーとはかぎらん」
と言うなりヘスはプイッと奥へ行ってしまった。
そんなヘスを見送ってからアヒムが、彼の腕を支えながら言った。
「副長、立てますか」。
「ああ、大丈夫だ」
とは言うもののそうではなかった。かなりふらふらしているのを彼は自覚しながらアヒムの肩を掴んで立ち上がった。
「すまん」。
「いいえ、ご心配なく」。
そこへ、二人の人物が近づいてきて言った。
「マティエリくん大丈夫かね」。
声の主は、デュパルク船長だった。
「あっ、船長．．．．申し訳ありません」
と応えるのが今の彼には精一杯だった。
「ああ、解った。今は、少し自室で休め」。
「ですが船長」。
「気にするな、起きてしまった事はしょうがない。後のことは此方で何とかする」
と言ってからデュパルクはアヒムに
「すまんが、彼を自室まで送り届けてくれないか」
と頼む。
「解りました船長、お任せ下さい」
とアヒムは応えマティエリを連れてエレベーターの方に消えて行った。
それを見送ってからデュパルクは側に立っている女性に言った。
「お待たせいたしました、ミス・ミッチェル。此方へどうぞ」。
「はい」
と言いながら彼女は後ろを振り返る素振りをする。
「どうかしましたか」。
「副長さん、本当に大丈夫なんですか」。
「まあ、たいしたことありません。さっき医師の話では、軽い脳震とうだそうですから」。
「そうですか、それなら大丈夫ですね」。
「じゃ、此方へ」
とデュパルクは彼女を導いた。
しばらく歩くと二人は二人の警備員に呼び止められる。デュパルクは、警備員に用件を告げると、二人を案内してくれた。
「それにしても、でかい奴ですよ」
と片方の警備員が言った。
しばらく歩くと、そこには体長4メートルを超える大型の猫科の動物が、横たわっていた。ミッチェルはそれを見るなり
「サーベントタイガーですね。船長」

と言った。

「そうなのかねミス・ミッチェル」。

「はい。それも雄の成獣ですね。たぶん体長は四メートル近くあるんじゃないかしら」

。その言葉を聞いてデュパルクは、警備員に向かって

「ちょっと君達、すまんが、そいつの大きさを測ってくれないか」

と言う。

すると警備員の一人が

「こいつの大きさですか。どうやってですか」

と尋ねる。

それに答えてデュパルクは

「君の足下にスケールが、転がっている。それを使ってはどうかね。どうせ君達が、ドンパチやらかしたときに、何処かの工具箱を吹き飛ばしたんだろうから」

と皮肉を込めて言った。

その言葉にその警備員はため息を付いてからスケールを拾い上げ、もう一人の警備員に声を掛けて渋々測り始めた。

「どっちを測るんですか」。

「長手の方向、頭から尾の付け根までを測ってくれ」。

「解りました。船長」

と言うなり渋々測り始めた。

「どうだ」。

「ええと、三メートルと八十七あります。ほぼ四メートルと言うところですか」。

「解ったありがとう」。

そしてデュパルクは、ミッチェルの方を見て言った。

「どうです。ミス・ミッチェル」。

「ええっ、そうですね。やはり雄の成獣ですね。それにしても誰が持ち込んだんでしょうね。しっかりした檻に入れ定期的に餌を与えていれば、暴れたりはしないのに、かわいそう」。

その言葉を言うなりミッチェルは、顔を背けてうつむいた。

「どうかいましたか」。

「いえ、何でもありません。ただちょっとかわいそうで．．．．．」。

「そうですね。確かにそうですね。ですが、わたしとしては乗客に被害が無くてホッとしているんですよ。申し訳ないが．．．．．」。

「それは解ります。船長の立場でしたら、それが最重要の事ですから」。

「解っていただいて感謝いたします」。

「いいえ此方こそ気を遣っていただいてありがとうございます。ところで、これで事は片付いたんでしょうか」。

「ええ、此方の意図とは反する仕方で．．．．」

とデュパルクは言葉を切った。

「では、わたしのする事は、未だありますか」

「いいえ、もうありません。たいへん時間を取ってしまいまして申し訳ありませんでした。この埋め合わせは、近いうちに必ずさせていただきます」。

「気になさらないでください」。

「いいえ、それでは此方のご迷惑を掛けてしまったのに、何も償いできなかったという事があっては、わたしとしても気が済まないのです」。

彼の答えを聞いて彼女は、少しクスッと笑ってから

「なら仕方ありませんわ、後日楽しみにさせていただきます」

と言う。

「ありがとうございます。では後日、此方の方から連絡させていただきます」。

その言葉を聞いてから彼女はデュパルクの方に振り返ってから

「他に無ければこれで失礼してよろしいでしょうか」

と言う。

「はい、かまいません。ありがとうございます。ミス・ミッチェル」。

「いいえ、此方こそ船長さん」

と言って彼女は格納デッキの出口に向かって歩き始めた。

そんな彼女の後ろ姿を見送りながら、デュパルクは、随分迷惑を掛けてしまったな

と
思っていた。
そこへ、ヘスが彼に近づいて来て言った。
「船長。この肉のかたまりをどうします。パーティーでステーキとして出しますか」。
デュパルクはその言葉にムツとして言う。
「君達がしとめた獲物じゃないかね。君達で処分したまえ。必要な料理器具がいるなら言ってくれ手配しよう。それとも、祭壇を築いて犠牲を捧げると言うなら、部屋を要してやってもいいぞ、隊長」。
「じゃ、冷凍パックでも用意してもらいましょうか。船長」
とヘスは、冷たく笑いながら答えてから側にいた警備員を呼んで、小声で何か話して立ち去っていった。
それから、その警備員がデュパルクに近づいて来て言った。
「船長。後は、此方の方で処理しますから、冷凍パックの手配を御願います。それと、しばらくの間、此処への立ち入りを禁止してもらえませんか」。
「解った。ところで、どの位の間だね」。
「少し点検をしますので、六時間ほどですが」。
「なら、かまわない。その様にしよう」。
「よろしく御願います。船長」。
その言葉を聞いてからデュパルクは、格納デッキを出ていった。
そんなデュパルクを見送ってから、その警備員は、振り返っていつの間にか後ろに立っていたヘスに、
「隊長、予定どおりに事が運びそうです」
と言う。
「解った。では、此処を六時間封鎖しろ。それから電子銃は準備してあるな」。
「はい、隊長」。
「それから、チーム以外の警備員は即刻、持ち場に帰せ」。
「既に、戻しました」。
「なかなか手際がいいな」。
「ありがとうございます」。
「では、お前の班で封鎖に取りかかれ、時間は六時間しかないぞ」。
「解りました」
と言うなりその警備委員は、クルッと向きを変えて叫んだ。
「C班は、今すぐに格納デッキを封鎖しろ、船長の許可は取ってあるから、質問する奴がいたら、そう答えてやれ。急げ！もたもたするな！」。
その言葉に反応するかのよう、何人かの警備員が各出入りに殺到するのを見たからヘスは叫んだ。
「残りの物は、デッキの清掃だ。奴を見つけしだい電子銃で眠らせろ。それから各自二人で行動しろ。以上だ」。
すると警備員達は、二人ずつ組になって行動し始めた。そして、ヘスは口元に笑みを湛えながら、無線機を取り出して、相手を飛び出した。
「レッドフォクスよりフォクスリーダへ、バグは始末した。後は子猫のお休み時間だ。以上」。

再会

まるで子猫のぬいぐるみのようにミュラの幼獣は、シヨンの腕の中で大人しく抱えられていた。アビンはそんな様子を何となく眺めながら、彼女の後を気のなさそうな感じで従っていた。
「アビンさん、此処です。5B-224この部屋に、いらっしゃる方が助けになって下さると思います。信用できる方です。わたしが補償いたします」。
とシヨンは、ドアの前に立ってアビンを手招きして言った。
「本当に助けになるのかな」
とアビンは少し渋りながらもドアの前に歩いていった。
「お会いになれば、直ぐに解りますから」

とまるで彼が、相手を直ぐに信用すると言わんばかりの口調だった。
そんな二人の会話に美緒は、何故か、黙って聴いていた。
そんな美緒をシオンは気に止めることもなく、ドアのチャイムを鳴らした。すると中から返事があった。

「何だ、シオンか？ どうした。親父達に意地悪でもされたか」。

その声はアビンには聞き覚えのある声だった。

「会わせたい人がいるんですが、中に入れていただけませんか」。

「シルバークローだったらお断りだぞ」。

「いいえ、今わたしの後ろにいらっしゃる方です」。

「.....」。

しばらく沈黙があつてから、突然ドアが、スーと開いた。

そこに現れた男は、アビンが、知っている人物、ホルストだった。

「やあ、アビンくん。君がシオンと一緒に来るとは、思いもしなかつたが、まあ、入りますよ。それと、こんなむさ苦しい所で宜しければ、美緒お嬢さんもどうぞ。歓迎しますよ」。

とホルストは、突然の訪問者を中に招き入れた。

「相変わらず。口が悪いのね。ミスターホルスト」

と美緒は部屋に入りながら言う。

ホルストの部屋は、どうも二人部屋のように、アビンの部屋よりも幾分か広かつたが、実際に、二人で使うには少し狭い気がした。それは、どうもこの部屋には、不釣り合いなまでに大きいテーブルが据えられて有るせいもあつた。そして、その上には、様々な書類が、散財していた。それから、何故か椅子の数も五脚も有つた。その答えは、ホルストが口を開くと直ぐに解つた。

「まっ、散らかっているが、掛けてくれ。さっきまで、今後の打ち合わせをしていてね。丁度君達は、入れ違いで来たものだから、何か問題でも起きたのかと思つていたら、問題を起さず、本人が来たもんだからビックリしたよ」。

と話を区切つてから、シオンの方をまじまじと見ながら、ため息を付いてから言つた

。「シオン？ そのドレスは、ビットンブルーの仕業か？」。

その言葉に、シオンはコックリと肯くだけだった。

「やれやれ、さぞや教授もウンザリしていたんだろうな」。

「よくご存じで」。

アビンはその言葉に答える。

「教授とは古い付き合いだからな。それにしても何のようなんだ。お嬢さん達」。

その言葉に答えるようにシオンが口を開く。

「ホルストさんに、御願いがありまして、お伺いしました」。

「どんな？」

「アビンさんの助けになっていただきたいのです」。

「俺は忙しい」。

「それは、承知しています。ただ、困つたときには助けになっていただきたいのです」

。「まあ、困つたときは、お互い様だからな、ただ、内容によるがな」。

「それはある程度ご存じでは、無いでしょうか。ご自身」。

「何だ、その含みのある言い方は」。

「わたしが知らないとでも？ ヘンツェさんと話していた時、ホルストさんの側にアビンさんと、ミユラー少佐 がいらっしゃつたでしょう？ 違います？」。

その言葉に、ホルストは一瞬たじろいで言つた。

「また、やったな。悪戯にも程があるぞ」。

「ですが、軍人がいるとなるとつい、調べてみたくなるんです」。

「解つた。ところで、俺が、あの時に聴いてない事も有るんだろう。だから来たんだろう」。

「さすが、ホルストさん」。

「おだてても何もでんぞ」。

と言つてから、ホルストはアビンをまじまじと見ながら尋ねてきた。

「さて、アビンくん。君の用件を聞こうじゃないか。俺に話してよければだがね」。

その言葉に、アビンは、少し考へてから、意を決して言う。

「これから話す事は、あの時にはまだ、俺自身も知らされていなかった事なんですが」と話し始めた。彼を信用すると言うことと、此方も自分の手の内をある程度見せる事で、自分が諜報員で有ることは伏せる、アリスブルーの事は人に頼まれた事として話、ベリアエンジェルについては、頼まれごとを引き受ける見返りとして、もらった情報と伝えた。当然、シオンは一部始終を知っているのだが、黙っていてくれた。それから、美緒にも自分の立場が知れるとまずいのと、民間人を余り巻き込みたくないの、ホルストが既に知っている事と自分の立場を話さないのは、正解だなとアビン自身そう思っていた。

ひととおりの彼の話を聞いてから徐にホルストは口を開いた。「そうか、どうも胡散臭いと思ったんだ、何故、あのミューラーがいるのかとね。やつがいると元々色彩の名称のアリスブルーも、何かのコードネームみたいだな、感じからして。それから、ベリアエンジェルについては、余り気にしなくていいんじゃないかな。たとえば、やつこさんが、何か企んで、事を起こすつもりでも、船の中で、何かやらかしたら逃げようがない。今までの、奴の行動パターンからして、逃げ道の無い所では、事を起こさないだろう」。

アビンは、今のホルストの言葉は、自分ではなく美緒に対して語っている言葉だと、解った。たぶん美緒に不安を与えないようにとの配慮だろうと。そして彼は言った。

「そこで、ホルストさんは、何かアリスブルーで思いつくものがありますか」。「まず、俺達が、よく利用しているカウンターバーの店の名が、アリスブルーだったな、まっ、これは関係ないな、ノースポートに有るファンシーハウスの名がアリスブルーだったな。それに、うちの研究所にある実験機にアリスブルーと言うコールサインを持っているものがあるな、それから、惑星ミストに、アリス・トウ・ブルーと呼ばれる地域が有るそう。他にも化粧品にそんな名前のもものが有ったな、元々色彩の名称でもあるし、そう言えば、そんな名前のケーキも有ったな.....」。

「それだけ?」。「それだけとは、心外な、アビンくん? 此方に対して君は尋ねている立場じゃないか」

。「あっ、申し訳有りません」。「そうだな、人の頼まれごとを果たしたいと思っている君の心意気には、敬服できるけどね」。

「やはり、自分で何とかしてみます」。
と、アビンが肩を落としてしていると、美緒が話に割り込んできた。「そう言えば、ホルストさん、以前、技術者の情報網は馬鹿に出来ないとか言っていました」。

その言葉を聞いてホルストは少し考え込む。そしてしばらくして、静かに話し始める

。「これから話す事は、噂の出所が不明なんだが、クリーク市の消滅以来、どこからともなく囁かれている噂だ。この事はシオンも知っている」。

「どういう話なんですか」
アビンは、ホルストに尋ねる。「クリーク市の消滅は、ある研究機関が遺跡から発掘した過去の先端技術を暴走させたために起きた事故だと言うんだ。なんでも神の力が手に入るとか、大それた事が、その研究者達が誇っていたそう」。

「神の力ですか。そんな馬鹿な」。「そう馬鹿げている。神がいるかも解らないのに、ましてや神の存在を信じない研究者達が何を指して神の力と言えるのか。それでも、彼らはそう言っていたそう。そしてそれは、ある程度成果を出していたらしい」。

「どんな成果ですか」。「なんでも、物体を創造出来る装置だそう」。「創造? 誰でも創造性は持っていますし、人は今まで色んな物を作ってきましたよ。何故今さら」

とアビンは不服そうに言う。それは美緒も同じだった。「それが根本的に違うんだ。今俺達の目の前に突然、物が、例えば、今、シオンの腕の中で寝入っている猫が現れるんだ。転送されてくるのでは無いぞ、生きた猫が現れる。信じられない話だが、そんな装置だと言う話だ」。「そんな.....」

アビンは言葉を失う。
「何処まで本当の話かは解らない。噂だからな。仮に出来たとしてだ、物質を作るには膨大なエネルギーが必要だ。当然失敗すれば、どうなるかは解るな」。

「それは、何となく」。

その言葉を聞いて、ホルストは、ため息を付いてから言った。

「その装置の開発のコードネームが、アリスブルーだという話だ」。

アビンは、その名前にビックリした。そして、今の話が事実ならターゲットは、これに違いないと考えたとき、はたと気付いた。その装置は二年も前に消滅しているんだということに、すると、可能性としては、何があるのだろうかと考え始めた。

「どうしたんだねアビくん」

とホルストは、浮かぬ顔をしている彼に声を掛ける。

「なんでもありません」。

「俺には、君が当惑しているようにしか見えないが、どうなんだ」。

「つまり、そのう．．．．．」

と言葉が詰まるアビン。

「君の今考えている事は、ある程度察しがつくが．．．．俺の話聞いて、これが君が探しているアリスブルーに違いないと、誰しも考えるが、よく考えて見ろ、それは、二年も前に消滅している今残っているのは噂だけだ。それに、何かが残っていたとして、どうやってアリスブルーと解る。結びつく鍵は？研究者かデータか、それとも発見された遺跡か．．．．まったく見当のつかない事だ。かえって、この情報に食らいついてくる奴ら自身が、目的かもしれんな。つまりお前さんは、その餌と言うことにもなりうる。お前に情報を与えて依頼した奴は、陰でコソコソお前の動向を見張っているかもしれんぞ」。

「そんな．．．．．」

と声を詰まらせるアビンの顔は、青くなっていた。

「まっ、これは俺の推測だがな。気にするな、お前の周りで変なことが起きているわけでもないだろう」

とホルストは彼を安心させようと諭すように言う。

その言葉を噛み締めるように、アビンは考えてみた。確かに、言われてみてばこれと言って変なことは起きてはいない。ただ、宇宙港での経験以外を除いては、あれは俺を監視していた奴の物だったのか。今は未だ何も確証できないが、警戒しておくにこしたことはないなど。

「何か、思い当たることがあるのか」

とホルストの言葉にハツとしてアビンは顔を上げた。

「どうしたんだ」

「いえ、そんな事あったのかなと、考えていたんです」

とアビンは答える。

ホルストは、その答えを聞いて

「なら心配するこたないさ」

と安心させる言葉を掛けながら、こいつ何か隠していると、感じ取っていた。

ホルストも、この船でミュラーに遭ってから、きな臭い物を感じていた。そして今アビンが持ってきた話から、それをいっそう感じた。そして、アビンと会ったときに有った違和感が、今は確信に変わった。此奴は諜報員だ。たぶん銀河帝国のと。

「ミャオ〜ン」

と突然シヨンの胸元で寝入っていたミュラの子供が、目を覚ましてぐずりだした。

その声でホルストは、思考を中断させられた。

「やれやれ、その猫、お腹が空いているんじゃないか、シヨン」。

「そうかも知れませんが、でも、ミュラの子供には、何を上げたらいいのでしょうか」。

「ミュラの子供ね。今どの位だ。生後何ヶ月だ」。

「未だ一ヶ月も経っていないそうです」。

「じゃあ、ミルクってとこだな」。

「ミルクですか．．．．．」。

そんな風なやり取りをしている中も、ミュラの子供はシヨンの胸元で泣いていた。

「ミルクならレストランにルームサービスを頼めば」

とアビンは提案した。

「でも今は、パーティーでそんな余裕は無いのでは」

と美緒。
「どうしましょうか」
とシヨン。
そこへポーンとドアのチャイムが鳴った。
「誰だ」
とホルストは、セキュリティのスイッチを押して答える。
すると、
「エナです。此方で、ささやかな宴をもようしてありますが、ご一緒しませんか」
との返事が返ってきた。
「いいのか？」
「はい」。
その答えが、返ってくるとホルストは、ドアを開けた。するとスラッと長身の女性が長い金色の髪をなびかせながら入ってきて、アビン達に目を留めて言った。
「あら、チーフ、お客さんだったんですか。それも、お嬢ちゃん達。御邪魔でした？」
。「いや、そんな事はない」。
エナは、アビンに目を留めて
「これはこれは、先ほどの学生さん。チーフと知り合いだったの」
と、言う。
それに答える様に、アビンは「まあ」と返事をする。
「お客さん達も如何です？」。
その誘いの言葉にアビンは
「わたし達も混じると、部屋が窮屈になるのでは」
と返す。
「ご心配なく、わたし達の部屋はファミリー用ですから、四、五人増えようが大丈夫ですから」。
その返事を聴いてホルストが尋ねた
「今何人いるんだ」。
「七人ですが」。
「とすると一人、男が混じっているな、誰だ」。
「メイソンくんです。他のみんなは、殆どダウンしてますから」。
「つまりタフな奴だけ残ったと言うことだな」。
「それは、失礼です。チーフ、わたしとメイな事務ですから、今日はそれほど疲れることはしてませんが」
とエナは、少しむくれながら返事をした。
「そうだった。悪かったすまん」
とホルストは謝罪した。
「ところで、チーフ、お客さん達と交わりません。．．．．．実はメイソンだけですと、白けちゃうんで、出来れば、ご一緒に来ていただければ嬉しいんですが」。
するとホルストはやれやれとばかりに
「最初からそう言えばいいんだ。どうせ、メイソンだけでは、場が持たなくなってきたんだろう」
と言う。
「さすがチーフ、解ってらっしゃる」。
「おだてても、支払いは持たんぞ」。
「うっ、読まれてた」。
「当たり前だ。お前達の考えそうな事、解らんでどうする」。
「では、来ていただけるんですね。それから、アリスちゃんの抱えているミュラの子もいいわよ、どうもお腹が空いている見たいね。その様子だと。違う？」。
少しとまどいを憶えながら、シヨンが答える。
「そうなんです。エナ」と、
アビンはエナの言葉とシヨンの反応注目した。
「じゃ、何かルームサービスを頼まなきゃね。あつ、シヨン 御免ついつもの癖で、愛称で呼んじゃって、御免ね」
と、エナは申し訳なきように謝罪する。
そんなエナの反応に、シヨンは幾分冷ややかな反応との思える言葉を返す。

「かまいません。エナ」。

「御免ね」。

アビンはホルストの部屋を出ながらホルストに尋ねた。

「先ほどから気になっている事があるんですが、尋ねて宜しいですか」。

「かまわないが、どんな事だ」。

「ホルストさんもエナさんも、シヨンが抱いている。動物が、ミュラだとどうして解ったんですか。余り知られていない動物なはずなんですが」。

「その事か。我々は仕事上色々な所に行っている。時には、命の危険な所にも。そして、そんなおり、野生のミュラと遭遇した事もある。彼らのテリトリーを犯さなければ、襲っては来ない。ただ、彼らのテリトリーは半径二キロに及ぶ、だがこれはさして問題ではない。問題となるのは彼らの、警戒エリアだ、これは半径百メートル、この範囲に入ると外敵と見なされ襲われる。ただ此方が、常に彼らの前に姿を現す。害を与えないいつもの風景と認知されれば、生まれたばかりの子供がいらない限りは、安全だ。子ずれの時だけは要注意なんだ」。

とホルストは詳しく話してくれた。その話を聞いてるうちに、エナ達の部屋に着いた。部屋番号は、5B-212だった。

「着きました。此処がわたし達の部屋、そして、女の館ってところですか」。

「下世話な紹介はいい、エナ」。

「解りました。チーフ」。

そして、クスツと笑ってから、敬礼していた手を下ろしながら言った。

「申し訳ありません。ヘンツエ達の癖が、うつってしまいましたわ」。

「エナ。俺がいない時には、そうやって俺を茶化しているのか」。

「申し訳ありません」。

「まっ、いい。早く中に入れてもらえないか。この人数で、ドア口にいると目立って困る」。

すると、エナは、クルツと向きを変えると、ドアのチャイムを押して

「わたしよ。チーフとお客さんを連れてきたわよ」

と言う。

「お客さん？ちょっと待ってて」

との返事が返ってきた。そして直ぐにドアは、スツと開いた。

エンジニアリングワーカー

アビン達が入った部屋は、Bクラスの部屋だとしても、ファミリー向けという事で、かなり広い、ただし、さすがにAクラスの部屋に比べれば調度品や各備品は質素だ。しかし、この部屋の広さは、ホルストの部屋よりも、かなり大きい、それに、リビングがあるのは、ファミリー向けと言うことだろう。

そのリビングに備え付けられたソファは、端に寄せられて、広く場所を確保して、そこに既に五人の人間がお菓子と食べ物と飲み物を囲んで座ってくつろいでいた。

ドア口に迎えに出た女性が、アビンに言った。
「始めまして。わたし、さつき・春日と言います」。
「あっ、此方こそ始めまして、アビン・ホーンブロワーです」

と彼は受けた。
アビンは、差し出された彼女の手を握って握手をしながら、細い手の割には、しっかりした手だと感じだと考えてた。

すると、まるでそれを察しているのか

「わたしの手、堅いでしょう」

と彼女は言った。
その言葉に反応する様に、彼は手を離してしまった。
「申し訳ありません。あまりにもしっかりした手なものでつい」

と断りの言葉が口をついて出た。
しかし、彼女は、アビンの反応を見ながら、優しく微笑んで言った。
「気になさなくてよ、驚かれたでしょう。わたしの右手はサイバユニットだから」。

「そうなんですか」
と、アビンは頭をかきながら申し訳なさそうな表情をする。
そんな素振りをしながらアビンは、この人は、自分の手が作り物だと言うことに、引け目を感じていない強い人だと感じていた。

彼がそんな風を感じているところに、エナが急かすように、
「そんな所に突っ立てないで、さっさ、奥へどうぞ」

言った。
「あっ、解りました」。
そして誘われるように、アビンは褐色の肌の男の側に座った。

「よろしく、アビン・ホーンブロワーと言います」

と言いながら、手を差し出して握手を求める。
「此方こそ、よろしく。スティーブ・メイソンだ」

と答えて握手した。
そんな二人に、
「そこの男二人だけで、まとまらないで。メイ二人の間に入っちゃって」

とさつきが言う。
「それは失礼じゃない」
とメイが答えると、そんな事はかまう事はないとばかりに

「いいから、割って入って」

と、さつきは、即答する。
すると、ホルストが適当に座ろうとすると、
「チーフは、此処上座に座っていただなくては」

と言葉が飛ぶ。
「そうなのか」とホルストが答えると、「はい！」とキツパリとした答えが返ってきた

。「あんたは、チーフの右よ」
と、さつきの言葉が飛ぶ。
そんなこんなで、ひととおり皆が席に着く。アビンとメイソンの間にはメイ、リンがいる。そして彼の左にはシヨンが座っていた。その隣が美緒。そしてエナ。アビンの直

向かいが、ホルスト、彼の左がさつき後には、アビンにとっては、見知らぬ人物だった。「さてと、今日のメンバーはこれで全員です。今エナが、追加のルームサービスを頼んでいるから、皆さん、遠慮なく飲んで食べてください。では、今日も一日ご苦労様でした」

と言って、酒の飲める物は、酒を飲み干し、それ以外の者は、ジュースを飲んだ。ところで、各自の自己紹介は、飲み物を飲みながらなされた。ホルストは知っていたの跳ばして、ステイブ・メイソンは、ホルストのチームで電子回路技師でシステムプログラマーをしている褐色の肌の生真面目な男だが、言葉の端々に軍人らしい言葉が見え隠れする。それでアビンが、それとなく尋ねると、元特殊部隊の隊員だった事をあさり話した。これにはアビンも拍子抜けをした。余りにもオープンだから緊張の欠片もない。メイ・リンは、チームの事務とアプリケーション・プログラマーをしている長身の女性。エミーナ・プロックフェルもメイと同じ部署で、エルファの長身の女性。さつき・春日は、メカニックで電子回路技師だ。特にパワーシステムに強い、背丈は普通の女性。発言がかなり積極的なのは、彼女がホルストのチームのメカニックのナンバーワンだからだと、他の女性達は、口を揃えて言う。ナターシャ・イワノビッチは電子回路技師でアプリケーション・プログラマー、彼女は長身でガッチリした体格だ。この体格はメカニックの方が似合うなどアビンは、彼女には失礼なことを思い描いてしまった。エリザベート・ブルッフはシステムプログラマーでロジック回路技師で、背丈は普通の女性。自己紹介以外は、殆ど話さない。ステラ・ラッセンはメカニックでアプリケーション・プログラマー、ションと美緒を除いて一番若いし未だハイスクールに通っていると言われたら、鵜呑みにしてしまう様な童顔の女性。これが、アビンが紹介された男一人に、女性全員である。

ひととおりの各自の自己紹介が、終わったところに、ルームサービスが追加注文の飲み物と食べ物、それからミルクを持ってきた。

するとホルストが、口を開いた。「そこにあるソーサーを取ってくれないか」。その言葉に、従うようにブルッフが手前にあった少し深めの皿を取ってホルストに回した。

「ありがとう。これに今来たミルクを注いで、ミュラの子供に与えてみてくれ」。

と、ホルストは皿をションに回した。

「これにですか」。

「そうだ」。

その声に従うようにションは、皿にミルクを注いで、ミュラの子供の前に置いた。するとミュラの子供は、美味しそうに、ピチャピチャとミルクを舐め始めた。それを見てホルストが言う。

「やはりな」。

「どういう事です」

とアビンは尋ねた。居合わせた者達も同意見だった。

「つまり、そのミュラには飼い主がいて、早い時期からその子を世話をしているということだ」。

「どうしてそんな事が解るんですか」。

「飼われていなければ、生後一ヶ月ほどで、皿に注がれたミルクなど飲みはしない。という事は、その様に慣らされている。飼い主にしかそうはできないということだ」。

「なるほど、そういうことですか」。

まるで、難問が解けたように、皆はホルストの話に安堵した。

「ところで」

とアビンは、疑問に思ったことを尋ね始めた。

「飼い主がいると言うことは、誰かがミュラの子を持ち込んだと言うことですね」。

このアビンの何気ない発言は、皆を沈黙させた。

「どうしたんです？皆さん急に黙りで」。

するとホルストは静かに言った。

「ミュラの子供は産まれてから、数ヶ月は親元長い時間離す事は出来ない。離してしまうと子供を捜してうろつき始める。それによって、不必要にテリトリー広がり、同時に警戒エリア広がり、やたらに他の動物を襲い始める。飼い主以外はな、つまりこの船に、親も一緒に乗っているのなら、既にその子を探してうろつき始めているということだ。もう既に誰かが犠牲になっているともかぎらん」。

そんな彼の左横には、シヨンがピツタリと着いていた。その腕には、ぐっすり寝入ったミュラの子供が抱かれています、そして、シヨンの表情と言え、何を考えているのか測ることの出来ない無表情だ。

そこでアビンは、それとなく尋ねた。

「シヨン？重くはないのかい」。

「イイエ、ダイジョウブデス」、

と音の強い答えが返ってきた。

「本当に？よければ俺が、変わろうか」。

「シンパイシナイデクダサイ」。

「そうか、解った。ところで、シヨン、君に尋ねたいことがあるんだが、いいかな」。

「なんでしょう。わたしに答えられる事なら、何なりと」。

表情と発音が戻って答えが返ってきた。

その反応にアビンは一瞬たじろいでしまったが、気を取り直して尋ねた。

「気を悪くしないで、聴いて欲しいんだが、何故、みんなは、君のことをアリスと呼ぶんだい」。

確かに、先ほどまでの部屋にいた人達は、みんなシヨンのことをアリスと呼んでいた。聴くとシヨンの愛称だそうだが、理由は尋ね損ねてしまった。そこで、この際本人に、聴いてみようと思ったしだいだった。それで、そう呼ばれているときに、浮かない顔をしている理由も、言ってくれるのではないかと彼は思ったからだ。

すると、シヨンは、アビンの顔をと言うよりも目を、じっと見てから口を開いた。

「お知りになりたいようですね。解りました。お話ししましょう。事は簡単な事なんです。すが、わたしが、オクトーバー市に、来てホルストさん達と知り合った時が、わたしが十三歳の時でした。その時、美緒さんとも知り合ったんですが、その年の暮れに、孤児達の為に劇をしようとの話が、持ち上がったんです。いつもは七月に行っているのですが、新しいメンバーが出来たので、つまりは、わたしのことなんです。みんなに慣れることも兼ねると、不思議の国のアリスを、やったんです。そのアリス役が、わたしでした。初めは断ったんですが、皆から、勧められ、伯父様達も強く勧められ、ドクターにも治療には、最適の判断だと言うことで、お引き受けしたんですが、それが良かったのか悪かったのか、それ以来、アリスと呼ばれる事が多くなったんです」。

と、シヨンの話が終わるや美緒が突然割り込んできて。

「そう、その時のシヨンて、今よりももっとあどけなかつたのよね、アリスにバッチリ合っていたのよこれが、少しシャイなアリスだったけど。でもね、これが受けたのよね、子供達にも、関係者の大人達にもね」。

「そ、そうなんだ」。

突然の割り込みに、たじろぐアビンだった。

「そう、その時に取ったデジタル・フォトのデータ有りますが、アビンさん、見ます？」。

「それは見てみたいな」

とつい言ってしまったアビン。

すると突然

「だめ〜！」

とシヨンが大声で叫んだ。

その声は、通路中にワア〜ンと響き渡る凄まじい物だった。その声にアビンは一瞬クラッと目眩がしたが、何とか持ちこたえたが、ふと美緒を見ると、耳を押さえてしゃがみ込んでいた。

「も〜う！ブラストボイスなんだから。解った。前言撤回するわ」。

と、美緒が声を張り上げた。

ところで、こんな大声が発せられたのに、不思議にもミュラの子供は、いっこうに起きようとしなかった。

「シヨン。その声量は、オペラ歌手も真っ青だな。出来れば、今度からは、少し声量を落としてくれると助かるだが」

とアビンは、未だ少し耳鳴りを感じながら言う。

その言葉に、シヨンは少し俯きかげんに

「申し訳有りません。つい大声を張り上げてしまいました」

と、しおらしく応えた。

「ほんと。そう願いたいわ。でも、叫んだのがアんじゃないかって良かったわ。もし、彼

女だったら、こんな物では済まなかったわね」。

と、美緒は少し不機嫌そうに呟く。

その言葉に、アビンは

「あの子は、そんなに大きな声が出るのかい」

と尋ねる。

すると、美緒は、ウンザリしたように「そうなのよ」と呟く。

その言葉を聞いてから、アビンは、やれやれとんだお嬢さん方だ、これからは、耳栓を用意するか、叫んだりしないように気を付けなければと、考えていた。

ようやく耳鳴りが止んだ、ころには、アビン達はAクラスの区画に来ていた。

すると美緒が

「わたしの部屋は8A-205です。そこのエレベーターを上がれば直ぐの部屋です」

と言う。

その言葉に促されるように、アビン達は、エレベーターでF8に上がった。

そのエレベーターを出ると、広いエレベーターホールが広がっていた。それは、シヨンの部屋に行った時と、同じようなホールだったが、シヨンの部屋に行くときは右手が公園を見渡せるウインドウだったに対してこの度は、左手に公園を見た。

そして、ホールから延びる二番目の通路の手前から三室目が、8A-205だった。

すると、部屋の扉の前で、美緒は、

「ありがとうございます。此処まででけっこうです。アビンさん。後は、シヨンが無事に送り届けてください」

と言った。

「そうですか。では、お疲れさま、お休みなさい美緒お嬢さん」

と、アビンは丁寧に頭を下げて、お別れを述べる。

「なんか、何処かのお姫様になったみたいね」

と、満面の笑みで美緒は答える。

「では、お休みなさい。シヨン、アビン」

と言って美緒は、部屋に入っていった。

「お休みなさい美緒さん」

とシヨンもその言葉を受けた。

そして、ドアがスーと閉じると、アビンは、フーツと、息をついてから

「では、シヨンお嬢様、お部屋にエスコートさせていただきます」

と言った。

「解りました。よろしくナイト様」

とシヨンは、少しアビンを茶化すように応えた。

そして、そこで従いに少し目を合わせてから、二人ともクスツと笑いが漏れた。

それから、アビンが手で促すと、シヨンはそれに従って、先を歩き始めた。

それに従って、アビンは歩き始めてから言った

「ところで、そのミユラの子供はどうでしょうか、明日の朝にもミツチエルさんに見てもらおうか」。

「そうですね。ミツチエルさんなら、この子の面倒を見られそうですし、何か知っておられるかも知れませんね」

とシヨンは応えた。

「それがいい。俺は、ミツチエルさんに尋ねたいことが、有るんで、良ければ一緒に、行かないか」

とアビンは提案する。

「宜しいのですか。わたしはかまいませんが」。

「良かった」

とアビンはポツリと言う。

するとシヨンは、

「そう言えば、ミツチエルさんの部屋を知りませんでしたね。解りました。わたしから船長さんに頼んでみましょう」

とニコニコしながら応える。まるでアビンの考えていることを察するように。

その言葉に、アビンは感謝しながら、この娘は、本当に勘がいいなと思っていた。

そうして二人は、エレベーターも中に消えたいった。

そんな二人をホールの奥でじっと観察している人影があったが、アビンは気が付いていなかった。

衝撃の翌日

「おはようございます。アビンさん」。

「ああっ、おはよう。シヨン」。

今日のシヨンは、昨日とうって変わっておとなしめの服装だったと、言うよりも昨日のパーティーのドレスが派手すぎたに過ぎなかったのだが、今日のは、白い服装だった。その服装を見てアビンは、男の子が着けていても似合う服装だと思った。

「どうかしましたか」

とシヨンは不思議そうな顔をして彼に尋ねる。

「いや、何でもなし。ただ、昨日と比べると今日はかなり様変わりした物だから」

とアビンは言い訳を口にした。

「この服装の方が、動きやすいですから、わたしは気に入っていますが、伯父様達はお気に召さないようです。アビンさんは如何ですか」

とシヨンは言ってきた。

「そうだな、いいんじゃないか」

とまるで合わせるだけの言葉だったが、正直に言ってこの娘は、この様な服でも、とてもキュートに似合うんだなと、思うしだいだった。

「ありがとうございます」。

こんな風に感謝されると、なおいっそう褒めたくなるが、それは辞めようとアビンは思って、用件を口にした。

「では、船長さんに、ミツチエルさんの部屋を教えてくださいに行くとしますか」。

「そうでした。この子の事もありますから」。

と、話ながら抱いていたミュラの子供を少し持ち上げながらシヨンは応えた。

そして二人は、7Aのエレベーターフロワーから上に上がった。それはAM9:10頃のことだった。これは、昨日アビンがシヨンと別れてから彼の部屋に、AM9:00に7Aの一番エレベーターフロワーで待っていてくださいとの連絡があったからだ。

しばらくすると、このエレベーターで行ける最上階層F12に着いた。

ピーンと言ってドアが開くとシヨンはエレベーターを出ながらアビンに尋ねてきた。

「アビンさん船長さんの部屋は、此処から二階層上にあります。階段を使いますか。それともエレベーターを使いますか」。

「どっちが近いんだい」。

「階段の方が近いです。エレベーターは此処から三十五メートル程船の後部に向かって歩いた所にあります。階段は、直ぐそこに見える螺旋階段です」。

と、シヨンは手で指し示しながらアビンに説明した。

「それでは、階段を歩くとしますか」

とアビンは答えた。

「解りました。では、ご案内します。デュパルク船長もお待ちしておりますから」。

「待っている？ どういう事なんだシヨン」。

「ですから、待っておられるということです」。

「何故、ミツチエルさんの部屋の番号だけ教えてもらえば、事は済むのに」。

と、アビンは少し自分は考えすぎているのではと、思いながら言う。

「わたしにも解りません。今朝方、船長から昨日の伝言について話したいことが有るから船長室まで、アビンさんと一緒に来るようにとの連絡がありました」。

と、シヨンも理由が解らないと、首をわざとらしく傾げて答える。その様子は、あどけない少女そのものだった。

「今朝連絡が、いつ頃に」。

「朝、と言っても船の中では朝も夜も関係がありませんが、船内時間でAM8:20頃に、つまりテラリーズ標準時ですが、直接に船長からインターテレコムメッセージが、有りました。あっ、申し訳ありません。船内テレビ電話が有ったんです」。

とシヨンは途中で専門用語を普通になおして、彼の質問に答えた。

「べつに、言い直さなくてもいいよ。ところで、その時の船長の顔はどうだった」。

「そうですね。少し、沈んだ様子でした」。

と答えながらシヨンの顔は、どうしてその様な質問をされるのですかと、尋ねているようだった。

「そう。解った」

アビンは、短く言葉を切った。

「どういう事なんです。何が、お解りになったのですか」。

「いやなんでもない」

と彼に疑問を投げかける眼差しをするシヨンに、誤魔化すように言った。

「そうですか。では、お尋ねしません」

とシヨンは、言葉を返して口を閉じた。

そのまましばらくは、シヨンは、口を閉じたまま何も話そうとしなかった。その為、アビンは、怒らせてしまったのかと考えた。

それも、螺旋階段を、二階層分、上がったところで解けた。

「アビンさん。船長の部屋は此方です」

とシヨンは、彼を導きながら通路の奥へ歩き始めた。

しばらく、歩くと左手に乗員会議室が有った。その、反対側、右手の方に、会議室のドアから三メートル奥に行った所に有るドアに、船長室と有った。

その前に立ち止まってから、シヨンはチャイムのボタンを押した。

すると、中から

「お二人さんか、今ドアを開けるから中に入りなさい」

と有りドアが、スーと開いた。

ドアが開くと、二人は中に入った。

するとそこには、デュパルク船長ともう一人制服の男が立っていた。

「よく来てくれたな、シヨン、それとホーンブローワーくんだったかな、歓迎するよ。．．．オツと、それから彼は、この船の乗船医員長のアルフレッド・シュナイダー博士だ」

とデュパルクは歓迎と医者を彼らに紹介した。

それに対してシュナイダーは

「船医のシュナイダーだよろしく、シヨンお嬢さん、そしてホーンブローワーくん」

と儀礼的なあいさつをした。

それを受けるように、アビンも

「此方こそ、よろしく御願います。シュナイダー博士」

とあいさつをする。

そして、シヨンは

「よろしく、アルフレッド、あなたが、この船の船医をしていただなんて初耳です」

とあいさつをする。

「な～に、じつは、バカンスの旅費がたらなくて、船長に頼み込んだら、この船の船医長の代理を旅費代わりにやってくれるなら、載せてやらないでもないがと、誘われて最終到着地まで、ただ働きという事になっているんだ。だから、九月になるまでは、街には、帰らないから、僕のオフィスに来て、メリッサが受付をしているだけだからね」。

「そうなんです。医院長が、よく承知しましたね」。

「いや、この為に、寝食を犠牲に働きましたからね。夜勤や緊急病棟にもノルマ以上携わりましたから、さすがに医院長も文句は言わなかった。ただ、休みボケで、腕を落とすなよとは言われたよ。はははあ」。

するとシヨンはクスツと笑ってから

「相変わらず、のんきな方ですね」

と言った。

そんなやり取りを征するように、デュパルクは軽く咳払いをしてから口を開いた。

「君達に、わざわざ来てもらったのは、ミッチェル女史についてなんだが、つまり、なんだ」。

「どうしたんです。何かあったんですか」。

と、アビンが尋ねると、デュパルクに替わってシュナイダーが答えた。

「ミッチェル女史は、今朝、亡くなった」。

「えっ！？どうして」。

と、アビンはシュナイダーに理由に問いたがそうとした時に、後ろの方で、ミュラの

子供を抱えて立っていたシヨンが、シュナイダーの目をジッと見据えながら言った。「ミッチェルさん、ブラスターで撃ち殺されたんですね。アルフレッド？」。

「ああっ、君に見入られたら、隠しようがないね。シヨン」。

「申し訳有りません。覗き込むようなことをしまして」。

「そうだな、褒められたことじゃないな」。

そんなやり取りをアビンは、理解できなかったが、一つだけ確かなことは、ミッチェルは殺されたらしいという事だった。

「でも、どうしてミッチェルさんが、殺されたんですか」。

と、アビンは尋ねながら、この答えは今は得られないだろうな思っていた。

あんのじょう答えは

「今は、調べている最中で、何とも言えない」

というものだった。

それで、彼は仕方なく

「ところで、死亡時間は、いつ頃なんです。それに何処で亡くなっておられたんですか」

と尋ねた。これも君には、知らなくていい事だと、言われるのがおちだなと思いがながらの事だった。

しかし、意外にも答えは返ってきた。

「殺されたのは、船内時間でAM7：50位で、殺された場所は、後部格納デッキ内だ」。

と、デュパルクは、苦虫をかみつぶしたような顔で答えた。

「そうですか」

とアビンは、答えながらAM10：00に後部格納デッキに顔を出すのは難しくなるなと考えていた。

すると、突然シヨンが、口を開いて言う。

「申し訳有りませんが、ドクター。ミッチェルさんの遺体は、今何処にありますか」。

その言葉を聞いてシュナイダーは、ポツリと言った。

「今はまだ、医務室の医療用ベッドに寝かせてあるが、後しばらくしたらカプセルに収めようと思って居るんだが、．．．．．」。

「カプセル？そうしましたら今ミッチェルさんの体は冷却処理をされてあるんですか」。

。「

「そうだよ、シヨン」。

「発見されたのはいつ頃ですか」。

「うむ、AM8：00だ。発見されてから直ぐに、儂に連絡があったたからな」

と、デュパルクが答える。

「蘇生を試みたんだが、即死だったよ。心臓を打ち抜かれていたから．．．．」

とシュナイダーは首を振りながら答えた。

それを聴いてからシヨンはシュナイダーに詰め寄って言う。

「申し訳有りませんが、ドクター。わたしに、ミッチェルさんを見させてください」。

その言葉にアビンは、ビクビクした。なにせ変わった娘と思っていたが、此処までとはと。

しかし、シュナイダーは、冷静だった。

そして、少し考えてから

「いいでしょう。船長は反対されますか」

と言った。

その言葉に対してデュパルクは、手振りて君の好きにするがいいとの素振りをした。

「ありがとうございます」

「なに、後始末は君がするんだから、かまやしないさ」

と少し投げやりにデュパルクは言う。

「では、シヨン案内しよう。ああっ、ホーンブローワーくん君も一緒に来るかい。無理にとは言わないが、．．．．．」。

「わたしも行きます」

と彼は答える。

「では、これにて失礼します。船長」

と言ってシュナイダーは敬礼をする。

それに答えるように、デュパルクも敬礼をして答えた。

そして、彼ら三人は船長室を出て、先ほどアビンとジョンが来た道に戻っていった。「医務室は、F9に有るエレベーターから直ぐの所に有るから、さほど時間は掛からないよ」

とシュナイダーは、二人を案内しながら言った。

それから、三人は無言のまま階を下りF9でエレベーターを降りると少しひらけたエレベーターフロワーに成っていた。そこには、八脚程のソファが配置されており、フロワーから船の後部に向かって延びる通路の左側が医務室だった。

ただ、ここは、医務室の前のフロワーというよりも、病院のロビーという雰囲気だった。なにせ医務室の扉の右側はガラス張りのカウンターに成っていて、そこに、二人の看護婦が、着いていた。そして、その一人が、此方側に気が付いたと思うとカウンターの右にあるドアから出てきて、シュナイダーに駆け寄って来て言った。

「先生！お待ちしていました」。

シュナイダーは、看護婦の様子が変なのに気が付いて言った。

「どうしたんだね。マリア」。

「先ほど、警備隊の隊長さんが来て、ミッチェルさんの死因と死亡時間を尋ねられました」。

「それで、君は答えたのかい」。

「いいえ、担当の先生がいらっしゃらないので、お答えできませんと、お伝えしたところ、無理矢理に病室に入られてミッチェルさんのカルテと報告書見て帰って行かれました」。

「何と強引な。後で船長に伝えておくよ。留守にして迷惑を掛けてしまった様だね。済まない」。

「いいえ、そんな事は．．．．．無いです」。

「でも、当直の医師のカルロスがいたんじゃないのかい」。

「カルロス先生は、A区画の乗客に急患が出たとの事で、出かけられた後のことでしたから」

と看護婦は、少し気まずそうに答えた。

「そうか、それならいかしかたない。君達の落ち度ではないよ」

と看護婦を慰めるシュナイダー。

「お取り込み中、申し訳有りませんが、ミッチェルさんの所に案内していただけませんか」。

と、ジョンがぶしつけにもシュナイダーに声を掛ける。

「あっ、申し訳ない。今、案内する」

と言ってから、看護婦にシュナイダーは彼ら二人を紹介した。

「此方の方達は、亡くなられたミッチェルさんのお知り合いの方で、アビン・ホーンブローアさんとジョン・F・ファーンビーさんだ。これから、会って頂くんだが、不都合なことは無いかね」。

「いいえ有りません」

とさっきまで狼狽していた事を微塵も感じさせない位に、既に立ち直って、看護婦は答えた。

「ならいい。では、わたしがこの方達を案内するから、後は仕事を続けてくれ」。

「解りました。先生」。

と言って看護婦は、先ほど出てきたドアに戻っていった。

シュナイダーは、看護婦を見送りながら、二人に言った。

「さて、面会と行きますか。ジョンお前が何を考えているかは、察しがつくが、まずは様子を見てくれ」。

ジョンは彼の言葉に、まったく反応を示すことなく、彼について、医務室の扉に向かった。アビンは、言葉の意味が掴めないまま、仕方無しに付いて行くのだった。

ミッチェルさんの遺体の有る病室に案内されて入った部屋は、四つほど有る病室の一番奥の部屋だった。その部屋には二つのベッドがありそのうちの一つに透明なシールドで覆われていた。そのシールド越しに中に人が寝かされているのが見えた。その横顔は、確かにミッチェルだった。服装は、紺色のドレスのようだった。それが、アビンには気になった。

「この人が、シリル・ミッチェルだ。間違いないかね。ジョン？」。

と、静かにシュナイダーは言った。

「はい」。

すると。
「では、どうするんだね」
シュナイダーは、入り口に所にあった椅子に腰掛けて言う。
「通信端末は、有りますか」。
「ああ、その生命維持装置の制御システムは、独立したコンピュータになっているから回線を接続すれば直ぐにも通信できるが、何をする気なんだい」。
「使っても宜しいですか」。
「かまわんよ。どうせ患者は、もう亡くなってしまったのだから．．．．．」。
すると、シヨンはコンピュータの前に椅子を持ってきて座って、キーボードを軽やかに打ち出した。
「今現在、ノルマンディーは、ハイパードライブの状態にありません。亜空間通信システムをダウンロードします」。
と、シヨンは言うなりキーを打つ。するとコンピュータは、しきりに、何かにアクセスをする。
数秒するとナビゲーション・システムの画面が現れた。
「ボイス認識システムを立ち上げます」
と言いながら、キーをたたくシヨン。
するとコンピュータのスピーカーから音声がでてきた。
「唯今より、音声の認識で命令を実行できます」。
「では、船のハイパーBサイトのアンテナを立ち上げてください」。
「了解．．．．．現在、Bサイトにアクセスしています．．．．．既に立ち上がっています」。
「では、BサイトにてGF回線を開いてください」。
「開きました。アクセスコード指示してください」。
「アクセスコード、SSF-001R/H9+V-6392」。
「唯今、接続しています」。
すると、シヨンは少しため息を付いて椅子の背もたれに、もたれかかる。
しばらくして、相手とつながったのか、スピーカーからまったく違った音声がした。
「こんな、遠距離から誰なのよ。このわたしにちよっかい出すのは」。
その声を聴いてアビンは何だこりゃと思って
「どっかと混信したのか、シヨン」
と尋ねた。
「これは、相手のそれなりの冗句なんです」。
と、シヨンが答えると、相手もそれに反応して言葉を続けた。
「あれ～、シヨンから直接わたしに、つなげてくるなんて珍しいじゃない」。
「御願いたいことが、有るんだけど」。
「これまた、しおらしいこと。あれ、其方は宇宙船なんだ。ノルマンディー？良い船じゃない。わたしが乗ってもいいんだ。御邪魔して良い」。
「良いですよ。この際、どうせ一回でもアクセスしたなら、何時までも追尾するに決まってるんでしょう」。
「よくご存じで。では、今其方に、行くからね」。
とあってからプツンと回線がとぎれた。
「どういう事なんだい、シヨン」
とアビンはシヨンに尋ねた。
すると「今に解るさ」とシュナイダーが、冷ややかに言う。
その言葉に、アビンが不思議がっていると、彼の目の前に、ポツと青白い光の固まりが現れた。それを何事かと、見ているうちにだんだん大きくなり直径二メートル程に成ると、今度は、収縮を始めながらしだいに人の形になり始めた。そして、人の形が、ある程度定まると、その光る物体は、床に降り立って、スウツと女の子の姿になった。
アビンは、呆気にとられながら、現れた少女を見て改めて驚いた。そこに立っているのは、シヨンそのものもだったからだ。銀髪に近い薄紫の長い髪といい、背格好といい、その表情は、まさしくシヨンだ、ただ着ている物が、水色のドレスと言う違いだけだ。
しかし、これ程よく似ていながら印象が、何処か違うなどアビンは考えながら、思わず言葉を発した。
「君は、誰だい」。

その言葉に、相手は、クスツと笑ってから言った。
「あら、始めての方が、いらっしやったのね。シヨン」。

「そうなの」。

「ふう～ん。ドクターもいらっしやるのね。わたしに、どんな用件かしら」。

と、その少女は、笑みを湛えながらアビンを見据えながら話す。

その時、アビンはその少女の目の色がシヨンと違って、両眼ともエメラルドグリーンであることに気が付いた。

「セシリア、あなたに御願いがああるの聴いてもらえませんか」。

とシヨンが、その少女に向かって話した。

すると、その少女は、くるりと向きを変えるなり

「これは、珍しいこともあるんですのね。あなたがわたしに頼み事なんて。で？どんな用なのシヨン」。

シヨンは、椅子から立ち上がり、その少女に面と向かって言った。

「そこに、横たわっている、女性を蘇生して欲しいの」。

「シヨン。あなた自分の言っていることが、解っているの」。

「ええっ」。

「あなたの言っていることは、あなたの理に反することでは、無いの？」。

「確かにそうですが。このまま、この方が、亡くなられるのは、かわいそうです」。

「かわいそう？感情が本当に戻ってそう言っているのかしら、ただ、公平では無いという理由じゃ無いのかしら。違う？」。

「そうかも知れませんが、あまりにも．．．．．」。

「わかったわ。シヨン、わたしに出来るかも知れないけど、知っているでしょ、条件があると云うことを」。

「ええ、許可します」。

「それなら、いいわ、やってあげる。ただし、記憶が全て戻るとは限らないわよ。それから、この人のデータを本当に取ってもいいのね」。

「仕方ありません。ただし、使用の制限は付けさせていただきます」。

「さすがに、そう来ましたか。まっ、わたしとしてはデータだけでも良かったんで、それは、かまわないわよ」。

その答えに、シヨンはフツとため息を付いてから

「では、御願い。ところで、どの位掛かりそう」

と、相手に尋ねた。

「そうね。ざっと二時間位かな」。

「では御願い」。

と、シヨンは、話し終わると、椅子に腰を下ろした。

そんな様子をシュナイダーは、良く心得ているのか、静かに見守っていた。しかし、アビンには、理解できない事だらけだった。それに、このシヨンそっくりな、少女はいったい何者なんだか、疑問が次から次へと湧いて来るのであった。

そこで、あらためて彼は尋ねた。

「君は、誰？いったい何者なんだ」。

すると、その少女は、アビンの方に振り返って言った。

「わたしは、シンク。テラコンピュータのコミュニケーション・システムを三次元フォログラフで実体化した物。そして、かつてはセシリアと呼ばれていた人物の写しでも有るのです。つまり、アビンさん、あなたがお存じな用に、シヨンの双子の姉妹だった者です」。

その言葉に、アビンは、昨日シヨンに亡くなった双子の姉妹がいる事を聞いた事を思い出した。そして、彼は尋ねた。

「それは、どういう意味なんだ」。

「はい。わたしシンクは、かつてセシリアだった人物が、死亡する前に、テラコンピュータのコミュニケーション・システムの接続媒体としてテラコンピュータのシステムの一部として取り込みました。そして。現在に至るまでに、わたしは、コンピュータと同化して今、この様な形で、アビンさんあなたの前に現れる事が出来るのです」。

「そんな事が、出来るのか」。

「現に、このわたしが、そうです」。

「しかしそれは、許されないことだ」。

「確かにそうですが、これは、わたし自身の意志によるものです。どうせ死ぬのなら、

何かの形で生きていたいと考えても不思議はないでは、無いでしょうか」。

「それは．．．．．」

アビンは、その言葉に、答えを無くした。

「当惑されるのは、無理もないことです。この様なことは、聴かれた例が無いに違いありませんから。これも、かつての高度に科学が発達した時代の産物ですから」。

「産物？．．．．．と、言うことはロストテクノロジーなのか」。

「はい。そうです」。

「どっかの遺跡から、発掘された物なのか」。

「はい。ですが、その出所は、わたしは知りません。このシステムは、発見された物を改良し、より効率的なシステムに造り替えた、わたしの父、以外には誰も知らないようでした。その父も、今から三年前に事故でなくなりましたので、後を引き継いだわたしには、このシステムのこと意外は、知らされていないのです」。

「それは．．．．．」

とまたも言葉を詰まらすアビン。

今度は、シヨンの地位とやの亡くなったことを聴かされて、何やら尋ねるたびに人のプライバシーに踏み込むようで、気が滅入ってきたからに他無かったからだ。

「どうしました」。

「いや、何でもありません。ところで、どうして初対面なのにわたしの事を知っているんです」。

と、アビンは、話の方向を変えて質問した。

すると、今まで無表情だったセシリアの顔がほころび、クスツと微笑んでから口を開いた。

「ここに、現れながら、この船のデータバンクにアクセスして、おおかたの情報は引き出したの、その中に、アビンさんあなたの情報もあったの、でも少し変わった仕方ですね。あなたは、銀河帝国の諜報員で、この船に調査活動のために乗船した。そして、ある程度、自由に行動できる権限を与えられています。ご存じないかも知れませんが、あなたのIDパスは、その権限があることを示すデータが書き込まれています。これは、通信回線により銀河帝国の承認を直ちに受け、この事に関するデータは全てプロテクトされました。ですから、今、お話しした事は、未だ誰も知りません。この件に関する、責任者に付いてはG・E・A・Sとのイニシャルだけでした。どうも、かなりの高位の方のようですね、アビンさんをこの船に使わした方は。これで解りましたか」。

「ああ、だが．．．．．」

「あっ、ご心配なくシュナイダー博士は信頼できる方です。と言っても信じてもらえないかも知れませんが、アビンさんには、そう、信じてもらうしかありません」。

と、セシリアは、冷たく言い放った。

「．．．．．」

アビンは、何と答えたらいいのか迷っていた。すると、シヨンが口を開いて言った。

「セシリア。この人が、どの様に殺されたか、そして、このミュラの子の面倒の見方の情報をまず取り出して欲しいの」。

「解ったわ。蘇生を開始して一時間もすれば、情報が取り出せるわ。ただし、死後数時間経っているから、何処まで正確なデータが取り出せるか補償できないんだけど」。

「それでもかまいません」。

「ならいいわ、後はわたしに任せて、シヨン。それから、シュナイダー博士は、少し手伝っていただけませんか」。

ふいに振られた物だからシュナイダーは、少し慌てて

「ああっ、かまわないよ」

と答えた。

「では、一時間後、また来てね。これから、ハイパードライブの時も回線を維持できるように、システムを構築しながら、蘇生するわ、その間誰にも回線が閉じられないように、してくれる？シヨン」。

「それは、可能ですよ。アンに言ってわたしの持ってきているコンピュータに亜空間通信端末をつなげてもらいますから」。

「じゃ、そうしてくれる。シヨン」。

「それでは、一時間後また来ます」。

と、言うなりシヨンは部屋の外に出ていった。それを追うようにアビンも

「では、失礼します」

と言っ出て。

二人は、セシリアとシュナイダーを病室に残して医務室を出た。そして、エレベータの前に来たときにアビンは、少し振り返って思った。医務室と呼ばれているが、どちらかというところホスピタルホールと言った方がいいような、設備の整った医務室だなど。

そんなアビンを見てシヨンが不思議そうに尋ねてきた。

「どうしたんですか。後ろを振り返って、思いに耽るような素振りをされていますが」。

その言葉に、ビックリしたようにアビンは答えた。

「え！？いや、この医務室、看護婦といい設備といいちょっとした病院より立派じゃないか。これで医者が二人もいるのは、船の医務室には出来過ぎじゃないか。違うか」。

アビンのその言葉に、微笑むようにシヨンが答えて言う。

「お医者さんは二人ではなく三人いらっしやいます。それに、この船は、外宇宙用に設計されているので、医療設備も整っています。また、お金持ちが利用することが多いために、人員と設備が充実しているのです。まっ、金に飽かしてやりたい放題と陰口をたたかれる方もいらっしやいますが、万が一のことを考えれば、設備が行き届きすぎと言うことはないと思いますが、如何ですか。アビンさん」。

「まあ、そう言われれば、そうだな」

と少し渋った答えをするアビン。

「さてと」

と言っ、シヨンはエレベータに一番近いソファに、座って、左腕にはめている銀色のブレスレット軽く右手の人差し指で押さえる動作をした。

アビンは、それとなくシヨンの様子を眺めていた。

それに答えるかのように、シヨンはアビンの方を向いてニコツと微笑んでから「ファンクシヨン」と、言った。

それから、彼が眺めていると続けて言った。

「インターテレコムメッセージ、オープン」。

すると、銀色のブレスレットの上当たりの空間に5インチのディスプレイが現れた。

シヨンは、それに向かって

「アン・フォレスト・ファーナビーにアクセス・オープン」

と言っ。

すると、直ちにそのディスプレイにアンの姿が映し出されて、応えてきた。

「はい、アンです。何でしょうか。シヨン様」。

「今は、何処にいますか」。

「はい、わたし達の部屋ですが、どういう御用ですか」。

「申し訳ないのですが、わたしのメタルブルーのコンピュータに亜空間端末をつないで、起動させておいてくれませんか」。

「はい、解りました」。

「出来れば、今すぐにでも御願いたいたいんですけど、いいですか」。

「はい、唯今」。

すると、しばらくの時間が経って

「シヨン様、起動させました」

との言葉が返ってきた。

「では、しばらくそのままにしておいてください」。

「はい、解りました。シヨン様」。

「ありがとう、アン」。

「いいえ、では失礼します」

と、映像は消えた。

すると、シヨンは「クローズ」と言った。それと同時に、空間に現れていたディスプレイは、かき消すように無くなった。

アビンは、まるで狐につままれたようなおももちで、シヨンに言った。

「それは、いったい何なんだい」。

「これですか。これは、バイオリストと言う物です」

と、銀色のブレスレットをアビンに見せるようにして応えた。

「バイオリスト？ どういう物なんだ」

その問いに、シヨンは少し考えてから口を開いた。

「これは、わたしの事故の後遺症を軽減するためにプリスト博士が作ってくださったバイオリズム調整器なんです。今行ったような付加的な機能も果たします。他に

もポータブルシールドなどの機能も持っています」。
「と言うと、ある面での医療機器と言うことなんだね。付加的な機能が付いている」。
「まあ、そうなんです。わたしが増やした機能もあるんですが、今のような通信機能なんかはです」。

なるほどと、アビンは、ションのバイオリストをまじまじと見ながら、こんな小さな物がねと、考えているうちに湧いてきた、疑問を口にした。

「ところで、そんな小さな物で、エネルギーの供給は大丈夫なのか」。

「はい、わたしの身体からエネルギーを取っていますから、でも、ご心配なく、体温とか運動エネルギーや光から得ているだけですから」。

アビンは、その言葉を聞いて、ホツとしていた自分に気が付いた。どうも、昨日から長い時間にわたって側にいるものだからこの娘に情が移ってしまったようだった。

「どうしました」

とションが、アビンに声を掛けて来た。

その言葉に、彼はハツとした。どうも彼は、思いに耽ってしまっていたようだ。ただ、何を考えていたのか自分自身も思い出せなかった。どうも、頭の中が空白になった様だった。何故？と考えても、空白になった事は思い出せない。どうしてだと考えていたときに、空白になる前のことを思い出した。それは、話しているションと目が合ったと、いうことだった。その後のことが、完全に思いの中から抜けている。

何故だ。何故だ。思い浮かばない。

「どうしました。御加減でもお悪いのですか」

と再びションが尋ねてきた。

その言葉に対してアビンは、頭を振りながら応えた。

「ああっ、どうも疲れが溜まっているのかな。最近、論文で睡眠時間が少ない毎日だったからな」。

「お疲れなんですね。少し此処で休みませんか、アビンさん」。

「そうだな」

と言ってションの側に座った。

すると、すかさずションは、

「少し横になっては如何ですか。時間になれば起こしますから」

とアビンに言葉をくれた。

「ありがとう。少しそうさせてもらうよ」

と彼は、ションの勧めを鵜呑みにするように応えて、横になり、直ぐ寝入った。

まるで、先ほどまで何日も一睡もしていないように。．．．．．

見えない顔

見えない顔

「アビンさん」。
「アビンさん、起きてください」。
と可愛い声が、耳に響く。誰だろうと、身を起こし目を開ける。
だが、未だハッキリと声の主が見えない。幾分未だ目がかすんで、相手が見えない。
すると、また声がして
「アビンさん。時間になりました」
と彼に告げた。
ここで、ようやくハッキリ見えるようになった。そして、声の主はシヨンだった。
「何だ、シヨンか、どうかしたのか」
とぶっきらぼうに答えた。
「時間です。病室に参りましょう」。
その言葉によって、頭がハッキリして、状況を思い出しシヨンに応えた。
「もう時間になったのか」。
「はい」。
「俺は、どの位寝ていた？」。
「約一時間ですが」。
「そうか、解った。すると、もう病室に行ってもいいんだな」。
「そういうことになります」。
「じゃ、病室へ行こう」
と言うなり彼は、立ち上がって医務室の入り口に向かって歩き始めた。
「解りました」
と言ってシヨンも立ち上がって彼の後に続くのであった。
二人がミッチェルの病室にはいると、部屋の内部は緑色の光で一杯になっていた。それに、アビンが当惑しているとシュナイダーが、声を掛けてきた。
「もう、二分もすれば、落ち着くから、そこで二人とも待ってくれないか。それと、後ろのドアは閉じてくれないか」。
その声に従って、ドアを閉じて待つことにした。
そして、本当に二分ほどすると、光は落ち着いて、医療用のシールド内だけにとどまるようになった。
「これで、もう大丈夫ね。後は安定すれば、蘇生は完了ね」。
と、セシリアは言いながら此方の方を見た。
「あっ、丁度いいところだったわ。今、データを取りだし終わった所よ、お望みの所を見させて上げるわ」。
と、言葉を続けて来た。
その言葉を聞いてシヨンは、セシリアに、
「では、見せていただきましょうか。ただ、時間は、どの位確定できますか」
と質問する。
「それは、問題ね。この人の時間の観念に左右されますから、データの長さなどで測るのは間違いが多いですから、この人が移動した距離と、要所要所で見ている時計などを基準にするしかありませんね」。
と、いかにも問題がありそうと言わんばかりの素振りで、セシリアは答える。
するとシヨンが、それに答えていった。
「既に、全てのデータを取っているんでしょう。では、そのデータの中で、昨日の夜から今朝までの行動の中で、時間が確認できる箇所を死亡時間に最も近い物から演算できませんか。セシリア？実際に既にタイムデータを取ってあるんじゃない」。
その言葉に対して、セシリアは、クスツと笑ってから言った。
「さすがに抜け目無いのね。と言うよりも、わたしの行動をよく知っているんだからしようがないわね。まっ、元双子ですからね」。
「では、見せていただけますか」。

「シヨンの言葉に、しょうがないわねと、身振りをしてからセシリアはアビンの方を見て、

「宜しいですか。ミスター・アビン？」

と言った。

その言葉に、アビンはつられるように、

「ああっ、やってくれる」

と答えるにとどまった。

「では、お見せします」。

と、セシリアが言くと、シールドの上の空間に映像が映し出された。

「これが、最後に時間を確認できる映像です。AM6：57彼女が、誰かからのインターテレメッセージを受けたときから始まります。ただ、相手の顔は、ご覧のとおり映し出されていません。音声はどうもハッキリ再生できませんでしたので、何が話されたかは、この時点では、解りません。この時点から人に会うまでを跳ばしますが、宜しいですか」。

と、セシリアは話した。

「次人に会うまでは、どの位経っているだ、だいたいでかまわないが」。

と、アビンは、セシリアに尋ねた。

「そうですね。彼女の部屋から後部格納デッキまでの時間、約15分程度、映像から確認する限り真っ直ぐそこに向かった様です」。

「15分ね．．．」

とアビンは考え深げに言った。

「では、その会った所から始めますが、宜しいですか」。

「そうだね」。

「では、約十五分後からです」。

映像は、格納デッキのドアに、彼女が入り込む所から始まった。そると奥から彼女を呼ぶ声があつて、その方に向かって歩き出す。

「映像が暗いけどこんなのも」

とアビンは尋ねる。

すると、セシリアが

「どうも、格納デッキ内が、暗いためのようです」

と答えた。

その答えにアビンは、納得した。そして映像は続く。彼の傍らではシヨンが、そして、後ろの方ではシュナイダーが、それを眺めていた。

こんな様子をアビンは、他人の頭の中を何人かの人間が覗き込むとは、いただけない話を通り越して悪趣味の極みだと言う思いが、脳裏をよぎる。だが、今、起きてしまった事件を解決するには仕方がない事と割り切って、映像を見続けた。

しばらくすると、相手が現れた、どうも一人では無いらしい、見える頭数をざっと数えて見るだけでも最低六人は、いるようだった。そして、相手の声がした。

「やあ、ミス・ミッチェル。ご足労掛けて済まない」。

「どうして、あんな事をしたの！あれじゃあの子が可愛そうよ！」。

どうも、かなりミッチェルは怒っているらしかった。それにしても相手の顔がよく見えない、胸から上が殆ど暗くて解らない。

突然、映像を止めてセシリアが口を開く

「この映像では、会話を優先して再生しています。じつは、この時の思考が、かなり混濁してしまっていて、かなり、過去と現在がごちゃごちゃになってしまっていて、正確な時間が判定できません。たぶん、幾つかのショックと、死亡に伴う記憶神経損失などが関係していると思われます。まあ、死亡時間から考えて見ればましな方ですが。では続けます」。

そして、再び映像は動き出す。

それにしても、相手の顔が、ハッキリ見えないのはどうもいただけないと、アビンは思ったが、黙って見ていることにした。

すると、ミッチェルが相手に近づいたのか、幾分、一人の顔が、ある程度ハッキリしてきた。とはいうものの、やはり人物を特定するには、情報不足というところだった。

。「仕方がないことじゃないか、あいつが檻を破って暴れだしたんだからな。他の奴では諷靡化しが利かない。そこで、サーベントタイガーをわざと放って、カキフラージュを

したのき、やっごさんも上機嫌で、そこら中駆け回っていたから、初めは、そう、暴れているところを確認させてから、電子銃で眠らせればそれで、終わりだったんだが、ちよつとした手違いあってな、仕方がない事さ」

と、相手の男が答えている。

それに対してミッチェルは尋ねる。

「どんな、手違いがあったのよ」。

「第三者が紛れ込んだ。それと、あんた、子供を一緒に載せただろう」。

「いけないかしら」

と彼女は強気の言う。

「それが、トラブルの元になった。三匹子供を入れたらろう」。

「ええ．．．．．」。

「それが良くなかった。今の奴を見ろ、その檻でしびれて横たわっている。奴の目を見れば直ぐに、解る」

と強い調子だが、冷ややかに声が響く。

すると、ミッチェルは、また奥へ歩き出した。何人かの人をかき分けながら、その時、アビンは、その内の幾人かが、制服を着ていることに目を留めた。何処かで見たことのある制服だ、今は、どうも思い出せないの、そのまま、映像の続きを見ていた。

しばらくすると、歩みが止まったのか、ある一点を見つめているようだった。それは、どうもコンテナのようだった。コンテナの扉は既に開いていた。その奥には、何か大きな物が横たわっていた。と、突然「ベティー」と彼女が奥に向かって声を掛ける。

すると、奥で、何かが動く、何かがすれる音と低いうなり声がして、奥の暗がり、二つの鋭く赤く光る物が浮かび上がる、それは、彼女の方を見ているようだった。

再び、「ベティー」と彼女が、声を掛ける。

まるで、それに応えるかのように、奥から低いうなり声がして、二つの赤い光は、細長くなる。この時点で、二つの赤い光は目であることが解った。

そして、誰かが近づく足音がすると、突然、奥の生き物が、ガ〜！ともものすごい勢いで吠えた。

その反応を見てなのか、近づいて来たさっきの男は、ミッチェルの側に立ち言った。

「こいつは、狂ってやがる。自分の子を二匹もかみ殺しておきながら、残りのもう一匹を探し回ってやがるんだからな」。

「そんな！．．．．．」。

「だが事実だ」。

「此奴は、もう使えん。此方で、制御できないからな」

と相手の男は冷たく言い放つ。

「では、残りの子は、何処に」。

「さあな、何処にも見あたらないし、見たという話も出てきていない。どこぞに、逃げたのかもしれない」。

「さて、これでいいかな、ミス・ミッチェル。サーベントタイガーは、第三者が紛れ込んだために、関係ない奴が死んだらこっちの計画が水の泡だ。だから．．．．」。

「殺したと、言う事ね！」

とミッチェルは言葉を荒らげる※。

「では、この子はどうするの！」。

「処分するしかあるまい」

と相手の男は冷たく言い放つ。

すると彼女な何を思ったのか、相手の男の右腰にあるホルスターからブラスターをサツと抜いて構えて言った。

「そうは、させないわ。この子はちゃんとわたしが見るから、そつとして置いて！」。

「そうカッコしなさんな、危ないから。それをこっちに渡してくれ」

と相手の男は右手をさしのべた。

すると、ミッチェルは、威嚇の為なのか男の足下に一発、発射した。その手は微かに震えて見えた。

「落ち着いて。そうしないと怪我人が、出るから、なつ、いい子だから」

と言いながら男はジリジリと彼女に近づく。

後もう少しで、彼女のブラスターに手が届きそうになった、その時、手元のブラスターが、光を放ち、相手の男の左肩をかすめて光線が走る。

すると、だんだん映像が、トの方を向きだした。そして、直トを向いたかと思うと、

映像が急に落ちて、コンテナの扉の方を向いて止まった。それも、床に横たわった状態の映像だった。そして、暗がりの奥の方で、二つの鋭い二つの目が、ジッと此方を伺っているのが見えながら、だんだん映像が、暗くなっていった。

そして、暗くなる前に、最後の音声が

「何故、撃った」

と微かに聞こえて、映像は終わった。

「どうです。これが、この方の最後です」

とセシリアは冷やかに言っていた。

「そう、ありがとうございます。これで、ミツチエルさんが、何故殺されたのか解りました。ですが、彼らは、何者でしょうか。データはどうなっていました」

とシヨンが、静かに尋ねる。

「それが、依頼者と言うだけで、何をすることも彼女には何も告げられていなかったみたいなのね、それから、これも聴きたいと思っている情報よ。あの奥に横たわっていた赤い目を光らせている動物なんだろうと思う」

と、セシリアはニコニコしながら言う。

「もったいぶらせないで欲しいな」

と今度はアビンが応える。

「驚かないで、聴いて。あれはミュラの雌の成獣」。

「ミュラの成獣だって！」

とアビンは思わず叫んだ。

そんなアビンをなだめるようにセシリアは言う。

「でも、今の会話からすると、処分されているんじゃない」。

その言葉に対してシヨンが、口を挟む。

「ですが、処分できる時間が有ったのでしょうか。今はAM11:17です。ミツチエルさんの殺されたのがAM7:50で、発見されたのが、AM8:00です。この間のわずかな時間で、体長四メートルを超える動物をどの様に処分できるのでしょうか。それから事件の現場はしばらくの間、船長の権限で閉鎖されます。つまり立入禁止です。警察の方がいれば早く処理できるのですが、いないとなれば、最も近いステーションか寄港地に立ち寄る間では、そのまま閉鎖と言うことになります。たぶん重装備の警備員が、常備待機することになるでしょう」。

その応えに、セシリアは、ため息を付きながら言った。

「相変わらずね。確かにそう言えるわ。ただ、警備員がこの事件に加わっていたらどうかしら」。

「それは、否定できませんが、全てが、関与しているとは限りません。船の警備員は航行の度に三分の一が、交替になる規定ですから、それに、再び乗れるとも限りません。かなりランダムに、割り振られていますから」。

「それも規定？」。

「そうです」。

「相変わらず。堅いのね。こういう事に関しては。まあ、規定何条何項目とまで言わないのは感謝するわ」。

「そんなに堅いのかい。シヨンは？」

とアビンはセシリアに唐突に尋ねる。

「そうね。ある意味では堅いと言えるわね。反面、抜け道も良く知っているのだけれどね」。

と言いながら、セシリアは、微笑んだ。

「だが、そのミュラが、処分されずに残っているとどうなるんだい」。

と、今まで、沈黙していたシュナイダー口を開いた。

「それは、ハッキリこうだと言えない。ただ．．．」。

「ただ？」。

「ただ、暴れ出したら、人を襲い破壊の限りを尽くすらしい」。

とアビンは、そうとしか言いようがなかった。

「らしい？それでは、船長にどう報告したらいいんだ」。

と、シュナイダーは、少し苛立たしげに言う。

「申し訳有りませんが、アルフレッド、わたし達にも解らないんです。余り知られていない動物ですから、ただ、あのミュラに関して言えば、たがは外れてしまっています。ミツチエルさんが、目の前で殺されることにより」。

障壁

PM 2 : 1 1。

白い陰は、人影のない通路をひた走っていた。

突然、何かの物音に、直ぐ足を止め、音のする方とは違う通路のに入って天井にひらりとへばり付いた。

「今日は、参ったな。朝早くから殺人とは、それも、もったいない若い女性ときたもんだ。なあ、聞いてんのか？」。

「ああ、解った。聞いてるよ」。

「そうか。おかげで休み時間なのに、こうして見まわんにやあならんときたもんだ。おい、聞いてんのか？」。

「だから、聞いてるよ」。

「ん？何かお前顔色が悪いぞ。大丈夫か？」。

「大丈夫だって、気にすんなよ」。

「そうか、じゃ、俺は、この調整室の中をしてくるから、此処で待機してくれ」。

と言いながら、警備員の一人はドアのロックを外して、中に入っていった。

それを確認すると、残った一人は、ドアを閉じて、その前に立った。そして、少し身震いをして、自分の肩を無意識にさすりながら独り言を言った。

「何でこんな寒気がするんだ。風邪でも引いたのかな」。

すると彼は、誰かに見られている感覚に襲われて、周りを見渡した。だが、誰もいなかった。自分たちの来た通路、エレベーターの方に通ずる通路を見た。誰もいない。そこで、これから行く、方向の通路を見た。それは、後部格納デッキの上部に通じていた。奥の方は、昨日のトラブルのせいで、未だ暗くなっているようだった。だが、彼は、独り言を言いながらその方に少し歩いた。

「確か、機能回復したはずなのに、またトラブルか」。

その言葉を言い切るか切らない内に、フウッと、風が、彼の顔を吹きすぎていった。

彼は、何気なく風の吹いてくる方に振り返る。

そこには、巨大な生き物が立ち竦んでいて、鋭い牙をむき出しに、大きく真っ赤な口を広げ、彼に襲いかかってくる。

彼は、応戦しようと反射的にブラスターを抜く。しかし、それより早く、鋭く長い爪を持った、巨大な手が彼を薙ぎ払う。

通路に鮮血が飛び散り、ざっくりと引き裂かれ、物言わぬ肉の塊と化した人が横たわる。

そして、巨大な生き物は、獲物を口にくわえてその場を、暗がりの通路の方へ姿を消していった。

去った後には、おびただしい鮮血と切断された右腕とが残されていた。

それを知らないもう一人の警備員が調整室の中から出てきて、相棒がいない事に気が付いたが、彼は、調子が悪くなったので医務室にでも行ったのだろうと思って、警備センターに連絡する。彼は、帰ってきた返事により、エレベーターの方に歩いて行って上の階に向かった。

「どうしたんですか。浮かない顔をして」。

「いや、何でもない」。

「そうでしょうか。わたしには、もうウンザリだと、仰りたいように見えますが」。

「解ったよ。シオン、君の言う通りだ」。

「どうしてなんです」。

と、不思議そうに尋ねてくるシオンにアビンは、説明をすることにした。なにせ、シオンを送って部屋に行くと、ファーナビー提督と教授が、二人を昼食に誘うために待っていたのだった。そして、先ほど、やっと解放されたのだった。

「正直に言うと、俺は、提督や教授というお偉いさんと食事をするのが、嫌いなんだ。どうしてかと言うと、堅苦しくて、マナーがどうのこうのというのが、特に嫌いなんだ。だが、勘違いしないでくれ、マナーが必要ないと言うつもりはない。ただ、

「マナーについてとやかく言われたくはないと、いうことですね」。

「そう、そういうこと」。
するとシヨンは、クスツと笑って。

「そうですね。食事の時のアビンさんの顔ったら、もういい加減にしてくれと、言わんばかりでした」。

と、言う。
「気付いていたのか」。

「はい」。
「じゃ、何故助けてくれなかった？」。

「仕方ありません。伯父様方が、気を悪くされますし、目上の方には、それなりの敬意を示さなければなりませんから」。

と、シヨンはにこやかに応えた。
それを見て、アビンは、シヨンに食事に誘われる様な事が有っても断ろうと思うのであった。

「ところで、ミュラの子供は、本当に置いてきて良かったのかい」

とアビンは尋ねて話題を変えた。
「はい。ホルストさん達にこれから話そうとしている事柄には、あの子がいたら、不安を煽るだけですし、まだ、ミュラに関してのデータが、セシリアから届いて無い状態では、余り連れ歩くのは、どうかと思ひまして。でも、部屋にほったらかしに、しているわけではありませんから、しばらくはアンが、面倒を見てくれると言っていましたから、ご心配なく」。

との答えが返ってきた。
「それもそうだ。ところで話は違うけど、アンは、どうして何時も君のことをシヨン様とか言うのかい？確かに、以前主従関係があったとしても、どうしてお嬢様ではなくシヨン様なんだい」。

と、アビンは少しシヨンの顔色をうかがいながら尋ねてみた。これは、二人の会話を度々聞いていて何時も引っかかる疑問だった。しかし、尋ねては見たものの答えをくれることは、はなっから期待はしていなかった。
だが、「その事ですか。それは、当の本人に聞いてください。わたしは、その様に呼ばれるのを望んではいないのですから」

とシヨンは静かに答えた。
確かに、答えは得られなかったが、シヨンとアンの関係は彼が知るよしもない深い関係があるかもしれないとの感じが強くなった。

ガタン！
突然、二人の乗っているエレベータ止まって明かりが消えた。
その時とっさにシヨンは、制御パネルのエマンジェーシーボタンを押す。すると、ほんのわずかな間をおいて明かりは点き、たぶん最も近い7階まで移動して止まった。

「何があったんだろう」
とアビンは、思わず呟いた。
「解りませんが、降りましょう。アビンさん」

と、シヨンは彼を促した。
「そうだな」
と言って、エマンジェーシーの為ドアの開閉が、手動になっているので、開くのボタンを押した。

すると、ドアは、スウツと開いた。ここは、おなじ7階といっても船の後部の方向、エンジンに近いエレベータのためエレベーターフローは無い、ただ、目の前に真っ直ぐに通路が延びているだけだった。

仕方がないなと思ひながらアビンは、エレベーターを出て階段を探しに歩き出した。その時突然、シヨンが呟いた。

「血の臭いがします」。
その言葉に、アビンは驚いて足を止めてしまった。
「どういう事なんだ、シヨン」。

その言葉にシヨンは、俯いて、同じ言葉を繰り返す。
「血．．．血の臭いがします」。
そんなシヨンをアビンは、両肩を掴んで言った。
「どうしたんだシヨン。大丈夫か」。
するとシヨンは、目を見開いてアビンを見ながら応えた。
「付いて来てください」。
と、言うなりシヨンは彼の手をサッと放れて歩き始めた。
そんなシヨンを彼は理解できなかったが、誘われるように付いていった。
そして、少し歩くと十字路に来た。左側の通路は何故か途中から暗くなっていたが、シヨンは其方の方向に歩いていった。アビンもそれを追う。
そして、少し歩いたところでシヨンが突然立ち止まったとおもうと崩れ落ちるように倒れかかる。それをアビンは透かさず支えた。
そして、アビンは異様な気配を感じてシヨンが歩いていこうとした方向を見て息をのんだ。
そこには、通路の床と壁一面に真っ赤な血の海が広がっていた。そして、その中ほどの左壁の所に人間の腕のような物が転がっていた。
そこでアビンは、シヨンを抱きかかえて、十字路まで戻って見渡し船内電話を探す。
すると、エレベーターの方向に少し行った右側に、それは有った。そこでただちに、彼は、警備センターに連絡をする。
「もしもし、警備センターですか。わたしは、アビン・ホーンブロワーです。通路に大量の血と人の腕らしき物が、転がっています。直ぐ警備の方を御願います」。
「どの辺りですか。其方の場所の近くですか」。
「はい。近くです」。
「出来れば、その場所の通路ブロック番号が解りますか」。
「ええっと、．．．」
と彼は十字路の上に有る、標識に書かれている番号を見つけて言った。
「7 R 4です」。
「解りました。其方に、警備員を派遣します。それから、何か気が付かれたことはありませんか」。
「いいえ。他には何も．．．」。
「解りました。そこを動かさないでください。出来ればですが、それから、警備員が到着するまで、この回線はオープンにしておきますから、何かあったら呼んでください」。
「ありがとう」
と応えてからアビンは、何かあったら後戻りは出来ない、後はエレベーターに逃げ込んでドアを閉じるしかないなど考えた。そして、ここに来たのは失敗だったな逃げ道を確保し忘れていた。
そして、アビンは未だ気を失っているシヨンを抱えながら、妙に落ち着き払っている自分に気が付いた。この非常時に、もしかしたら処分されなかったミュラが、暴れ出しているかも知れないのに、この落ち着きは、何だろうと思ったときに自分の顔が、にやけているのを感じた。
何ということだと、自分に驚きながら壁により掛かった。その時、シヨンは目を覚まして言った。
「アビンさん。どうしたんですかわたし．．．」。
その答えをアビンは手短かに応えて、今の状況を説明した。
「分かりました。申し訳有りませんでした。でも、もう大丈夫ですから、降ろしていただませんか」。
「あっ、すまん」
と言ってアビンは、シヨンを降ろした。

「ワン！此方、ゼクター4のベッカーだ。7 R 4に直通のエレベーターが故障だ。今、1 2 Q 4の通路ブロックにいる。最短のエレベーターは、何処だ」。
「此方、ワン。ブリッジよりの連絡でB 1 1ラインの一部が損傷の為使用できないエレベーターが二つある。今、最も近い経路は1 1 Q 1のエレベーターを使って行くしか有りません。Q 3は故障Q 2とQ 5は7階には、止まりません。Q 6は調整中です」。
「了解」

と言っ^てて交信を切るベツカー。
そんな彼を他の三人の隊員が注目して指示を待っていた。
「では、11Q1のエレベーターまで走るぞ！付いてこい」
と声を掛ける。

その言葉に、他の三人は「イエッサー」と応えてベツカーの後にしたがう。
12階の通路を重装備の警備員が走り抜ける。そんな光景を、一般乗客は、何があつたのかと、通路の端寄りながら眺めている。そんな注目を浴びても、彼らは、気にすること無しに通路の端に到達し、一気に階段を駆け下り11Q1のエレベーターに到着、一般乗客が乗り込もうとしているのを止めて

「申し訳有りません緊急事態です。先に行かせてもらえますか。苦情は、其方の船内電話にて、船長に申してください。では、マダム失礼します」

と言うなり年輩の婦人をエレベーターから出して、直ぐ側にある船内電話に預けて、中に乗り込んだ。

そして、ベツカーは、懐からキーを取り出して操作パネルに差し込み非常ボタンを押してから目的の階を指定する。すると、ドアは、スウツと閉まり、高速で7階に到着した。

ドアが開くと直ぐに「こっちだ！」と言って掛けだした。彼らは、いったん船の前の方向に走り二ブロック先で左に折れて7O5でまた左に折れ、それから、7R5でまた左に折れて真っ直ぐ7R4に到着した。

そこで、彼が見た物は、通路一面を赤く染める血と通路の端に転がる人の腕だった。直ちに彼は、二人の警備員をその場で警戒を行わせ、自分ともう一人で7Q3のエレベーターに行つて、乗客を保護することにした。

その場所に着くと、若い男と少女が立っているのを確認した。

そこでベツカーは、二人を安心させるように言った。

「もう大丈夫です。安心してください。我々が来たからにはもう大丈夫です」。

それに応えて若い男は

「それはありがたい。感謝します」

と言った。

その答えを聞いてベツカーは警備センターに連絡した。

「こちら、ゼクター4のベツカーだ救援願いの二人を確保した。ブリッジにもそう伝えてくれ」

と連絡する。

それから、ベツカーは、尋ねた。

「何があつたんですか。ええと．．．」。

「わたしはアビン・ホーンブロワーと言いますが、解りません。エレベーターが急に止まって出てみると、ご覧になった通りの惨状です」。

「解りました。アビンさん。彼について、安全な場所にお戻り下さい」。

「ありがとうございます」。

その言葉を聞いてから、ベツカーは、自分の後ろにいる警備員に言った。

「アヒム、ホーンブロワーさんとお嬢さんを安全なところまで連れて行ってくれ」。

「解りました。どうぞ此方へ」

と言っ^てて二人を導いて歩き出した。

ベツカーは、彼らを見送ったから、

「殺人事件かもしれん。増援をよこしてくれ」

と警備センターに連絡をした。

それから、ベツカーは、現場に戻り惨状を眺めて思った事が独りでに口から漏れた。

「いったい誰が、こんな事を事件を起こしても逃げ道は少ないのに、馬鹿な奴だ。だが、此処までやるなんて、正気では無いな」。

そこへ警戒に当たっていた警備員が、声を掛けた。

「チーフ、あれを見た下さい。あれは、もしやハンドブラスターではありませんか」。

ベツカーは、その警備員が指さしている方を見た。その先には、銀色に鈍く光るハンドブラスターが転がっていた。それも、血の海の向こう側に。

そこで、ベツカーが言った。

「ロン、他には気が付いたことはないか」。

「はい。血が、点々と奥の暗がりが続いています。それと．．．」。

「それと？なんだ、ロン」。

「この腕に付いている衣服の切れっ端は、我々と同じ物です。つまり．．．．」。
「つまり犠牲者は、警備隊員だと言いたいんだな」。
「はい。チーフ」。
「そうかもしれんな」
と言うなりベッカーは、空かさず警備センターに連絡する。
「こちら、ゼクター4、ベッカーだ。今、非番な者を含め警備隊員の全ての所在を確認しろ」。
「どうしたんです。チーフ」
とセンターの当直員が聞き返す。
「いいから、今すぐに確認しろ！これは命令だ」。
と、言ってからベッカーは一息ついてマッカーシーを呼ぶ。
「マッカーシー！」。
「はい。チーフ」。
「点々と続いている血の周りに足跡らしき物はないか」。
「いいえ、ありません」。
その言葉を聞いてベッカーは、はたと思い当たる物があった。そう、昨日の後部格納デッキでの騒ぎだ。あの時は暴れ出したサーベントタイガーをしとめて事足りた様に見えたのだったが、どうも、とんでも無い奴が出歩いている様だ、それも、昨日の奴よりも、でかい奴だ。そして、人ひとり引きずることなく銜えて持ち運ぶことが出来る程でかい奴だと。そこまで考えたら、急に彼は身震いして。何かやな予感が脳裏をよぎった。
丁度その時、増援の警備隊員が四名到着した。
それを見て、ベッカーはこれでも焼け石に水かもしれんなと思った。
その時マッカーシーが叫んだ。
「チーフ天井にある、あの傷は何でしょうか」。
ベッカーが、その示す方の天井を見ると、高さが六メートル有るのに、そこには、したからハッキリ何か鋭い物でえぐられた様な形で、五つの細長い穴の塊が四つ長方形の端点を示すような形であった。
「あれは、なんだ」。
「解りません。ところで、こんな物が床に落ちていました」。
「何かの毛か、それとも糸か」
「さあ」
とマッカーシーは肩をすくめて答える。
そこで、ベッカーはマッカーシーに命令した。
「それを持って、分析センターに行って来い。そして判りしだい報告しろ。分析が終わるまで戻ってくるな」。
その言葉に、マッカーシーは「イエッサー」と言って、通路を掛けていった。
その様を、ベッカーは、黙って見送った。何故か無事に着けばいいがと思いつつ。

そのころブリッジでは、デュパルクが、頭を抱えていた。
それは、シュナイダーから聞かされていた、ミュラの話が、今、入った事件の話で、どうやら現実問題となっていることを思い知らされているからだった。
「船長！指示を御願ひします」。
とワッツが、彼に催促した。
そこで、デュパルクは仕方なく指示をする。
「先ずは、Pブロックから後ろを遮断。Pブロックから後ろでF2からF8を遮断。そして、Yブロックから前を遮断。後は、この遮断区画の乗客を区画の外に誘導する」。
その言葉を聞いてワッツはデュパルクの言葉を復唱して各ブロックを隔壁で遮断し始めた。
それと同時に、此方の対処をリャーノフが、警備センターに連絡をした。
その様子を見ながらデュパルクは、先ずは最初の対処は出来た。後は、乗客の誘導と危険物の排除か．．．．．どちらも厄介だなと天井を見上げた。
そして、彼は、ミュラに関してもっと情報があればいいのだがと思った。しかし、その情報源は断たれている。ミス・ミッチェルの死でそれも無いかと、思うのであった。
そこに、警備隊から連絡が入ってきた。

何だろうと、デュパルクは、その連絡を取り愕然とした。

その様な時アビンとシオンは、7P1ブロックに有るロビーで休息していた。二人は三人掛けのソファに腰を下ろしていた。

アビンは、ソファにもたれ掛かるように、そして、シオンは何か思いふけるようにロビーの中央にある観葉植物を見ている。

そんなおり、突然、船内放送が放送される。

「乗客の皆さん、船内で火災事故が発生しました。緊急のためF2からF7のQからXまでのブロックを閉鎖します。この間のブロックにおられる乗客の皆様は、係員の指示に従って避難してください。ご協力を感謝します」。

「どういう事なんだ、あれは火災じゃ無かったぞ」

とアビンが呟く。

するとシオンがアビンを宥めるように

「あれは、乗客に不要な不安を与えないように、決められた手順で言っているだけです」

と言う。

「そうなのか」。

「そうです。ただ、火災事故と表現する辺りは、かなり深刻な状況です。あれがたんなる殺人事件なら気密漏れぐらいにしか言われませんかから」。

「と言うと、どう言うことなんだ」。

「解りません。調べてみないと」。

「どうやって？」。

「まあ、わたしに考えがあります。ちょっと来てください」

と言うとシオンは立ち上がった。

それに応じてアビンも立ち上がると、同時に警告音が鳴りながらQブロックに通じる通路に隔壁が、降り始めた。

その様な光景を気にもせずシオンはロビーの端に設けられたコミュニケーションボックスに入って行った、それに続いてアビンも中に入った。

そこは、二人が入れる程度の大きさしかなかったが、窮屈ではなかった。

「此処で何をするんだ、シオン」

とアビンは尋ねる。

「此処の通信端末を使って船内情報を見るのです」。

「そんな事が出来るのか」。

「はい」。

「でもそんな事をしたら、規則違反じゃないか」。

「諜報員の方の言葉とは思えませんね。ですが、ご安心下さい。見るだけでは罰せられませんから」。

「そうなのか」。

「はい」

とシオンは、ニッコリ笑って彼に答える。

そして、シオンは通信端末のキーボードを使って操作を始めた。その様子は、かなり素早い物だった。彼自身も論文のレポートを書き上げる時には、キーボードを使うが、それは考えをまとめながら書き上げるためだったが、シオンのタイピングは、それとは違い、まるで早口で話すような早さだ。そして、アビンが眺めていると、見知らぬ言葉やスペルや数字、記号が、頻繁に並ぶ。しばらくして、シオンが、ターンとエンターキーを叩くと通信端末から応答があった。

「ハロー！シオンわたしに何かね」。

「こんにちわ、ハーモン。今の船の状況を知りたいのですが」。

「宜しいですよ。何なりと聞いてください」。

「今、隔壁がQからXのブロックで閉じられているけど、何があったのですか」。

「はい。後部格納デッキにて、ミュラとおぼしき生命体の存在が懸念されたため、乗客の安全に備えて、船長より命令が発せられています」。

その言葉にシオンは少し考えて言う。

「どうして、ミュラと判断されたもですか」。

「それは、シュナイダー博士からのミュラが船内に持ち込まれた形跡の報告と。 7 R 4

通路ブロックで、襲われた警備員の天井に有った爪の後と、その近くに落ちていた体毛がミュラの物であることが確認されたためです」。

「他には、何か有りませんか」。

「はい。現在、行方が不明になっている警備員が三名います。これら全ては、現在閉鎖されている区画内で消息を断っています」。

「以上ですか」。

「はい。シヨン」。

「ありがとうございます。ハーモン」。

「いいえ、お役に立てて光栄です」。

と、答えが返ってきて通信が切れた。

「今のは、誰なんだい？シヨン」

とアビンは尋ねる。

するとシヨンは、クスツと微笑みながらアビンに答える。

「今のは、この船の制御システムコンピュータ。わたしが開発の時にハーモンと名付けて情報処理のテストをしながらお喋りをしていたんです。ある意味では、言語認識のチェックだったかも知れませんが、その時に、いつでもハーモンを呼び出して船のあらゆる情報を得ることが出来るプログラムを入れて置いたんです」。

「そうか。ところで、その事を船長は知っているのか」。

「知りません。メンテナンス用のシステムと記録されているぐらいで、他には、何も触れられていないからです」。

その言葉を聞いて、ため息を付きながらアビンは、船長すら知らないシステムかと思った。

だが、得られた情報は深刻な物でこれからはたいへんだなと思いながら、シヨンをチラッと見た。すると、何故かニコツと笑顔を返してきた。

「なんだい？」

とアビンは、尋ねてみた。

「アビンさんが、この事件に直接関わっているみたいな顔をして考え込んでいるみたいですから、おかしい方と、思ってしまったしだいです。申し訳有りません」。

「いや、そのとうり。目撃者にはなったが、事件を解決するのは、警備の方や船の乗員の方達だ。それにしても、たいへんな事になって船長は頭が痛いだろうな」。

「そうですね。後で、ミッチェルさんのデータが、入ったら、ミュラに関する事は、お知らせすることにします」。

「それはいい」。

と、アビンは言葉を添えながら、考えていた。もしかしたら、この事件は、ランカスター公爵、つまり教授の暗殺の為に用意された物ではないかと、しかし、考えてみれば、ミュラという猛獣をどうやって操るつもりだったんだろう。下手をすれば自分たちが襲われるのにと、考えたところで、ハツとした。その為に、操るためにミッチェルさんが雇われた、目的を知らされないまま、こう考えれば、ある程度、起きた事件のつじつまが合うなど、彼は、頭の中で、この事件に関して整理してみた。

だが、解らないのは、誰がどの様に、持ち込む手配をしたのか、そして依頼主は、誰だろうと、アビンは考えていた。そこへ、シヨンが声を掛けた。

「アビンさん。アビンさん。どうしたんです。急に難しい顔をなさって」。

「あっ、いや何でもない」。

「そうですか。．．．．．」。

どうも、シヨンはまだ何か言いたそうだったが、アビンはあえてそれを無視するように言った。

「そろそろ、部屋に戻ってみたらどうかな、セシリアからデータが届いているかもしれないよ」。

「そうですね。帰って見てみます」。

「それじゃ、ここで別れよう。これから、未だ残っているレポートを仕上げなければならないんでね」。

すると、シヨンはいかにも残念そうな顔をして

「そうですか。解りました」

と言う。

そして、何処から出したのかカード状の通信機をアビンに渡して

「これを持って行ってください。この船の中なら何処からでも交信が可能です。何か用

「有れば呼んでいただければと思います。此方からも、何か良い情報が有ればお知らせ出来ますから」

と言って、彼に、カードを渡した。

「ありがとう。ところで、使い方は？」。

「カードに向かって話しかけるだけでいいです。それだけで動作しますから」。

「そうか、じゃいただいていくよ、シヨン」

と言って彼は、コミュニケーションボックスを出た。

そして、そこを離れてエレベータに乗った。そしてシヨンが見ていないことを確認し、F9のボタンを押した。するとドアは、閉まり上の階に上がり始めた。

その様子を、背の高い観葉植物の陰からシヨンは、静かに微笑みながら見ていた。

エレベータがF9で止まるのを確認すると、シヨンは、通路を船の前の方へと歩き出した。

アリスブルーと呼ばれるもの

アビンはある考えがあって行動していた。

それは、シンクいや、セシリアにアリスブルーについて何か知っているのではと、彼は考えたからだ。これは、彼の感なのだが、消滅事故で亡くなっている事といい、ロストテクノロジーのコンピュータの事といい、何かきな臭い、確かアリスブルーもロストテクノロジーの産物だという話を踏まえれば、何か糸口ぐらい見つかるかもしれんと、予想してのことだった。

だが、セシリアにどう切り出せばいいかは、未だ何も決めていなかった。彼の悪い癖だが考えが煮詰まらなないと、怪しいと感ずいたものへ、積極的に行動する傾向がある。今回も、どうやらその様に行動して、何かの糸口を探ろうとしているのだった。

まずは、行動それも慎重に、何時も教授には壁にぶつかったら、まずは行動して当たって砕けろの精神はいいが、くれぐれも砕け散らないでくれと、言われているのを肝に銘じながらアビンは、医務室の扉に入って行き診療室の横を抜けて、ミッチェルの病室にノックをして入った。

「失礼します」。

突然入ってきたアビンをセシリアは、如何にも彼が来るのを知っていたような口振りで答える。

「いらっしゃいませ、アビンさん。何かお聞きになりたい事でも有りますか」。

その言葉に、アビンは、一瞬たじろいだが、気を取り直して尋ねた。

「君とシオンはクリーク市が消滅する前、そこで、何をしていたのかなと、ちょっと聞いてみたくなって、教えてくれないかな」。

と、言ってしまうから、何と唐突な切り出しだと、自分が情けなかった。

しかし、シンクは、そんなアビンの質問の仕方に気を止めることなく、笑みを浮かべて答える。

「いいですよ。何なりと、ただし、わたしが、何と答えようともシオンに対して、気持ちを変えないでいただきたいのです。約束していただけますか」。

アビンは、どうも含みのある言い方であることに気が付いたが、その事が何を意味するのか把握できないまま、

「ああ、かまわないよ」

と約束してしまった。

「では、何が知りたいのですか」。

アビンは一呼吸置いて、まず、シオンが研究所で行っていた事を尋ねることにした。

「シオンは、ソルティス工科大学の研究所で何をしていたんだ」。

その質問にシンクは、笑顔で答える、

「シオンは、その研究機関で宇宙航行システムの研究開発に携わっていたの。でも、試験飛行まで、自分自身でやっていたの。危険だからとわたしは止めたんだけど、聞いてはくれなかった。まるで危険なことに、わざわざ自分で飛び込んでいるみたいで、毎日が気が気では無かったわ。理由は話してくれなかったし．．．．．でも、一つだけブリistol博士からこんな事を聞いたことがあるの、わたし達の母親は、シオンの目の前で殺されたと言うことらしいの。この様なき、子供はね、親族の死を直ぐ自分の責任にすることが有るらしいの、自分のせいで母親が殺されたと．．．．．たぶん、殺した相手にも恨みを持つでしょうけど、それと共に、その死を自分のせいにする。

．．．．．たぶんそんな感情が働いているのではと、仰っていました」。

その答えを聞きながら、深刻なことをよく笑いながら話せるなど思いながら、質問を続けた。

「シオンは、クリーク市消滅事件とはどんな関わりを持っているだ」。

「もともとは、シオンが務めていた研究機関はクリーク市から50キロ離れた郊外にありましたから、クリーク市に来るのは、わたしを訪ねてくるか、遊びに来るぐらいでしたが事件の時は、わたしのやっている事を止めるために来てたんです」。

「君のやっている事を止めには？」

アビンはシンの言葉に興味を引かれて言った。
「はい。わたしのやっている研究を止めに．．．．」。

「何の研究をしていたんだい？」。

「人の思いを実体化するシステム、と言うよりも、あれは、そう、超兵器とも呼べる物だったわ。暴走して始めて気が付いたのだけど、まさか、システム自体が意志を持つとは予想だにしませんでしたから。そして、システム制御のエネルギー波でわたしとシオンを貫いたのです。偶然なんです。わたしたちの研究を止めに来たシオンと暴走を止めようとした、わたしたちが丁度重なり合った時の事でした。わたしは直撃を受け、シオンはわたしをフィルターにして、そのエネルギー波を受けてしまった。わたしは、その為に身体の細胞が破壊され、シオンはひどい後遺症が残る状態になってしまったの、わたしが、目先だけにとらわれて実験を強行したために、多くの人が命を落としたんです」。

と、話してセシリアの顔は、寂しそうな表情をたたえながら口を閉じた。
そんな寂しそうな顔をされても、アビンは可愛そうとは、思えなかった。なぜなら事件の元凶がこのセシリア自身で有るからだった。この一人の、いやたぶん他にも賛同した人物がいるだろう、それらによって十万人が、一瞬で消え去ったのだ。だから、あえて彼は、質問を続けた。未だ知りたい事が有ったからだ。

「その暴走は、消滅の形で終わったのに、何故、その原因の中心にいた人物は、消滅しなかったんだ」。

「それは、暴走を止める事が出来たからよ」。

と、意味がかみ合わない答えが返ってきた。

「どうして、クリーク市が消滅してしまったのに、暴走を止められたと言えるんだ」。

と、アビンは、問いたです。

「止める事が出来たのは、シオンよ。わたしでは無いの、暴走したコアを破壊することで停止したわ、同時にクリーク市が消滅したの、それだけのエネルギーが蓄積されていたという事に成るけど、そのまま放って置けば、星系ごと無くなっていたかもしれないの、それが、申し訳ないけどクリーク市だけで済んだと、わたしは安堵しているの」

。「安堵？十万人が消えたというのに」

とアビンは声を荒らげる。

「気に障ったらごめんなさい。でも、わたしは、最小の被害で済んだと、思っているんです」。

とセシリアは顔色一つ変えずに言い切った。

アビンは、その時、相手は人間ではないのだと、あらためて思い知らされた。そして、それならばと質問を続けた。

「では、どうして三人は、消滅しなかったのか」。

「それは、シオンがシールドを張ってくれたから」。

「どうやって、そんな強力なシールドを張れたのか、都市が一つ消滅する程のエネルギーに耐える様な．．．．」。

「それは、わたしには答えられません。そのデータは、わたしには無いからです」。

「どう言う事なんだ」

とアビンは尋ねたが、答えは同じだった。

それで、質問を変えた。

「その研究のコードネームは、何だ」。

「コードネームですか？確かジェネレーション計画とか言っていました」。

その言葉を聞いて、アビンは何と期待はずれかと思った。その時、セシリアは、妙なことを口走った。

「ただ、一部の研究員の間では、研究の事を外で口外できないため、暗黙の呼び方がありました。それは．．．．」。

「それは？」

とアビンは身を乗り出す。

「確か、アリス・ブルーとか言っていました」。

その答えは、アビンの期待していた物だった。

そして彼は、此処は慎重にと考えながら、知りたい情報引き出すことを始めた。そして先ずは、確かめたい事柄を尋ねた。

「ところで、そのジェネレーション計画は、人の思いを実体化と言ってもどんな風に行

うんだい」。

「それは、アビンさんもお存じだと思いますが、物質はエネルギーの塊だと言うことをつまり、エネルギーで物質を作り出す。それも思うように」。

「単純な物なら、ビーム砲が交錯したときに出来ると聞いているけど」。

「そんな物では有りません。作り出した物質を織りなして例えば、細胞を作り出したり、最終的には、動物や植物を作り出す。それも、自分が望む物を．．．．」。

「そんな！まるで神の業と言えるのではないか」

とアビンはわざとらしく言っただけのけた。これは、ホルストさんから聞いたことから、考えがあっただけで使った言葉だ。

「そうね、ある人達はそんな事を言っていたわ。けれど、それはまだまだ、遠い先のことと実際に出来たことと言えば、単純な構造の物で金属の板とかでした。情報の処理とそれに基づくエネルギーの制御が必要なんです。それも膨大な量のそんなの考えられますか。細胞一つとっても、その構造の複雑さを考えれば一つの国を作るのに匹敵する力が必要なんです。つまり、それだけの事柄を処理するシステムが必要なんです。そして、その為の可動システムコアとが一つとなってジェネレーション計画が進んでいました」。

「そんな大規模なシステムなら、かなり巨大な物になるから人目に触れない様にするのは難しいのでは？」

とアビンは興味本位に尋ねてしまった。

「そうですね」

とセシリアは、言いながら妙な笑みを浮かべて言葉を続けた。

「ですが、それぞれのシステムのパイプラインをする物体だとしたらどうですか？ハッキリ言いますよアビンさん。その大規模な情報処理をするのが、わたしシンク、テラコンピュータNOA9001です。そして可動システムコアの事をアリスブルーと呼んでいたわけですが。今から考えれば、それは、わたしたちの考えの未熟さを良く表していたと言えます」。

アビンはセシリアの答えを聞いてこれで、任務達成まじかだと感じて、話を詰めることにした。

「と言うことは、セシリアはアリスブルーについての情報を持っていると言うことだね」。

その言葉にセシリアは、残念そうな顔をして言った。

「アビンさん。あなたがアリスブルーについて調査していることは知っていました。ですが、これ以上の情報は、難しいです。なぜなら、NOA9001は、一度もアリスブルーとコンタクトを取っていないのです。つまり、二つのシステムは、一度も一つのシステムとして稼働したことがないのです。ですから、アリスブルー、システムコアの情報が、無いのです。残念ですが、これから組み合わせるといふ時に、システムコアは、暴走、破壊を繰り返したんです。制御システムが組み込まれていませんから、頭のない破壊兵器と化してしまっただけです。それを止めたのがシオンでした。どの様に止めたかは、わたしは瀕死の状態でしたから、知りません。そして、シオンはその事が思い出せません。その時の記憶が欠落しているんです」。

その答えに、アビンはぬか喜びだった事を思い知らされた。

「憶えてないんだ」

とアビンは、ポツンと言った。

セシリアは、彼を慰めるかのように

「期待させまして申し訳ありません。何か情報がありましたらわたしがお知らせしますから」

と言う。

「君がそこまでしなくてもいいのに」

とアビンは応える。

「いいえ、シオンが気に入ってる方ですから、ご協力を惜しみません」。

「いいのかい？」

「ええ、今となっては、わたしにとって情報を集めること位が、生き甲斐みたいな物ですから。ご心配なく」。

「それなら、お言葉に甘えさしてもらおうよ」

とアビンは、一様その行為を受けることにした。彼としては、未だセシリアの事を全て信用しているわけではなかった。

「その時、セシリアの後ろでカタッと音がした。するとセシリアが、
「申し訳ありません」
と言って後ろの患者の手を取り脈を測る。
その患者は、そうミツチェルだった。それを見たアビンは、内心ホッとした。
すると、セシリアが彼の考えを知っているかのように言った。
「アビンさん。彼女は蘇生できましたが、直ぐに話が出るわけではありません。残念
ですが、あなたやションのことは、憶えてないでしょう。新しい記憶の殆どは跳んで
しまっています。換えてその方がいいかもしれません。記憶として確かな物は、今か
ら一ヶ月以上前の物から位でしょう。それでも、色々と抜けているかもしれません。で
すが、一ヶ月前からやり直すと、考えれば、日常の生活で少しずつ補っていけるでし
ょう。それでもしばらくは不自由するかもしれません。それに後二日は、このまま眠っ
たままにしておかなければなりません。蘇生の課程でかなり体力を失っていますから。
．．．．．ところで、アビンさん、あなたに協力していただきたいことがあります」。
「何をだい？」。
「ここに、彼女を寝かせて置くことは、不信を招きます。それで、ションの部屋に移し
たいのですが、手伝っていただけますか」。
確かに言われてみればそうだ。死亡報告があった人間が、生きていては問題が起こる
。特に殺した人間に知れたらなおの事だ、と言ってどうすると考えながら応えた。
「協力はいいがどうやって運ぶ？それに死体が無くなってはまた問題があるのではな
いか」。
しかし、セシリアは平然と応える。
「それについては、わたしに考えがありますから。それと、死体については、ダミーを
入れた冷凍カプセルを安置しておけば大丈夫ですから」。
「そうなのか」。
「疑いですか？詳しいことは後でお知らせしますから、今はお引き取りください。余り
長くいると疑われますよ」。
その様に言われてアビンは、それもそうだと思い、この場を去ることにした、全てを
納得したわけではなかったが、その提案は正しいと判断したからに他なかったからだ。
「では、これで失礼。後連絡よろしく」
と言って、医務室の前のホールに出た。
そして、アビンは、これからどうした物かと考えては見たが、何も浮かばなかったの
でお茶でもしようと、Bブロックにあるティールームに向かった。

事の成り行きは何処へ

アビンは、ティールームに入ると、そこは、相変わらず空いていた。船の後ろの区画
ではたいへんな事が起きているというのに、来ているお客は、平和そのものと言う感
じだった。そんな風に見回している彼を誰かが呼ぶ声がした。
ふと、その方を見ると、ミュラーとトレッカーの二人が目に入った。そしてアビンは
、誘われるように二人のテーブルに向かって歩き始めていた。
この時、アビンの頭の中では、ある考えが浮かんでいた。この二人を何とか利用でき
ないものかと、確かに彼よりも数倍も上手の相手だ。ただ、彼としては、唯一勝てる部
分もあった。それは、発掘に関する話だ。この場に教授がいない事がかえって話を運び
やすくする。この期を利用しないわけには行かないと、彼は歩きながら考えをまとめる

。「こんにちは、お二人で打ち合わせですか、教授に付いていなくていいんですか」。
アビンはさり気なく尋ねる。
「やあ、アビンくん。此方もその事で話していたんだ」。
ミュラーが、彼の言葉に答える。
「どういうことです」。
如何にも関心ありげに聞こえるように尋ねるアビン。
「じつはね、彼にも話したんだが、わたしが黙って連れてきた。部下を彼に紹介した
んだ」。
とトレッカーは言った。
「紹介した。どういうことですか」。

「じつは、どうもトラブルが起きているらしいんだ。そこで我々としても身軽であった方が、いいとの結論から、わたしの連れてきた八人の部下を彼に紹介したんだ。後で君にも紹介する。そして今は、今後の対策を打ち合わせていたんだ」。

「本当に丁度良かった、昼食の後、急にいなくなるものだから、どう連絡しようかと考えていたところだったんだ」。

とミュラーは、トレッカーの言葉を補うように言う。

「ところで、どんな事を打ち合わせるのですか」。

アビンは、尋ねながら椅子に腰掛ける。

「今、わたしの部下二人に、公爵に付いてもらっているのだが、要所要所では、我々のどちらかが付いていようと考えている。そして、此処が肝心なのだが、乗客一人びとりの洗い出しをやる。我々でだ」。

「我々って？もしかして、わたしを含めてですか」。

「そうだ、君がいなければ、最近、公爵に近づいてきた人物か判断できないからな」。

ミュラーは厳しい目つきで彼に話す。

「そうですか．．．解りました。協力します」。

アビンはミュラーの気迫に押されて、渋々、協力を承諾したように装いながら応えた。

。「なら、いい。では本題に入ろう」

とトレッカーは言うてから話し始めた。

だいたいこの用件はこうで有った。

通常は、トレッカーの部下の八人が、二人ずつ交替で警備をする。その間ミュラーとトレッカーは各乗員、乗客の身辺を洗う、その中で、引つかかる人物をアビンが確認する。どの様に交替するか、またどの様に調査するかは、彼には関係なかったの、その話は、聞き流すだけだった。また、各人の連絡事項は朝食の時にやることなどを取り決めた。

「で、他に何か気なることは、起きていないか」。

と、トレッカーが尋ねた。

そこでアビンは、切り出した。

「じつは、これは、未だ公になっていませんが、この船の中で、殺人事件が発生しています。既に犠牲者は二人を超えています。それから、船長はひた隠しにしていますが、ミュラの成獣がこの船に運び込まれています。その為に犠牲者が何人か出ています。これについてはブロック閉鎖で、今のところ対処しているようです」。

「何と、そんな事がこの船で起きているとは」。

と、ミュラーは呟く。

「随分セキュリティが甘いな」。

とは、トレッカーの言葉だった。

「しかし、これはこれとして無視できない事と言える。例えば、相手が手段を選ばずに、無差別にやって事故と見せかけるつもりなら、ミュラの成獣を送り込むのも一つの手だ。ただ、確実性には乏しいが」。

ミュラーは苦虫を噛み締めるような顔をして言う。

「そうだな、だが、そんな事をして搭乗艇が有れば、簡単に逃げ出せるから、本気でやろうと思うなら確実性は無いな」。

トレッカーもミュラーの意見に賛同のようだ。

「どちらかという、奴らはミスをしたな。ミュラを抑えきれずに暴走させたとも言える」。

「そうだな、馬鹿な奴らだ。だが、どうやって止める」。

「そこが問題だな。ミュラとは厄介なものだからな」。

「此処は、この船の警備員のお手並み拝見といきますかな」。

その言葉にアビンは、尋ねる。

「どうして？手を貸さないんですか」。

トレッカーがその言葉に冷ややかに応えた。

「そんな事をしてどうするんだ。我々の存在が知られてしまっているのか。それこそ、有らぬ噂を広めかねない。此処は最後の最後まで自重だ。此方に害が及びかねないと予想されるまではな」。

「そうだな、ここは、我々の存在を知られては困る」。

とミュラーもその言葉に同調した。

「しかし．．．．．」

アビンは焦れたく言う。

「今は出来ない。申し訳ないがな。解ってくれアビンくん」。

ミュラーはアビンを宥める。

アビンにも解っていた。これ以上言っても彼らは、プロだ。自分の任務を遂行するのが最優先だ。彼らの障害とならなければ助けてはくれないだろうと、そして、此処は仕方がないとこの件は、諦めて次のことに掛かることにした。

アビンは、少し息を整えてから、自分が先ほど考えていた芝居に打って出た。

「ところで、あなた方に知っていて欲しい事があるんです」。

「何だね」

と二人は彼に聞き返した。

アビンは少し勿体をつけながら話し始めた。

「今、教授と発掘している物に妙な物があるんです。アリスブルーとわたし達は呼んでいるのですが、どうも奇妙な物なんです。未だ分析が終わっていないので、ハッキリしたことは言えないんですが、どうもロストテクノロジーらしいんです。どういう働きをする物かに付いても分析中なんですが、人間が思い描いた物を作り出せる代物ようなんです。今のところ解読されているところでは．．．．．黙っていて申し訳なかったんですが、今回の件は、それが原因ではと思える節も有るんです」。

その言葉にミュラーは、興味深げに言う。

「それは、初耳だな。で？どんな物なんだ」。

トレッカーは、表情一つも変えることなくアビンを見ていた。

「それが、未だデータの整理がついてないんです。未だ研究室で解析している部分もあるんで、ただ、今回ある程度そろったデータで、発掘現場で確かめてみたい事が出来まして、それが、予想通り出てきますと、たとえばこのティーカップをと思い願えばそれを作り出すことが出来るんです。今の概算では、一立方位の物は簡単に作り出せるんです。凄い技術でしょう。本当かどうか調べに行くんです。良くこんな物が開発できたなど、信じられないのですが、わたしとしては．．．．．」

「それが、事実とすれば画期的な発明だし、今回の発見は、大発見となるな」。

とミュラーは静かに言う。

トレッカーも

「確かに、狙われそうな技術だ」

と言う。

「ところで、この件について知っているのはどの位だ」。

とミュラーはアビンに尋ねる。

「そうですね。発掘に携わっている。教授達とその助手、それから研究所の人間となりますが」。

「それだと、何処からでも情報は漏れるな」。

「そうでもないですよ。研究所は、うちの研究所ですし、発掘もうちの学校の者だけですから、そうでなければ、お二方ともわたしが話すまでは、この件については聞いていなかったでしょう。違いますか？」。

「確かに、そうだな」

とミュラー。

「君の言う通りだ」

とトレッカーが答えた。

「つまり、それほど情報は漏れていないということになりますが、いかがですか」。

「それで、君は情報の漏れは無いと言い切れる訳だ。それでは今回の公爵暗殺計画には、そのアリスブルーの件が絡んでいると言いたい根拠はなんだね」。

とトレッカーは余計なお世話だと言わんばかりの口調でアビンに返してきた。

「それは、勘なんですが．．．．．」。

「これはこれは、何を言い始めるかと思えば、勘ですか。そんな物で、我々を振り回さないでくれるかな」。

「確かに感ですが、これが狙いの偽情報かも知れませんよ。教授の暗殺なんかは、わたしが、助手になってから四度有りましたから、それなのに今まで、其方さんが、動いたのは今回が初めてです。これこそ、あなた方の方こそ何か隠してないか疑いたくなりますが」。

「これは、失敬な！今までは事前に情報が掴めなかったからだ。今回は、情報を得られ

たので、こうして警備しているんだ」。

とトレッカーは、強い口調でまくし立てた。

アビンは、トレッカーの反応を見て、あらがち間違いでも無さそうだと思うた。

しかし、ミュラーの反応は気になる物があった。と言うよりも彼らの話をただ、じっくり聞いているだけのように見えるからだ。

アビンは仕方がないなと思いながら言った。

「解りました。トレッカーさん此方の失言です。申し訳ありません」。

「解ればいいんだ」。

そこで、ミュラーが「どちらにしても、公爵が狙われていることには変わらないし、アビンくんが言っていたアリスブルーの話が本当であるならば、君自身も狙われる対象になると思うがどうだね」

と二人の話に割ってはいる。

「そう言われればそうですね。でも、わたしを襲っても、殆ど何も出てきませんよ。全てのデータは、教授に渡してしまっていますし、未だ、正確にどんな物か解っていないんですから。本当のところは」。

「でも、君は今さっき言っていたじゃないか」。

「それは、今のところ解読できた範囲での話で、それが実際に成功して使える物だったかは、まだ、これからの調査によるものです。ですが、今までの資料でも立派に研究資料にはなると教授は言っていました」。

「まっ、それだけでも立派に狙われる対象にはなるな」。

とミュラーは素っ気なく言った。

その言葉にトレッカーは、同意するように軽く肯いてから二人に言った。

「今、船で問題が発生している。これを機に一気に事を進めてくるかもしれんし、ジッと此方の様子を窺っているかもしれん。我々としては、此処は慎重に行動しなければならぬ。今後の連絡は密に取っていくことにしよう。では、これにて、この話は、終わりだ。各自それなりに解散だ。以上」。

とトレッカーは、この場を締めた。

そして、徐に立ち上がると、テーブルの上に置いてあったレシートを取って「勘定はわたしがもつ」

と言うなり去っていった。

それを、ミュラーは含み笑いをしながら見送っていた。

アビンはどうしたものかと、迷っているとミュラーが

「君は役者だね」

と呟いてから席を立てアビンを見下ろしながら

「アビンくん楽しい話をありがとう。ミュラには気をつけなよ」

と言って立ち去っていった。

何となくポツンと取り残されたアビンは、深くため息を付いてから、体中にどっと湧いてくる疲れに打ちのめされていた。だが、今話した話は、調べていけばそのうち当たる内容だ、嘘ではない。しかし、アリスブルーというキーワードが無ければかなり探し当てるのが難しい無いような話であることは確かだった。

それにしても、自分の任務をこういう形で部外者に知らせるのは、実際、打つ手が無くなった故に手なのだが、ある意味で、自分の得たデータの確かさを出来る奴に判断させる方法だった。かなり危ない話だが、今は手詰まりなので、これで何かの進展を期待しての事だった。

そして、手に持っていたカードに、話し始めた。

ポイント

「かなり閉鎖区画内の回線はやられているらしく。此方からモニターが殆ど取れないです」

とシオンは、少し訴えるような眼差しで、アビンに話しかけた。

「何とか、区画内の警備員に連絡できればいいのだが」。

アビンは、それに応える様に言う。

「だめです。回線がやはり切断されています」。

「この事は、ブリッジにも知れていることだろう」。

「そうですが、手の撃ちようがないと思います。今となっては、.....」。

「では、どうやって連絡したらいいんだ、彼らのもっているブラスターでは歯が立たない奴だって」。

「アビンさん、そう怒鳴らないでください」。

「あっ、わ、悪かった」。

とアビンは、謝りながらテーブルに拳を叩き付けた。

その様子を見てアンが彼に促すように言った。

「アビンさん。わたしたちが焦ってもどうにもならないと思います。まずは、落ち着いて考えて見ましょう。何か方策が見つかるかも知れません」と話ながらテーブルに、お茶の入ったティーカップを置いて、仕草でアビンにお茶を飲んでほと勧める。

アビンは自分の前に置かれたカップを見つめてからゆっくり椅子に腰掛けてからあらためてアンを見て思った。確か彼女は、ファーナビー家でメイドをしているんだったな。こんなに何時も物腰が柔らかいのかな。それにしてもこの子は人を落ち着かせる雰囲気がある。その為なのかどことなく15歳よりももっと上の様を感じる。シオンと一緒にいるとシオンが幼く見えるせいかわりいっそう大人びて見えると。

そんな彼の様子にアンは、

「わたしに何か」

と尋ねてきた。

「いやなんでもない。ミッチェルさんは、どうしている」。

「はい。今、奥で寝ていらっしゃいます。その傍らにミュラの子供も一緒に寝ています。それをセシリア様が視ていらっしゃるから大丈夫です。でも、わたし驚きました。突然、女性の方を担ぎ込まれるのですから、それにセシリア様もご一緒に、本当に驚きました」。

「いや、驚かせるつもりは無かったのだが、彼女のことはまだ、他人には知られては困るから、知らせることが出来なかったんだ。それに、君のベッドを占領してしまって申し訳ない」。

「いいえ、そんな事はかまわないでください」。

アンは物腰柔らかく、会釈をしながら応える。そんな、彼女の仕草にアビンは少し戸惑いながら受け答えをしていた。

そこへ、シオンがテーブルについてアビンに言った。

「ところで、どうします。何か方法を考えますか」。

その言葉に応える前に、ミッチェルさんを運ぶ前に聞いたことを確認の意味で、尋ねた。

「ミュラの情報にブラスターが効かないと有ったと言う事だが、何故なんでもう一度説明してくれないか」。

シオンは「いいですよ」と言ってから話し始めた。

「ミュラの全身を覆っている白い毛は、カーボンケブラー素材みたいなしなやかで堅い毛です、それも、一本の毛に見えるのは拡大すると細かい枝が出ていてその間を細かい水滴が覆っています。ある意味で水蒸気の皮膜、大げさに言えば擬似電離皮膜呼べるもので保護されています。この水蒸気は、たぶん皮膚から常に供給されているもので、元々は、外気の熱を遮断したり乾燥から身体を保護していたと思われる物ですが、同時に、高エネルギーが当たると蒸発ではなく雷離イオン化し雷磁バリアーの働きをして

「はい、聞きます。これはたぶん水滴に微量に含まれる不純物のせいだと言えます。ですがかなり効率的に発生する様です」。

「それなら、何なら効果があるんだ」。

「解りませんが、電子銃ならある程度は効果は見込めますが、よほど強力でないとお勧めです。ですが、相手をしびれさせる程度です。それと、皮下組織から考えて、スマートライフル、それからこれは無理ですが、対艦ビーム砲等が効果的です。そんな物を船の中で使っては、船がどうなるか補償はできませんが、．．．」。

その答えを聞いてアビンはまったくその通りだと思った。

そして、

「だが、このままでは、閉鎖区画内にいる警備員と取り残された人全て殺されてしまう」

とシヨンに何か考えは無いかとの含みを込めていった。

「そうですね。時間の問題です。ですがこれといった方法がありません」。

と言いながらシヨンはコンピュータのキーを叩いて、新たに現れた画面を見ながら言葉が続ける。

「この回線が途絶える前の最後の情報を、見て言えることは、取り残された乗客は十二名に警備員十六名の所在がデータとして残っていますが、その内、警備員の七名は既に生命反応は有りません。所在を確認できるのは、彼らが持っている、IDカードが信号を返して来ているに他有りません」。

「それで、ブリッジはどうしている」。

「ハーモンによれば、新たな救出チームを編成中の様です」。

「このままでは、警備員がいなくなってしまうぞ」。

「それが狙いかも知れませんね」。

その言葉に、アビンはやな事を言う娘だなど思いながら言った。

「そこまで、相手が考えていたならたいしたものだな」。

「そうですね。今は成り行き上そうなってしまっているんだと思います」。

何かこの娘は、感づいたのかも知れないと思えた。そこでアビンは

「どうしてそう言えるんだ」

と尋ねた。

「さっき思い出したんですが、ミツチエルさんの記憶の映像に映っていた人物の中に見覚えがある服装をした人物がいました」。

「ああ、それなら俺も気付いた」。

「それなんです、警備員の制服でした。先ほど気になって確認をして確かにそうであることが解りました」。

「そうか、それなら、警備員が無くなるまではやらないだろう。だが、そうなるとうするつもりだろう」。

「それは、相手に聞いてみなければ解らないと思いますが」。

「それはそうだ。で？どうやって聞くんだシヨン？」。

「それは、アビンさんの仕事では？」。

「よく言ってくれるよ」

とアビンはため息を付きながら言い放った。

「無理ですか」。

「暗殺者にか？正気の沙汰ではないな」。

「やっぱり？では、後二日、次の寄港地まで待ちますか。それまで、生き延びてくれればいいのですが、．．．」。

「いやなこと言うな」。

「事実ですから。あっ、申し訳有りません。わたしとしたことが、．．．」。

「いや、もういい」

とアビンは会話を切った。

そしてアビンは、あの時、病室でセシリアが言った言葉を思い出していた。確か、感情が戻ったのかどうかと言っていた事をそして、今、改めてシヨンの反応を体験して思ったのだった。感情というものが無いとは言わないが反応が薄い。本人は、自分がその様に反応している事を状況から確認して認めている。間違いをした時には、幾分感情が働き自責の念を表すようだ。どうも細かい感情が働かない様だ。そして、その事を本人も悩んでいる。あえて追求することは、可愛そうだから追求しないにしてもこの点は、憶えにおくにはしたことはないなと。考えをまとめて自分の胸にしまい込んだ。

それから、アビンはアンの方を見ていった。

「アン。今、起きている事を提督に話して置いてはくれないか」。

「どうしてです」。

「ちよっとね。提督に知って置いてもらった方が、後々何かあったときに助けになると思っさ」。

「後々ですか？いいですけど」。

どうも、アンは気乗りがしないらしかったが、アビンはこう言っければ、彼女は伝えてくれると確信していた。それは、養女でありメイドでもある彼女が、養父であり主人に危険が迫っていると考えられる事を黙っているはずがないからだ。

「さて、シヨン？君のコンピュータで閉じている隔壁を開けることは出来るか」。

と、アビンは唐突に尋ねた。

「はい。出来ます。アビンさん」。

「じゃあ、最後の生存者の場所のデータはいつでも出せるか」。

「はい。アビンさん何をお考えですか？．．．．．まさか」。

「その、まさかさ。こんな時に使わなくて何時、使うんだ」。

「ですが．．．．．」。

「安心しろ。スマート弾は使わないから」。

「そう言うわけでは．．．．．」。

「俺が、戦場へ入っていくのは、無理と言いたげだな。これでも、月に一度は、大使館で72時間連続の訓練を受けている。実弾の撃ち合いのな、ほぼ実戦と同じ様に」。

と、アビンは安心させるようにシヨンに言った。

「ですが、相手にリニアガン弾が通用するか解りません。それに、相手はかなり機敏に行動します。ハッキリ言って早いですよ。それでも行かれるんですか」。

「性分さ！弱い立場の奴が困っているとどうしても手を貸したくなる。ミユラーさん達は関係ないから此処は大人しくしているとは言われたけどね。手を拱いているのがいやなだけかも知れないな」。

と、言いながら自分の口元が笑っているのにアビンは気が付いた。

「お節介とも言います」。

と、シヨンが付け足した。

「いやな言い方を、するなシヨン。可愛い顔して．．．．．」。

「申し訳有りません。そんなつもりではないのですが、ただ、．．．．．」。

「心配してくれるのはありがたいが、閉じこめられた人のことを考えれば、当然だよ」

。「まっ、そんなところが、あいつの息子らしいと言え、らしいな」。

と、アビンの背後で男の音がする。

彼が振り返ると、そこには、ファーナビー提督が立っていた。

「ご連絡したら、ドアの向こうにいらっしゃったので、お越しいただいた。と言う訳なんです」。

アンは、彼の疑問に答えるように告げる。それにしても、提督がはいつて来てる事に気が付かなかった自分が情けなかった。

「これから、戦場に行こうという奴が、わたしに気が付かなくてどうする」。

これまた冷たい言葉を提督はアビンに浴びせた。

「やって見せますよ。提督、指揮を御願います」

と売り言葉に乗ってアビンは答えてしまって、しまったと思ったが、後の祭りだった

。「さすがに、ランカスターにくっついてる諜報員だ。その意気込みを認めてやろう。わたしが、直々に指揮してやる。いいな」。

アビンは、その威圧的に迫力のある言葉に負けて、直立して応えてしまった。

「イエス！マイロード。指揮を御願います」。

その言葉を聞くや提督はニヤリとしてから、命令を下す。

「では、今から五分後、装備を調べて此処に出頭しろ」。

「イエス！マイロード」。

と、敬礼して応えて、シヨン達の部屋を出ていった。

それを見送ったから提督はシヨンに背を向けながら言った。

「今、できる装備を揃えて置いてくれ、わたしのロッカーにある。それから、ホルストがこの船にいるそうだな。彼にも連絡してくれ。わたしからだ」と。

「解りました。伯父様」。

救出

「今、5 Q 3の通路にいる」。
とアビンは5 Q 3と表示されている隔壁の前に立っていた。その、少し後ろにホルストとヘンツェが彼を見守るように立っていた。
「アビンさん。これから5 P 3の隔壁を閉じます。中に入るまでは、ホルストさん達が援護してくれます。それから5 Q 3の隔壁が空いたら直ぐに中に入って。最初の目的地まで急いでいってください。後は此方の指示に従って行動してください。そして、アビンさんが中に入ったら隔壁は直ぐに閉じます。宜しいですね」。

シヨンは確認をするように話す。
「解った。入ったら、最初の目的地5 R 4の通路にある5 B - 4 0 5に行くそこで、最初の生存者を確認する」。

「はい。そうです。くれぐれも無理はされないでください」。

「解ったよ。では、やってくれ」。

「では、5 P 3の隔壁を閉じます」。

すると、後ろの方で警告音を鳴り響かせながら隔壁が降り始めた。
アビンは後ろの警告音を聞きながら、自分の渡された装備を確認していた。彼はサバイバルジャケットを羽織りベルトを締め小型の信号弾発射装置左腰に付け予備の信号弾四発催涙弾四発を身につけ閃光弾五発をポケットに入れてある。緊急用の医薬品を背中に負い小型対戦車爆弾を二個ポケットにぶら下げて右のポケットには六ミリリニアガン弾三十発マガジンを二つ入れて、今、右手にはMSG-P 4 8ハンドスマートガンを握っていた。この銃は、彼自身あつかった事のある物の中で、破壊力が格段に大きい物の部類に入る。これはスマート弾を使えば戦車すら破壊できる代物だが、船の中で使うと船体に重大な損傷を与えてしまう代物だから、これを使うのは慎重でなければならない

。だが、こんな格好は、一般の人には見せられないなどアビンは、思っていた。

すると、シヨンの声が耳元に響いた。

「では、前の隔壁を開けます。そこから五十メートル以内には生命反応は有りません。開いたら、直ぐに目標地点へ、宜しいですか」。

「了解」。

すると警告音と共に目の前の隔壁が上がり始めた。それと同時にアビンはハンドスマートガンを構えた。

しだいに上がる隔壁と共に向こうに通路が見えて来た。何の変哲もないただの通路、だがこの先は、ミュラのテリトリー、つまり戦場だ。そんな思いがアビンの脳裏をかすめたとたん彼は、目標地点に向かって走り出した。その顔は、緊張していたが、口元は笑っていた。

彼は、先ず真っ直ぐに通路を二つ目の十字路まで走った。そこで、立ち止まると辺りに気を配ってから4ブロックへと走った。その行く手を阻む物は何もない。ただ、彼が走る足音だけが、彼を追いかける。

5 R 4の初めの十字路に来た。あいかわらず、何の気配もないが、何となくじめっとした空気が彼を包んでいる。空気が澱んでいるのかとの思いが過ぎるが、先を急ぐことにした。

次の十字路に着いた。此処の前に通じる通路はエレベータに向かっているが、そのエレベータは故障の為仕えない。やはり、空気が澱んでいるのか、じめっとした感じがする。そして、これから進む奥の方を見る、しんと静まりかえっている。物音一つもしない。

そして、天井を見上げた、明かりが何となく霞んで見えるのは気のせいかとアビンは思った。

そして、今度はゆっくりと船の後部に向かって警戒しながら歩き始め手から報告した

。「今、5 B - 4 0 5に向かっている。空気が澱んでいるのか、じめっとする」。

「少し、お待ちください。アビンさんに付けていただいたセンサーのデータを見ています」。

「それにしても静かだ。近くに生命反応は有るか」。

「ありません。それから、その通路の気温は二十五度で湿度が八十五パーセントを超えています。たぶん空気が凝っていると感じるのはその為でしょう」。

「ありがとう。前進を続ける」。

「解りました。お気をつけて」

とションの声が切れた。

アビンは五ブロック進んだところで、妙な雰囲気気が付いた。何か足が進むのを躊躇する。緊張のせいなのか。それとも、何か悪い予感がするのか、それは、解らなかったが、ションに連絡する。

「近くに、生命反応は有るか」。

「有りません。大きな物もありませんから、ミュラは近くにはいないと思います」。

「そうか、ありがとう」。

「何か有ったんですか」。

「いや、何でもなし。ただ、急に足が重くなった気がするんだ」。

「少しお待ちください」。

と言ったションの言葉が途切れる。

アビンは連絡を待つ気はなかったので、そのまま目的の部屋に向かって歩いていた。

そこへ、ションから連絡が入った。

「原因が判りました。多分深層心理が働いたのだと思います。アビンさんの身体には問題有りません」。

「何か隠しているような言い方だな。気を遣わなくていい。この場所でデリケートな話をしてもしょうがない」。

「解りました。空中に人間の体液が浮遊しているためです。つまりそれを察して脳が拒否反応を起こしていると思います。しばらくすれば慣れると思います」。

「体液って？」。

「血です」。

アビンは、その言葉を聞いて、一瞬、戻りそうになったが、壁に寄りかかって、それを、堪えたが、胃がむかつくのはしばらく続きそうだった。

それを何とか堪えながら、アビンは5B-405についての。その部屋のドアは何故か半開きとなっていた。

そこで、アビンは、三分の一ほど開いているドアから中を覗き込むと、そこには目を背けたくなる光景が広がっていた。

アビンはドアに寄りかかりながら連絡をする。

「5B-405に到着。中の乗客全員死亡と見える。此処に何人いた事になっている」。

。「二人です」。

「なら、全員死亡だ。頭が二つ転がっている」。

「そうですか。残念です」。

そのションの言葉を聞いて、多分こっちに合わせているかもしれないが、こんな時には、そんな言葉でも、気持ちが楽になるとアビンは、思った。

「次は、何処へ行く」。

「そうですね。ちょっと待ってください。向かいのドアを開けますから、直ぐに入ってください。何か、大きな生命反応が近づいてきています」。

と、答えが返ってくるなり、向かいの部屋のドアがスッと開いた。

そこでアビンは、直ちにその部屋に飛び込んで、ドアを閉じた。そしてセキュリティモニターで、ジッと外を監視した。

しばらくすると、音もなく白い大きな陰がやって来た。大きすぎて全体が見えない。そしてしばらく見ていると、こっちの気配に気が付いたのか大きな顔を此方に向けた。大きな赤い二つの目にベツリと血にまみれた口からよだれが垂れていた。

その光景を見てアビンは金縛りに合ったように身動き一つ出来なかった。幸いドアはロックされており向こうからは開けることが出来ないが、ミュラは爪で何度かドアをこじ開けようと引っ掻いたが、幸いロックが壊れずに保ったので、ミュラは諦めて何処かへ音もなく去っていった。

そしてアビンは、全身の力がどっと抜けるのを感じた。正直言って、怖い。未だ心臓の鼓動が収まらない。落ち着くまで、何故かハンドスマートガンを両手で握りしめながらテーブルの上に腰掛けていた。その間、ションはしきりにアビンに呼びかけていたが

、まるで耳に入らなかった。
「アビンさん、アビンさん、新たな生命反応の動きがあります。どうも人間の様です。確認しますので、そこで待っていてください。聞こえますか？アビンさん．．．」。

そのころ、孤立したゼクター4は、6B-617に止まっていた。

「みんな、大丈夫か？」。

既に疲労しきった顔が並んでいるが、何とか励まそうとベッカーは声を掛けた。

それに応えるようにマッカーシーが言った。

「チーフ。ブリッジと連絡が出来なくなって、だいぶ立ちます。このままですと此処に二日止まなければならぬではないでしょうか」。

「そうなるかもしれん。次の寄港地まで、持ちこたえられればな」。

と話ながら内側に湾曲したドアを指さして応えた。

「そうですね、あれが二日保ってくれば、助かりますね」。

苦しそうにアヒムが同意する。

「お前はベッドで静かにしていろ」。

と言ってからフィンチに向かってベッカーは指示をした。

「フィンチ。アヒムを見てやってくれ」。

「解りました」。

フィンチは、そう答えるとベッドに横たわっているアヒムを見た。彼はかなりの重傷を負っていて脇腹がへそから腰まで裂けていた。出血は応急処置で何とか少なくなっているが、早く傷口を手当しなければ後二日は保たないだろう。その証拠にアヒムを見たフィンチは、目を伏せて首を振って、アヒムの容態が深刻なことを告げた。

確かに、普通だったらアヒムは死んでいただろうが、フィンチが外科医だったのが幸いして、応急処置で事なきを得たのだった。

そして、フィンチが近づいて来て言った。

「彼は、後、保って半日でしょう。最初の出血でかなりの体液を失っています。今、それを補うために、少しづつですが、彼に水を与えています。気休めにしかなりませんが」。

「ありがとうございます」。

「いいんですよ。此方もチーフの機転で助かったんですから」。

「ところで、子供の方はどうだ」。

「それなら心配は要りません。軽い脳震とうですから、直ぐに元気になるでしょう」

「そうか？感謝する」。

「いいえ。これも勤めですから」。

と言ってからフィンチは、部屋の奥にいる乗客の方に言った。

そんな彼女の後ろ姿を見て、始めに会った時は、自分のチームに女が入るのを毛嫌いしていた自分を思いだしていた。確かに、初めは生意気だと感じていたが、時立つうちに、今では彼の片腕的存在になっている。かなりハードな仕事も今まで遅れることなく付いてきた。記憶力がいいのでけっこう助かったこともあったなど、思い返していた

。それにしても、あれがミュラと呼ばれる物かと彼は、ドアの方を見ながら考えていた。ブラスターが歯が立たない動物など聞いた事がなかった。こんな事は初体験だ。お陰で、部下を四人も失った。今は、四人だけそれも一人は瀕死の状態だ。これから先、四人の乗客を抱えて、どうしたものか考えても、良い案が出てこないのに、彼は、途方に暮れていた。

そこへ、彼の通信機にアクセスが入った。

「ピッー。何方か居ますか」。

すぐさま彼は、返事をして言った。

「此方、ゼクター4のベッカーだ。聞こえる。ブリッジどうぞ」。

相手は落ち着き払って彼に答える。

「ベッカーさん。此方はブリッジではありません。現在、其方の区画内では、通信設備が寸断されて、外部との交信が出来ない状態にあります」。

「どうやって、連絡を．．．」。

「先ほど、其方の区画内に中継器を跳ばしました。現在、各システムをチェックしながら

「生存者の確認をしています。其方が先ず最初です」。
「ところで、失礼と思うが其方は何者なんだ」。
「インターナショナル・レスキューとでも申しておきましょうか。しばらくしたら其方に隊員を派遣しますから、持ちこたえてください」。
「あっ、ありがとう。だが、あまり長くは、待てない瀕死の状態の者がいる」。
「解りました。彼を急がせましょう」。
「彼？一人なのか」。
「大丈夫です。此方で各設備を操作できますから、一人でも、多分大丈夫です」。
「ほんとに？」
「はい。今回が初めての出動ですが．．．」。
「悪戯ではないだろうな」。
「それは、確かです。念のために、其方も人数を当てましょうか。八人ですね」。
「確かにそうだ。解った。信じよう。で？此方はどうしてればいい」。
「そうですね。大人しくしてください。そうしないと怪我をしますよ」。
その言葉を聞いて彼は、ため息を付いてから「解ったそうする」と答えた。
「では、ドアの前に来たら連絡します」。
と言って通信は切れた。
彼は、半ば信じられないと、思いながらも、救出が来るを聞いて安堵している自分に気が付いた。そして、彼は立ち上がってみんなに告げた。
「もう少ししたら救出隊が来る。それまで我慢してくれ」。
すると、部屋の中で安堵の音が響く。

「アビンさん。6B-617に急行してください」。
「解った。そこに生存者がいるんだな」。
「はい。八人います」。
「了解。それからミュラの動きモニターしてくれ」。
「解りました。常に全システムをアクティブにしておきます。それから伯父様からですが、6B-617はQ5のエレベータの近くだからエレベータを使ってその部屋に行くようにとのことです」。
アビンは、シヨンの言葉が終わるやいなや、ドアを開けて走り出した。
彼は、来た通路を戻り始めた。走りながら彼は考えていた。ミュラの走る速度を。そこでアビンは、尋ねた。
「シヨン聞きたいことがあるんだが」。
「何でしょうか」。
「ミュラの走る速度は、どの位だ」。
「約時速120キロメートルですが」。
「そうか。ありがとう」
と言いながら、彼は聞かなければ良かったと後悔した。なぜならミュラに遭遇した時は、逃げ切れない事がハッキリしたからだ、それで、シヨンが早いですよと、言った意味が今解った。
しばらく走って、最初に入って来た通路に来た。その前に通じる方は隔壁で閉じられていた。それを横目で確認しながら一ブロック向こうの通路まで走って十字路で止まった。そして、船の前の方を向くとQ5のエレベータが見えた。
「シヨン、Q5のエレベータに来た。ミュラの様子はどうだ」。
と、アビンは少し苦しそうに尋ねた。
「大丈夫です。今現在、F3のR2の通路をゆっくりと後ろの方に向かって移動しています」。
「そうか良かった。今からF6に向かう。引き続きモニターを頼む」。
「解りました。それから今、伯父様がブリッジと交渉しています」。
「どんな」
と尋ねながらアビンはエレベータのドアを開けるスイッチを押す。
「下手に犠牲を出さないように、救出部隊の投入を待つようにとです」。
「そうだな、ブラスターだけでは、歯が立たないからな」
と応えながらアビンは、エレベータの中に入って、ドアを閉じるスイッチを押す。
「そうですね。ちょっと待ってください。ミュラの動きが変わりました。今度は前に

向かいました」。

「まだ、F3だから、大丈夫だよ」

と言ってアビンはF6のボタンを押す。

ところが、エレベータは上に上がろうとせず、下がり始めた。

「どういう事なんだ！誰か下にいるのか」。

「慌てないでください。今確認します」

とシヨンの声があつてからしばらく沈黙が過ぎ応えが、帰ってきた

「F3まで、そのエレベータは、行ってしまいます。何かのショックでスイッチが、入っていた物と思います。今はF6とF3だけです。申し訳有りません。エレベータのモニターリングにアクセスしていなかったものですから」。

「すると、F3でドアが開くことになるだな」

とアビンは天井を見上げながら尋ねた。

「はい」

と力無くシヨンの言葉が返ってきた。

すると、突然、提督の声が入って来て命令を下した。

「銃を構えろ！これは実戦だ！MSP-48でのリニアガン仕様の有効射程は百メートルだ。ドアが開いたら即座に打てる体制を取っておけ！ドアが自動に閉じる十秒間が勝負だ、もしミユラを発見したら迷わず発砲し閃光弾を投げつけろ。これで逃げる時間が有る程度稼げるはずだ！解ったなら応えろ！」。

「イエッス、マイロード」。

「よし！行け」。

その言葉を聞いてからアビンは、エレベータの奥に背中を付けて、ポケットから閃光弾を一つ取り出して足下の床に置いて、彼は静かに片膝を付いてハンドスマートガンを構えた。

「ミユラは、其方のエレベータの方へ向かっています」。

その言葉を聞いてアビンの動悸は激しくなったが、妙に落ち着いてきている自分に気が付いた。そしてエレベータがF3で止まるころには動悸は治まりすっかり落ち着いていた。

エレベータが止まる。ドアが開く。すると通路の向こう三十メートルの所に、ミユラがこっちに向かっているのを確認と同時にアビンは引き金を引く。連射で八発を発射、すぐさま床の閃光弾を拾いピンを歯で抜いて、ミユラめがけて投げたところで、ドアが自動的に閉じた。相手にダメージを与えたかどうかは解らないが、ドアめがけて突進して当たってこなかったのは、相手を怯ませるには効果があった様だと彼は思った。

エレベータは、静かにF6に向かって上り始めているのを確認すると、アビンは少し疲れたように立ち上がって連絡した。

「ミユラと遭遇。リニアガン弾を八発打ち込んで閃光弾を投げつけた。戦果の程は不明。以上だ。提督に伝えてくれ」。

「解りました。ですが、ご無事で何よりです」

との応えが、シヨンより帰ってきた。

アビンはシヨンの言葉に気を止めることなく

「ミユラの動きはどうだ」

と聞き返す。

「はい。先ほどのエレベータの前で停止して動きません。ダメージを与えたのでしょうか」。

「いや、閃光弾のせいであまり動きが止まっているだけだ」

と提督がシヨンの言葉に答えた。

「動いてなければF6に着いたとき、鉢合わせになることは少ないということになるな」。

とアビンは呟きながら万が一に備えてハンドスマートガンを構えてエレベータが止まるを待った。

そんな様子をエレベータ内ではモニター出来ていたので、それを見て提督はニヤリとして言った。

「ほう。なかなか鍛えがいのある奴だな。これなら将来楽しみだとランカスターが言ったのも解る」。

「どういうことですか伯父様」

とシヨンは少し批判的な響きの訪ね方をする。

「そう言いなさん、わたしは純粋に誉めたつもりだが．．．．」。
「失礼ですが、伯父様、わたしにはその様には聞き取れませんでした、何か企んでませんか」。

「誓ってその様なことは無い」
と提督は答えながら、ヤレヤレ勘がよいな迂闊なことはシヨンの前では言えないと思うのだった。

「ところで伯父様、アビンさんがどれだけ出来るか御存知なんですか」。
「いや、だいたいな。戦場での経験は無いが、ランカスターと一緒にトラブルに巻き込まれたとき行った行動が彼の実戦と言えればそう言えるかもしれんな」。

「そうなんですか。で？どのくらいの経験ですか」。

「そうだな、実戦経験七回というところかな」。

「人を殺したことは有るんですか」。

「何故？そんなことを聞く」。

「いざと為ったときアビンさんが、打てるかどうか心配なんです」。

「そうか。解った。答えは有るだ」。

「解りました、それなら大丈夫かもしれませんね」。

「どうゆう事なんだシヨン」。

「あのミュラを射殺しなければならぬからです。いったん人の血を覚えた野獣は再び人の血を求めます。特にミュラはその様に創られています。セシリアが得た情報が正しいければ、元々が、暗殺用に創られたバイオモンスターなんです。現在では自然界に適応して固有種になっていますが、そのためか情報が破棄されていましたし、残っている情報のほとんどは過去の研究記録が、セシリアの記憶バンクの底の通信記録メモとして残っているにすぎないんです、今のところ確認出来る記録としては、それだけなんです」。

。「それで、なのか」。

「はい、伯父様」。
その様に答えるシヨンの顔は、提督には、どことなく打ち沈んで見えるのだった。実際に悲しんでいるかどうかは、解らないが、感情の表現が表に現れやすくなったのを提督は心の中で喜んではいた。

「そろそろ到着するのではないかな」。

と、その言葉と同時にアビンから報告が入った。

「こちらアビン、F 6に着いた。エレベータを出る。次の指示をくれ」。

アビンは、エレベータを出たが、ドアのすぐ前に留まって、左肘でエレベータのボタンを押してドアが閉じないようにしていた。

そこへシヨンの応えが有って言った。

「アビンさん。ミュラはまだ3 Fに留まっています。今少しづつ船の後ろに向かって動いています。それから、エレベータの方は、此方で、コントロールしてドアを開けたままそこに止めておきます」。

「解った。ありがとう」。

「では、アビンさん、そこから見える通路を直進してください。そして、二つ目の十字路から進行方向に左の三番目の部屋が6 B - 6 1 7です。そこに八人の生存者がいます。一人は重体です。急いでください。此方でミュラはモニターしていますから、お気をつけて」。

「了解、6 B - 6 1 7に急行する」。

そう返すと、アビンは、通路を掛けだした。

まず一つ目の十字路を駆け抜ける。至って静かな物だ。何事もなかったような様子、アビンはふと足を止めた。

丁度立ち止まった所は、次の十字路まで十メートル程の所だった。ふと、足元を見るとキラリと光る物が転がっていた。何だろうとアビンが手に取ってみると

それは、何かのピンの様だった。それも何処かで見たことがある物だが、今はどうしても思い出せない。仕方がないので左のポケットに入れて後で調べることにした。

それから再び6 B - 6 1 7に向かってアビンは走り始めた。

二番目の十字路を駆け抜けたところで、アビンは前方の様子がおかしいことに気が付き足を止めた。そして、ハンドスマートガンの銃口を進行方向に構えながらゆっくり歩

き始めた。

どうも、何かが通路の上に散らばっている。黒い物が転々と無数に。そこに近づくとつれそれが、何であるかはつきり見て取れた。それは、血痕と赤黒い肉片だった。そして、進行方向の方を見上げると、そこには上半身のない遺体がドア口に転がっていた。

アビンは目のやり場に困って進行方向の通路の奥の方を見た。すると彼から十メートル程離れた所に同じ様な状態の場所があるのが目に入った。

「いったい何人の死体を見せられなければならないんだ」。

と、思わず叫んだ。

するとシヨンから彼に連絡が入った。

「アビンさん。落ち着いてください」。

「これが落ち着いていられるかシヨン？あんな化け物に行き着くところは死体ばかりだ」。

「怒鳴らないでください。アビンさんの状況はお察ししますが、今は、生存者の救出が第一です。それに、志願なさったのは、アビンさん自身ではありませんか」。

その言葉を聞いて、アビンはハッと我に変えた。

「すまん。取り乱して」。

「ところで、アビンさんはミユラを見たんですか」。

「ああ、セキュリティモニターでだが」。

「そうです．．．．．恐ろしいですか」。

アビンはその言葉に、何を尋ねてくるんだと思いながら答えた。

「ああ、腰が抜けるほど恐ろしいかった」。

「情けない奴だ。戦場ではそれは命取りだ」。

と、ファーナビー提督の声が入った。

「あん、伯父様は今出しゃばらないでください」。

「いや、僕は、彼に戦場での心構えという奴を」。

「今は時間ありませんからそんなことは、後にしてくださいね」。

と、初めてシヨンが怒鳴るのをアビンは聞いて、提督とのやり取りを思い出して、妙に可笑しくなって笑い出してしまった。

「どうしましたアビンさん」。

とシヨンの慌てた声。

「気が触れたか」。

「伯父様は黙ってて！」。

「はい．．．．．」。

アビンは笑いながらどうやら片が付いたみたいだなと思ってシヨンに尋ねた。

「いやすまん。ところで6B-617はどこだシヨン？」。

「申し訳ありません。今アビンさんが立っておられる所の左のドアがそうです」。

その言葉に従って彼はドアを見た。何かの鋭い傷でナンバープレートが剥ぎ取られていた。それに、ドアは内側に湾曲していて開くかどうか解らない様な状態だ。

「確認したが、ドアが湾曲している其方からのコントロールで開くか」。

「試してみます。少し待っていてください」。

すると、ドアの方で軽い動作音がしてすぐに止んだ。

「どうもだめみたいです。完全に壊れています」。

「ではどうする」。

「緊急時のドアの外し方があります。まずは、中の人たちへ状況を説明しますから少しお待ちください。それから、提督からですが、万が一に備えて、そこから十二メートル先に離れた所に対戦車爆弾を仕掛けて置くようにとのことです。保険だと申しております」。

「解ったそうする」。

と応えてから、保険ねと呟きながら爆弾を仕掛けに向かった。

シヨンは生存者に連絡を始めた。

「ベッカーさん」。

突然、彼の無線に通信が入って、直ぐに応答した。

「此方ベッカー。ここから出られそうか」。

「はい」。
「そうか、ありがとう。で？どうやって」
「はい。其方のドアは故障のために開きません。それで、緊急時のドア撤去を行います。それで、みなさまには、ドアから離れていてもらいたいのです。ドアは内側に倒れてしまいますから、よろしいですか」。
「解った。ドアから離れていよう。後はよろしく」。
「お任せください」。
無線が切れるとベッカーは、皆に聞こえるように言った。
「今ドアの外に救助が来ている。もう少しの我慢だ。今ドアを外すから、全員ドアから離れてくれ」。

シオンはアビンを呼び出した。
「アビンさん準備はよろしいですか」。
アビンは呼び出しに手を止めて応えた。
「今、爆弾を仕掛け終わるところだ。少し待ってくれ」。
「解りました。それが終わったなら6B-617のドアの前に戻ってください。外し方を説明しますから」。

「了解」。
とアビンは応えてから床に置かれた爆弾の頭の上にある出っ張りを止めている安全ピンをゆっくり抜いた。そして、6B-617のドアの前に戻ってから連絡をした。
「シオン。今ドアの前に戻った。これからどうすればいい」。
「解りました。では、説明いたします。少し見にくいかもしれませんが、ドアの上と下のレールの付け根等間隔でレールに沿って四カ所赤い二重丸が有ります。確認できますか」。

「ああ、確認できる。それで？」。
「そこが丁度レール固定ボルトが入っている所なんです。ふつうはそこをハンマーで叩いてメタルブロックを割って固定ボルトを外すのですが、ドアが湾曲しているとなるとボルトが捻れて外れなくなっていると思いますので、ハンドスマートガンでその赤い二重丸の所を撃ち抜いてください。リニアガン弾で有るならば中の人には被害が及びませんから」。

「いいのか」。
「はい。それしか方法が有りませんから」。
「解った。今から打ち抜く」。
アビンは、そう応えてからハンドスマートガンを構えて赤い二重丸に狙いを定めて、一カ所ずつ打ち抜いていった。そして、最後の赤い二重丸を打ち抜くとドアはゆっくりと中に倒れ込んだ。

「シオン。ドアは開いた。今ミユラの様子はどうだ」。
「はい。いまだにF3をうろついています」。
「そうか解った。これから生存者を確認する」。
「解りました。それから退路は今来た通路とエレベータを使ってください」。

「了解」。
彼が、答えを返すか返さないうちに、倒れたドアの向こうから一人の男が現れてきて言った。
「あっ、君はあの時の．．．救助隊が、君のような坊やが一人とは驚きだ」。
アビンは、その言葉を無視するかのよう男に尋ねた。
「けが人が、有るそうですが、動かさそうですか。それからこれから避難しますので、わたしの指示に従ってください」。

男は、自分の言葉が無視されたことには気を止めず、答えた。
「それは難しいな。フィンチどうだろう」。
「はいチーフ、失血材と傷口の縫合剤が有れば何とか。出来れば担架が有れば申し分ないのですが」。

と奥の方から警備服に身を固めた女性が現れて言った。
アビンはその言葉を聞いて、それならばと背負ってきた救急用品をその女性に渡した。
すると、それを受け取るなり袋を開いて中を確認して、ニコリとして彼女は言った。

「チーフ。これで助かります。後は担架です」。

男はヤレヤレとした表情をしてアビンに手を差し出して言った。

「ありがとうございます。わたしはベッカーだよ。よろしく彼女はフィンチ」。

「いえ、ご無事で何よりです。わたしはアビンと言います」。

「ありがとうございますアビン君ところで、君はどここの部隊なんだね」

その質問は、たぶん自分の着ているサバイバルジャケットせいだろうとアビンは、思
って答えた。

「単独なんでね部隊名はありません。ただ、サポートは万全です。あなた方を襲った怪
物の動きは此方ですべて把握していますから」。

「それは頼もしい。すると無線で連絡してきた。お嬢さんも君のサポートという訳
かな」。

「そうです」。

と応えながらたぶんションのことを言っているんだろうとアビンは思った。

「ところで、アビン君。君の装備は、この船で一戦交えようと思えんがどうな
んだ」。

「このくらいの装備でないと、あの化け物には渡り合えませんから」。

とアビンは応えながら実際には自信はこれっぽっちも持ち合わせては居なかったの
だが、今はそうでも言っておかなければ、恐怖で押しつぶされそうだった。

「そうか、それほどの奴なのか。それにしてもこれだけの装備よく持ち込めたものだ」

。「この船は辺境域ですから出発時にパスすれば後な何でもありですから」。

「そうだな」。

とベッカーは納得した。しかしアビンは、それだけで納得してどうすると言いたい
のをのどの奥でじっと堪えた。

まっ、事実はそうなのだから仕方がないにしても、それだけで納得して警備が務まる
のか心配になったのと同時に、何故、提督がこんな装備を持ち込んだのかも不思議に
思えてきた。まさか、このようなトラブルが有ることを予め知っていたのか、そんな事
は無いだろう、しかし、何か引っかかる物が有る。だが、今はそれどころではない、早
くここを脱し津する事が先決だ。気になることは、助かってから考えようと思った。

「では、移動しましょうか」。

とアビンはベッカーに声を掛けた。

「いや待ってくれ。一人重体の者が居る」。

と深刻な答えが返ってきた。

そこでアビンは尋ねた。

「その方を動かすことは出来ませんか」。

その言葉にベッカーはアヒムの手当をしているフィンチに尋ねた。

「フィンチ。アヒムは動かさそうか」。

フィンチは傷の縫合をしながら

「少しなら大丈夫ですが。出来れば担架など有れば一番良いですが」

と答えた。

「と言うことだ」

とベッカーは付け足した。

「解りました。アリス聞こえるか担架が必要だ。この近くに緊急用品の置き場はどこだ
教えてくれ」。

アビンはションの名前を出さないように愛称を使った。これで、ションにいやな思
いをさせてしまうが、今は彼女の名前を出さないのが得策だと思えてのことだった。

「解りました。少しお待ちください」。

その声は、それほど怒っているようには聞こえなかったのでアビンは安心した。

「アビンさん。解りました。エレベータに戻る通路の初めの十字路に向かって左側に緊
急用ボックスが有ります。それからミユラが上に上がり始めました。注意してくだ
さい」。

「解った。ベッカーさん、誰か怪我人を担いで緊急用品のある場所へ行ってくれませ
んか。時間ありません。奴が上へ上ってきてますから」。

「そうか、なら．．．．．フィンチ手を貸せ俺がアヒムを担ぐ。テオ、お前は乗客を誘
導してくれ」。

「解りました。チーフ」

「では、皆さん此方の指示に従って、行動してください。まずこの部屋から出ます」と話し始めた。

「それから、前の方のエレベータに向かって移動します」。

すると、乗客はおそるおそる部屋を出始めたが、女性の乗客がドアを出たところで「キャー！」と鋭い悲鳴を上げた。

それを征するようにテオは

「奥さん、奥さん、そっちを見ないで！エレベータは反対方向ですから。大丈夫、助かりますから」

と女性をなだめる。

アビンは、今の叫びでミュラが反応して真っ直ぐにこっちに掛けてはこないか心配になってションに連絡した。

「ミュラの様子はどうだ」。

「今、F4に上がりました。動きは相変わらずゆっくりです」。

「ありがとう」。

「どういたしまして」。

アビンは部屋の外に立って一人、一人、テオに導かれて部屋を出ていた。そして奥の方では、ベッカーが怪我人を担ごうとしていた。

「チーフ、よろしいですか」。

「ああ、やってくれ」。

二人は声を掛け合って怪我人を担ぎ上げた。それからベッカーはフィンチに導かれるように部屋を出てきた。

「では、いこうか救助隊員君」。

「行きましょう。足下気を付けてください」。

「解ってる」。

そう答えるとベッカーはゆっくり歩き始めた。それに付き添うようにアビンとフィンチがそれに続いた。

しばらくして初めの十字路で足を止めアビンは緊急ボックスを確認してその扉を開けて中から折り畳み式の担架を出し組み立て始めた。

フィンチもアビンが組み立てるのを手伝ったのでそれは直ぐに組みたった。

そこへ、ベッカーがアヒムをゆっくり下ろした。

それからベッカーがフィンチに言った。

「少し釣り合わないが、俺が頭の方を持つからフィンチ足の方を持ってくれ」。

「解りました。チーフ」。

と二人はアヒムを乗せた担架を持ち上げた。それからベッカーはアビンに言った。

「じゃ、援護を頼む」。

「お任せを」。

とアビンが応えたその時、ションから急報が入った。

「アビンさん。ミュラの動きが早くなりました。エレベータに急いでください」。

「解った」。

と応えるやいなや、アビンは叫んだ。

「奴がこっちに向かってる。急いでエレベータに入って！」。

その言葉に先行しているテオの乗客たちが、叫びながら走り始めた。それに釣られるようにベッカーたちも走り出した。アビンはその最後部で援護しながら掛けだした。

「ミュラはどこから現れそうだ」。

とアビンは状況を確認した。

「今、F5です。その5T6をT5に向かって走っています。最短でアビンさんたちが担架を取り出した通路に三十秒後現れます」。

アビンはその答えに、叫んで言った。

「全員エレベータまで全速で走れ！」。

先に行った乗客たちはもうすぐ着きそうだと思ったとき、乗客の子供が転んで泣き出した。そして、その母親は、立ち止まろうとしたがテオに引きずられてエレベータの中に入った。そんな中、母親は必死に子供に向かって叫んでいる。アビンは走りながら子供との間隔を詰めながらどうするか考えていた。

ベッカーたちもエレベータの中に入った。

子供との距離がだんだん近づいてくる。アビンは側を過ぎ去る時左腕でその子をすく

上げたが、子供が十歳ぐらいだったので重くてバランスを崩して直ぐに転んだが、二人とも床を滑るようにしてエレベータの前にたどり着いた。

丁度その時、ミュラがさっきの十字路に現れ、こっちに向きを変えて走り始めた。

アビンは乗客の叫び声を聞きながら、子供をエレベータ内に引きずりながらハンドスマートガンを構え三発発射して叫んだ。

「エレベータのドアを閉じてくれ」。

すると二人が、エレベータ内に入ったところでドアは閉じた。そして、直ちにF5に下がり始めた。

そして少し下がった所で、頭の方でガシャン！と大きな音とともに振動が伝わってきた。

アビンは、ほっと胸をなで下ろした。間一髪だった。

「アビンさん。此方で隔壁を閉じてミュラを閉じこめました。ですからF5に到着次第5Q3の隔壁に言ってください。其方でホルストさんたちが待機しています」。

「ありがとう」。

すると、直ぐF5に到着した。彼らは、直ちに5Q3の隔壁に向かった。

「此方アビン。5Q3の隔壁を開けてくれ、全員その前にいる」。

「解りました。今開けます」。

その応えが、返ってくるなり警報が鳴りながら隔壁が上がった。

そんな様子を見ながらアビンは、よくこんなんでミュラを捕らえられたなと思った。

そこで、尋ねてみた。

「よくこんな、動作の遅い物でミュラを捕らえられたな」。

「いえ、緊急カットオフを行ったんです。そうすると、二秒で閉じますが、次上げるのが大変なんです。動力全部カットしたので、ジャッキで上げなければならないんです」。

。「そうなのか。後始末が大変なのか」。

「そうなんです」。

シヨンと話しているアビンにベッカーが近づいてきて、握手を求めてきた。

「ありがとう。君のおかげで助かったよ。これで、部下の命も助かる」。

「いいえ、当然のことをしたまでですよ」。

とアビンは少しはにかみながら答えた。

二人が5Q3の隔壁を過ぎると、再び警告音とともに隔壁が降り始めた。

その様子をじっと見ているアビンの元にホルストが近づいて来て言った。

「第一回戦は、此方の逃げ勝ちだな。二回戦目はどうするかな、英雄君？」。

アビンがその言葉にどう答えたらいいか迷っていると、子連れの人婦人が近づいてきて言った。

「なんとお礼を申したらよいでしょうか。ありがとうございます。あなたは私たちの命の恩人です。それで、せめて．．．．．」。

しかし、アビンは、半分上の空で、聞いていた。緊張感が急に解けたせいなのか、軽い心神喪失状態になっていた。そこで、アビンに変わってホルストが受け答えをしてくれていた。そして彼はゆっくりとソファに腰掛けた。どうも、朦朧としながらもロビーまで歩いていたのだった。直ぐ側にホルストに付き添われていることも解らぬまに．．．．．。

アビンはどれ程呆然としていたのか、解らなかつた。
ところが、周りが騒がしくなったのに気が付いて我に返った。
すると、ホルストが語りかけて言った。
「大丈夫か？」。
それに答えようとしたらホルストに、止められて口を閉じて彼が、話すのを黙って聞いた。
「今は、ここでジッとしている。この船に乗り合わせていたプレスが英雄を祭り上げようと、お前を躍起に捜している」。
その言葉にアビンが身構えようとしたのをホルストは制して言葉を続けた。
「心配するな。武器とサバイバルジャケットは、此方で直ぐに隠したから、あいつらにはそうとは見えないだろう。かえって、さっきまでの様子からして救助された乗客にしか見えなかつただろうよ。何せ、さっきまでは、まるで抜け殻のようだったからな。あいつらもここに来て、まず言ったことは被害者の方ですか。どうも話は聞けそうにないですねと、言ってさっさと行っていったくらいだからな。その方がお前としても好都合じゃないのか」。
その言葉は、当たっていた。ただ、一時の正義感で突っ走ったものの後のことは全く眼中に無かつたからだ。正直ホルストには、助けられた。だが同時に、此方の正体を知られてしまったのではと、アビンは思った。
「ありがとうございます。ホルストさん」。
「なあに、気にするな宮仕えの辛さはよく知っている。教授とシヨンを守らなきゃならんのだろう。さっきシヨンと提督から話は伺った」。
アビンは、その言葉を聞いて、どうやらシヨンが彼の立場を誤解の無いように言ってくれたようだと、思った。確かにここまでは、彼の立場がどんなものかホルストなら察知するだろうし、下手に隠せば変な疑いが掛けられるだけだ。それに、今後の助けも得られなくなるだろう。それにしても、シヨンが言っていたように、確かに助けになる人物だと、思った。
「どうした？俺の顔をじろじろ見て」。
「いやなんでもありません」。
「ならばばらく、ここでジッとしていよう」。
「どうしてです」。
「この船の船長が討伐隊を組織してミュラを抹殺すると息巻いているんだ」。
「ですが、そのためには、スマートガンか対艦砲が」。
「そう、その対艦砲があつたのさ、この船に」。
「民間の船にですか」。
「それも、60ミリビームキャノンだメタルライン社製のMAB-60H-Lと言う奴だ」。
「それって、共和国軍のスターフリゲートの副砲で長距離射程の高ビームタイプじゃないですか。そんな物、船内で発射したら穴だけですみませんよ」。
「多分な。この船の隔壁だったら、ワンショットで20枚は軽く貫くだろうよ」。
「それに、ミュラはかなり敏捷です。そんな重火器では．．．．」。
「電子銃で痺れさせてから仕留めると言っていたな」。
「そうですか。うまくいけばいいですが」。
「今は、そう祈ろう」。
「ホルストさんは神がいると？」
「いや、言葉のあやさ、出来ればいてほしいがな」。
「そうですね」。
「まっ、此方は事の成り行きを大人しく見ていよう」。
「そうですね」。
とアビンは、答えた物だが、妙な胸騒ぎがして一瞬身震いをした。
「どうかしたか」。

「いや、何でもありません」。

「そうか」。

ホルストさんには、何でもないと言ったが、最近、虫の知らせというのがよく当たる。特に身震いがするときには、彼としても成功を祈りたいのは同じだった。だが、誰に？

そう考えていると、ヘンツェが、二人の所に近づいていった。

「チーフ、どうやらF6だけを閉鎖して後はすべて解放するそうです」。

「解った。ありがとう。ヘンツェ」。

「いえ、当然のことです」。

と答えながら彼はホルストに敬礼をした。

それを見てホルストは、少しウンザリしたような素振りをしてから彼に指示をした。

「全員に伝えてくれ。閉鎖解除後も各人その場で待機と」。

「待機ですか」。

ヘンツェは浮かぬ顔で返した。

「そうだ！」。

ホルストの強い調子の解答にヘンツェは直立して敬礼して「イエッサー」と言うも駆け足で去っていった。

それを見送ってからホルストはアビンに言った。

「うちは軍隊じゃない。だからそれは止めろとは言っているんだが、止めやしない。かえって同調する者が近頃増えてきてかなわん」。

「みんな、ホルストさんを慕っているんですよ」。

「そうなのか」。

「エナさんたちは、ホルストさんの事を賞賛していましたよ」。

「.....」。

ホルストは、答えなかった。

「ところで、今回の事でどの位犠牲者が、出たんでしょうね」。

とアビンは、ポツンと呟いた。

「それはですね、四十一人です」。

アビンはハツとして声のする方に振り返った。

するとそこには、シヨンが立っていた。何時の間に来たんだろうとアビンは思った。

それは、少しも気配を感じなかったからだ。そこで、アビンはそれとなく尋ねた。

「シヨン？何時からそこに立っていたんだ。人の話を立ち聞きするのはよくないと、思うんだがどうかな」。

その言葉に、シヨンは直ぐに反応して謝罪した。

「ごめんなさい。声を掛けようとしたんですが、ヘンツェさんが、先に話し始めておられたものですから」。

「そうか、悪かった」。

とアビンは、攻めたことを謝罪した。

それにしても、同時に来たにしては、やはり後ろの方に人の気配は感じられなかったのだがと、気にはなったが、かといって疑ってもしようがないので、あえてシヨンの答えを確認した。

「ところでシヨン？先ほどの人数は確かなのか」。

「はい。先ほど全てのシステム回復した時点での確認ですから正確です。内訳は警備員が二十二名死亡一人重体、乗客十八名が死亡です。それから最初発見された、つまり、わたしとアビンさんで発見した血痕の主も亡くなっている様ですので、これを加えるますと全部で四十一人死亡一人重体という状況です」。

とシヨンがこの辛い報告を事も無げにすらすらと、言っただけのを見てアビンは、確かにこの子は感情が薄いなど感じた。

「どういたしました」。

とシヨンがアビンの浮かぬ顔を察して尋ねてきた。

その言葉に、アビンはさすがに勘は鋭いなど思いながら返事をする。

「いや、何でもない」。

「そうですか.....」。

と言ってから、少し間をおいてシヨンは、ある物を彼に差し出しながら言った。

「アビンさん。これを.....万が一のために部屋から持ってきました」。

それは SPAK 6-48-30I スマートガン弾の三十発入りのマガジンだった。

何故こんな物をと言う疑問とともに、俺の部屋に勝手に入ったなどアビンは思っ^て口を開こうとした矢先にションが、驚かせる事を言った。

「先ほど、伯父様に言われてアビンさんの部屋に行って参りましたが、ドアには鍵がかかって無く、部屋は荒らされていました。ですが、このマガジンが入っていたケースは無事でしたし、コンピュータも無事でした。たぶん、何も取って行かなかったのでは、と思います。部屋を荒らしたのは物取りに見せかける為、ケースはロックが外れなかった為、ですが彼らは必要な情報は、持っていったと思います。それは、コンピュータを起動させた形跡があるからです」。

「コンピュータを起動させた？」。

「はい」。

「どうしてそんなことが解るのかい」。

「それは、微かに熱を帯びていましたからです」。

「そうか」。

とアビンは、応えてから考えた。確かに、今日は一度の起動させていなかったから、微かでも熱を帯びていることは、使われた形跡があると見える。するといったい何を見たんだ。もしかすると、蒔いた餌に、誰かが食いついて来たのかも知れないと考えて、ションに尋ねた。

「で？どの位の情報を持っていったと思う」。

「たぶん、アビンさんが今作成しているレポートのデータを全てだと思います。ほかには目もくれていないでしょう。データのバックアップの記録が、そこだけ有りました。今から三十分程前になされたと」。

「そうか、ところで、俺の部屋は閉めてきたか」。

「開けたままで来ました。その方が向こうも警戒しないと思ひまして、ただ、船長さんには、部屋が荒らされていることは報告いたしました。でも、安心してください。勝手なことと思ひましたが、見つかると問題になる物は全てわたしの部屋に保管しておきました」。

「ありがとう」

としかアビンは返事が出来なかった。

そして、彼はションの手際の良さに感心した。この娘は彼が、一般人であるように装う点で協力してくれていることに感謝した。

「いいえ、勝手なことをして申し訳ありませんでした」。

アビンは、その言葉に確かにそうだとも思ったが、この際ションの機転を感謝しようと思ったのだ。しかし、部屋に入り込んだ人物は、誰だろうか、ミューラーかトレッカーのどちらかだと思ったが、証拠が掴めなければ今のところは、どうにもならない。だが、これで、二人とも安心出来る人物では無いと考えた方が得策だと言うことになるなどと思った。

「ところで、ション？提督はどうした」。

とホルストが尋ねた。

「提督ですか。船長に話があると言ってブリッジに行かれましたが」。

「そうか、思うところは、わたしと一緒にか」。

「どう言う事です？」。

とアビンは、ホルストの言葉の意を尋ねた。

「いや、こっちの話だ。悪いが君には首を突っ込んでほしくないことさ」。

ホルストは、アビンの質問を優しく拒絶した。

「申し訳ないです」。

とアビンが謝罪する。すると、ホルストは、彼を慰めるように言った。

「なに、そのうちイヤでも解るさ、その時は君にも手伝ってもらう事になるけどね。今は、やっておくことがあるので、まだ、知らない方がいい。ただそれだけの事さ」。

アビンは、その言葉では納得できなかったが、今は従うしかないと思った。

「なに、このまま船長の思惑どうり順調にいけばの話さ」。

とホルストは付け加えるように言った。

「順調に？とはどういう事ですか」。

アビンは彼にあえて尋ねた。しかし、返ってきた答えは「そう願ってるってことさ」と言うものだった。

アビンが、どうも浮かない顔をしていると、ションが彼に言った。

「アビンさん、申し訳ないですが、準備をしていただけませんか」。

「何の準備だい？ ション」。

「サバイバルジャケットと装備は、アビンさんの後ろのバッグに入っています。もうそろそろすると、人目はF 6での事に移ります。そしたら、そのバッグを持ってわたしに付いて来ててください」。

アビンは、その答えの意味が把握できず

「君に付いて行く？ どこへ？」

と尋ねた。

「それは、来れば解ります」

とションは、答えてからクスツと笑った。

その時アビンは、それが悪魔の誘いと言う感じがして為らなかったが、

「そうかい？ 解った」

と答えてしまった。

するとションが、ポツンと言った。

「よかった。皆さんわたしの忠告を聞いてくれませんので、これしか方法がなかったのです。アビンさんには、ご迷惑をお掛けします。ごめんなさい」。

アビンは、その言葉に答えようとしたが、ションは、ただ、アビン達が戻ってきた5 Q 3の向こう側をジツと見たままだったので、答えられなかった。そして、その隔壁は、すでに開け放たれていて、その向こうに真っ直ぐな通路が奥の方に延びていた。

丁度そのころ、閉鎖されていたブロックのF 6を除く各階層では、ミュラに荒らされた部屋、通路の補修及び遺体の回収を行っていた。それまでは一般乗客は、立入禁止とされていた。

そしてF 6では、貨物運搬路を通して、ビーム砲をミュラが閉じこめられている隔壁の前に運んでいた。

「よし、引っ張ってくれ」

と警備隊の隊長が牽引車のドライバーに声を掛けた。

すると、ドライバーは、その指示に従って牽引車を前に進めると、それに、釣られるようにビーム砲は、ゆっくりと動き始めた。

「ゆっくり行け」

と声が掛かる。その言葉にドライバーを務めていた甲板員は、さっさと用を済ませて帰ろうとしか考えていなかった。

しばらく進むと、彼ら警備隊にQ 6の隔壁が見えてきた。それも、三つある隔壁の進行方向に対して左側の隔壁だ。彼らに、はっきりとQ 6 Bと書かれているのが見て取れる所までビーム砲を進めた。

「よおし！ ここでストップだ。今から金具を外すから外し終わったなら右の通路に、牽引車を避けておいてくれ」。

ドライバーはその言葉に肯いてから

「解った。俺は事が済むまで、入って直ぐの部屋に待機しているから終わったら呼んでくれ」

とその警備隊長に言った。

「解った。直ぐ終わるから、待つ必要はないと思うが、あんたがそうしたいならどうぞ御自由に」。

「ああ、そうさせてもらう」。

そうした会話の交わされているうちに、金具が外された。

「外したぞ。さあ、牽引車を退けてくれ」。

「ああ、そうする」。

と言ってドライバーは、牽引車を右の通路に入れてから、直ぐに左の部屋のドアの前にたった。そして、船内無線を取り出してブリッジを呼び出した。

「こちら、副長のマティエリだ。B 6 - 5 1 4の部屋のドアを開けてくれ」。

すると、スツとドアが開いたので、彼は、直ぐに部屋に入りドアを閉じた。

彼としては、この掃討作戦は、気乗りがしなかった。それは、何か妙な胸騒ぎがしてならなかったからだ。そこで、船長に断って作戦終了まで、部屋で待機させてほしいと願い出たのだったが、そんな事でどうすると、一喝されると思ったが、昨日の格納デッキのことが、あったために、無理は禁物だなという事であっさり了承されたのだった。そして、今こうして、安全策として部屋で待機する事にしたのだった。

「そのころ、等の警備員達は、ビーム砲の発射準備をしていた。
「此方、ゼクター6。現在、ビーム砲の準備をしている。それと同時に、隔壁Q 6 Bを開ける為の準備も同時進行で行っている。以上」。
「此方ブリッジ、ゼクター6了解した」。
その答えを聞いてから、警備隊長は、部下の四人に指示を出して、電子銃を装備させて二人ずつ前方の左と右の通路に待機させた。
それが終わる頃に、ビーム砲の発射準備が整った事が告げられた。すると彼は、隔壁の前にいた二人にパワーリフターの据え付けの完了を確認してから呼び戻した。
それから、彼はブリッジに連絡を入れた。
「此方ゼクター6、準備が完了しました。指示をお願いします」。

ブリッジでは、警備隊からの一報を受けて、オペレーターがデュパルクに、報告した。
「船長、準備が整ったそうです」。
「解った。では、現在閉鎖されている区画を、搬送エレベーターを除いて完全封鎖しろ」。
「解りました。完全封鎖します」。
「それから。ゼクター6には、攻撃は2分後と伝えてくれ」。
「解りました。二分後と伝えます」。
そう答えるとオペレーターは、そのことをゼクター6に伝えた。すると「二分後攻撃」との返事が返ってきた。
それから、デュパルクは、オペレーターに指示を出して言った。
「Qの通路上のQ 5以降のAとDの隔壁を全て閉じろ」。
「了解、全て閉じます」。
デュパルクはこれで、船体に穴が開いたとしても大事に至らないと思った。

そのころ、ゼクター6は、攻撃のカウントダウンを開始していた。
「後、一分だな」。
その言葉に反応してパワーリフターを据え付けていた二人は、コントロール装置のアンテナを起こした。
「三十秒前、電子銃を構えろ」。
その言葉で前方にいる四人は電子銃の銃口を隔壁に向けて構えた。
「二十秒前、安全装置解除」。
彼の傍らにいる警備員はトリガーのカバーを外した。
「十秒前、照準は中央」。
「了解。中央にセットします」。
「五秒前、パワーリフター始動準備」。
「了解」。
と先ほどパワーリフターを据え付けて警備員が手を挙げて答えた。
「四」。
彼の声が、幅六メートル高さ四メートルの通路に響く。
「三」。
全員が前の隔壁に集中する。
「二」。
トリガーに予備を掛ける。
「一」。
指先に力が掛かる。
「パワーオン！」。
その声とともに、パワーリフターのスイッチが入る。それと同時に、パワーリフターは、轟音を上げて隔壁をあっという間に持ち上げた。
ところが、隔壁は強制的に開けられたと言うのに、その向こうからは、何の反応も示さなかった。そう、ことりとも反応がなかった。
「どうしたんでしょう」。
と一人の警備員が呟いた。
「気を抜くな！奴は隠れているんだ」。

と警備隊の隊長は、部下に警戒を促した。
そして、全員がじっと相手の出方を見守ったが、一向に動く気配すら感じなかった。
しばらく、そのままの状態が続いた。そしてどの位立ったのだろうか、警備隊長は、ブリッジに連絡した。
「此方、ゼクター6、隔壁を開けたが、ミュラの気配が感じられない。まだ、Q6のブロック内に居るか確認してくれ」。
すると返事が、帰ってきた。
「まだ、そのブロック内に居るぞ。間違いなく」。
「だが、隔壁を開けても飛び出してくる気配は、無い。本当に居るのか」。
「確かにいる。それも、奥のエレベータの方にジツとしているようだ。其方からは確認できないかもしれない」。
「解った。それなら此方からは見えないのが解る。このまま持久戦となりそうだ」。
「了解。十分警戒してくれ」。
「了解」。

と通信を切ってから警備隊の隊長は言った。
「向こうは、隠れん坊を決め込んでいるらしい」。
「さっきの音で、びびっちゃったのか」。
と一人の警備員が呟くと、一瞬、ほっとした雰囲気気が漂った。
その時、ガリガリと奥の方から音がしたと、思ったら、今度は、グアシャグアシャと金属を粉碎するような、けたたましい音ともにミュラが、天井を走って出てきた。それを見て慌てた砲手は、とっさにビーム砲の角度をアップして撃ったが、エネルギービームは、ミュラの背中をかすめてQ6Cの隔壁に穴を開けた。
それと同時にミュラは、ひらりと天井から床に降りて、素早くビーム砲のある方に走ってきたかと、思うと直ぐ手前の右通路で電子銃を構えていた二人をなぎ倒して、右通路の奥に姿を消した。

その状況に、警備隊の隊長は、しまったと思いながら手前の右通路の方に走って言った。
そこには、二つに切り裂かれた二人の部下が倒れていた。そして、彼がその二人に歩み寄ろうとした。その時、ミュラは、ほかの通路を通ってビーム砲の後ろに来ており砲手と一緒にビーム砲を薙ぎ払った。壁に叩き付けられる砲手と火花を散らして無惨に転がるビーム砲、そして逃げまどう二人の部下。そして次彼が目にしたのは、ミュラの巨大な手だった。

「此方、マティエリ。ブリッジ聞こえますか」。
「はい。此方ブリッジ」。
「掃討作戦失敗です。ゼクター6は壊滅です。生存者二名。残り六名は絶望。ビーム砲は破壊されました。此方はB6-514の部屋に逃れて無事です」。
「了解。掃討作戦は失敗を確認。副長その場を動かないでください」。
「解った。何処か他に行ってくれと言っても、もうお断りだ」。
そう答えるとマティエリは、彼の居る部屋に逃げ込んできた二人の警備員を見た。彼らは、まだ、荒い息をして床にしゃがみ込んでいた。
そこで、彼は二人に言った。
「せつかく逃げ込んできたのに悪いが、これで助かったというわけでは無いぞ。後二日は、ここで大人しくしていないと助かる可能性は無いからな。まあ、それでも此処は、大人しくしていればある程度安全だ。奴が此処に気が付かない限りは」。
マティエリは、自分が幾分冷ややかに話しているのに気が付いた。たぶん彼らの失態に腹立ちを覚えたのもあるが、余りにも情け無い様子について嫌みを言いたい気持ちに駆られての事だった。

そんな、彼の言葉に警備員の二人は何の言葉も返すことは無かった。
それもそうだなとマティエリは思っていた。何せ、二人の慌て用は、見ていて腹立たしかった。突然チャイムが鳴ったと思う他、助けてくれ開けてくれの一点張り、どんな状況で助けてほしいのか言葉は無かった。開けてみるところがりこむように入って来るなりドアを閉じてくれとわめき立てる。ドアを閉じた後状況を聞いてみれば二人の警備員がミュラになぎ倒されて、その後ミュラがビーム砲を襲った様だ。
そして、どうやら彼らは電子銃を持っていた二人が、なぎ倒されるのを見て逃げ出したようだった。

話の後で、セキュリティモニターを右いっぱい振って見ると、十字路の所にビーム砲の残骸が見えた。

それで、マティエリは、どうも後の警備隊員は、全滅したのではないかと判断したしだいだった。

それから、改めてマティエリは、シヨンが話していたように此処はじっと二日待つて次の寄港地でしっかりした対処をした方が、得策だという事が正しかったと、思うのであった。

それに、彼自身もこの作戦には気乗りがしなかったが、この船の全警備隊の隊長が、自信満々に「我々の作戦は完璧な物だ」と船長に言っけて、挙げ句の果ては「これが了承されないとすれば、あなたの船長としての資質に重大な疑問が生じる」と船長に詰め寄る始末で、ついには、船長がおれてしまった故に、行われた作戦だった。

たぶん此によって、船長は、この航海の後に懲罰委員会に呼び出されることは必至だろうし、作戦を強硬に促し遂行した警備隊の総責任者の隊長は免職及び宇宙運行法廷で審議されるだろう。どちらも大きな判断ミス責任はとられるだろうなとマティエリは思った。

それにしても、自分の部下を沢山失ったために、復習したいと思うのは解るが、やはり無謀だった、特に相手が未知の生物である時には特にそう言える。そして、そのいきり立つ相手を征する事が出来なかったと言う点で、以前はライバルだったファーナビー提督と、この辺が違っていたのだろう、それ故、方や貨客船の船長、もう一方は、押しも押されもせぬ名提督、女たらしとの噂はあるものの、ただ、どちらも普通の船長としては十分過ぎる程の資質は持ちあわせるなどと、マティエリは考えながら、ふとシヨンが、もっと大人だったら、事態は変わっただろうにとの思いが浮かんた。

確かに、十五歳の子供の言葉は、大人の中では、軽く見られがちだ。特に緊迫した中では、たぶんシヨンが船長にミュラに関しての忠告を伝えるところに、警備隊の責任者達が、居なければ船長ももっと正しい判断を下せただろうに、マティエリには、そのことが残念だった。それは、たぶん自分が船長の立場だったら同じ様な間違いするだろうと思ったからだった。

それから、マティエリは、だらしなくグツタリしている二人の警備隊員を見ながらため息混じりに言った。

「しかし、これからがやっかいだろうな」。

再突入

「此処です。アビンさん」
と言って、シオンは貨物エレベータの前で立ち止まった。
「これは？」
とアビンは尋ねた。
「貨物エレベータです。主に大型の清掃機材やメンテナンス機材を各階層のフロワーに搬入するための物です」
との答えが返ってきた。
「何故、貨物エレベータ？」
「此処だけが、唯一フリーなんです。これで、私たちはF6に行きます。先ほどは、ここからビーム砲が運び込まれました」。
「そうか．．．．．これで私たちが？．．．．．おい、シオン、君も行くのか」。
とアビンは聞き返した。
「そうです。そうしないと誰が、ミュラの動きを止めるのでしょうか」。
「それはそうなんだが、危険なんだぞ」
とアビンは何とか考え直すようにと促した。
しかし、シオンの返事は、
「解っています」
とキッパリした返事だった。
「解っているって、死ぬかも知れないんだぞ」
とアビンは引き続き促す。
「そうかも知れません」
とシオンは至って平然と答えた。
アビンは、その答え方に驚いて何も言えなくなった。
すると、シオンがアビンに話し始めた。
「アビンさん。わたしがわがままで無茶を言っているとお思いかも知れませんが、誰かがやらないといけない状況になってしまったんです。このまま放っておいてもミュラはこのF6の閉鎖された区画内で、大人しくしてはくれなくなってしまいました。先ほどのビーム砲による攻撃によって完全に敵対行動状態になってしまいました。そのため、閉鎖のために下ろされている隔壁を何時その鋭い爪で切り裂いて囲いの外に出るとも限らなくなってしまったんです。それで、一刻も早く囲いの中で始末しなければならなくなってしまうのです。それも、一人ではどうにもなりません。一人がフォワードとして攻撃を受け持ち、もう一人は、バックアップサポートとして援護しなければミュラを押さええることは出来ません」。
「それは解るが、いくら何でもシオン、君が来るべきじゃない」。
とアビンは強く窘めた。
しかし、シオンは譲らなかつた。
「いいえ、わたしは、大丈夫ですから。アビンさんご心配なく」。
と答えながらきりっとした表情でアビンを見返した。
「しかし．．．．．」
とアビンが渋っていると、シオンが彼の前に何かを差し出した。
「此は？」
とアビンが尋ねると、シオンはその棒のような物をギュツと握りしめる。すると、その棒のような物は両端が600ミリずつ活きよいよく伸び、弓のような形に成った。
そして、シオンは静かに言った。
「此は、電子弓です。狩猟用ですが．．．．．」。
「狩猟用？．．．．．狩猟用の電子弓と言えばかなり強力な電子銃と代わりはしない。いや、かえって電子ロッドを併用した時には、破壊的な威力を発揮する。それはまるで、対戦車砲並の威力だ。だが、シオンどうしてそんな物を．．．．．」。
「そうですね、此くらいでないと、ミュラの動きを止められません。ただ、普通の動物ですとショック死しますけどミュラには癒れる程度しか影響を与えられません」。

とシヨンは、平然と話す。その様子を見てアビンは、こんな状況にも平然と対応するシヨンはどんな精神をしているのか不思議でしかなかった。

「それで、本当に大丈夫なのか」。

「はい。たぶん」。

「たぶんね。どうしても良いがミュラの動きが止まれば、俺としては助かる。．．．．

シヨン援護をよろしく」。

とアビンは、言うてから、後は出たところ勝負かと思った。

するとシヨンが彼に言った。

「では、参りましょうか。アビンさん」。

と言うてからシヨンは貨物エレベータのドアを開くスイッチを押した。

すると貨物エレベータの重いドアが、ガクツンと音を立ててからゆっくり開き始めた。そして、中に入ってみると、流石にビーム砲を運び上げた物だ、奥行きが十メートル幅六メートル高さ四メートルはある広さだ。その中に、アビンとシヨンの二人が立ってみると、何とも寂しい限りだった。

「なんだか寂しいですね。アビンさん」

と率直な感想を述べるシヨン。

それに対して

「二人つきりだからな」

とアビンは皮肉っぽく言った。

「そうですね」

とシヨンは真面目に受け答えた。

その対応にアビンはヤレヤレとため息を付いた。

「アビンさん。どうかしましたか」。

「いや、何でもない」。

「そうですか。では、F 6 に上がります」。

と言うてシヨンはF 6 へのスイッチを押す。それから、アビンの方に向き直って話し始めた。

「アビンさん。F 6 に上がったなら何時ミュラと鉢合わせになるか解りません。動向はモニター出来ませんが、動きが早いです。もしかするとドアが開いたら同時に此方に飛び掛かってくるかも知れません。でも大丈夫です。最初の一撃は携帯シールドで何とかかなりそうです。二度目は、持ちこたえられますが、此方の状態と何処にいるかで変わってきます。三度目は期待しないでください。ですから、そうなる前に仕留めなければなりません」。

「と言うことは、最大空振りには二回までと言うことか」。

「申し訳有りませんが、そうなんです」。

「ところで、ミュラは今どの辺りにいる」。

アビンはシヨンの断りを受けることなく質問をした。それは、今知っておきたい最も重要な情報だからだ。

「はい。今このエレベータから四区画前方方向に行った左側の三番目の通路を此方側に進んでいます」。

とシヨンは冷静に状況を報告してくれた。アビンは、それを聞きながらハンドスマートガンのカートリッジ排出スライドをスライドさせて、さっきまで入っていたリニアガンの加速コイルカートリッジを排出させた。それに伴ってスマート弾のマガジンからスマート弾のカートリッジが加速器銃身に供給された。そして排出された加速コイルカートリッジが、エレベータの床にコトンと音を立てて転がった。

この事は、本来のバンドスマートガンの威力を發揮することを示すと、同時に引き金を引く人物を、破壊魔と変貌させる物だった。本人の使い方次第で．．．．．

それで、アビンは自然に深く息をして自分の心を落ち着けようとした。

そして、ゆっくりとドアに向かってハンドスマートガンを構えた。それから、自然とこぼれそうになる口元を必死に押さえながら、彼は自分に「引き金にはまだ指を当てな、うっかり撃つと、ドアには直径300ミリもの大穴が空き二度とドアは開かなくなってしまうぞ、落ち着け、落ち着けアビン」としきりに言い聞かせていた。

すると、ガクンとF 6 に到着した。しかし、ドアは開かない。

「アビンさん。今ドアは、ロックしています。アビンさんが宜しければ、いつでも開けます。どうぞ指示をお願いします」。

とシヨンがアビンに告げた。

「今、ミュラは何処にいる」
とアビンはシヨンに尋ねた。
「はい。ここから二区画前方に行った処の左側に二番目の通路を此方に向かっています」。
アビンはその答えに
「解った。シヨン開けてくれ」
と言った。
「はい。開きます」
とシヨンは応えてドアを開けるスイッチを押した。
するとドアはゆっくりと真ん中から分かれて上下に開きはしめた。
ドアが、ゆっくり開き始めると次第にF6の様子が見えてきた。貨物エレベータの前は少し大きなスペースが取られていて目の前を広い通路が前方に延びているのが確認できた。
ドアが完全に開くとアビンはエレベータから出て辺りを警戒して振り向く方向にハンドスマートガンの銃口を向けながら気を配った。そしてアビンは少し前に進むとその後ろにシヨンが続いて従ったのを気配で感じた。
すると、ガクンとの音と共に静かな唸りを上げてドアが閉まり始めた。たぶんシヨンが扉のスイッチを操作したのだろうとアビンは思ってしまった。
「シヨン。今ミュラは何処にいる」。
「左のブロックの対角線上の反対側にいます」。
「すると、向こうも此方の出方を見ているということか」。
と呟くアビンの言葉にシヨンは
「そうではなく、音の反射で此方の位置を確認しているのだと思います」
と告げた。
「どう言うことだ」。
「こちらの位置を掴んでから、全速で襲うつもりなんだと思います。向こうの最大の武器は早さと鋭い爪ですから、急接近して鋭い爪で一撃という戦法でしょう。ですから此方は先ずはシールドを張ります。此で最初の一撃はかわせると思っています。その次ですが、アビンさんスマート弾はシールドを貫通します。そのままミュラを狙うことが出来ます」。
「なら、楽勝じゃないか」。
その言葉にシヨンは、否定するような響きのある応えをした。
「それでもありません。その一撃に、体制を保つことが出来ればの話です。シールドごと壁に叩き付けられる可能性もありますから」。
「そうなのか」
とアビンは驚くように尋ねた。
「はい。向こうの力がどれ程か解りませんから。ただ、2.5トン程の物を数メートルはじき飛ばす事が出来るみたいですから。ビーム砲を薙ぎ払った様子をモニターで確認した限りではです」。
「じゃどうする」。
「此処でシールドを張ります。アビンさん動かないでください。動くとも此方が不利ですから」。
「解った」
と応えてから、此処はシヨンに従っておこうと思った。
「シールドは短時間しか張れませんので、向こうの出方待ちです」。
「そうか。処でシールドは、どの位保つんだい」。
「一回のシールドで、受けるショックにもよりますが、今回想定するショックには十秒とは保ちません。物理的衝撃が大きすぎますので、ブラスターならかなり保ちますが、・・・」。
「そうか、聞かない方が良かったようだ」
とアビンは本当に受け流す程度効力しかない事を知って後悔した。
そして、改めてアビンは周りに気を配った。そして、左のブロックの反対側にミュラは此方様子を伺ってジツとしているのだろうか、周りは静かそのものだ、だが、この向こうには、どう猛なミュラが潜んでいる。かえって此の静けさが、彼の肩にズッシリと言いつれぬ重みを感じさせていた。
そんなおり、ふと気付くと自分の後ろにシヨンが、静かに立っている。それは、さっ

きからずと、そんなのだが、一瞬この空間に、自分一人しか居ないという間隔に襲われていたのだろう、シヨンの存在を感じられなかったからだった。

するとシヨンが言った。

「来ます」。

その言葉にアビンが目を上げるか上げないうちに、彼らに白い陰が迫ってきた。

「シールド」

とシヨンが短く言った。その直後、彼らを巨大な手が覆ったと思うと、強い衝撃が両足に伝わった。そして、また衝撃が走りアビンは少し後ずさりをする様に、よろけた。

と同時にミュラは、ひらりと体を交わして広い通路の真ん中で身構えた。それを見て取ったアビンは、すかさずハンドスマートガンを構えて二発発射した。

するとスライダが激しく二回スライドし空のカートリッジコイルを排出した。そして、彼の足下にコトンコトンと落下して床に転がった。

しかし、足下がふらついていたのか、二発ともミュラの肩をかすめて通路の奥の方に飛んでいって爆発音をたてた。たぶん何処かの壁に大きな穴を開けたのだろう。

ところが、ミュラはスマート弾は外れたのに、うなり声を発して、ジリジリッと後ずさりを始めていた。そして、よく見るとミュラの左側の肩口にケガをしたのか血が垂れていた。

そこで、アビンはこのハンドスマートガンの威力を知った。此の超高速発射されるスマート弾は、かすただけでも、相手の体に深い傷を与えてしまうのだった。

だが、かといって油断は出来なかった。それは、ミュラは後ずさりをしながらも攻撃態勢を整えつつあったからだ。

そう、幾分前屈みに為りながらミュラは、此方の様子をうかがっている。その体制は、アビンの銃口を見据えながらなされている様だった。彼には確信はなかったが、どうもその様に感じられた。彼は、自分に問いかけるように「どうする」と独り言を言った。

その時だ、ミュラがフツと見えなくなった。アビンが「何い？」と思ったその時、彼の頭の上で、バウン！との衝撃音が走ったと、同時にギャ！と短い悲鳴のような鳴き声が聞こえ、三メートル手前にミュラの巨体がドスンと落ちた。どうやらシヨンの放った電子弓の荷電子矢が当たった様だ。

その瞬間、アビンは無意識に銃口をミュラに向けていたが、狙いは付けられなかった。なぜなら、ミュラは床に落ちたが、激しく床の上をのたうち回っていたからだった。

「アビンさん、今です」

とシヨンの声が彼の後ろでした。

その声に従ってアビンは、何とか狙いを定めて三発発射したが一発しか命中しなかった。それも、左の手のひらを貫通しただけだった。それは、特殊な体毛と分厚い皮下組織により、スマート弾の威力が減衰して左手を吹き飛ばす程の威力を示さなかったのだった。

だが、ミュラはその様なダメージにも動きは落ちなかった。直ぐに電子弓による痺れが無くなったのか、むくっと起きあがって身構えたと思うと傷を負っていない右手で反撃してきたが、その鋭い爪は、アビンの体から十数センチの処を掠めて空を切った。

アビンは一瞬やられると思ったが、辛うじて助かったが次は、そうはいかないだろうと

素早く数歩後ずさりをした。すると右足のかかどが、コツンと何かに当たったと思うと背中から壁に当たった。それは壁では無く貨物エレベータのドアだった。

彼が逃げ道が無いと思った瞬間、シヨンが叫んだ。

「アビンさん伏せて！」

その言葉に、アビンはとっさにシヨンの声のする方、右手の方向に飛び込むように伏せた。すると、アビンの背中の上をミュラの鋭い爪が空を切った。

アビンは、すかさず床を転げるようにしてシヨンの傍らに行って体制を整えた。

するとシヨンが

「アビンさん、外れが多いです」

と言った。

それに対してアビンは、息を整えながら応えた。

「無茶言いなさんな！あの動きの早さにどう付いていけば良いんだ」。

「ですが、アビンさんの腕だけが頼りなんですから」。

「解ってる。もう少し動きを鈍らせる事は出来ないか」。

「解りました。やっています」。
と二人が、言い合っているうちにもミュラは体制を整えて身構えていた。左手いや左前足の傷を気にしながらも、此方を威嚇して、鋭くほえた。

それに対してシオンは、彼の前に出て電子弓を構えた。シオンが弦を引くと弓とシオンの右手の間に荷電子矢が青白く輝きながら発生したと同時に、ミュラは此方に向かって来た。シオンは直ぐさま荷電子矢を放った。

再びバウン！との衝撃音と同時に無数の稲光がミュラと床や天井に走った。それと、同時にシオンは「シールド」と言って自分の周りにシールドを張ったが、ミュラは体中電撃の火花を散らせながら、シオン目掛けて右手を振り下ろした。

すると、一瞬火花が飛び散ったと思うと、シオンはシールドを張ったまま、壁に叩き付けられた。次の瞬間、アビンはとっさに銃口をミュラに向けていた。同じようにミュラもその痺れる体を彼に向けて、再び右手を挙げた。

まるで、時間が止まって感じられたが、その時アビンは、スマート弾を三発発射していた。そして、ミュラはその手を挙げたまま崩れ落ちるように彼の前に倒れた。

スマート弾はミュラの腹と胸と頭部にそれぞれ一発ずつ命中していた。その様子をアビンはむごいと思った。なにせ頭部は見る影もなかったからだ。また、胸がむかついてきて気持ち悪くなってきたが、シオンの事が心配で、それを必至で堪えて、シオンが倒れている壁に駆け寄った。

「大丈夫か？シオン」。
「．．．．．アビンさん。ミュラは？仕留めたんですね」。

「ああ、仕留めた」。
「それは良かった．．．．．で．．．．．す」。

と言ってシオンは項垂れた。
アビンは、ハツとしてシオンに呼びかけるが、答えは返ってこなかった。すでに心臓は止まり息はしてなかった。

そして、直ぐ蘇生を試みようとしたが、突入前に打ち合わせで、確認した事を思い出した、たとえどちらかが遣られたとしても、蘇生を試みることなく、目的を果たし、直ちに結果を報告することだった。彼はやり切れない思いのまま自分の懐を探った。それは、彼の左ポケットに収まっていた。

それで、右手で取り出すためシオンの胸元にスマートガンを探してから、震える手でそれを取り出した。

それから、アビンは、どうしようもなく震える手で、事が上手くいった時の打ち合わせ道理に、船内電話のスイッチを入れて言った。

「此方、アビン、提督聞こえますか。ミュラは始末しました。繰り返します。ミュラは始末しました」。

すると答えが返ってきた。
「よしご苦労、ケガは無いかね」。

「．．．．．」。
「どうしたんだ」

と提督が焦れたそうに言った。
「申し訳有りません。シオンが、やられました」。

「シオンが？」。
「はい。最後ミュラに壁に叩き付けられて、もう息がありません」。

「．．．．．解った。今、救護班をよこすから、人工呼吸はするな。死にたくなかったら」。

「どう言うことです」。
「後で説明する。くれぐれもやるなよ」。

「解りました」。
と言ってアビンは船内電話のスイッチを切った。そして、そのままシオンの頭を膝に乗せたまま壁にもたれかかった。

「疲れた。本当に疲れた。このまま一日寝たい気分だ。泣き寝入り．．．．．だな」

とアビンは独り言を呟いた。
それから、シオンの胸元に預けてあったスマートガンを取り上げ、誰もいないフローアに、カターンとハンドスマートガンが床に置く音が響いた。それは何処か遠くに思いをはせるように。

静かに. . . .

「アビン君、良くやってくれた。助かったよ」。
と言ってくれたのは、ミュラの為に部屋に閉じこめられていたマティエリだった。

「いえ、当然のことでしたよ」。

アビンは世辞などどうでも良かった。

「いや出来る事ではないよ。ありがとう」。

そんな感謝の言葉を丁重に受け流して、シュナイダー博士の処の言った。

シュナイダーは、医療班として来ていた。

「あのう、ドクター。シオンは？」

とアビンが尋ね始めると、平然として彼に言った。

「シオンの事は心配ない。死んではいないよ。ただ今回、精神的圧迫が大きいと考えたのか、発作の薬を服用していたようだ。それでショックで一時的に仮死状態に為ってしまったようだ。次回からは、シオンに気を付けるように言うとして、今は軽い脳しんとうで、しばらくは目が覚めないと思うから、気になるんだったら後で、この娘の部屋でも尋ねるといい」。

と言ってから後ろの方に向き直って

「この子を運んでくれ、そおっとだぞ」

と指示を出してから、また向き直ってアビンに

「まあ、大事はないが、人工呼吸をしていたら、今頃君が担架で運ばれていたからな、良い判断をしたね」

と言った。

「それは、提督から忠告されて」。

とアビンが応えると。

「提督がね. 君ずいぶん気に入られたみたいだね」。

「はあ.」。

「解らなくても良いよ。じゃ、わたしは此で失礼するよ」。

とシュナイダーは含み笑いをしながら去っていった。

アビンは何の事か計りかねていたが、シオンが助かった事には安心した。そして、今は何処かで、しばらくゆっくりしていたい気分だった。

そんな彼に、誰かが近づいてきた。

「大丈夫か、だいぶ顔色が悪いが」

と声を掛けてきたのはホルストだった。

「ありがとうございます。最悪です。このままベッドに倒れ込みたい気分ですよ」。

と悪態を付くように応えた。

「そう言いなさんな、ところで.」。

と言うなりホルストは彼の腕を掴んで人混みから外れたところに連れて行って続けるように言った。

「アビン君、君の持っていたMSG-48、あれが見つかるちょっとやばい事になるので、今、シオンのお尻の下に隠してある。大丈夫だ、今シオンを運んでいった奴らは、俺の部下だ。心配はいらない、その代わり床には競技用のPS-48を転がしておいた。君は、あれを使ってミュラを仕留めたと言ってくれ、専門家でない限り空のカートリッジがMSG-48の物とは解らない。この場はこうしておいた方が、君のためだし、いらぬ噂を立てられずにすむ。だろう？」。

「確かに.」。

そう、それは肝心なことだったMSG-48と言えば完全に軍用の兵器だし、それも特に警戒される代物だ、たとえば、戦車や対艦ミサイルなどを持ち歩くと同じで、どんないい加減な税関でも通してはくれない代物だ。ましてそんな物が、一般の船に持ち込まれたのなら一大事になる。

「ところでホルストさん達は、今何をされているんですか。それに、PS-48をどこから持ってきたんですか」。

「まず、最初の答えは、提督に言われて君を保護すること。二番目は、後部格納デッキで、ミュラの隠れ家を探していたら壊れた貨物から三十挺のハンドブラスターと一緒に

に出てきたのを失敬してきたのさ、ひどく荒らぎられていたから、二三品無くなっても気にも止め無いだらう」。

アビンは、後の答えは納得できたが最初の答えは納得できなかった。

「何故、俺を保護する必要があるんですか」。

その言葉に、ホルストはニヤツと笑ってから、彼の肩を抱き寄せてから言った。

「このヒョッコが、生意気なことを言って。俺達が、お前の正体に気が付いてもいないと思っっているのか。まだ、他の連中には、知られない方が、お前の為になるとの提督の判断だ。ありがたく思え．．．．それから、ミュラを遣ったのがお前であることは、出来るなら言うな。どうしても隠せなくなった時に、P S - 4 8で遣ったと言え。此方にも考えがあるからな」。

「どういうことです」。

「面子を保たせてやれってことさ」。

その言葉で、アビンは何となく解るような気がした。船長と警備隊の面子か何か虚しいと彼は思った。

「では、俺とションの立場は」。

「最後まで取り残されていた乗客と言うことになるそうだ」。

「何となくせこくありませんか」。

「気にすんな。世の中には結構ある話だから、今回はその方が好都合だしな」。

「いえてます」。

「じゃこのままの体制でこの場を去るぞ、良いな。坊や」。

「解りました」。

アビンは、流石にホルストに言い逆らうことは出来なかった。それは彼が醸し出す雰囲気による物だろう。彼にとっては、アビンは手の掛かる新兵と言うところだろう。この場は悔しいが、彼に従うしかないと思いながらも、頼りがいのある人物であることは確証した。

二人は、その様にして現場を離れていった。

その五時間後、アビンは服を整えて、教授にレポートを提出してから、ションの部屋に寄った。彼が、ドアのチャイムを押すとアンが出迎えてくれた。そして中に招き入れられてから、今回の事のねぎらいの言葉を受けた。そして、すでにションは、起きている事を告げられた。そこで、ションの部屋に入ってみると、ベッドの上で起きあがっていた。その傍らにはミュラの幼獣が枕にじゃれ掛かっていた。

「もういいのかい」。

「ありがとうございます。もう大丈夫です。ご心配を掛けて申し訳有りませんでした」。

と微笑みながらションは答えた。

「それは良かった。さっき教授の処に行ったんだが、心配していたよ。そうそう、今忙しくて来れないから、よろしく伝えておいてくれと、ことづかってきたんだ」。

「それは、ありがとうございます」。

とションは答えた。

アビンは話題を変えて言った。

「ところで、ミッチェルさんはどうだね」。

するとアンがそれに答えた。

「はい。二時間程前に、意識を取り戻しました。今、セシリア様がまだ付いてくださっています。ご自身何故、この船に乗っているかも覚えていらっしゃらないようです。今何処まで記憶が回復しているのか調べておられます。でも面白い会話ですよ」。

「面白い会話？」。

「そうなんです。学校の話とか同級生の話なんかをして居るんですよ。それも昔からの知り合いみたいに、セシリア様なんか同級生では無かったのにね」。

アビンはアン言葉からセシリアがミッチェルさんの記録した記憶の断片を使って会話をしているんだなと思った。確かに彼女の知っていることは全てセシリアも知っていると言うことになる。上手くいけば、記憶の断片をつなぎ合わせることや、彼女の経験を思い出させることが出来る。上手くいけばの話だが．．．．．と思うのだった。

「それは、面白いね」

とアビンは此処はアンに話を合わせた。

それから、シヨンに尋ねた。
「シヨン？そのミュラの幼獣をどうするんだい」。
すると少し考えるような素振りをしてからシヨンは口を開いた。
「そうですね。わたしに懐いたみたいですので、飼おうと思うんです。良い番犬になると思いますが」。
その言葉にアビンは言葉を失った。
「この子の名前も決めتانです。スターンて、良い名前でしょう」。
と言ってシヨンはミュラの幼獣を抱きかかえた。
アビンは冗談では無いと思いながらも何と云っていいのか言葉が見つからないでいた

。「スターンは、しっかり仕付ければ、この子の親のように、為らないって聞いたですよ」。

「しっかり仕付ける？」
とアビンはシヨンの突拍子もない言葉に驚いた。
「はい。元々暗殺用に創られた生物ですから、主人に忠実で有るような性質となっております。そうでないと使えませんから．．．．．」。
とシヨンは答えてくれたが、答えの後の方がなにやら、この娘にしては口ごもった。
それでアビンは気になってあえて尋ねた。
「シヨン？、使えませんかからの後の方もはっきり言ってはくれないかな」。
するとシヨンは少し躊躇するような素振りをしてから意を決して口を引く。
「主人の言うことを聞かないなら、獲物、つまりターゲットを殺すことは出来ないからです。ただ、問題なのは、自分の主人と認めた相手の言葉以外は聞かない。つまり主人が亡くなると暴走するか、自分で単独の行動をとるようになるということです」。

「ということは」。
「わたしが、亡くなると暴走する可能性があるということです」。
「どの位の確率で？」とアビンは幾分冷たく聞いた。
「80パーセントです」。
「かなり高い確率だな」。
「でも、大丈夫です」。
「何が大丈夫なんだ」。
「つまり、この子の上位に位置する人を多く造ることによって、それは回避できます」

。アビンは少し疑いながら
「それは、本当に可能なのか」
と尋ねた。
「はい。ただ、この子がそれを認めればの話ですが．．．．．」。
とシヨンは、少しトーンを落として答えた。
その様子を見てアビンは、ヤレヤレと肩を落として
「では、可能な限り上位者を増やしてくれ」
と言った。
その時、アンが二人の間に割って入ってきて
「あもう、お茶が入りましたので、アビンさん、そこの椅子にお座りになって、くつろいでいただけませんか」
と言って彼に皿ごとティーカップを手渡した。
仕方なく、それを受け取るとシヨンのベッドの前の椅子に腰掛けてお茶を頂ながら話をした。

それにしても、いつもアンには、良いところで割り込まれるとアビンは思った。それは、いいとして彼は、ホルストから聞いた事をシヨンに手短かに伝えることにした。
つまりこういう事だった。後部格納デッキを整理していると、いくつかのコンテナに申告と違う品物が入っていた事と、ミュラは医療用モルモットの表示コンテナで持ち込まれた。そのコンテナには、ミュラの幼獣の死体が三つ有ったそうだ。たぶんスターンの兄弟達だろう。どうも、あの雌のミュラは、自分の子供を殺したようだ、何かの原因で狂ってしまったのか、危険を察知して子供らを自分で始末したか解らないが、ホルストさんの話では、答えは前者だと言うことだった。ミュラは子供を見殺しにはしないらしいから、何かの原因で、気が触れたのだろうとの話だった。それから、何処の誰がミュラを持ち込んだかは、調べてみたが、荷主は架空の会社だったそうだ。それから、最

後にホルストさんからシヨンに言付けがあった。
「ホルストさんから、くいれぐれも無茶はしないように、後始末をするのは俺は嫌だからなとおっしゃってましたが、どういう事なんだい」。
シヨンはアビンのその言葉に笑って応えるだけだった。
そんなシヨンを見てアビンは言った。
「もう少し、ゆっくりしてればいいよ。後十四時間もすれば次の寄港地のロックウエルだ此処で補充と検閲を行うそうさ。だから二日停泊すると船長が言っていたよ」。
「予定より一日長くなりますね」。
「仕方がないさ」。
と言ってからアビンは「ごちそうさま」と言ってアンにカップを返して立ち上がり「これで失礼するよ」と言葉を置いて二人の部屋を出た。
それから、アビンは広いエレベータロビーに出てから、公園側に一番近いソファアーに腰を下ろしてから、夜のとぼりの様になっている公園を見ながら、今回の旅はまだ何か有りそうだなっと思うのだった。

二項、恐怖の目覚め終わり
アリスブルー第一部終了

オクトーバーレイン アリスブルー

<http://p.booklog.jp/book/68923>

著者：にしのまさみ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/aqualeef/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68923>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68923>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ